

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第205集

ど う め ぎ
働 女 木 遺 跡

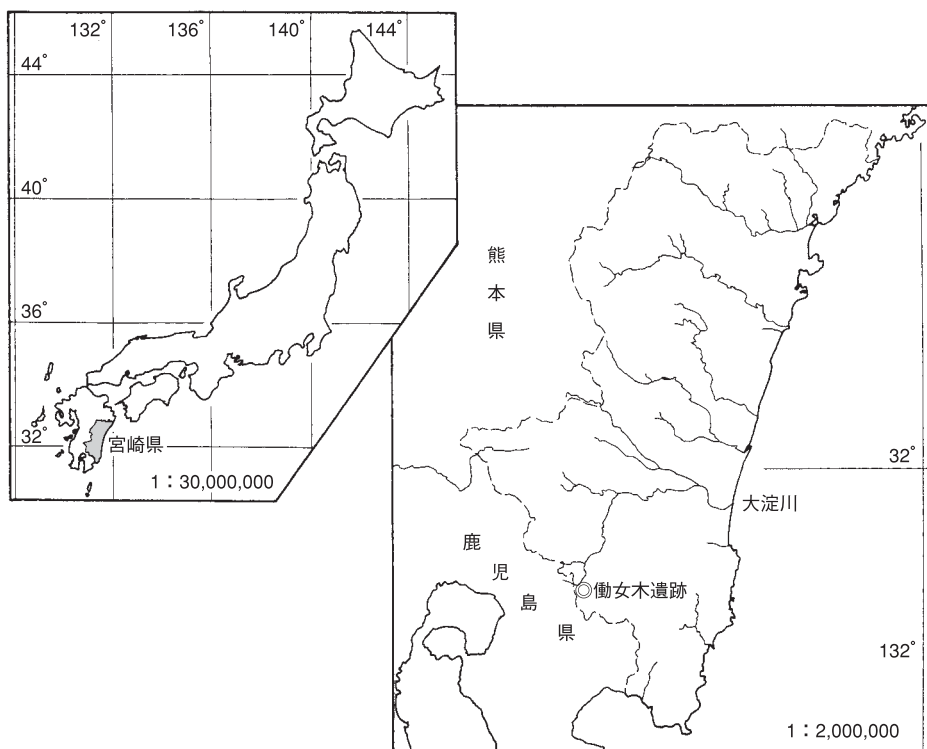
都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2011

宮崎県埋蔵文化財センター

ど う め ぎ
働 女 木 遺 跡

都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3



2011

宮崎県埋蔵文化財センター



働女木遺跡遠景（標高1,574mの秀峰高千穂の峰を仰ぐ）



瀬戸内系の土器（前列）と在地系の土器（後列）



弥生時代の磨製文化（働女木遺跡出土の磨製石鏃と砥石）

序

宮崎県教育委員会では、都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴い、都城土木事務所の依頼を受け、平成20年度から同21年度の2か年度にわたり働女木遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

今回の調査では、縄文時代早期から弥生時代に至るまでの遺構や遺物を確認することができました。中でも、南九州で特徴的な花弁状住居跡や、独立棟持柱を有する掘立柱建物跡などの弥生時代中期後半の遺構が多数検出され、集落の構造を明らかにすることができました。遺物についても、南九州の在来系土器が多数出土するとともに、矢羽根透かし孔を施した高坏など瀬戸内系の土器も数点確認され、当該期の地域間交流の様相を考える上でも良好な資料が蓄積されました。

これらの調査成果は、都城の歴史、ひいては南九州の歴史を知るには大変貴重な情報を提供する内容と言えます。この成果を、学術資料として研究者のみの活用にとどまらず、地元はもとより、より多くの方々にご活用いただき、都城の歴史さらには宮崎県の埋蔵文化財の未来についての認識と理解を深め、そして関心を高めていただく一助となれば幸いです。

地下に眠る歴史を顕彰することは我々の務めであり、近い将来、当該周辺域の歴史構造が解明されることを祈念するとともに、今後もたゆまぬ調査・研究に邁進していく所存でございます。

最後になりましたが、調査にあたってご協力を賜りました関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆 茂

例 言

1 本書は、都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した働女木遺跡の発掘調査報告書である。調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

2 調査は、工事計画等との関係により調査対象範囲を3分割し、2か年度にわたって実施した。
なお、調査対象範囲と期間は次のとおりである。

調査対象範囲	調査期間
IC切替道路工事部分（調査区北側）	平成20年8月4日～平成20年12月25日
センターライン東側部分（市道原村643号北側）	平成21年1月5日～平成21年3月26日
センターライン西側（市道原村643号北側） 及び市道原村643号南側部分	平成21年4月27日～平成21年9月30日

3 本書で使用した位置図及び地形図は、それぞれ次の地図を基に作成した。

- ・周辺遺跡位置図 ... 『都城（宮崎14号）』5万分の1図 国土地理院 平成7年11月1日発行
- ・周辺地形図 ... 『都城市管内図7』1万分の1図 都城市（承認番号）昭58.九公第69号

4 現地における遺構等の実測・写真撮影などの記録は、中田憲治、福田光宏、橋本憲二、若松宏一、松田博幸、川越宏之、加藤徹が担当し、福田泰典と和田理啓がこれを補助した。

5 空中写真撮影、自然科学分析及び金属分析は次の業者に委託した。

- ・空中写真撮影 ... 平成20年度：九州航空株式会社、平成21年度：有限会社 ふじた
- ・自然科学分析（放射性炭素年代測定・樹種同定）... 株式会社 古環境研究所
- ・自然科学分析（種実分析）... パリノ・サーヴェイ株式会社
- ・金属分析（顕微鏡組織・EPMA調査）... 株式会社 九州テクノロジーサーチ

6 遺物・図面の整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センター内で行った。図面作成・遺物実測・トレースは、中田が整理作業員の補助を得て行った。

【実測図凡例】

（1）土器実測（調整等の表現方法）について

ア 土器の残存状況が径1/4未満でも、反転復元できる場合には、外形線・稜線を中心線から実寸5cm幅のみ忠実に表現し、間隔（空白）をとって残りの外形線・稜線を復元した。その際、刻目突帯・沈線・凹線文等の特徴ある装飾・文様等に関しては、実寸5cm幅にとらわれず残存する全てを表現するようにした。

ただし、半径5cm前後及びそれ以下の遺物・部位については、忠実に表現した部分と復元し

た部分との間に間隔（空白）を設けていない。

イ 調整の不鮮明なものや、最終調整ではなく下調整であるもの（ナデ消されたもの等）については、実線ではなく長破線で表現するようにした。

(2) 石器実測（使用痕跡等の表現方法）について

ア 節理面は1点鎖線、自然面はドットを使って表現した。

イ 欠損面については、調査時等の新しい欠損面と判断できるものは白抜きとし、それ以外の欠損面に関してはリング及びフィッシャーを入れて表現した。

ウ 磨石・砥石・台石の使用痕跡は、平面上では網掛、断面上では矢印（ ）を用いて使用の範囲を表現した。

(3) 挿図の縮尺について

以下の縮尺を基本とし、それ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示した。

ア 遺構実測図に関しては、遺構の規模に応じた縮尺を用いており、使用範囲は以下のとおりである。

大型の竪穴建物跡〔1：60〕 ～ 遺物を伴う小穴〔1：4〕

イ 遺物実測図に関しても、基本的には遺物の大きさに応じた縮尺を用いている。以下に基準を示す。

縄文土器〔1：3〕

石器（石鏃・石錐・スクレイパー・剥片等）〔2：3〕

弥生土器〔1：4〕

石器（石斧・磨石・敲石・砥石・台石等）〔1：3〕

鉄器〔1：2〕

石器（大型製品）〔1：4〕

7 調査に際しては、日本測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても日本測地系に準拠した。

8 本書で使用した方位は、全て座標北『G.N.』で示している。なお、働女木遺跡が位置する宮崎県都城市の磁針方位は西偏約6°0'で、レベル表示（L）には海拔絶対高を使用した。

9 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。なお、竪穴建物跡のうち、支柱穴をもち住居の構造を有する遺構は「SA」で表記し、構造的に判断に迷うものは「SZ」で表記することにした。

SA：竪穴建物跡（竪穴住居跡） SB：掘立柱建物跡 SC：土坑 SD：土墳墓

SZ：竪穴建物跡（竪穴状遺構） SH：単独の小穴 SI：集石遺構

10 遺物観察表中の土器等の色調及び土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。

11 本書の執筆は第1章・第1節を飯田博之が、その他の執筆・編集を中田憲治が行った。

12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経過	2

第 章 遺跡の地理的・歴史的環境

第 1 節 地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	4

第 章 調査の記録

第 1 節 調査の概要	
1 基本層序	8
2 グリッド及び確認トレンチ配置	8
第 2 節 縄文時代の遺構と遺物	
1 早期の遺構	11
2 早期の出土遺物	12
3 前期の出土遺物	15
4 後・晩期の出土遺物	16
第 3 節 弥生時代の遺構と遺物	
1 概要	25
2 竪穴建物跡と出土遺物	26
3 掘立柱建物跡	57
4 土壌墓	60
5 土坑と出土遺物	61
6 小穴と出土遺物	63
7 包含層出土遺物	65
8 その他の遺物	70
第 4 節 古代以降の遺物	70
遺物観察表 (縄文土器 弥生土器 焼成粘土塊 古代以降の遺物)	72
遺物計測表 (石器類 鉄器 軽石加工品等)	82

第 章 自然科学分析

第 1 節 放射性炭素年代測定	86
第 2 節 樹種同定	89
第 3 節 種実分析	102
第 4 節 埴埴破片の分析	105

第 章 総 括

第 1 節 縄文時代について	108
第 2 節 弥生時代について	109
第 3 節 古代以降について	115
第 4 節 自然科学分析について	115
第 5 節 終わりに	117

挿図目次

第 章 遺跡の地理的・歴史的環境

第 1 図 【働女木遺跡及び周辺遺跡位置図 S=1/50,000】	6
第 2 図 【周辺地形図 S=1/10,000】	7

第 章 調査の記録

第 3 図 【第 層上面土層堆積状況 S=1/20】	9
第 4 図 【第 層下面土層堆積状況 S=1/20】	9
第 5 図 【グリッド及びトレンチ配置図 S=1/1,000】	10
第 6 図 【早期の遺構分布図 S=1/300】	11
第 7 図 【1号集石遺構実測図 S=1/10】	12
第 8 図 【1号土坑実測図 S=1/20】	12
第 9 図 【早期の縄文土器実測図 S=1/3】	13
第10図 【第 層出土石器類実測図 S=2/3、1/3】	14
第11図 【前期の縄文土器実測図 S=1/3】	15
第12図 【第 層出土石器類実測図 S=2/3】	15
第13図 【後・晩期の遺物分布図 S=1/1,600、1/300】	17
第14図 【後・晩期の縄文土器実測図 S=1/3】	19
第15図 【後・晩期の縄文土器実測図 S=1/3】	20
第16図 【後・晩期の縄文土器実測図 S=1/3】	21
第17図 【第 層出土石器類実測図 S=2/3、1/3】	23
第18図 【第 層出土石器類実測図 S=1/3】	24
第19図 【遺構分布図（弥生時代） S=1/1,000】	25
第20図 【1号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	26
第21図 【1号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3】	27
第22図 【2号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	28
第23図 【2号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3】	29
第24図 【3号竪穴住居跡実測図 S=1/50】	30
第25図 【3号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3】	31
第26図 【4号竪穴住居跡実測図 S=1/60】	32
第27図 【4号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、1/3、2/3】	33
第28図 【5号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	34
第29図 【5号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、1/6、1/3】	35
第30図 【6号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	36
第31図 【6号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=2/3】	37
第32図 【7号竪穴住居跡実測図 S=1/60】	38
第33図 【7号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3】	40
第34図 【7号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/3、1/4】	41
第35図 【8号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	42
第36図 【8号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3、1/2】	43
第37図 【9号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	45
第38図 【9号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3】	46
第39図 【10号竪穴住居跡実測図 S=1/60】	47
第40図 【10号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、1/6】	49
第41図 【10号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/3】	50
第42図 【11号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	52
第43図 【11号竪穴住居跡出土状況実測図 S=1/40】	53
第44図 【11号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/4、2/3、1/2】	54

第45図	【12号竪穴住居跡実測図 S=1/40】	55
第46図	【12号竪穴住居跡出土遺物実測図 S=1/2、1/4、2/3、1/3】	56
第47図	【1号竪穴状遺構出土遺物実測図 S=1/4】	56
第48図	【1号竪穴状遺構実測図 S=1/40】	57
第49図	【1号掘立柱建物跡実測図 S=1/40】	58
第50図	【2号掘立柱建物跡実測図 S=1/40】	59
第51図	【1号土壙墓・2号土坑・3号土坑実測図 S=1/30】	60
第52図	【2号土壙墓実測図 S=1/30】	60
第53図	【2号土坑実測図 S=1/20】	61
第54図	【3号土坑実測図 S=1/20】	61
第55図	【4号土坑実測図 S=1/20】	62
第56図	【4号土坑出土遺物実測図 S=1/4】	62
第57図	【5号土坑実測図 S=1/20】	62
第58図	【6号土坑実測図 S=1/20】	63
第59図	【7号土坑実測図 S=1/20】	63
第60図	【1号小穴実測図 S=1/4】	64
第61図	【1号小穴出土遺物実測図 S=2/3】	64
第62図	【包含層出土遺物実測図 S=1/4】	66
第63図	【包含層出土遺物実測図 S=1/4】	67
第64図	【包含層出土遺物実測図 S=1/4】	68
第65図	【包含層出土遺物実測図 S=2/3、1/3】	69
第66図	【包含層出土遺物実測図 S=1/2】	70
第67図	【古代以降の遺物実測図 S=1/3、2/3】	71
第 章 自然科学分析		
第68図	【暦年較正結果】	87
第69図	【働女木遺跡の炭化材】	90
第70図	【働女木遺跡の炭化材】	91
第71図	【働女木遺跡の炭化材】	92
第72図	【働女木遺跡の炭化材】	93
第73図	【働女木遺跡の炭化材】	94
第74図	【働女木遺跡の炭化材】	95
第75図	【働女木遺跡の炭化材】	96
第76図	【働女木遺跡の炭化材】	97
第77図	【種実遺体】	104
第78図	【埴埜の顕微鏡組織・E P M A 調査結果】	107
第 章 総 括		
第79図	【石器の器種別割合】	114
第80図	【砥石の石材別割合】	114
第81図	【磨製石鏃及び未成品の石材別割合】	115

挿・付表目次

第 章 調査の記録

第1表	【第層上面土層堆積状況（K19グリッド東壁）】	9
第2表	【第層下面土層堆積状況（I12グリッド下層確認トレンチ〔Tr5〕北壁）】	9
第3表	【遺物観察表（縄文土器）】	72
第4表	【遺物観察表（弥生土器）】	75

第5表	【遺物観察表 (焼成粘土塊)】	81
第6表	【遺物観察表 (古代以降の遺物)】	81
第7表	【遺物計測表 (石器類)】	82
第8表	【遺物計測表 (鉄器)】	85
第9表	【遺物計測表 (軽石加工品等)】	85
第 章 自然科学分析		
第10表	【放射性炭素年代測定結果】	88
第11表	【樹種同定結果】	89
第12表	【種実分析結果】	103
第 章 総 括		
第13表	【後・晩期の石器類の器種と石材】	109
第14表	【竪穴建物跡 概要一覧】	110
第15表	【掘立柱建物跡 計測値一覧】	111
第16表	【土墳墓・土坑・小穴 計測値一覧】	111
第17表	【遺物接合状況表】	116

図 版 目 次

巻頭図版 1	【働女木遺跡遠景 (標高1,574mの秀峰高千穂の峰を仰ぐ)】	
巻頭図版 2	【瀬戸内系の土器と在地系の土器】 【弥生時代の磨製文化 (働女木遺跡出土の磨製石鏃と砥石)】	
図版 1	【働女木遺跡遠景 (都城市街地を望む) / 調査区全景】	121
図版 2	【調査区東側壁土層堆積状況 / 調査区北側壁土層堆積状況 / 第 層 (Kr-M) 下確認Tr 1 / 同Tr 2 / 同Tr 3 / 同Tr 4 / 同Tr 5 / 同Tr 6】	122
図版 3	【SI 1 検出状況 / SC 1 完掘状況 / SA 1 遺物出土状況 / SA 1 床面検出状況 / SA 1 完掘状況 / SA 2 遺物出土状況 / SA 3 遺物出土状況 [164: 磨製石斧] / SA 3 完掘状況】	123
図版 4	【遺構配置 (SA 2・SA 3・SA 4・SA 5 床面検出状況、SC 4 完掘状況) / SA 4 完掘状況 / SA 5 遺物出土状況 / SA 5 完掘状況 / SA 6 完掘状況・埋土堆積状況】	124
図版 5	【SA 6・SD 1・SD 2 完掘状況 / SA 7 遺物出土状況 / SA 8 遺物出土状況・埋土堆積状況 / SA 8 完掘状況 / 遺構配置 (SA 7・SA 8・SA 10・SZ 1 床面検出状況、SA 11 遺物出土状況)】	125
図版 6	【SA 9 遺物出土状況 / SA 9 床面検出状況 / SA 9 完掘状況 / SA 10 遺物出土状況 / SA 10 遺物出土状況 [254: 瀬戸内系の壺] / SA 10 完掘状況 / SA 11 埋土堆積状況・遺物出土状況 / SA 11 床面検出状況】	126
図版 7	【SA 11 遺物出土状況 / SA 12 遺物出土状況 / SA 12 完掘状況 / SZ 1 完掘状況 / SB 1 完掘状況】	127
図版 8	【SB 2 完掘状況 / SD 1・SD 2・SC 2・SC 3 完掘状況 / SD 1 埋土堆積状況 / SD 2 埋土堆積状況 / SC 4 埋土堆積状況 / SC 5 完掘状況】	128
図版 9	【SH 1 埋土堆積状況・遺物出土状況 / SC 6 完掘状況 / SC 7 完掘状況 / 調査区南側工事道路法面の土層堆積状況 / 調査区から見る高千穂の峰】	129

図版10.....	130
【早期の縄文土器 / 第 Ⅰ 層出土の石器類】	
図版11.....	131
【前期の縄文土器 / 第 Ⅰ 層出土の石器類 / 後期の縄文土器 / 同 / 同】	
図版12.....	132
【後期の縄文土器 / 晩期の縄文土器 / 同 / 同】	
図版13.....	133
【晩期の縄文土器〔組織痕土器〕 / 同 / 同 / 第 Ⅰ 層出土の石器類〔打製石鏃・剥片〕 / 同〔二次加工剥片〕】	
図版14.....	134
【第 Ⅰ 層出土の石器類〔打製石斧〕 / 同〔敲石・磨石〕 / SA 1 出土の弥生土器 / SA 2 出土の弥生土器】	
図版15.....	135
【SA 2 出土の弥生土器 / 同 / SA 3 出土の弥生土器 / 同 / SA 4 出土の弥生土器 / 同 / SA 5 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同】	
図版16.....	136
【SA 5 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同 / SA 7 出土の弥生土器】	
図版17.....	137
【SA 7 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同 / 同 / SA 8 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同】	
図版18.....	138
【SA 8 出土の弥生土器 / 同 / SA 9 出土の弥生土器 / SA 10 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同】	
図版19.....	139
【SA 10 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同 / 同 / 同 / 同 / SA 11 出土の弥生土器】	
図版20.....	140
【SA 11 出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同 / 同 / 同 / SA 12 出土の弥生土器】	
図版21.....	141
【竪穴住居跡出土の石器類〔磨製石鏃〕 / 同〔磨製石鏃未成品〕 / 同〔打製石器類〕 / 同〔磨製石斧〕 / 同〔剥片〕】	
図版22.....	142
【竪穴住居跡出土の石器類〔敲石・磨石・砥石〕 / 同〔砥石〕 / 同〔砥石〕 / 同〔砥石〕 / 同〔縁部に鉄が付着している砥石〕 / 同〔周縁端部に砥面をもつ砥石〕 / 同〔台石・石皿〕 / SZ 1 出土の弥生土器】	
図版23.....	143
【SC 4 出土の弥生土器 / SH 1 出土の磨製石鏃未成品 / 包含層出土の弥生土器 / 同 / 同】	
図版24.....	144
【包含層出土の弥生土器 / 同 / 同 / 同 / 同 / 同 / 同】	
図版25.....	145
【線刻のある弥生土器(遺構内・包含層出土) / 包含層出土の石器類〔磨製石鏃〕 / 同〔磨製石斧・転用品〕 / 同〔磨製石鏃未成品・剥片〕 / 同〔砥石〕 / 鉄器〔刀子・鉄鏃・鉄鎌?・鉋〕(遺構内・包含層出土)】	
図版26.....	146
【軽石加工品等(遺構内・包含層出土) / 焼成粘土塊(遺構内・包含層出土)】	
図版27.....	147
【古代以降の土師器 / 火打ち石・石盤 / 中・近世の陶磁器】	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

平成 6 年 12 月に地域高規格道路として計画された都城志布志道路は、九州縦貫道宮崎線と志布志港及び東九州自動車道との連結により、南九州の拠点の支えとなることを期待されている。総延長は約 40km、このうち、都城市五十町（一般国道 10 号線インター）から鹿児島県境に至る延長約 8 km の自動車専用道路が都城東環状線である。

都城志布志道路については、一部を国土交通省が事業主体となって実施しており、平成 9 年から埋蔵文化財の分布状況の照会が行われ、協議を重ね発掘調査を実施してきている。その一部に組み込まれる都城東環状線についても、埋蔵文化財についての照会・協議が進められ、平成 12 年に事業認定のため計画路線の協議が県都市計画課と県文化課（現県文化財課）で行われ、梅北 IC 施工範囲にあたる梅北城の曲輪や空堀等の取扱いを巡り協議が難航した。最終的には、梅北城跡を避けるように路線が変更されることになり、6 箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地について取扱い協議をさらに重ね、本発掘調査が必要な場合は記録保存の措置を講ずることとなった。

働女木遺跡は、平成 16 年度から確認調査を 3 回実施している。1 回目は平成 16 年 3 月 4～5 日、2 回目が平成 20 年 3 月 19～20 日、3 回目が平成 20 年 5 月 20～21 日である。調査の結果、霧島御池軽石層と桜島文明軽石層間の黒色土層から遺物が出土することを確認するとともに、ピット等の遺構も確認した。

確認調査の結果を受け、都城土木事務所長から埋蔵文化財発掘通知が提出された後、県教育長名で発掘調査を指示する旨の回答を行った。

第 2 節 調査の組織

働女木遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体	宮崎県教育委員会	
平成 20 年度	発掘調査	
調査機関	宮崎県埋蔵文化財センター	
所 長		福 永 展 幸
副所長兼総務課長		長 友 英 詞
総務課総務担当リーダー		高 山 正 信
調査第二課長		石 川 悦 雄
調査第二課調査第三担当リーダー		福 田 泰 典
調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）		中 田 憲 治
調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）		若 松 宏 一
調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）		和 田 理 啓
調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）		松 田 博 幸
調査第二課調査第四担当 主査（調査担当）		橋 本 憲 二
調査第二課調査第四担当 嘱託（調査担当）		福 田 光 宏

平成21年度 発掘調査・整理作業

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

所 長

福 永 展 幸

副所長兼総務課長

長 友 英 詞

総務課総務担当リーダー

高 山 正 信

調査第二課長

石 川 悦 雄

調査第二課調査第三担当リーダー

福 田 泰 典

調査第二課調査第三担当 主査（調査・整理作業担当）

中 田 憲 治

調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）

若 松 宏 一

調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）

和 田 理 啓

調査第二課調査第三担当 主事（調査担当）

加 藤 徹

調査第二課調査第四担当 主査（調査担当）

川 越 宏 之

平成22年度 整理作業・報告書作成

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

所 長

森 隆 茂

副所長

北 郷 泰 道

総務課長

矢 野 雅 紀

総務課総務担当リーダー

長 友 由美子

調査第二課長

永 友 良 典

調査第二課調査第三担当リーダー

吉 本 正 典

調査第二課調査第三担当 主査（整理作業・報告書担当）

中 田 憲 治

事業調整担当

平成20年度 宮崎県教育庁文化財課 埋蔵文化財担当 主査

飯 田 博 之

平成21～22年度 宮崎県教育庁文化財課 埋蔵文化財担当 主査

日 高 広 人

調査協力・指導

鹿児島県歴史資料センター黎明館 学芸課

東 和 幸

都城市教育委員会 文化財課

栞 畑 光 博

第3節 調査の経過

平成20年度に着手した働女木遺跡の調査は、工事計画等を勘案して調査対象範囲（16,200㎡）を3分割し、2か年度にわたって実施した。

1 平成20年度の調査

調査は、平成20年8月4日に開始した。五十町IC（一般国道10号）切替道路工事の関係上、まず調査区北側の約5,400㎡に着手した。北側中央部分を中心に重機にて表土掘削を開始した。確認調査により、調査区全域において第Ⅱ層（桜島文明軽石堆積層，Sz-3）上面は耕作により攪乱されていることが判明していたため、

遺物包含層となる第Ⅲ層（黒色土）から、遺構検出が可能な第Ⅳ層（暗褐色土）上面の範囲で表土除去を進めた。8月18日より作業員を雇用しての人力による包含層掘削及び精査を開始した。8月中に2軒の竪穴住居跡を検出し、9月に遺構掘削を開始した。調査区北側の範囲が明確となった10月には、切替道路工事範囲の北西部及び北東部（一部）を第Ⅴ層（霧島御池軽石〔Kr-M〕の漸移層）面まで掘削した。この範囲内は北に向かって約2m程度傾斜しており、縄文後・晩期の土器及び弥生土器が散見された傾斜高位部はⅤ層上面までが削平されていたため、遺構等も確認できなかった。

切替道路工事範囲内（概ねグリッドIライン以北）の調査で検出した弥生時代の遺構は竪穴住居跡6軒、土坑3基、土壙墓2基、遺物を伴う小穴1基を数え、弥生土器を中心に縄文後・晩期の土器も出土した。11月20日にこの範囲内の空中写真撮影を行い、翌週から第Ⅵ層（霧島御池軽石堆積層，Kr-M）下層の確認トレンチを人力で2箇所設定した。第Ⅷ層（鬼界アカホヤ火山灰堆積層，K-Ah）の上位層である第Ⅶ層（黒色土）で縄文前期の土器片及び黒曜石剥片等を、下位層である第Ⅹ層（桜島11テフラ濃集層，Sz-11）では縄文早期の土器片及び石器・剥片等が数十点出土し、早期の遺構と考えられる集石遺構も1基検出することができた。年内に切替道路工事範囲内の調査を全て終了し、工事業者への明け渡しを完了した。

平成21年1月より、市道原村643号線以北の南東部約2,600㎡の調査に着手する。南西部は平成21年度調査対象とし、排土置場として利用することにした。この範囲内は前年10月の重機掘削時に第Ⅳ層上面まで掘削が終了していたため、遺構の検出及び掘削も短期間で終了する予定であった。しかし、調査区J16グリッド付近から炭化材が多数出土したため精査した結果、焼失した弥生時代の竪穴住居跡が検出され、3月の菜種梅雨及び調査期限と闘いながらの発掘調査となった。

この範囲内で検出した弥生時代の遺構数は、竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構1基、土坑1基、掘立柱建物跡1棟を数え、北側に集中していた。南に向かって標高が下がるのに比例して遺物量も減っていく傾向にあった。3月2日にこの範囲内の空中写真撮影を行い、第Ⅵ層下層の確認トレンチを人力で12箇所設定したが、第Ⅹ層で縄文早期の土器片が数点出土しただけで遺構は確認できなかった。なお、調査着手時に芋の植え付けが行われていた東側三角地帯は、収穫後に確認トレンチを設定し調査を行ったが天地返しにより第Ⅷ層下まで攪乱されていた。

2 平成21年度の調査

平成20年度調査時に排土置場としていた範囲が調査対象区となるため、4月27日、重機による大がかりな排土移動から平成21年度の調査が再開した。調査区中央を横切る市道は依然として地域住民の作業道として利用されていたため、市道以北の南西部及び調査事務所前までの市道南側を重機により表土除去し、市道部分の調査は最後に回すことにした。市道以北の南西部は調査区内でも標高の高い場所に位置し、芋の貯蔵穴（芋つぼ）による攪乱が著しかったものの、重機による表土掘削時から第Ⅳ～Ⅴ層において弥生時代の遺物が多数出土した。土器の出土数に比べ検出された遺構は少なく、弥生時代の竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡1棟、土坑2基を数えるだけであった。なお、市道南側ではピット以外の遺構を確認することはできなかった。

7月7日より市道部分の表土除去及び包含層掘削を行った。一部、Ⅳ層中で縄文後期から晩期にかけての土器が密集して出土したが、遺構等は確認できなかった。8月10日に最終の空中写真撮影を行い、翌日より第Ⅵ層下層の確認トレンチを2箇所設定した。第Ⅷ層まで重機で掘削し、第Ⅸ層（黒褐色土）から人力による調査を進めたが、早期の土坑1基とピット6基を検出するにとどまり、遺物も打製石鏃1点と縄文土器片が数点出土しただけであった。

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

都城市は宮崎県の南西部に位置する。東には鰐塚山系、北西には霧島山系、そして南北を台地や段丘に囲まれた盆地の中央部にあり、北西には標高1,574mの秀峰高千穂の峰を仰ぐ。南西部は鹿児島県に接する。

今回の調査対象となった働女木遺跡は、宮崎県都城市五十町に所在する。五十町は都城市の西部、大淀川上流の左岸に位置する五十市地区にあり、地区内の北部を東流する横市川流域の低地面を挟んで、南北に成層シラス（二次シラス）台地である蓑原・月野原台地が広がる。また地区南西部にも、大淀川と支流の梅北川に挟まれた成層シラス台地が広がっている。本遺跡は、市の中心部から南西に約3.7kmの地点にある。地形的には都城盆地の西部に位置し、南北を東流する大淀川とその支流（野間谷川）の侵食によって形成された鹿児島県曾於市末吉町側から広がる標高約170～180mの舌状の成層シラス台地上に立地する。そのため、入戸火砕流（AT、約28,000～22,000年前）、桜島11テフラ（Sz-11、P11、約8,000年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）、霧島御池軽石（Kr-M、約4,600年前）、桜島文明軽石（Sz-3、P3、AD1,471）などの年代指標となる広域テフラの堆積層が明瞭に確認できる。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、古くは旧石器時代の細石刃石器群が検出された大岩田上村遺跡や、刻目突帯文土器期の区画された小規模な水田跡が検出された坂元A遺跡等をはじめとする古代以前の遺跡が点在している。また、中世以降についても、北郷（都城島津）氏の居城であった南九州型城郭である都之城跡を中心に、西明寺跡や兼喜神社など都城島津家ゆかりの寺社や史跡等も多数存在する。国指定史跡（昭和10年12月24日指定）である今町一里塚も、本遺跡にほど近い今町の有里地区に今もなお現存する。

本遺跡では、縄文時代早期から弥生時代後期後半にかけての遺構・遺物が断続的ではあるが確認されているため、ここでは当該期の周辺遺跡等について概説する。

縄文時代

早期では、「五十市式土器」と呼ばれる全縄文施文の円筒形土器が完形で採取された国道269号沿いの宮尾・立野遺跡が以前から知られている。器面全体に縄文が施されること自体が異質な存在であり、類例も少ないことから都城市指定文化財となっている。遺構としては、加治屋B遺跡で集石遺構19基、岩立遺跡では集石遺構31基・土坑6基が検出されている。このうち本遺跡に最も近い岩立遺跡においては、貝殻文円筒形土器を中心として押型文土器も出土している。

前期においては、鬼界アカホヤ火山灰降灰の影響によるためか、明瞭な資料は確認されていない。近隣では梅北町の笹ヶ崎遺跡で前期後半の曾畑式土器が出土しているが、都城市内でもこの曾畑式土器が出土している遺跡は少ない。

中期においても霧島御池軽石降灰の影響が考えられ、遺構・遺物ともに検出例は少ない。ただ、瀬戸内地方との交流を裏付ける瀬戸内系の土器が、都城周辺地域でわずかながら出土している。遺構としては田谷・尻枝遺跡の落とし穴遺構等が挙げられ、狩猟生活を髣髴させる。

後期から晩期にかけては遺跡の数が増え、遺構・遺物の報告例も多くなる。特に、土掘り具と考えられる

打製石斧が多く出土し、畑作を中心とした原始的な農耕が盛行した時期とも言える。後期では、本遺跡に最も近い岩立遺跡で堅穴住居跡 2 軒・土坑数十基が検出され、中尾田 3 類の深鉢や中岳式土器等が出土している。また、今房遺跡では磨製石斧と磨石が埋納されたような形で出土した土坑も検出されている。さらに上牧第 2 遺跡では、九州でも検出例が少ない後期初頭の堅穴住居跡が確認され、その床面中央部には焼土を含む土坑も設けられており、炉の役割を果たしたと考えられる。

晩期になると組織痕土器の出土が顕著となる。中尾山・馬渡遺跡においては土坑 6 基が検出され、包含層からは組織痕土器や孔列文土器等が出土している。また、横尾原遺跡では平面形態が隅丸方形の小規模な堅穴住居跡 1 軒が検出され、その埋土中からも松添式土器や組織痕土器片が出土している。この他にも、柱穴とみられるピットが楕円形状に巡る堅穴状遺構が検出された大岩田村ノ前遺跡や、黒川式土器が出土している近隣の油田遺跡、大岩田上村遺跡等も晩期の遺跡として挙げられる。

弥生時代

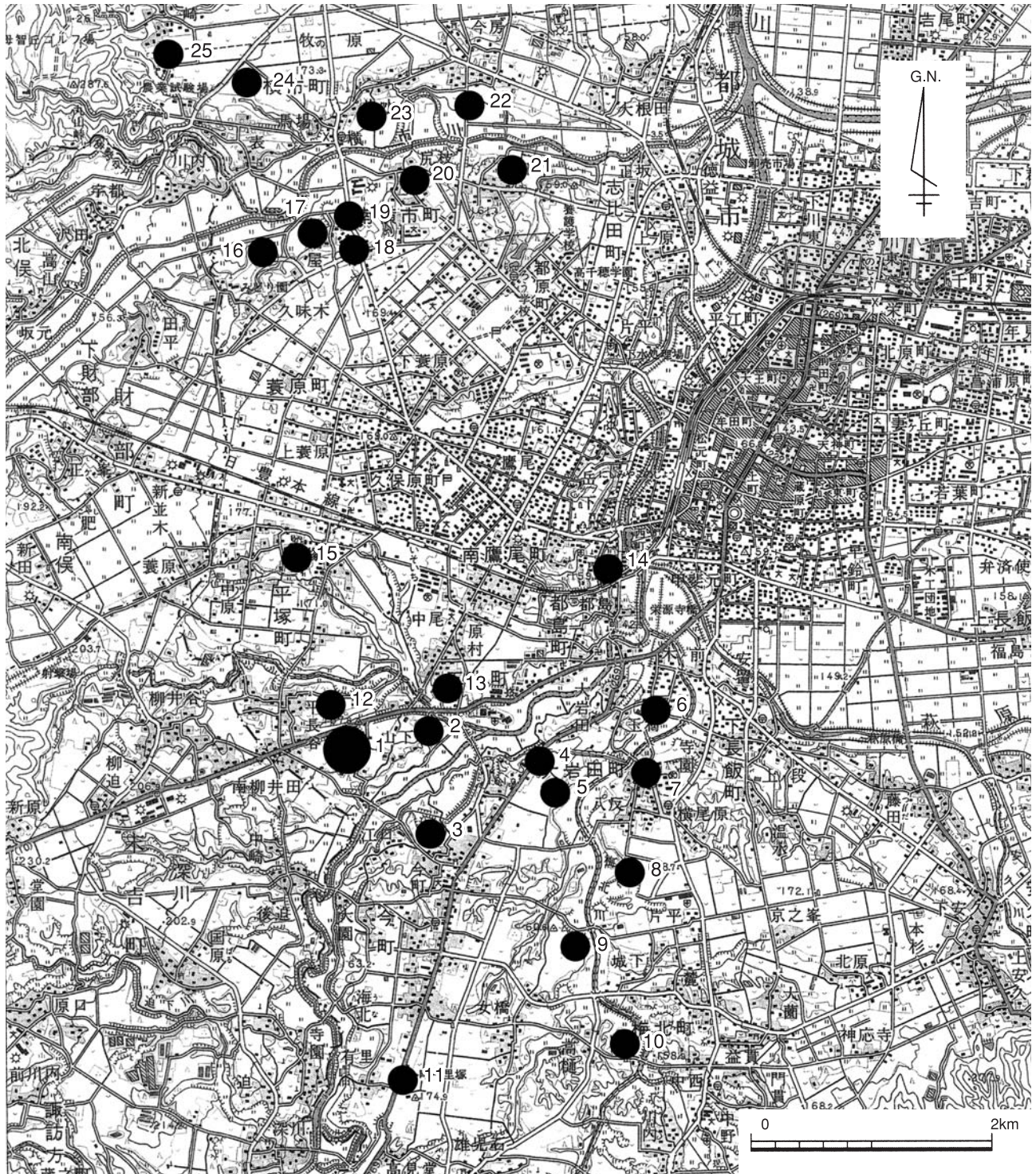
南部九州における刻目突帯文土器期の稲作の可能性は、五十市地区内の調査、とりわけ横市地区遺跡群の調査によって確実なものとなってきている。まず坂元 A 遺跡では、擬似畦畔によって区画された一区画 10m² 前後の不整形な水田跡が検出された。同遺跡では、早期・前期後半・中期後半・古代・中世に至る水田跡が検出され、同地区で脈々と稲作文化が継承されていったことを物語っている。また、横市川対岸の肱穴遺跡では、刻目突帯文土器や擦り切り穿孔をもつ石包丁等を伴う晩期末から前期にかけての松菊里型の円形堅穴住居跡と水田層が検出された。さらに黒土遺跡でも、擦り切り穿孔をもつ石包丁や粉痕土器等が出土しており、イネのプラントオパールも検出されている。

中期になると遺跡数も急激に増え、その中でも特に後半に位置づけられる遺跡は多くなる。坂元 A 遺跡では、中期後半の水田層から南九州では検出例の少ない農具と考えられる木製品が出土している。大岩田村ノ前遺跡では、熊本県に分布の中心がある黒髪式の甕を伴う堅穴状遺構が検出されている。また、牧の原第 2 遺跡や諸麦遺跡では、堅穴住居跡の埋土中から瀬戸内系の凹線文土器も出土している。このような調査結果から、この頃になると各地との交流を盛んに行い始めた社会的構造が垣間見える。一方、当該期には在地系の山ノ口式土器や中溝式系の土器が出現する時期でもあり、様々な文化が交流し合いながら地域社会の発展を遂げていったことも窺える。この他、40軒の堅穴住居跡が検出された加治屋 B 遺跡や、検出例の少ない独立棟持柱をもつ掘立柱建物跡を検出した岩立遺跡も当該期の遺跡として付け加えておきたい。

後期では、ベッド状遺構を伴う堅穴住居跡と、周溝状遺構が検出された加治屋 A 遺跡がある。同遺跡では、絵画土器や鉄斧等も出土している。平田遺跡 D・E 地点でも、中期後半から後期初頭にかけての同様の遺構が検出されているが、堅穴住居跡から約 31.7cm の長鋒型の鉄矛が出土したことは特筆すべき点である。後半から終末期にかけては、花卉状住居跡や周溝状遺構等が検出された今房遺跡がある。この周溝状遺構からは、免田式の長頸壺や安国寺式の複合口縁壺等が出土している。肱穴遺跡でも、同時期の溝状遺構と木組状遺構とが直交する形で検出されている。

〔参考文献〕

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『平田遺跡 D 地点・E 地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 160 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 168 集
- 宮崎県都城市教育委員会 1986『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』都城市文化財調査報告書第 5 集
- 宮崎県都城市教育委員会 1987『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』都城市文化財調査報告書第 6 集
- 宮崎県都城市史編さん委員会 2006『都城市史 資料編 考古』都城市
- 栗畑光博 2009「南部九州における刻目突帯文土器期の稲作の系譜」『古代文化』第 61 巻 第 2 号 古代学協会



- | | | | |
|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1 働女木遺跡 | 2 岩立遺跡 | 3 筆無遺跡 | 4 宮尾・立野遺跡 |
| 5 大岩田上村遺跡 | 6 大岩田村ノ前遺跡 | 7 黒土遺跡 | 8 横尾原遺跡 |
| 9 梅北針谷遺跡 | 10 笹ヶ崎遺跡 | 11 今町一里塚 | 12 平峰遺跡 |
| 13 油田遺跡 | 14 都之城跡 | 15 諸麦遺跡 | 16 中尾山・馬渡遺跡 |
| 17 坂元A遺跡 | 18 加治屋A遺跡 | 19 加治屋B遺跡 | 20 田谷・尻枝遺跡 |
| 21 平田遺跡 | 22 今房遺跡 | 23 肱穴遺跡 | 24 牧の原第2遺跡 |
| 25 上牧第2遺跡 | | | |

第1図 働女木遺跡及び周辺遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 周辺地形図 (S=1/10,000)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査の概要

1 基本層序

K19グリッド第Ⅵ層上面の東壁及びI12グリッド下層確認トレンチ(Tr5)第Ⅵ層下面の北壁を第1・2表及び第3・4図に示した。今回の調査対象範囲における土層の堆積状況は、桜島文明軽石(Sz-3、AD1,471)、霧島御池軽石(Kr-M、約4,600年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前)、桜島11テフラ(Sz-11、約8,000年前)の四層を鍵層とし、谷地形等の特異な場合を除いて各地点とも大きな差異は認められなかった。そのため、第1・2表に示した土層堆積状況が本遺跡の基本層序ととらえてよい。

第Ⅰ層(表土及び旧耕作土)は、現耕作土(層厚約20cm)と二層の旧耕作土(層厚約10cmと20cm)に分かれる。第Ⅱ層(桜島文明軽石堆積層)は、調査区全域にわたって耕作が及んでいたため残存状況は良好とは言えないが、確認できた層厚は最大で約20cmであった。第Ⅲ層(黒色土)から第Ⅴ層(霧島御池軽石漸移層)までが縄文時代後・晩期から中世までの遺物包含層である。古墳時代から中世までの遺物はほとんど確認できなかったものの、弥生時代中期後半及び後期後半から終末期にかけての遺物が第Ⅳ層(暗褐色土)を中心に、縄文時代後・晩期の遺物が第Ⅳ～Ⅴ層を中心に出土した。遺構の検出は第Ⅲ層では困難で、第Ⅳ層中下位から第Ⅴ層中上位付近で行った。第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の平均層厚はそれぞれ約25cm・15cm・40cmであった。

第Ⅵ層(霧島御池軽石堆積層)は、調査区内及びその周辺の露頭の観察においても安定した堆積状況が確認でき、平均層厚は約40cmであった。遺跡内の竪穴建物跡・土坑等のほとんどが、排水を考えてかこの第Ⅵ層を床面又はベッド状遺構として揃える傾向にあった。また、本調査区の至るところでゴボウトレンチャーによる攪乱が見られたが、このゴボウトレンチャーの最深部も第Ⅵ層中まで達し、遺構や遺物の検出に影響を及ぼした。第Ⅶ層(黒色土)は平均層厚約30cmで、遺構は確認できなかったものの土器片や黒曜石剥片など縄文時代前期のものと考えられる遺物が数点出土した。第Ⅷ層(鬼界アカホヤ火山灰堆積層)の平均層厚は約40cmで、層中下位にはアカホヤ火山豆石を明瞭に確認することができた。第Ⅸ層(桜島11テフラ濃集層)の上層(第Ⅸ層)から下層(第Ⅹ層)は縄文時代早期の遺物包含層で、土器片や石鏃等が数点出土した。また、第Ⅸ層中下位から第Ⅹ層中上位にかけて集石遺構1基と土坑1基を検出した。第Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層の平均層厚はそれぞれ約10cm・30cm・30cmであった。

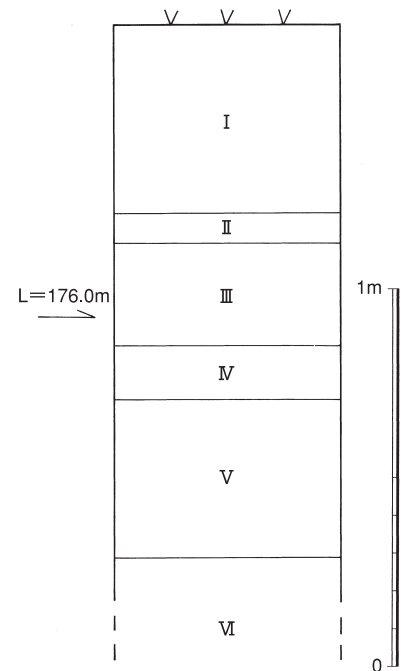
2 グリッド及び確認トレンチ配置

調査に際しては、現地での記録図作成のため、日本測地系に準拠した10m単位のグリッドを設定し、アルファベットと整数で名称を与えた。南北方向は北から南へD～R、東西方向は西から東へ3～23に区画し、この二つの組み合わせで第5図に示す区画(例:「F15グリッド」)を設定した。

また今回の調査においては、縄文時代早期から中期にかけての遺構・遺物を検出するため、確認用のトレンチを第5図(網掛部)に示すとおり設定し、掘削を進めた。

第1表 第Ⅵ層上面土層堆積状況 (K19グリッド東壁)

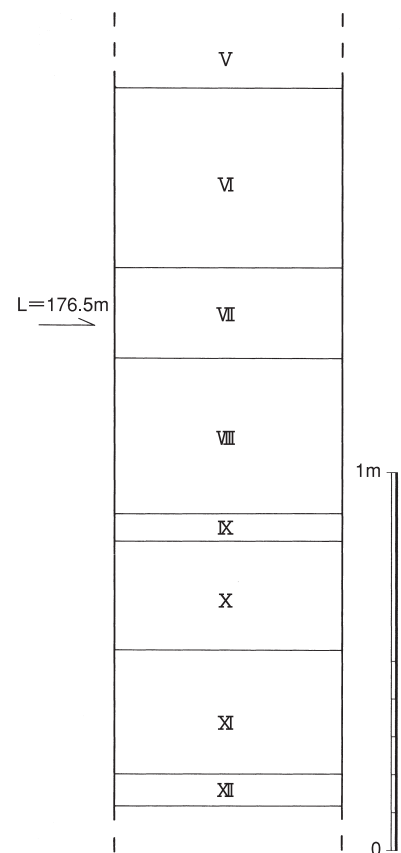
層序	色 調	特 徴
第Ⅰ層	灰白色土 (Hue10YR5/1)	表土・旧耕作土 厳密には、径20mm以下の文明軽石を15～20%程度含む現耕作土、径10mm以下の文明軽石を10～15%程度含む旧耕作土、径5mm以下の文明軽石を7%程度含むそれ以前の耕作土の三層に分かれる。
第Ⅱ層	にぶい黄橙色軽石 (Hue10YR7/4)	桜島文明軽石 (Sz-3、P3) の一次堆積層 径1～5mmの粒子で、10～20mm程度のもも散漫に含む。層中下位から最下位に微細粒が見られる。耕作の影響を受け部分的に残存。
第Ⅲ層	黒色土 (Hue10YR1.7/1)	黒色粘質粗砂 御池軽石に由来する微細粒子が極少量含まれる。粘性があり、ややしまっている。
第Ⅳ層	暗褐色土 (Hue10YR3/3)	暗褐色粘質粗砂 径1～5mmの御池軽石を3～10%程度含み、第Ⅴ層に近づくにつれ散漫に混在する。Ⅲ層より粘性は弱い、しまっている。
第Ⅴ層	にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)	霧島御池軽石 (Kr-M) の漸移層 径1～5mmの御池軽石を層中上位では10～20%程度、下位では50%程度散漫に含み、径10～20mmの粒子も散見される。粘性は弱く、堅くしまっている。



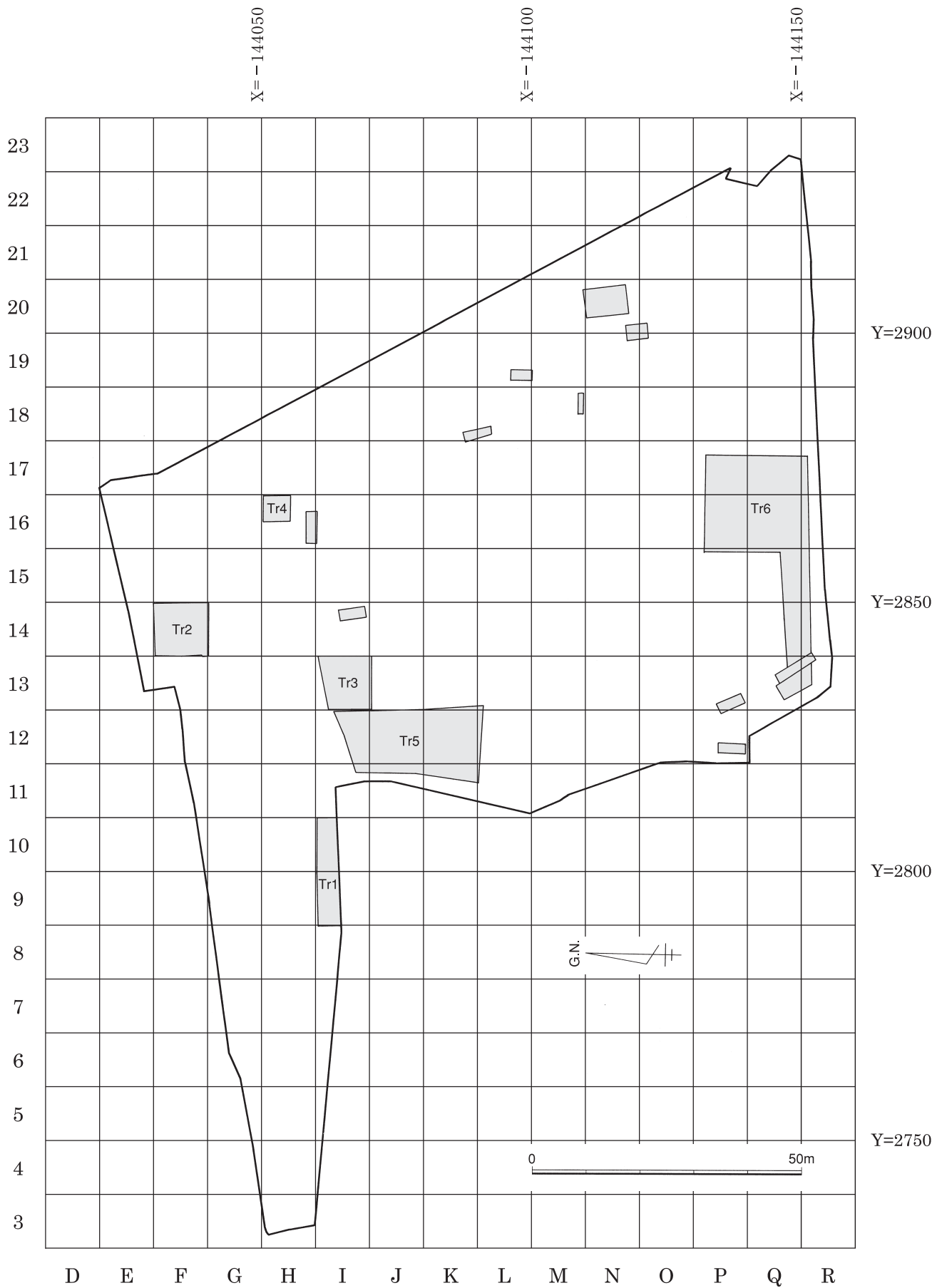
第3図 第Ⅵ層上面土層堆積状況 (S=1/20)

第2表 第Ⅵ層下面土層堆積状況 (I12グリッド下層確認トレンチ〔Tr5〕北壁)

層序	色 調	特 徴
第Ⅵ層	明褐色軽石 (Hue10YR6/8)	霧島御池軽石 (Kr-M) の一次堆積層 径1～3mmの粒子を中心に、径5～10mmの粒子も散見される。しまっているが、乾燥すると崩れやすい。
第Ⅶ層	黒色土 (Hue10YR2/1)	黒色粘質粗砂 層中上位には径20mm以下の御池軽石を20%程度含み、中～下位にかけて赤橙色の微細粒をわずかに含む。粘性があり、しまっている。
第Ⅷ層	黄橙色火山灰 (Hue10YR7/8)	鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) の一次堆積層 層中下位の厚さ約60mmにわたって径10mm以下のアカホヤ火山豆石が密に堆積している。粘性がなく、層中下位は堅くしまっている。
第Ⅸ層	黒褐色土 (Hue10YR2/2)	黒褐色粘質粗砂 径1～10mmの明黄褐色粒子を3%程度含む。
第Ⅹ層	黒褐色土 (Hue10YR3/2)	桜島11テフラ (Sz-11、P11) の濃集層 黒色粘質粗砂に径20mm以下の明黄褐色粒子が30～40%程度混入する。霧島蒲牟田スコリア (Kr-Km) の可能性も考えられる径2mm程度の赤褐色粒子もわずかに含む。粘性があり、非常に堅くしまっている。
第Ⅺ層	黒褐色土 (Hue10YR2/3)	黒褐色粘質粗砂 径20mm以下の明黄褐色粒子を1～10%程度含む。
第Ⅻ層	にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3)	桜島薩摩火山灰 (Sz-S、P14) の混入層 明黄褐色粗砂50%とにぶい黄褐色土50%が混在する。5mm以下の明黄褐色粒子を含み、下位にいくほど大きくなる。



第4図 第Ⅵ層下面土層堆積状況 (S=1/20)



第5図 グリッド及びトレンチ配置図 (S=1/1,000)

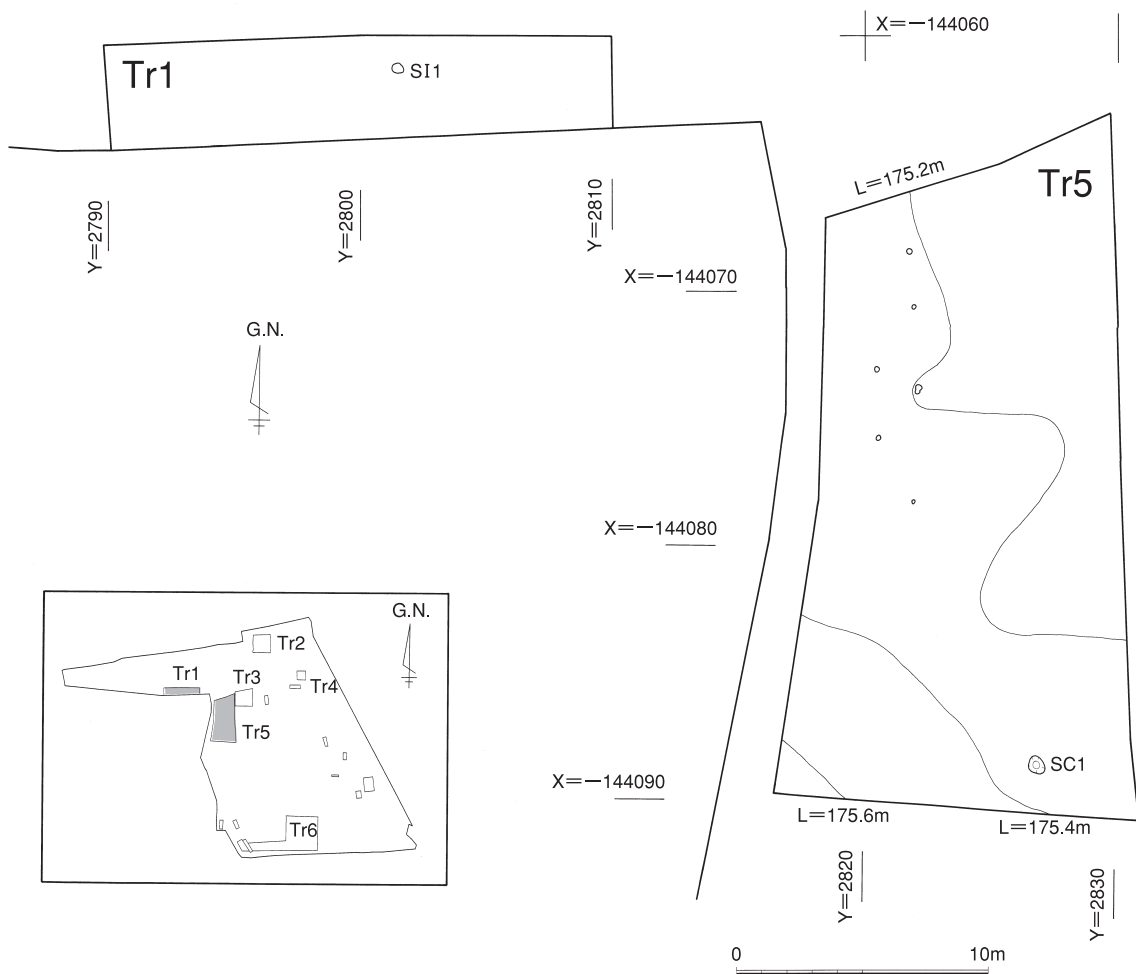
第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 早期の遺構

第6図は、縄文時代早期の遺構分布を示した図である。第Ⅵ層（Kr-M）より下位層での確認トレンチ調査を、第5図のとおり16箇所を実施した。その結果、6つのトレンチ（Tr1～6）で遺構・遺物を確認することができた。

縄文時代前期から中期の包含層と考えられる第Ⅶ層では、遺物は少量確認できたものの遺構を検出することはできなかった。その後、第Ⅷ層（K-Ah）を除去し掘削を進めていくと、貝殻文円筒形土器の破片や打製石鏃・剥片等がいくつかのトレンチで散見された。しかし、遺構は調査区北西部に位置するTr1で集石遺構1基、Tr5で土坑1基を検出するにとどまった。これらはいずれも、Sz-11の漸移層である第Ⅸ層から濃集層である第Ⅹ層にかけて検出された。また、Tr5の第Ⅻ層内上面ではピット6基を確認することができたが、性格は不明である。

第6図中に付記した等高線は、第Ⅺ層下面での地形を示すものである。



第6図 早期の遺構分布図（縄文、S=1/300）

(1) 集石遺構

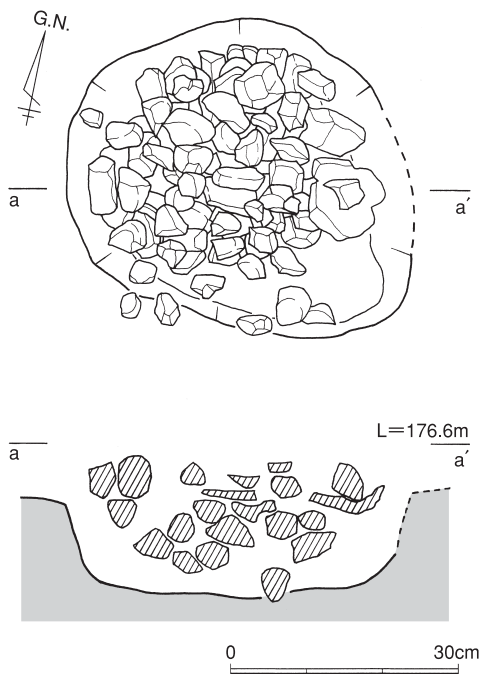
1号集石遺構 (SI1、第7図)

SI1は、調査区北西部I10グリッドに位置し、K-Ah下層の第IX～X層にかけて検出された集石遺構である。検出面での礫範囲は径約0.42mの円形プランを呈し、その周囲に散礫が見られた。構成礫は5～10cm長の砂岩製の垂角・角礫が多く、そのほとんどが焼けて赤化していた。礫密度は高い。掘り込みも円形プランを呈し、長軸約0.5m、短軸約0.42m、深さは最深部で約0.14mを測る。

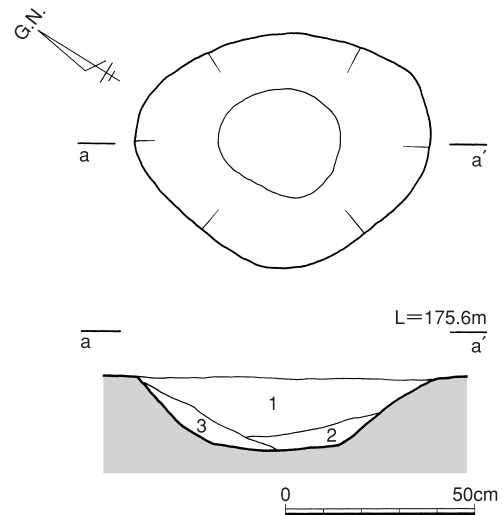
(2) 土坑

1号土坑 (SC1、第8図)

SC1は、調査区中央部西側K12グリッドに位置し、K-Ah下層の第X層で検出された土坑である。上端の計測値で長軸約0.78m、短軸約0.63mの平面形態は楕円形を呈し、深さは最深部で約0.19mを測る。遺構内から両輝石安山岩製の自然石と思われる石が3点出土したが、遺構が埋まる際に流れ込んだものと考えられる。



第7図 1号集石遺構実測図 (縄文、S=1/10)



- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
微細な黄橙粒を全体的に含む。軟質粗粒バミスを散漫に含む。炭化物多し。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
暗褐色斑が目立つ。3に含まれている白色微細粒をほとんど含まない。
- 3 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)
白色微細粒をわずかに含む。1と同様の粗粒バミスを含む。

第8図 1号土坑実測図 (縄文、S=1/20)

2 早期の出土遺物

遺構に伴わず、第X～XI層から出土した遺物を第9・10図に示した。個々の遺物の詳細については、遺物観察表① (第3表) 及び遺物計測表① (第7表) を参照されたい。

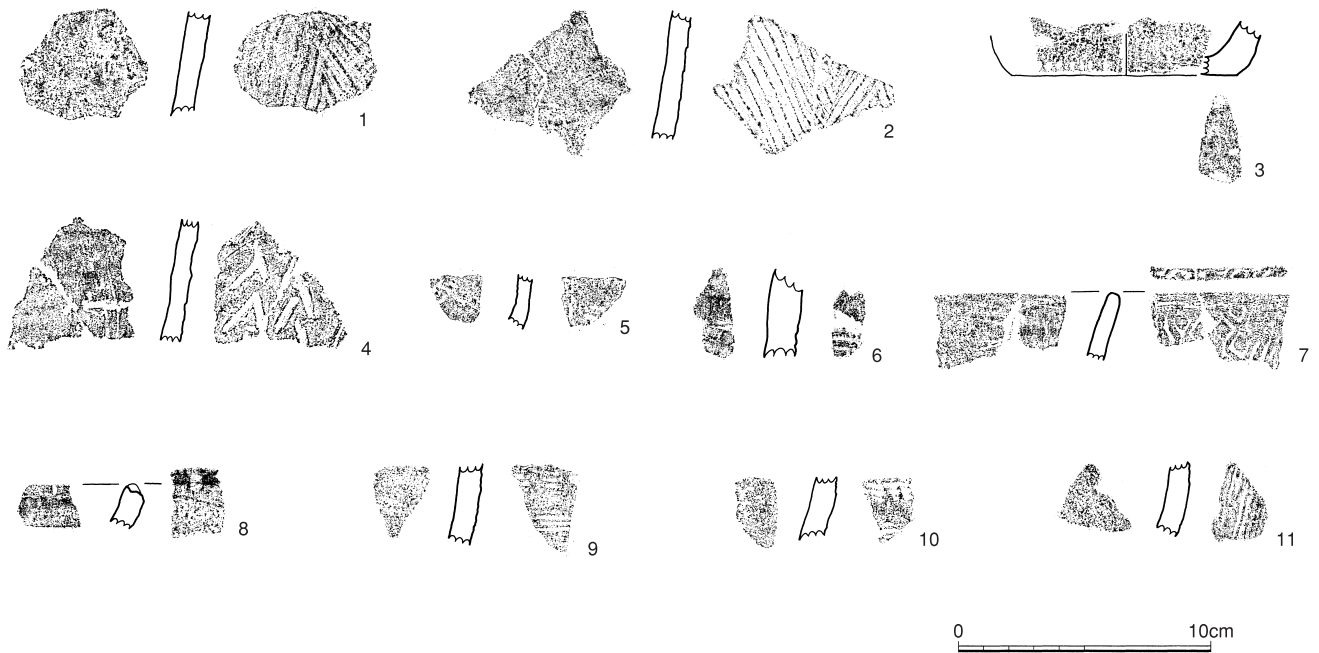
(1) 早期の縄文土器【第9図】

1～11の土器は、第VIII層 (K-Ah) より下層の出土遺物で、縄文時代早期に位置づけられるものである。

1～6は貝殻文円筒形土器の深鉢である。1・2は石坂式の胴部である。貝殻条痕文が斜方向に施され、山形状にぶつかり合う。3は底部で、底部周縁部に約0.5cmおきに浅い刻目が施される。1・2と色調や胎土等が類似するため、石坂式の底部と考えたい。4は桑ノ丸式の胴部である。外面には、縦方向に2列の羽状

の短沈線文が確認でき、沈線内には工具痕と考えられる条痕が残る。5も胴部で、羽状の短沈線文が施される。胎土には金色光沢粒が多量に含まれている。6は口縁部に近い胴上部で、横方向の貝殻条痕文が施される。

7～11も深鉢である。7・8は口縁部で、7には山形と菱目の押型文が口唇部まで施され、手向山式と考えられる。8の口唇部は丸みを帯び、貝殻刺突文が施される。外面は風化著しい。9・10は胴部で、ともに外面上部に横方向の押し引き文が施され、その下位にも貝殻条痕文が確認できる。11の胴部にも、斜方向の貝殻条痕文が施される。8～11は塞ノ神B式に属するものと考えられる。



第9図 早期の縄文土器実測図（縄文、S=1/3）

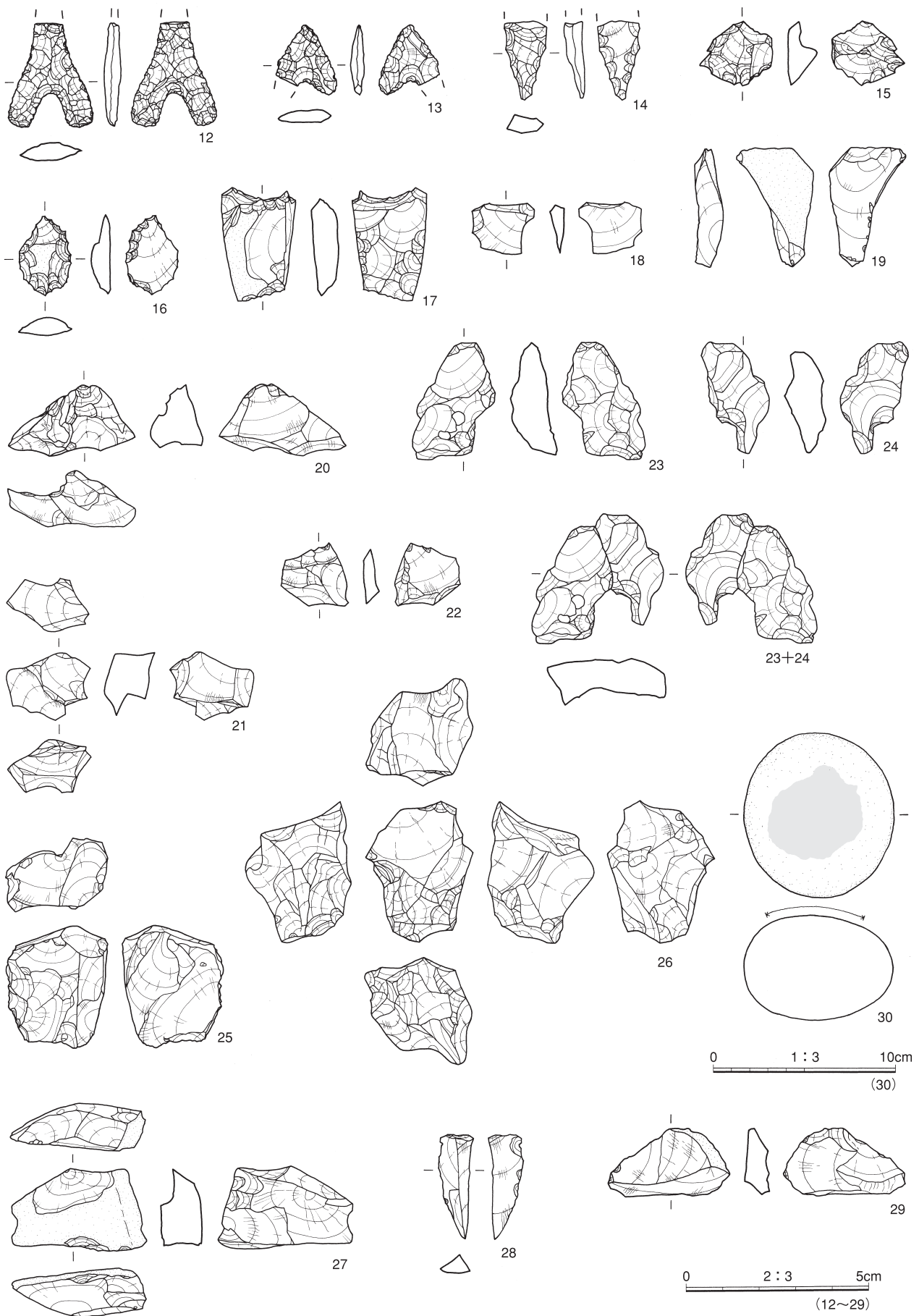
（2）第X・XI層出土の石器類【第10図】

12～30の石器類は、第VIII層（K-Ah）より下層の出土遺物で、縄文時代早期に属すると考えられるものである。

12・13は打製石鏃である。12はチャート製で、鋒が欠損する。基部は深く抉られ明瞭な脚部をつくる。平面形態は逆「Y」字状の凹基形となる。13は姫島産の黒曜石製で、脚部を欠損する。平面形態は正三角形に近い凹基形である。14は安山岩製の石錐で、側縁部は両面から調整を加え整形している。

15～24は剥片で、15は黒曜石製、16～24は珪質岩製である。15～17の周縁部には明瞭な二次加工が認められ、16は特に細かい調整で整形されている二次加工剥片である。23と24の剥片は接合できるが、珪質の白く風化した部分が目立つ。25～27は石核で、25・26は珪質岩製、27は安山岩製で、27の表面には風化した自然面が残る。28・29は安山岩製の剥片である。28には明瞭な二次加工は認められないものの、形状から石錐として利用された可能性も考えられる。

30は砂岩製の円磔を利用した磨石で、表面中央部のみが磨面となる。



第10図 第X・Ⅱ層出土石器類実測図（縄文、S=2/3、1/3）

3 前期の出土遺物

確認トレンチ内の第Ⅶ層から出土した遺物を第11・12図に示した。個々の遺物の詳細については、遺物観察表①（第3表）及び遺物計測表①（第7表）を参照されたい。

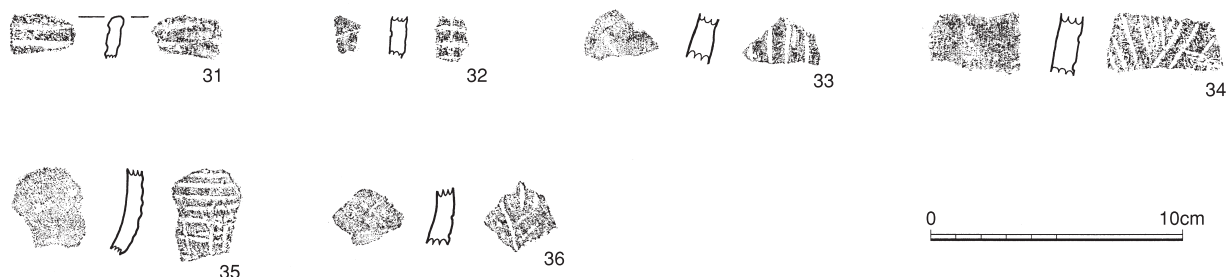
(1) 前期の縄文土器【第11図】

31～35の土器は、第Ⅵ層（Kr-M）下から第Ⅷ層（K-Ah）上間で出土した遺物で、縄文時代前期に位置づけられるものである。ただし、36については第Ⅴ層出土の土器ではあるが、前期の様相を呈するためここに含めることとした。

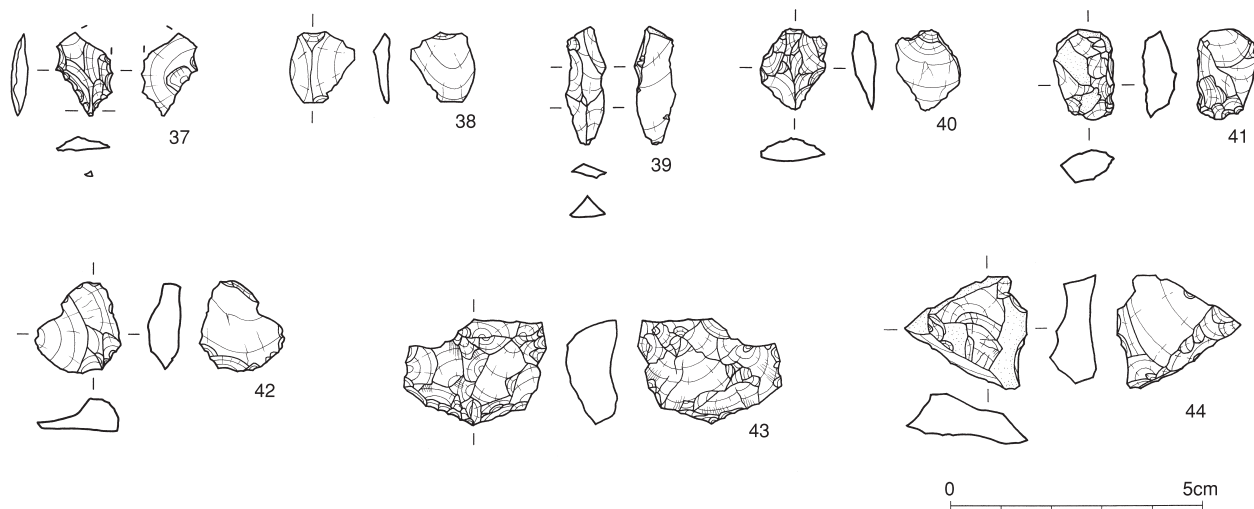
31～34は曾畑式系統に属するものである。31は口縁部で、外面には横方向の浅い平行沈線文が、内面には横方向の明瞭な凹線状の平行沈線文が巡る。32は口縁部付近で、外面に確認できるだけで3条の横方向の平行沈線文が巡らされ、沈線内には炭化物が付着している。内面にも斜方向の細かい沈線1条が確認できる。33・34は胴部で、ともに等間隔の平行沈線文が施される。34は逆向きの斜方向に向かう平行沈線文同士がぶつかり合い「y」字状を呈する。35は横方向だけでなく、縦方向にも沈線文が施される。36は短沈線文が綾杉状に施される。35・36も曾畑式の可能性が考えられる。

(2) 第Ⅶ層出土の石器類【第12図】

第Ⅵ層（Kr-M）下から第Ⅷ層（K-Ah）上間で出土した37～44の石器類は、縄文時代前期に該当するものと考えられる。37はチャート製の石錐で、基部が欠損している。38は玉髓製の剥片である。39～43は黒曜石製の剥片で、39を除いて周縁部を中心に部分的に二次加工が認められる。特に43は表裏両面ともに多数の二次加工が認められる。44は黒曜石製の石核で、表面には自然面が残る。



第11図 前期の縄文土器実測図（縄文、S=1/3）



第12図 第Ⅶ層出土石器類実測図（縄文、S=2/3）

4 後・晩期の出土遺物

縄文時代後期から晩期にかけての遺構は検出されなかったが、遺物については第Ⅳ～Ⅴ層にかけて比較的良好な資料が多く得られた。これらの資料は、後期後半の磨消縄文系の深鉢から弥生時代早期の刻目突帯文土器に至るまでのもので、この地で連綿と土器の系譜が継承されていったことを物語っている。

(1) 後・晩期の遺物分布

前述したように、当該期の遺構を検出することはできなかったが、出土遺物を手がかりに遺跡内における当時の生活空間を想定できないものかと考え、遺物の分布状況を第13図（遺物集中Ⅰ区・Ⅱ区の2箇所は拡大）にまとめた。

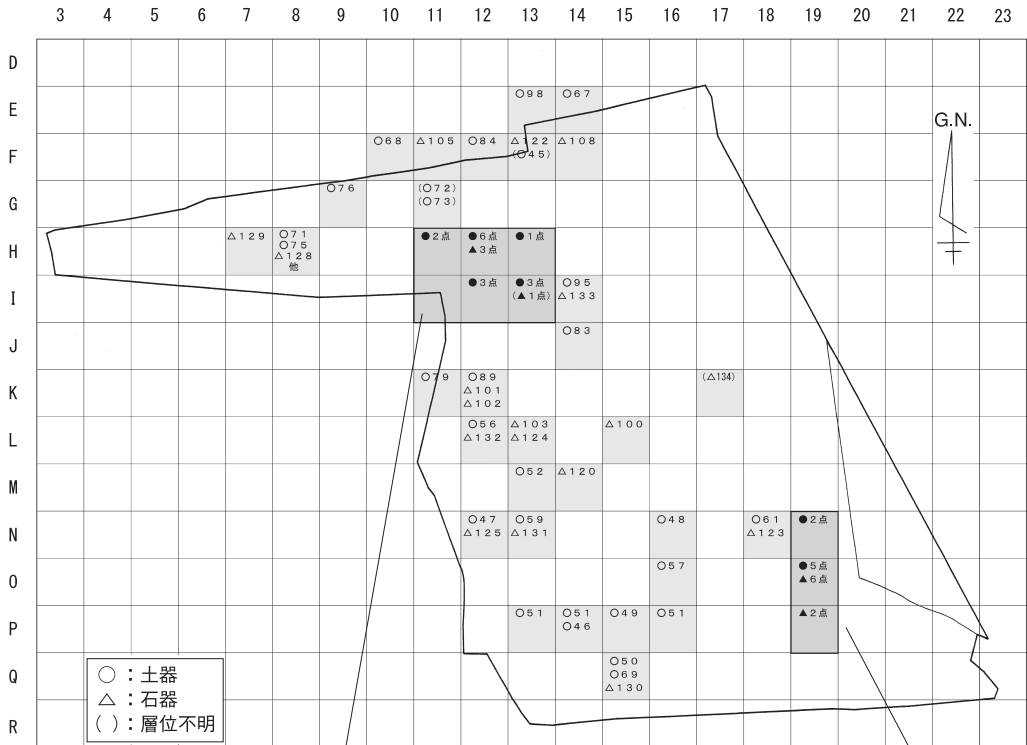
弥生時代の遺構のほとんどが調査区北東部に集中しているのに対して、当該期の出土遺物は調査区西側に偏るという相反する傾向が見て取れる。調査区内では、中央部西側のK～L11グリッド付近が最も標高の高い地点の一つとなるが、おそらくその西側（調査区外）にはさらに標高の高い地点が存在していたことが考えられる。そこに何らかの当該期の生活空間の中心が存在し、それを取り巻く調査区内西側に遺物が偏るのではないかと考える。また、遺物が集中するⅠ区（H～I11～13グリッド）では晩期の遺物が集中し、Ⅱ区（N～P19グリッド）では後期後葉の遺物が集中するというような、遺物のまとまりの傾向も見取れる。その他、分布の詳細については「第Ⅴ章 総括」で述べることにする。

個々の遺物の詳細については、遺物観察表①（第3表）及び遺物計測表①（第7表）を参照されたい。

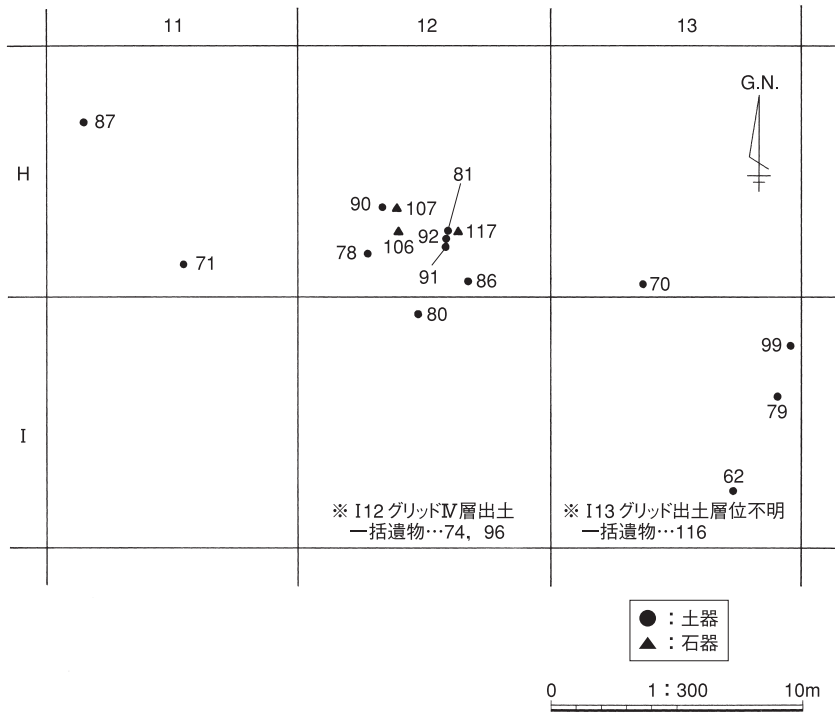
(2) 後・晩期の縄文土器【第14・15・16図】

45～99の土器は、第Ⅱ層（Sz-3）下から第Ⅵ層（Kr-M）上間で出土した遺物の中から、縄文時代後期から晩期に位置づけられるものを集約したものである。ただし一部、層位不明の一括資料も当該期の土器の特性をもつことからここに含めることとした。

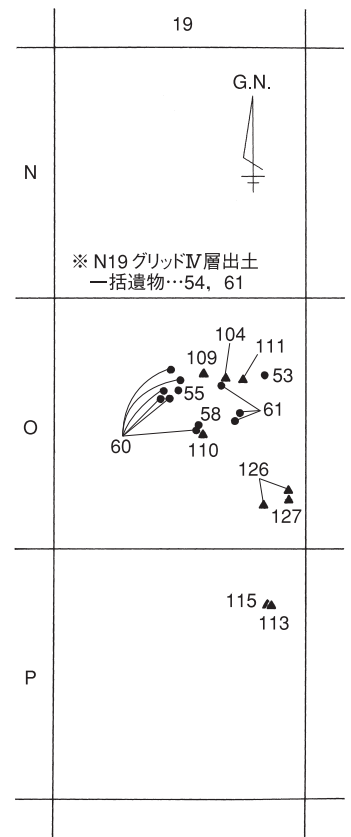
45～62は縄文時代後期後半の磨消縄文系（西平式）～黒色磨研系（三万田式～入佐式）の深鉢・鉢である。45は頸部変化点に対向弧文が施され、そのやや上位に横方向からの刺突による列点文が約1～1.5cm間隔で横に並ぶ。列点文の下位には縄文もかすかに確認できる。46は胴上部付近で、横方向に多条の粗い沈線文が施されている。47は鉢で、胴部に横方向の平行沈線文で区画をつくり、中に細斜線が施される。48～51は頸部から口縁部にかけて直線的に外方へ立ち上がるタイプのものである。48は口唇部が平坦で、49・50は丸みを帯びる。51の口唇部は幅狭で平坦な面をつくる。52～56は口縁部を肥厚させるタイプのものである。52は口唇部が丸みを帯び、口縁部外面には凹線状の沈線が1条巡る。53は外方へ向かう口縁部の上面に、やや内傾する口唇部が貼り付けられる。外方を向く口縁部先端と、やや内傾する口唇部との間はそれぞれ凹線状にくぼむ。54・55は内面に粘土を貼り付け、口縁部を肥厚させる。54の外面には、横方向に凹線状の沈線が2条施される。56は口縁部直下に断面三角形の突帯を貼り付け肥厚させる。57～59は胴上部から頸部付近である。57は口縁部との接着面で剥離し、内面には横方向の条線状の工具痕が残る。58は胴張り出し部に凹線状にくぼませる沈線2条が巡り、その間は突帯状に隆起する。59は胴部変化点上位に横方向の沈線が施された後、豆状形態のものを押し当てた刻目様の列点文が約5mm間隔で施される。列点文内部には繊維痕が認められ、中心よりやや下位に1条の細い沈線が確認できる。60は胴部から頸部への変化点を肥厚させ、頸部から口縁部にかけては緩やかに外反し、口唇部は平坦な面をつくる。61は上げ底状の底部付近で、胴部は底面端部から外方へ直線的に立ち上がる。内面の横方向の条線が類似し、出土地点も近いことから60と同一個体である可能性が高い。62は上げ底状の底部で、丁寧に整形されている。内面には平坦な面が広がる。63は胴部最大



【遺物集中I区 (H~I11~13グリッド)】



【遺物集中II区 (N~P19グリッド)】



第13図 後・晩期の遺物分布図 (縄文、S=1/1,600、1/300)

径位置に明瞭な屈曲点を持ち、内外面に横方向の貝殻条痕が確認できる。外面は屈曲点より下位、内面は上位で貝殻条痕がナデ消しされる。

64～77は黒色磨研系（入佐式～黒川式）の浅鉢である。64・65は口縁端部が玉縁状を呈する。66は胴部の最大径位置に巡る沈線により、下位に段を形成する。この沈線内では丹が確認できる。67は胴部が直角に屈曲し、頸部から口縁部にかけて外反する器形的特徴を有する。口縁部内面は肥厚により玉縁状を呈し、鱗状かりボン状の突起物が貼り付けられる。胴部屈曲部の外面張り出し部をつまみ出す際に付いたと思われる沈線が、屈曲部上に1条巡る。68は頸部から口縁部へと直線的に外方へ向かい、口唇部は平坦に近い。口縁端部の内外面に沈線が1条ずつ施される。69は口縁端部の外面にのみ沈線1条が施され、口縁部上面は玉縁状を呈する。70は口縁端部にリボン状の突起物がつくり出され、断面「く」の字状を呈する。胴部外面の最大径位置と口縁部内面にそれぞれ1条の沈線が施される。外面は風化しているが、ミガキ痕が認められる。71も口縁部が断面「く」の字状を呈し、口縁部内面に1条の沈線が施され口唇部は丸みを帯びる。70に比べ、胴部の屈曲が明瞭となる。72は口縁端部に付く突起物である。72・73ともに口縁部は断面「く」の字状を呈し、口縁部内面には1条の凹線状の沈線が施され、口唇部が丸みを帯びる。出土地点が近く、形状・調整等が類似することから同一個体の可能性が考えられる。74も口縁端部に付く鱗状かりボン状の突起物である。外面の突起物直下に1条の凹線状の沈線が施される。75は頸部から上を欠損するが、外方に直線的に伸びる長頸状を呈すると考えられる。胴部屈曲部はほぼ直角となる。76・77は胴上部が湾曲し、短めの口縁部が欠損しているものと考えられる。非常に丁寧な整形と調整により仕上げられている。

78～84は縄文時代晩期（黒川式新段階後葉：松添式）の粗製深鉢である。78はわずかに肥厚させた口縁部に横方向の貝殻条痕が残る。口唇部最上位には稜が立つ。79も口縁部全体をわずかに肥厚させ、口唇部は丸みを帯びる。口唇部には、浅細の沈線が1条巡る。78・79ともに外面全体にススが付着している。80～82は口縁部に粘土を貼り付け、肥厚させた口縁部をもつ。いずれも外面には条痕が観察できる。80・81は口縁部が帯状となる。83・84は口縁部直下に1条の突帯を有する。内面から口唇部までミガキが施され、口唇部は平坦な面をつくる。84は外面全体にススが付着している。

85～96は縄文時代晩期の組織痕土器である。これらは、松添式土器の一器種を構成すると考えられるボウル状の鉢である。全て底部付近の資料ではあるが、傾きを特定できるほどの残存状況ではない。85～94は編布圧痕をもつものである。85・86は経糸間が1cm未満のもので、緯糸も細く密である。87～91は経糸間が1.5cm前後のもので、緯糸には弛みが見られる。89・90は外面が磨滅しているため、圧痕も不鮮明である。90の内面には丁寧なミガキが施され、黒色の光沢をもつ。92～94は経糸間が2cm以上のもので、緯糸は太く目も粗い。96は網目圧痕をもつもので、97もその可能性が考えられる。95には凹痕が認められるものの、網目圧痕の一種であると考えられる。

98は粗製深鉢で、口縁部に鱗状かりボン状の突起物がつくり出される。口縁部は貼り付けにより突帯状に肥厚し、口唇部は丸みを帯びる。胴部にも突帯が1条貼り付けられる。99は厚みのある平底となり、底部周縁部がやや張り出す。胎土・色調が98と類似し、出土地点も近いことから同一個体の可能性も考えられる。

（3）第Ⅳ・Ⅴ層出土の石器類【第17・18図】

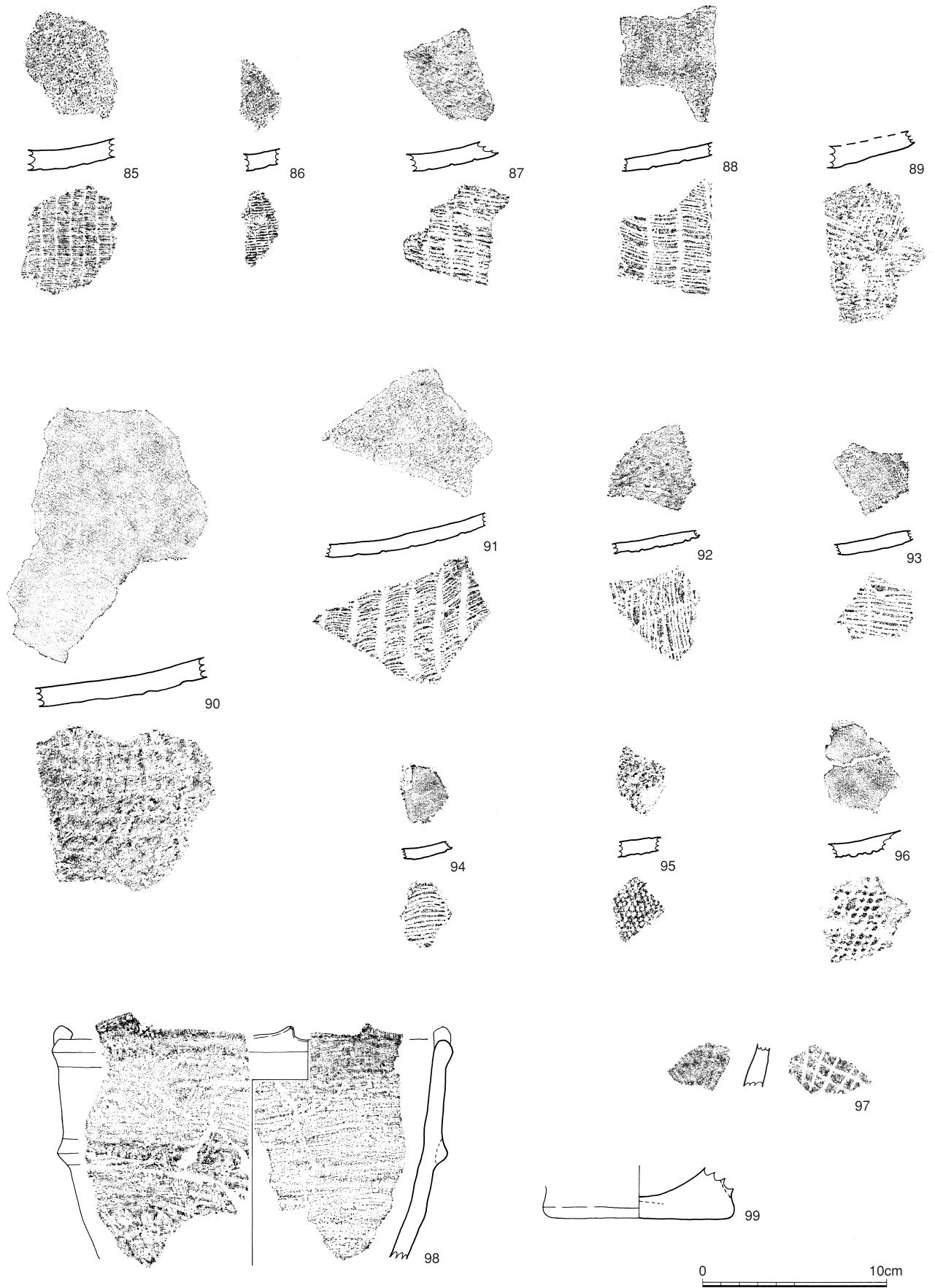
100～134の石器類は、第Ⅱ層（Sz-3）下から第Ⅵ層（Kr-M）上間で出土した遺物の中から、縄文時代後期から晩期に位置づけられる可能性の高いものを集約したものである。ただし一部、層位不明の一括資料も当該期の特性をもつことからここに含めることとした。



第14図 後・晩期の縄文土器実測図①（縄文、S=1/3）



第15図 後・晩期の縄文土器実測図②（縄文、S=1/3）



第16図 後・晩期の縄文土器実測図③（縄文、S=1/3）

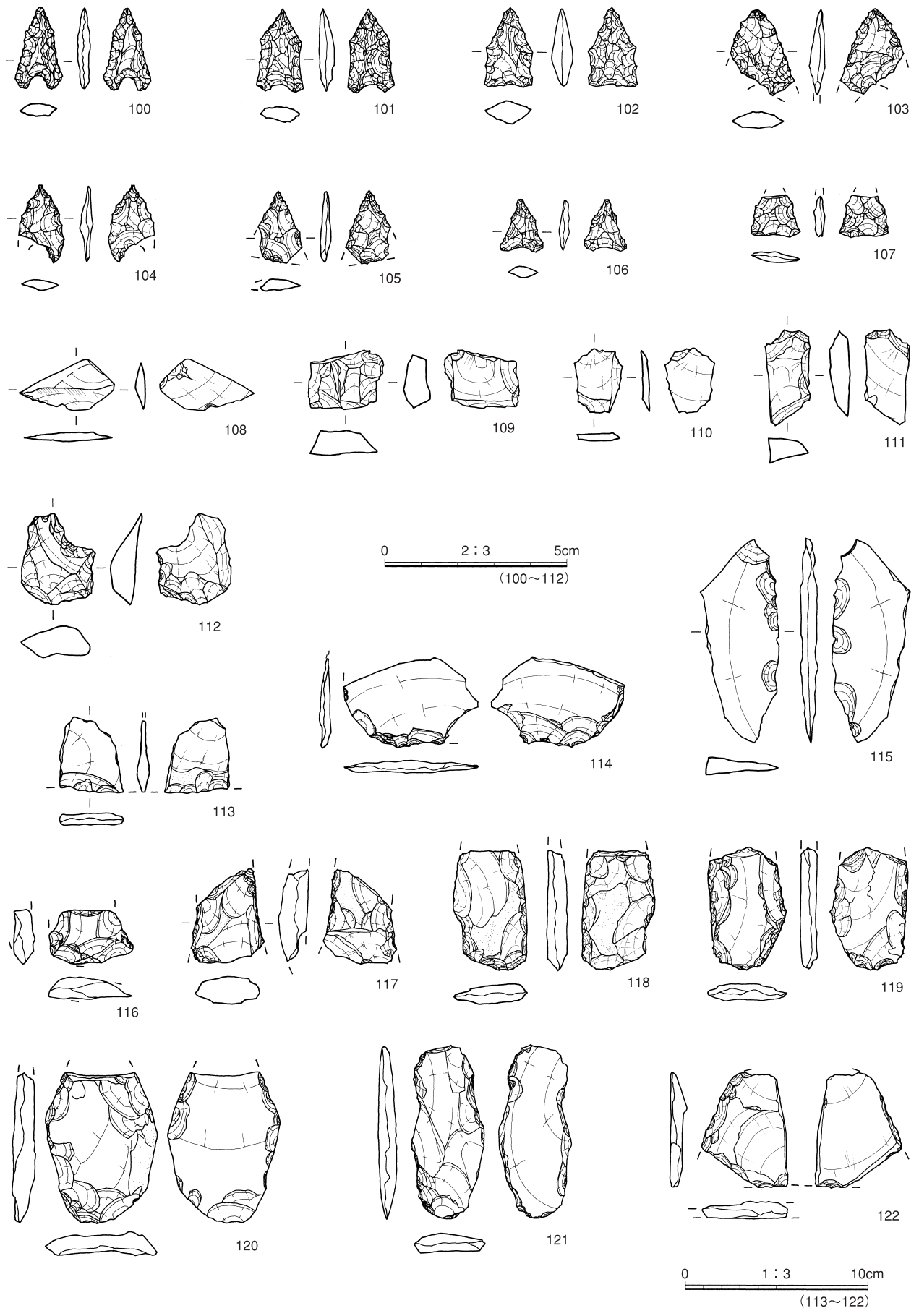
100～106は打製石鏃である。100～102は平面形態が略五角形を呈する。100は玉髓製、101はチャート製で、ともに刃部中央上に角をもつ凹基形である。102は玉髓製で、刃部中央下に角をもつ平基である。103はチャート製で両脚部が欠損しているが、平面形態は正三角形に近い凹基形であると考えられる。104は安山岩製で、片脚部が欠損している。平面形態は身部から脚部にかけて幅狭となる凹基形を呈する。105はチャート製で、基辺両端部が欠損しているが、平面形態は三角形の平基形である。106は安山岩製の小型の石鏃である。平面形態は刃部に凹凸が目立つ三角形を呈し、浅い凹基形である。107は安山岩製で、形状・大きさから異形石器と考えたいが、打製石鏃の基部周辺及び石匙のつまみの可能性も否定できない。厚さは薄く、周縁部に両面から細かい調整を加えて整形されている。

108～112は剥片である。石材は、108が珪質岩、109～111が安山岩、112がチャートである。112は周縁部に二次加工が認められる。113～115は二次加工剥片である。113は両輝石安山岩製で、両面から調整を加えて刃部がつくり出されている。127と石材が非常に類似し、出土地点も近いことから打製石斧の一部となる可能性も考えられる。114はホルンフェルス製で、下部には両面から調整が加えられ刃部を成すものと思われる。115は両輝石安山岩製で、表裏両面ともに大きな剥離で刃部をつくり出し、部分的に再調整を加えて仕上げられている。114・115は削器としての利用も考えられる。

116～122は小型の打製石斧である。116は両輝石安山岩製である。刃半部から裏面にかけて使用による大きな剥離が見られ、基部から身部にかけても欠損している。117～122はホルンフェルス製である。117は刃部付近で、刃部及び基部が欠損している。表裏両面に自然面が残り、側縁部には両面から細かな調整が加えられている。118・119は基部が欠損しているものの、平面形態は細長の舌状となる。側縁部及び刃部ともに表裏両面から大き目の調整を加えて整形されている。120は刃部の平面形態が丸みを帯び、舌状となる。刃部は表裏両面から大き目の調整を加えて整形され、側縁部には自然面や大きな剥離面をそのまま生かしている部分も見られる。121は刃部の平面形態が丸みを帯び、細長の舌状となる。側縁部に抉りをもつタイプである。大きな剥離で整形し、刃部及び側縁部にかけて部分的に仕上げの調整が加えられている。122は側半部及び刃側部が欠損するが、平面形態は台形状であったと考えられる。大きな剥離で整形した後、側縁部及び刃部のみ両面から細かな調整が加えられている。

123～128は中型から大型の打製石斧である。123・124はホルンフェルス製、125～128は両輝石安山岩製である。123の基部は隅丸の方形を呈し、側縁部は表裏両面から調整を加えて整形されている。刃部を欠くものの浅い抉りをもつ撥形であったと考えられる。124は基部が丸く整形され、刃部が欠損している。側縁部には抉りをもたず、表裏両面から調整を加えて整形されている。125は刃部が欠損する。基部が丸く、刃部に向かって大きく広がる形状であったと考えられる。側縁部片面は平坦な面を成す。風化が著しく整形も粗い。126は側半部が欠損しているが、平面形態は基部から刃部に向かって大きく広がる台形状であったと考えられる。節理面や大きな剥離調整により整形し、側縁部及び刃部のみ両面から細かな調整が加えられている。127は身部の側半で、表裏両面ともに節理面を生かし、側縁部のみ両面から細かく調整を加えて整形されている。128は刃側部で、刃部及び側縁部は表裏両面から調整が加えられるが、側縁の自然面は平坦なまま残り、手持ち用の石斧であったと考えられる。

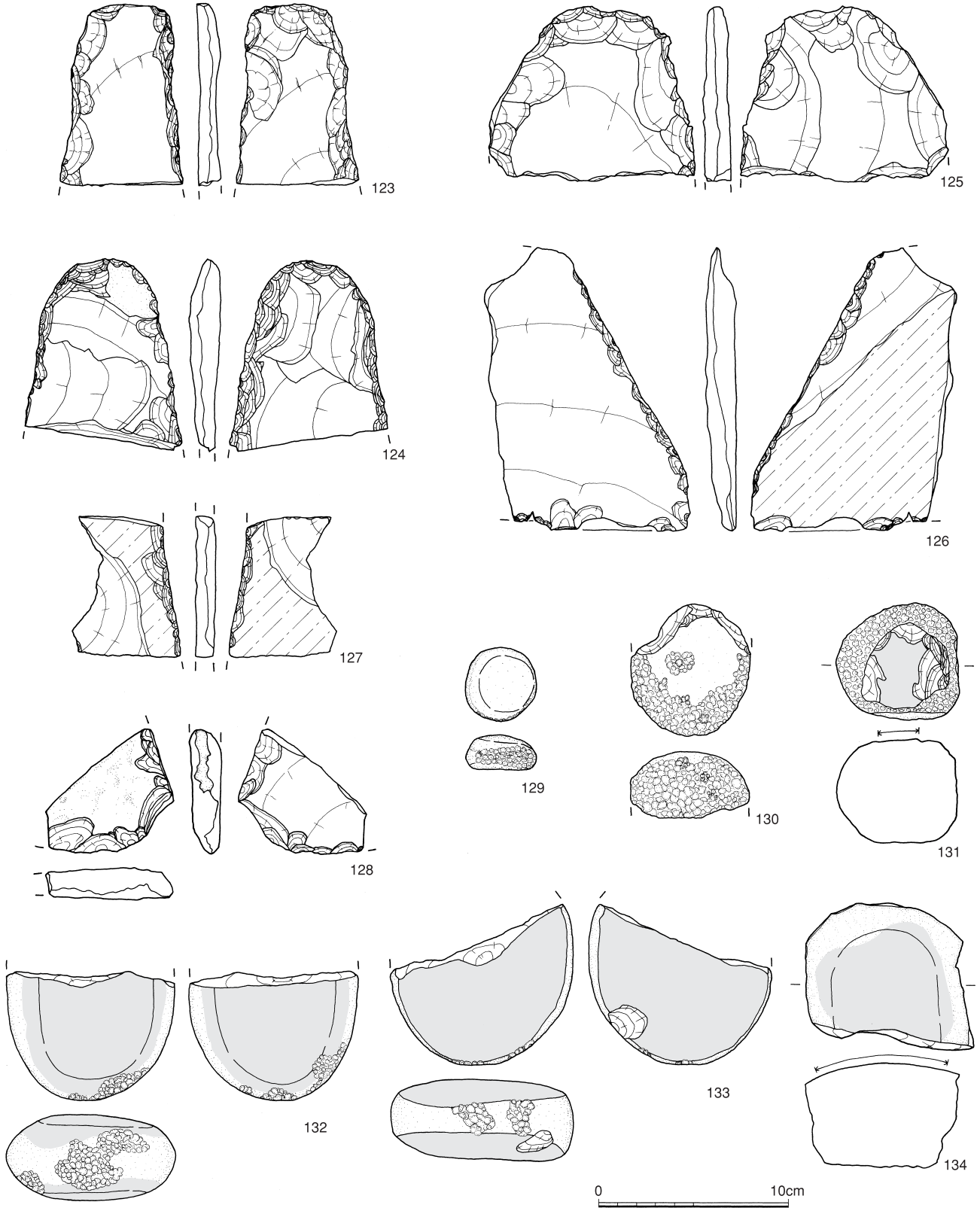
129～131は敲石である。129は砂岩製の扁平な円盤を利用した小型のもので、周縁部に部分的に敲打痕が認められる。130は砂岩製で、敲打痕が明瞭に残る。敲打により円盤が半球状に割れたものと考えられる。131も砂岩製で、素材は立方体状であったと考えられる。角部のみを使用し、5面は平坦な自然面が残る。残り



第17図 第IV・V層出土石器類実測図① (縄文、S=2/3、1/3)

1面は磨面となり、磨石として利用されたものと判断できる。

132~134は磨石である。132・133は砂岩製の扁平な円盤を利用し、表裏両面が磨面となる。ともに周縁部に部分的に敲打痕が認められる。134は砂岩製の剥片を利用したものである。自然面である片面のみを磨面として利用している。



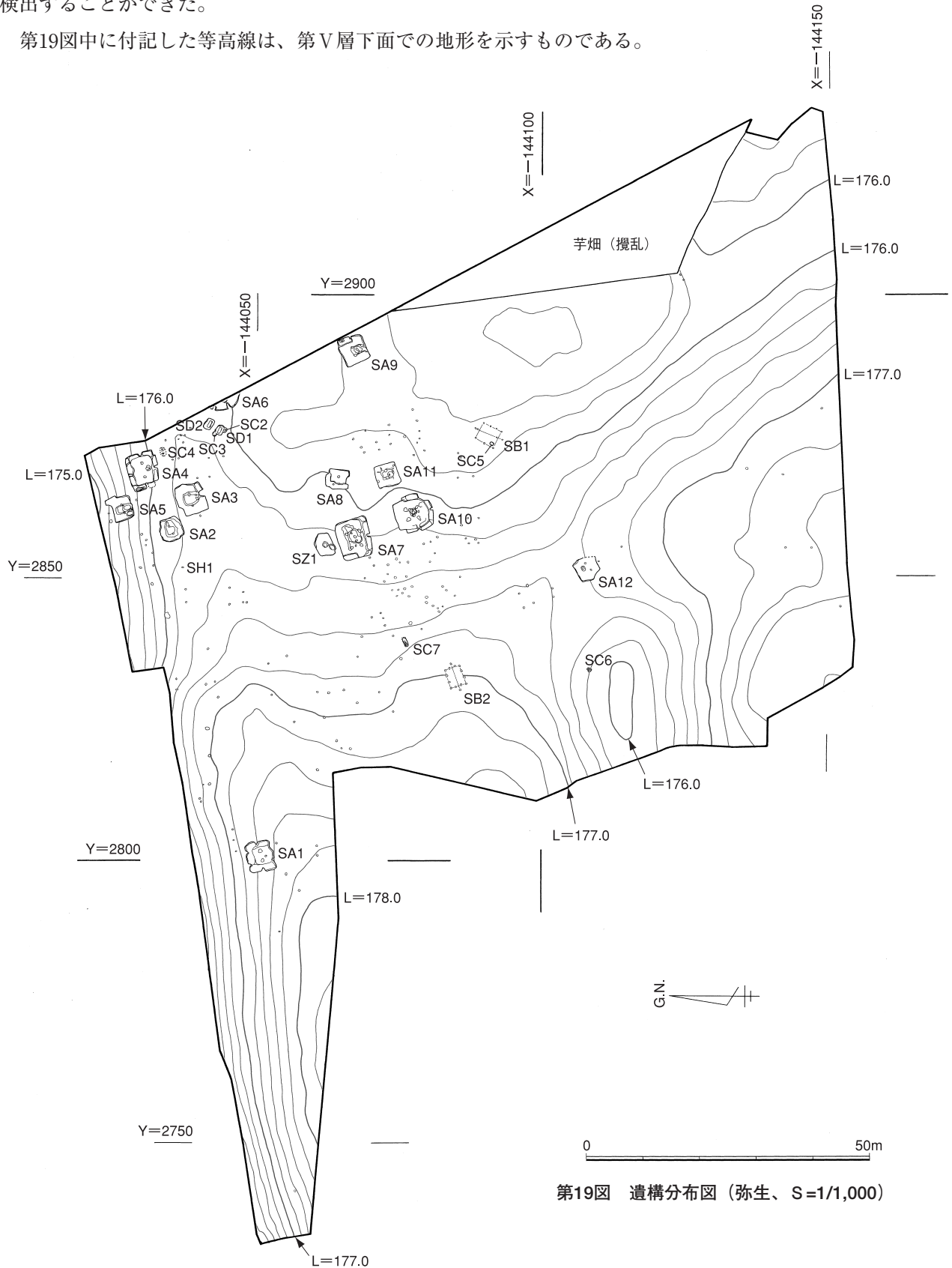
第18図 第IV・V層出土石器類実測図② (縄文、S=1/3)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1 概要

第19図は、弥生時代中期後半の遺構分布を示した図である。調査区中央部から北部にかけて竪穴建物跡13軒（竪穴住居跡12軒・竪穴状遺構1基）、掘立柱建物跡2棟、土壇墓2基、土坑6基、遺物を伴う小穴1基を検出することができた。

第19図中に付記した等高線は、第V層下面での地形を示すものである。

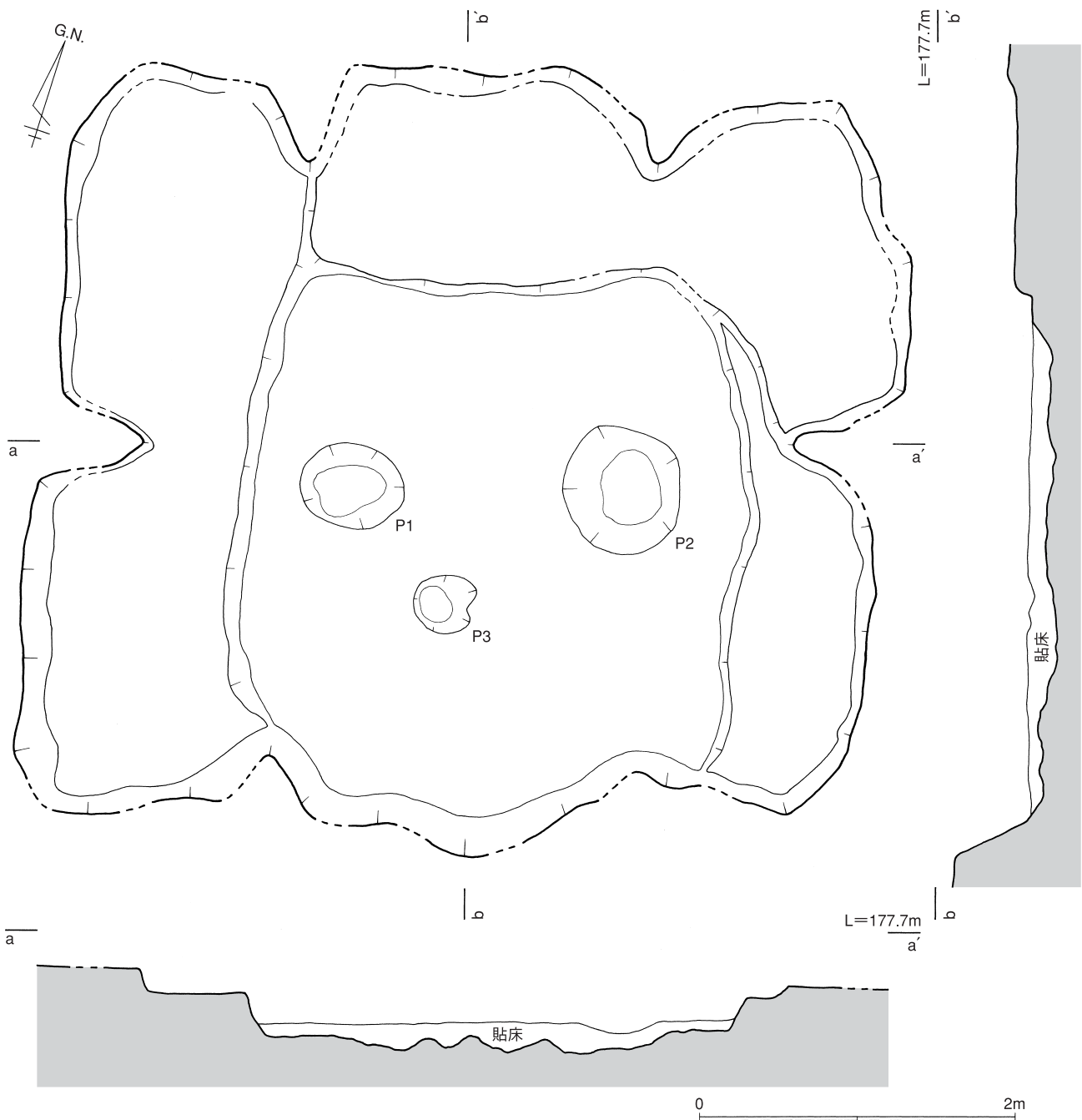


2 竪穴建物跡と出土遺物

【註】 竪穴建物跡のうち、支柱穴をもち住居の構造を有する遺構は「竪穴住居跡 (SA)」、構造的に判断に迷うものは「竪穴状遺構 (SZ)」として表記。

1号竪穴住居跡【SA1、第20図】と出土遺物【第21図】

SA1は、竪穴住居跡が集中する北東～中央部から西方へ約50m離れた調査区北西部G～H 9～10グリッドに孤立した形で位置する。長軸約5.4m、短軸約5.0mの長方形プランを基調とし、突出した6つの壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居である。総床面積は約20.9㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.48mを測る。床面は第Ⅶ層まで掘り込まれた後、0.1～0.2m前後の貼床が施されていた。住居内の中央では、東西方向に並ぶピット2基、南側に1基、計3基のピットを確認することができた。西側のP1は上端の計

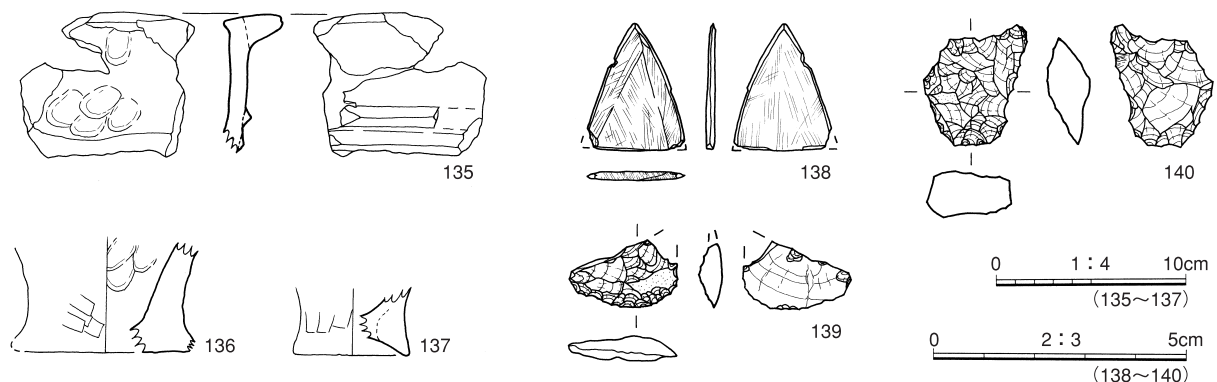


第20図 1号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

測値が長軸約0.68m、短軸約0.52m。東側のP2は長軸約0.82m、短軸約0.76mで、いずれも平面形態は楕円形状を呈する。南側のP3は長軸約0.4m、短軸約0.36mと、東西のピットに比べ平面の掘り込み範囲が小さく、深さ及び住居の構造から判断すると東西方向に並ぶピットが支柱穴である可能性が高い。西側壁中央部の突出壁は約0.58m張り出し、その下の南北方向に設けられた約5.1㎡のベッド状遺構からは約0.14m立ち上がる。東側壁中央部の突出壁は約0.62m張り出し、この南側に設けられた約1.5㎡のベッド状遺構からは約0.07m立ち上がる。この北側にも、一段高い第VI層（Kr-M）下面で揃えられた約4.4㎡のL字形のベッド状遺構が設けられていた。この他、北壁側に約0.25～0.3m張り出す突出壁が2つ設けられ、南壁側にも張り出しは弱い北壁側のもとと対と考えられる2つの突出壁が存在する。

第21図の135～140は、SA1出土の遺物である。135～137は甕である。135の口縁部は断面鋤先状を呈し、口唇部はヨコナデによりわずかにくぼむ。胴上部には、確認できるだけで2条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。136・137は底部からやや内湾して胴下部へと立ち上がる形状を呈す。136は底部周縁部が外に張り出し平底となり、137は上げ底となる。

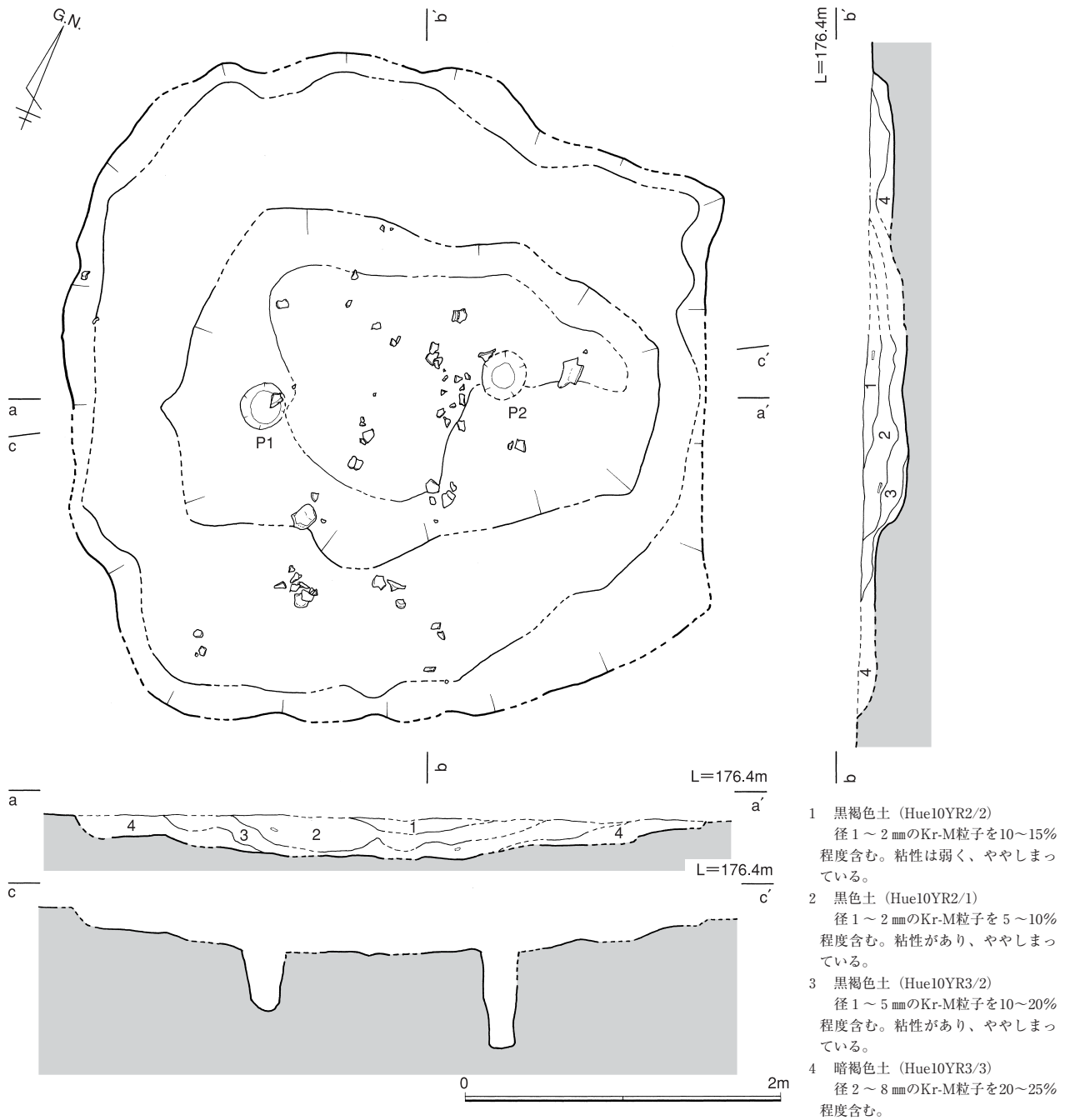
138は暗灰色頁岩製の磨製石鏃で、基端端部が欠損する。平面形態は三角形状の平基形である。139は小型のスクレイパーで、表面刃部には多数の細かい調整が加えられるが、裏面は主要剥離面をそのまま利用して整形している。140は表裏両面ともに周縁部を中心に多数の二次加工が認められる剥片である。139・140ともに石材は黒曜石で、何らかの影響で住居廃絶後の埋土中に紛れ込んだ可能性も考えられる。



第21図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=1/4、2/3）

2号竪穴住居跡【SA2、第22図】と出土遺物【第23図】

SA2は、調査区北東部F15～16グリッドに位置する。一辺が約4mのやや不整形な方形プランを基調とする竪穴住居で、総床面積は約12.2㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.15mを測る。床面は全面第VI層（Kr-M）で揃えられており、貼床は確認できなかった。遺構は床面までトレンチャーで切られている部分もあったが、住居内の中央で東西方向に並ぶピット2基を確認することができた。この他にピットを確認することができなかったことから、2本柱の竪穴住居であったと考えられる。2基の柱穴は上端径約0.3mの円形で、深さは約0.38m（P1）と約0.62m（P2）。両者に差は見られるものの、いずれもしっかりとした掘り込みで底部に硬化した面を確認することができた。床面のほぼ中央に長軸約3.1m、短軸約2.3m、深さ約0.2mの掘り込みがあり、少量の炭化物が出土した。焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。



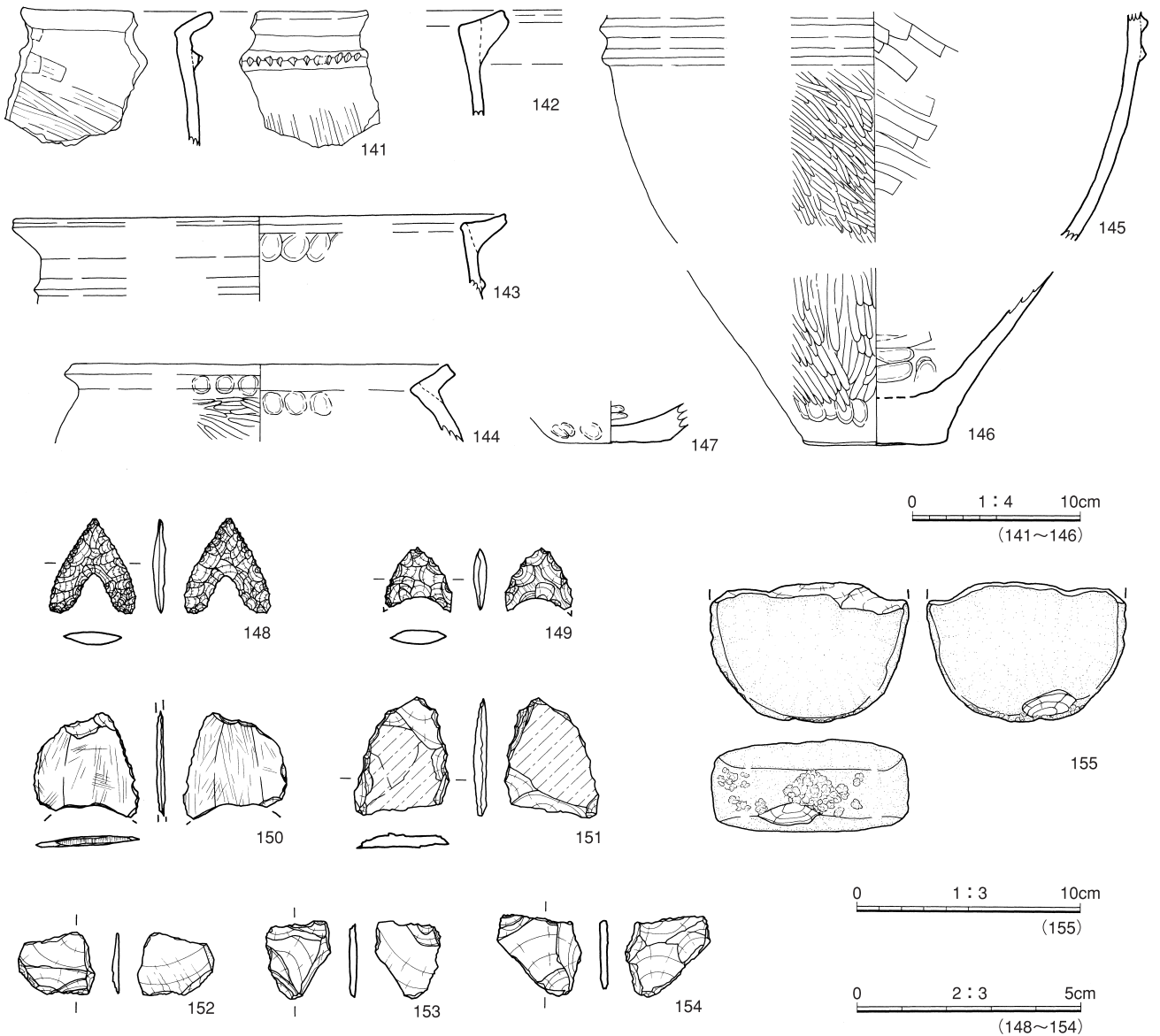
第22図 2号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

第23図の141～155は、SA 2 出土の遺物である。141～143は甕である。141の口縁部は断面が「く」の字状に折れ曲がり、口唇部はやや丸みを帯びる。口縁部直下には、先端部が鋭利な工具で刻目を施した突帯1条が貼り付けられる。142はやや大きめの甕で、断面台形の厚い口縁を貼り付け、口唇部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。143も口縁部は貼り付けられ、口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。胴上部には確認できるだけで2条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。

144～147は壺である。144は広口の無頸壺で、口縁部を貼り付けた際の指頭痕が内外面に明瞭に残る。口縁部断面は「く」の字状を呈し、口唇部はヨコナデによりほぼ平坦な面をつくる。145は胴部で、最大径位置に確認できるだけで2条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。146は底部で、平底となる。胴下部は、底面端

部より外方へほぼ直線的に広がる。形状・色調・胎土等から、145と同一個体である可能性が高い。147は平底で、底部のみが円盤状に残存する。

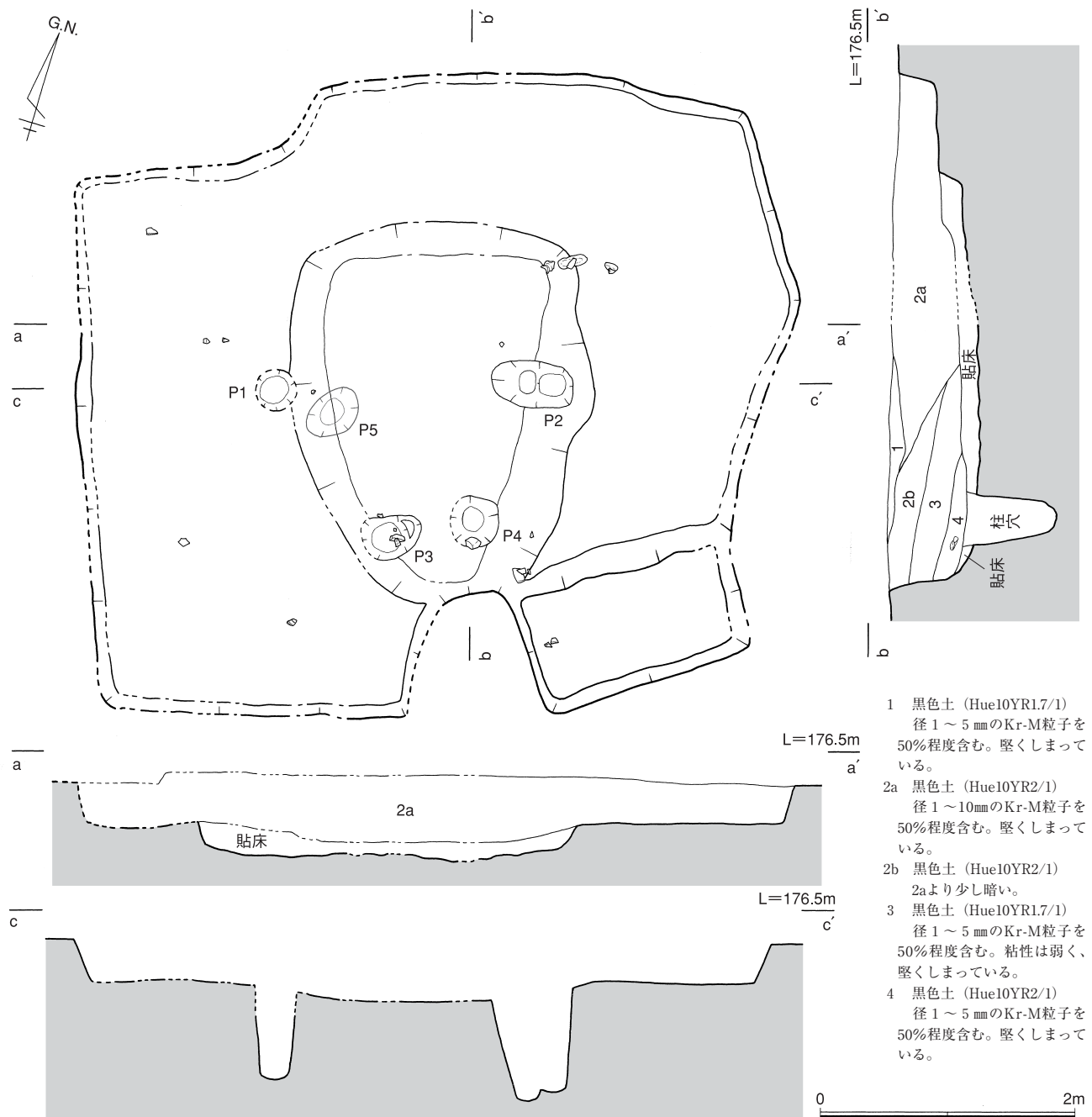
148・149は打製石鏃であり、何らかの影響で住居廃絶後の埋土中に紛れ込んだ可能性も考えられる。148はチャート製で、基部は深く抉られ明瞭な脚部をつくるため縄文早期の様相を呈する。平面形態は正三角形に近い凹基形となり、刃部は非常に細かい剥離調整で仕上げられている。149は安山岩製で脚部は鋭利に尖り、片側がわずかに欠損している。裏面には局部磨製が施され、平面形態は刃部にやや丸みを帯びた正三角形の凹基形である。150は灰色頁岩製の磨製石鏃で、鋒から刃部にかけて欠損する。凹基形であり、完成間近の未成品である可能性も考えられる。151は明灰色頁岩製の磨製石鏃未成品で、研磨痕は認められないものの節理面を生かして側縁部だけに調整を加えて整形しようとしている。152～154は頁岩製の剥片で、石材及び形状等から磨製石鏃製作時の剥片であると考えたい。155は安山岩製の敲石で、側面に敲打痕が残る。表裏両面とも扁平となり、磨石として利用された可能性も考えられる。



第23図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (弥生、S=1/4、2/3、1/3)

3号竪穴住居跡【SA3、第24図】と出土遺物【第25図】

SA3は、調査区北東部F～G16グリッドに位置する。長軸約5.7m、短軸約5.0mの長方形プランを基調とし、突出した壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居で、総床面積は約22.2㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.36mを測り、床面は第Ⅵ層(Kr-M)まで掘り込まれた上に貼床が確認された。住居内の中央では、東西方向に並ぶピット2基、南側に2基、計4基のピットを確認することができた。西側のP1は上端径約0.32mの円形で、深さは約0.7m。東側のP2は長軸約0.64m、短軸約0.37mの楕円形で、深さは約0.82m。いずれもしっかりと掘り込まれており、この2つのピットを主柱穴とする竪穴住居であったと考えられる。南側のP3・P4の深さはそれぞれ約0.65mと0.61mで、住居入口施設等に伴うピットであると考えたい。床面のほぼ中央には長軸約3m、短軸約2.3m、最深部約0.2mの掘り込みがある。南側に1箇所だけ

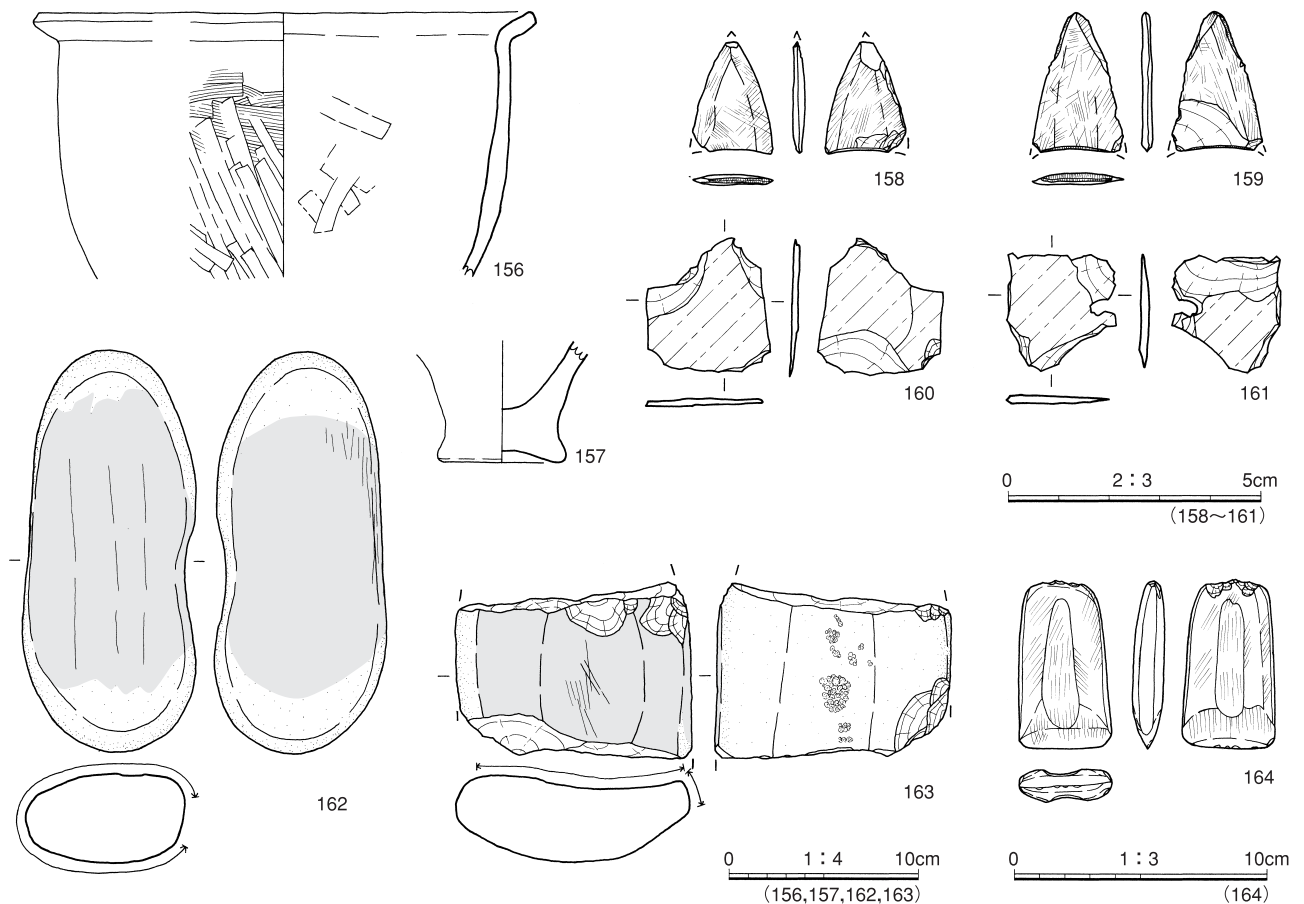


第24図 3号竪穴住居跡実測図(弥生、S=1/50)

られた突出壁は、この掘り込みから約0.48m立ち上がり、南側壁中央部付近から北へ向けて約0.95m突出している。この壁の東側に約1.2mのベッド状遺構が設けられている。この空間は第VI層（Kr-M）で揃えられており、中央床面との比高差は約0.13mを測る。貼床下で検出されたP5は、上端の計測値で長軸約0.48m、短軸約0.33mの楕円形で、深さは0.52mであった。

第25図の156～164は、SA3出土の遺物である。156・157は甕である。156は口縁部が外方へ強く折れ曲がり、口唇部はほぼ平坦な面をつくる。157はやや上げ底で、底部周縁部が外へ張り出し、やや内湾して胴下部へと立ち上がる。156と157は同一個体の可能性が考えられる。

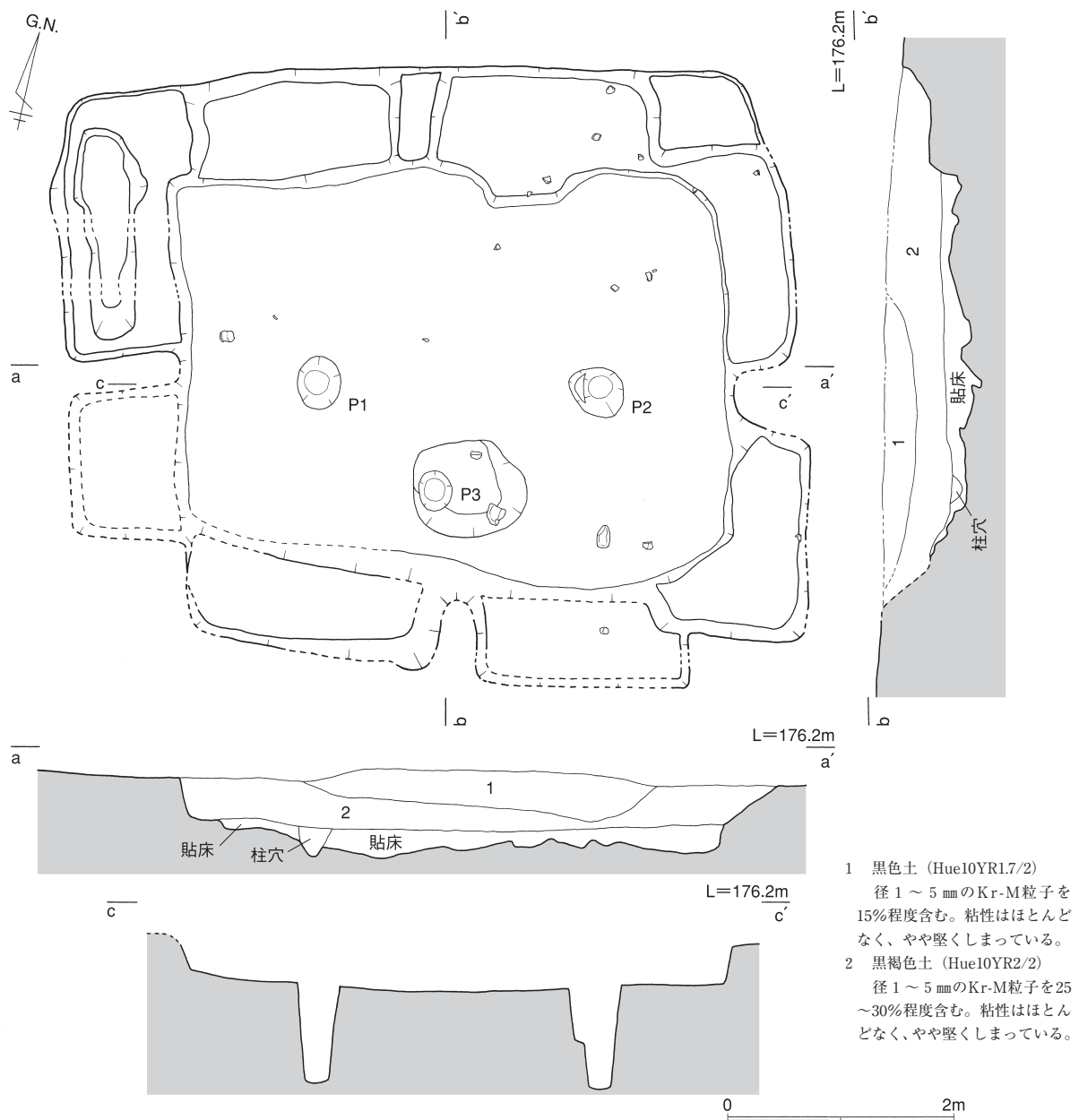
158・159は明灰色頁岩製の磨製石鏃である。158は鋒及び基辺端部が欠損する。平面形態は三角形状の浅い凹基形で、表裏両面には粗い研磨痕が明瞭に残る。159は基辺両端部が欠損し、裏面に基辺端部からの剥離面がある。平面形態は三角形状の浅い凹基形で、鋒はやや丸みを帯びる。160・161は明灰色頁岩製の剥片で、石材及び形状等から磨製石鏃製作時の剥片と考えたい。162は砂岩製の自然礫を利用した砥石で、表裏片側面の3面が砥面となる。表面には不明瞭ではあるが浅い溝状のくぼみが長軸方向に認められ、光沢をもつ。163は砂岩製の石皿で、表面には擦痕が認められ浅くくぼむ。裏面中央の尾根部には被敲打痕が残る。164は光沢度の高い蛇紋岩製の磨製石斧で、平面形態は基部から刃部に向けてわずかに幅が広がる隅丸の長台形状を呈する。身中央部には長軸方向に明瞭なくぼみが認められ、柄の装着部分であったと考えられる。刃部は両面から丁寧に研磨し刃をつくり出しているが、片刃に近い。刃部にはわずかな摩滅が認められるものの、明瞭な使用痕は認められない。



第25図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=1/4、2/3、1/3）

4号竪穴住居跡【SA4、第26図】と出土遺物【第27図】

SA4は、調査区北東部E～F16～17グリッドに位置する。長軸約6.5m、短軸約5.5mの長方形プランを基調とし、突出した4つの壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居である。総床面積は約28.5㎡。検出面から床面までの深さは最深部で約0.45mを測り、床面はほぼ全面で貼床が確認された。住居内の中央では、東西方向に並ぶピット2基、南側に1基、計3基のピットを確認することができた。西側のP1は上端の計測値が長軸約0.56m、短軸約0.38mの楕円形で、深さは約0.88m。東側のP2は長軸約0.52m、短軸約0.44mの楕円形で、深さは約0.93m。南側のP3は深さ約0.49mと、東西のピットに比べ約0.4m程度浅く、住居の構造及び本遺跡の傾向から判断すると、東西方向に並ぶピットが支柱穴である可能性が高い。北側壁中央部の突出壁は床面から約0.31m立ち上がり、この東西に第Ⅵ層（Kr-M）で揃えられたL字形のベッド状遺構が対称的に設けられている。西側約3.5㎡、東側約3.3㎡を測り、いずれも上下段の二段に分かれる。東側壁中央部の突出



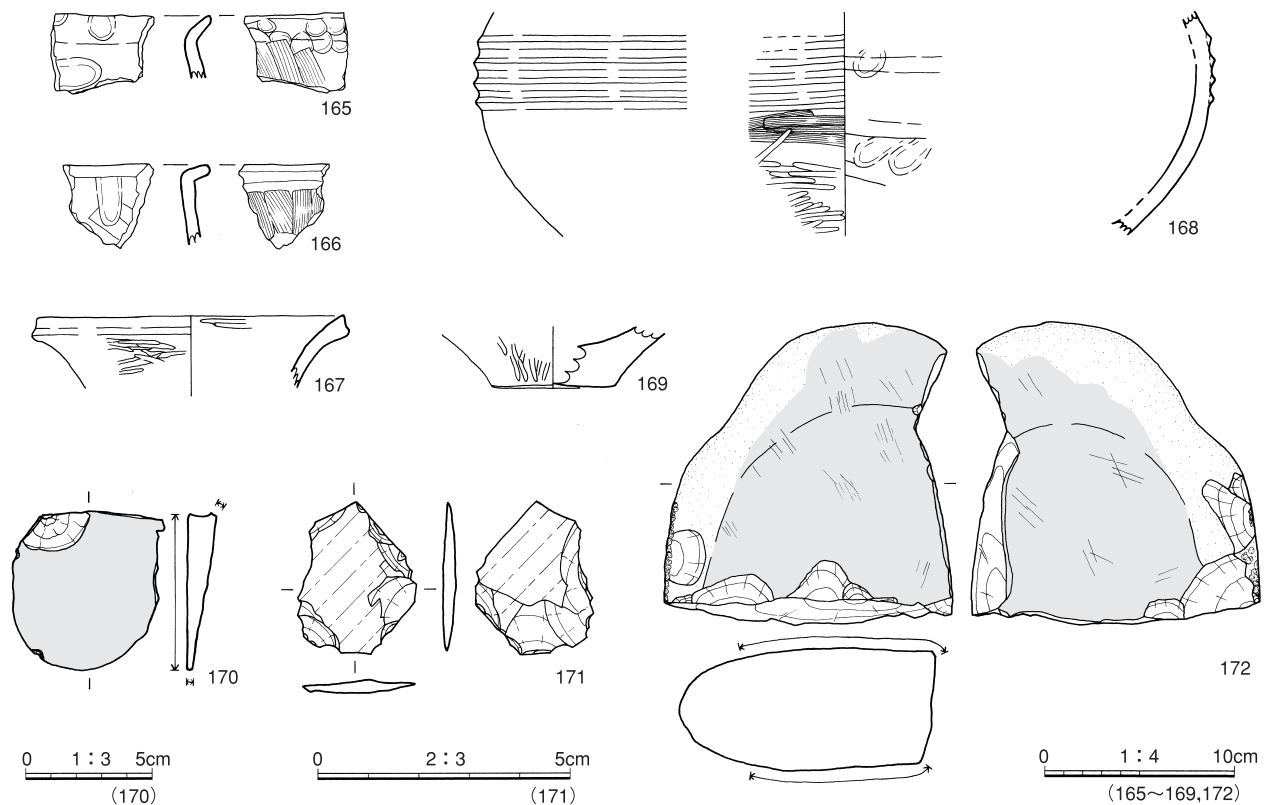
第26図 4号竪穴住居跡実測図（弥生、S=1/60）

壁は床面から約0.34m立ち上がり、この南側にも約1.2㎡のベッド状遺構が設けられている。また、西側に設けられた突出壁は床面から約0.34m立ち上がり、この突出壁の南側は試掘トレンチにより切られていたが、遺構全体の形状から判断すると約1㎡前後のベッド状遺構が存在したことが想定される。南側壁中央部の突出壁は床面から約0.4m立ち上がり、この東西にも東側1.1㎡、西側1.3㎡のベッド状遺構が対称的に設けられていた。南側突出壁の下にある長軸約1m、短軸約0.82mの掘り込みは最深部で約0.11mと浅いものであった。

第27図の165～172は、SA 4 出土の遺物である。165・166は甕である。165は口縁部が緩やかな断面「く」の字状を呈し、口唇部はやや丸みを帯びる。指頭痕が明瞭に残るため、凹凸が顕著で粗い整形である。166は口縁部が断面「く」の字状に強く折れ曲がり、口唇部はやや丸みを帯びる。

167～169は壺である。167は頸部から口縁部にかけて緩やかなカーブを描いて外反し、口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。168は胴部の最大径位置に断面三角形の突帯が4条貼り付けられる。169は平底の底部で、胴部は底面端部から外方へ大きく開く形状をとる。

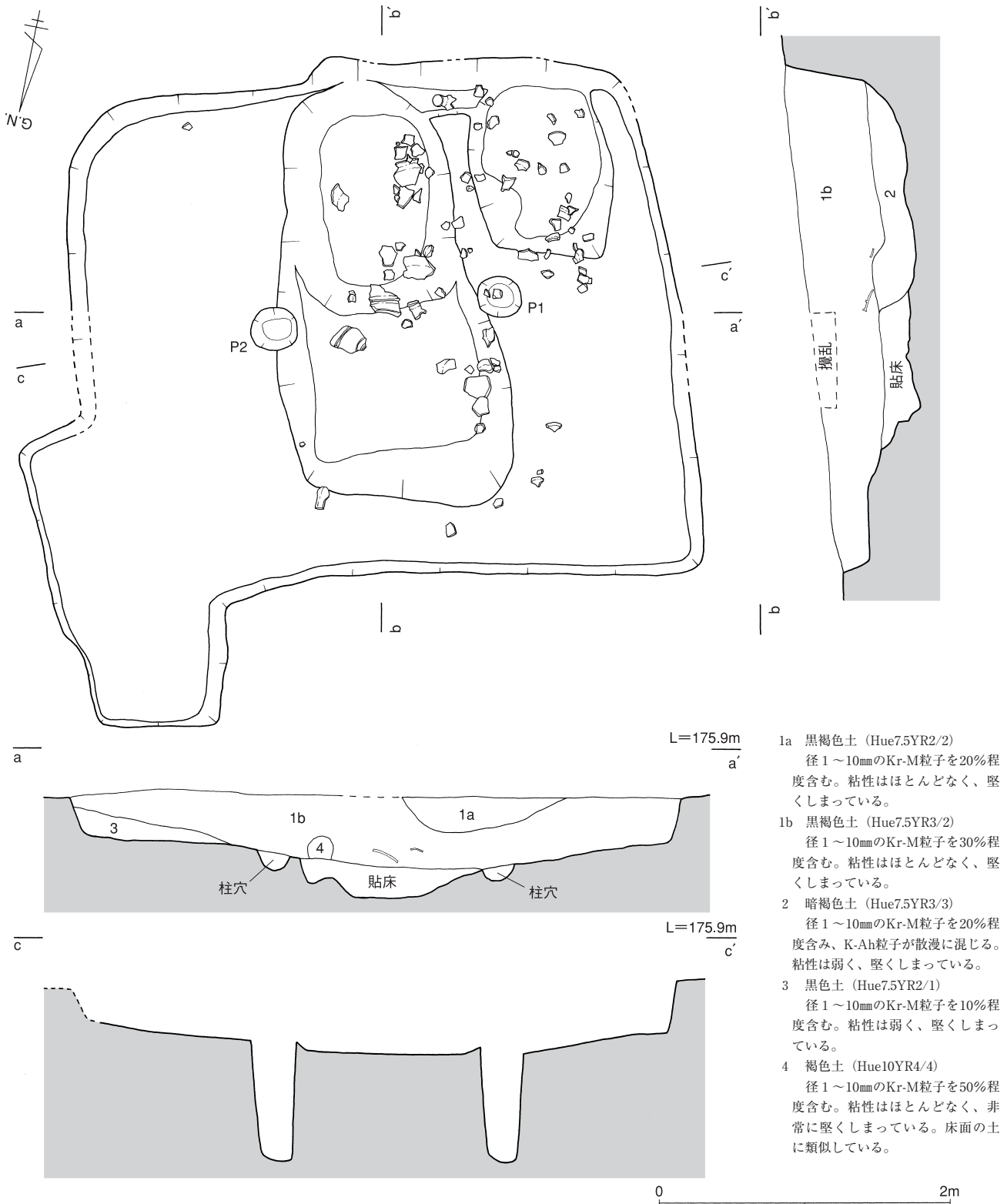
170は剥片を利用した砂岩製の砥石である。周縁端部にも砥面が認められ、手持ち用として使用されたと考えられる。171は明灰色頁岩製の剥片で、磨製石鏃の未成品である。整形段階で失敗したと考えられる。172は砂岩製の自然礫を利用した砥石で、表面が一部赤変している。SA 7 の213と接合できるため、本来は大型の台石状の砥石であったと考えられる。折損面角部にも砥面が認められるため、割れた後も砥石として利用し続けられたことが窺える。周縁部には213と同様の被敲打痕が認められ、割れる前の使用痕と推察できる。



第27図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=1/4、1/3、2/3）

5号竪穴住居跡【SA5、第28図】と出土遺物【第29図】

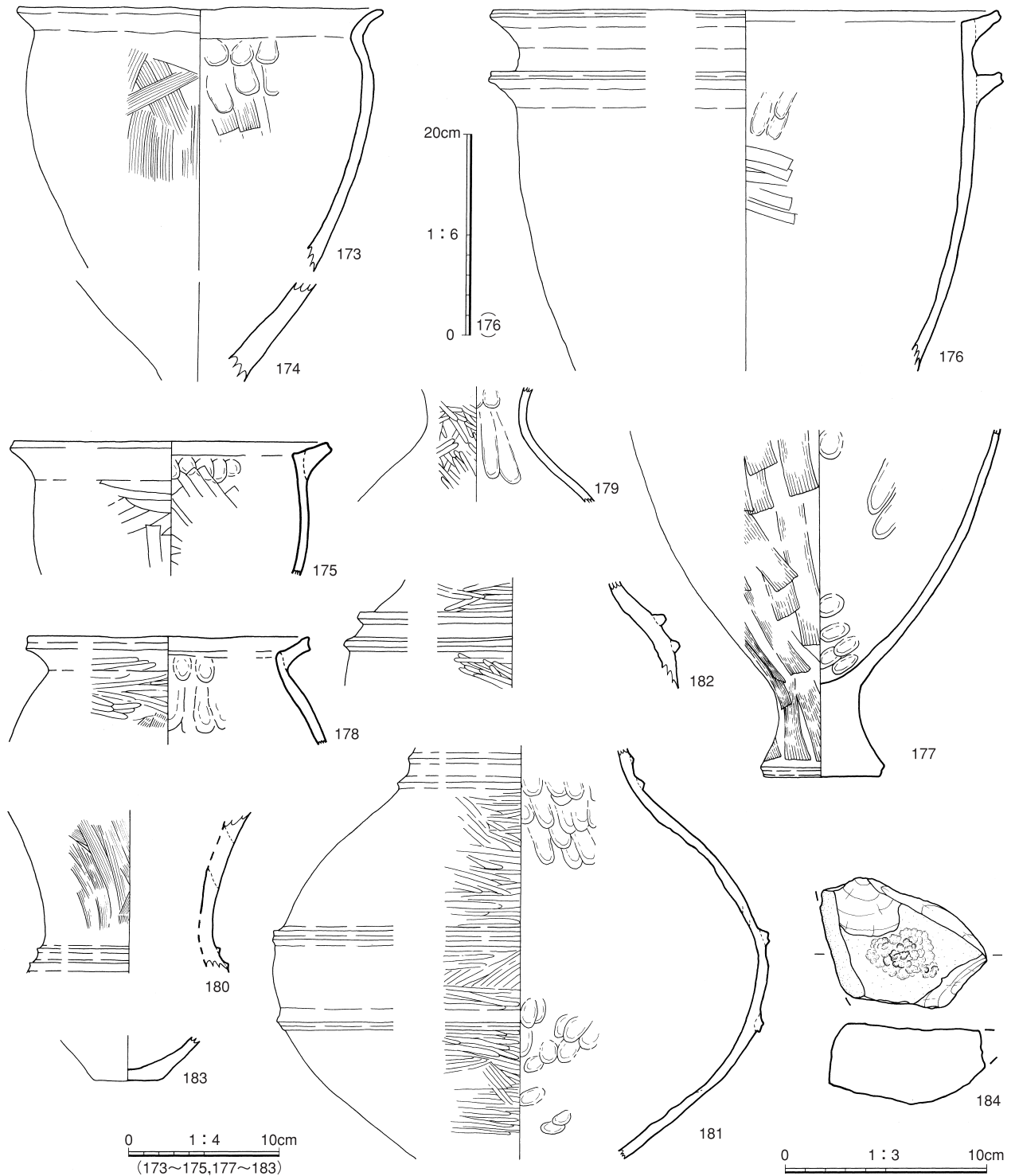
SA5は、調査区北東部E16グリッドの斜面上に位置する。長軸約4.7m、短軸約4.6mの方形プランを基調とし、北東部に張り出し部を有する竪穴住居で、総床面積は約13.9㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.46mを測り、第VI層（Kr-M）まで掘り込まれていた。住居内の中央では東西方向に並ぶ円形のピット2基を確認することができ、2本柱の竪穴住居であったと考えられる。西側のP1は上端径約0.3mの



第28図 5号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

円形で、深さは約0.82m。東側のP 2 は上端径約0.32mの円形で、深さは約0.88m。いずれもしっかりと掘り込まれていた。床面中央部には、南北方向に二段の掘り込みが確認された。北側約1.1㎡の掘り込みは、床面との比高差が最深部で約0.1mを測る。南側約0.8㎡の掘り込みは、北側の掘り込みからさらに約0.08m掘り込まれている。この南北の掘り込みは、一度全面に貼床を施した後に南側だけをさらに掘り込んだか、北側部分のみに貼床を施したかのいずれかと考えられる。周囲の床面では貼床は確認できなかった。

第29図の173~184は、SA 5 出土の遺物である。173~177は甕である。173は口縁部断面が「く」の字状を呈し、口唇部はやや丸みを帯びる。胴部外面は風化著しく、胴上部は外へ張り出して肩部をつくる。口縁部



第29図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (弥生、S=1/4、1/6、1/3)

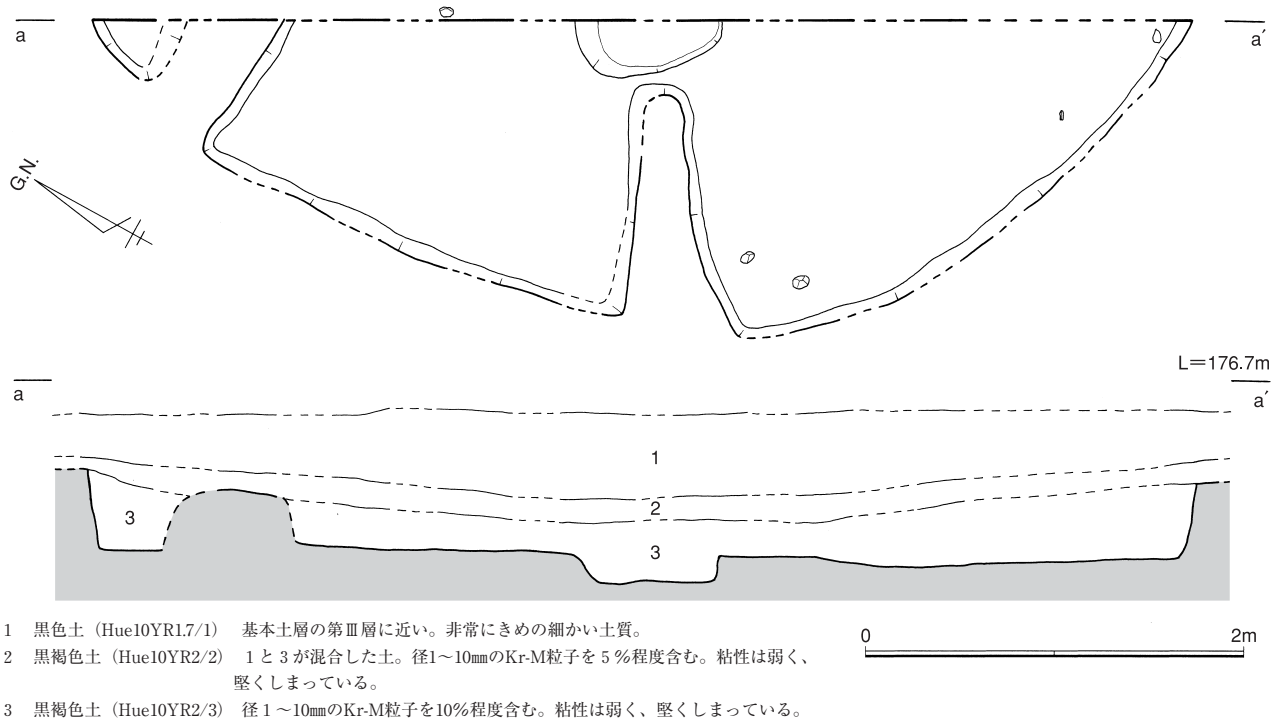
の凹凸が顕著で、粗い整形と言える。174は底部付近で、形状や色調、胎土等から173と同一個体である可能性が高い。175は口縁部に断面台形状の口縁を貼り付け、口唇部はヨコナデによりわずかにくぼむ。176は大型の甕で、口縁部には断面台形状の口縁を貼り付け、やや立ち気味に外方へと開く。口唇部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。胴上部にも、口縁部と同形状の突帯が1条貼り付けられる。内外面ともに丁寧な整形である。177は中実脚台状の底部をもち、底部周縁部が強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。底部と胴部の間には明瞭なくびれをもち、器面全体は丁寧なナデによって整形されている。

178～183は壺である。178は肩部から口縁部へと直接つながる広口の無頸壺で、口縁部を貼り付けた際の指頭痕が明瞭に残る。口縁部断面は「く」の字状を呈し、口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。179は頸部から肩部にかけて残存し、頸下部で緩やかに内湾した後に肩部へとほぼ直線的に外方へ広がる。内面には頸部を成形する際の絞り痕が認められ、他の壺に比べて器壁が薄い特徴を有する。180は頸部から口縁部に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる。肩部との境に、確認できるだけで2条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。内面は剥離著しいため調整不明であるが、外面はハケ目で丁寧に仕上げられている。181は頸下部に断面三角形の突帯が連続して2条貼り付けられ、さらに胴部の最大径位置に上下に間隔をとって2条の断面「M」字状の突帯が貼り付けられる。胴部は大きく外に張り出し、球状を呈する。内面は指頭痕及び指ナデの痕が多く残るため、凹凸が顕著である。182は肩部から胴部にかけて2条の断面台形の突帯が貼り付けられる。183は底部付近で、平底を成す。底面端部から外方へ直線的に大きく開く。内外面ともに風化が著しく調整は不明であるが、多角形状を呈する黒斑部分にはかすかにミガキ痕が認められる。

184は両輝石安山岩製の台石の欠片で、表面に被敲打痕が残る。

6号竪穴住居跡【SA6、第30図】と出土遺物【第31図】

SA6は、調査区北東部G18グリッドに位置するが、住居の3分の2程度が調査区外である。確認できた範

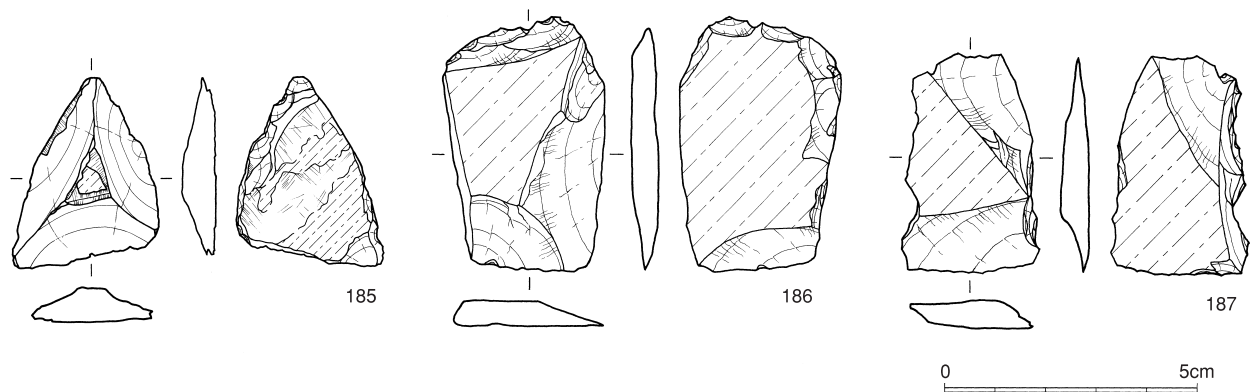


- 1 黒色土 (Hue10YR1.7/1) 基本土層の第Ⅲ層に近い。非常にきめの細かい土質。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 1と3が混合した土。径1～10mmのKr-M粒子を5%程度含む。粘性は弱く、堅くしまっている。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR2/3) 径1～10mmのKr-M粒子を10%程度含む。粘性は弱く、堅くしまっている。

第30図 6号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

囲では、長軸約5.8m以上の円形プランを基調とし、2つの突出した壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居である。検出面から間仕切られた空間の床面までの深さは最深部で約0.3mであったが、調査区北東壁土層で確認できた地表面と考えられる高さから床面までの深さは最深部で約0.43mを測る。この床面は、ベッド状遺構の可能性も否定できない。西側に設けられた突出壁は床面から最大で約0.37m立ち上がり、西側壁から東へ向けて約1.26m突出している。北西側に設けられた突出壁は、確認できた範囲では床面から最大で約0.28m立ち上がり、南東へ向けて約0.82m突出している。西側突出壁のすぐ東側には、長軸約0.78m、最深部約0.15mの掘り込みがあり、少量の炭化材が出土した。

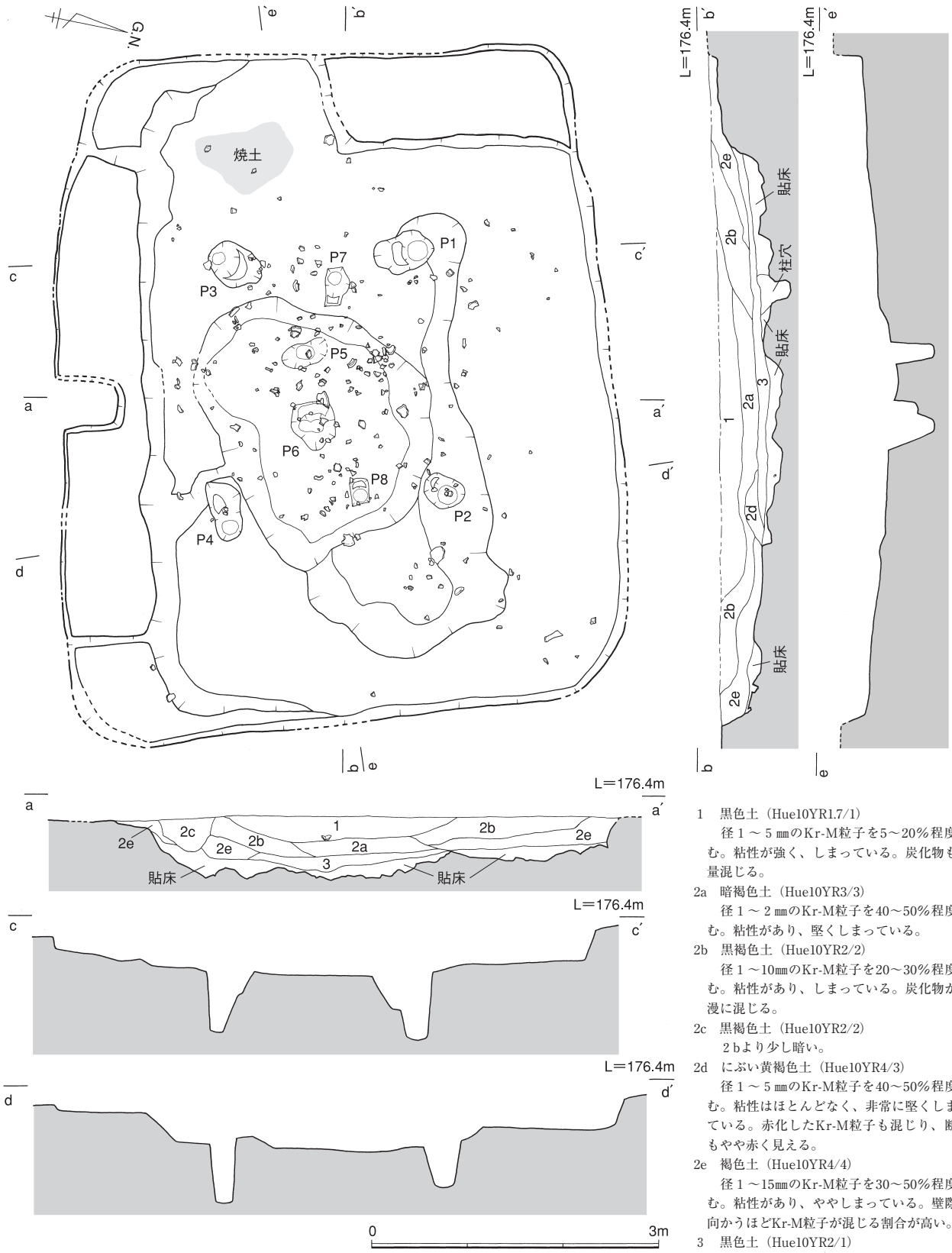
第31図の185～187は、SA 6 出土の遺物である。185は灰色頁岩製の磨製石鏃の未成品で、表面の凸角部及び裏面の凸部が研磨されている。186・187は灰色頁岩製の磨製石鏃の素材剥片である。出土状況・同質石材・両面の節理面等から、同一素材から剥離したものと判断できる。



第31図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=2/3）

7号竪穴住居跡【SA 7、第32図】と出土遺物【第33・34図】

SA 7は、調査区中央部 I 15～16グリッドに位置する。長軸約7.3m、短軸約6.0mの長方形プランを基調とし、突出した壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居で、総床面積は約36.7㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.46mを測り、ほぼ全面で貼床が確認された。住居内中央部には長軸約2.8m、短軸約2.3m、深さ約0.03～0.14mの浅い掘り込みがあり、その中に東西に並ぶピット2基を確認することができた。西側のP 5は上端の計測値が長軸約0.5m、短軸約0.24mの長楕円形で、深さは約0.4m。東側のP 6は長軸約0.5m、短軸約0.46mの不整形となり、深さは約0.43m。いずれのピットも、底部において硬化した面が確認できたため柱穴と考えられる。また、中央部の浅い掘り込みを囲むように4つのピットが確認された。北西側のP 1・北東側のP 2・南西側のP 3・南東側のP 4の深さは、最深部でそれぞれ0.72m・0.45m・0.71m・0.65mを測り、全ての底面において硬化した面が確認された。住居の構造上、支柱穴はP 1～P 4の4本柱と考えられ、P 5・P 6については補助的柱として利用された柱穴の可能性も考えられる。住居南側には床面との比高差が約0.06～0.29mの第VI層（Kr-M）で揃えられたベッド状遺構約3.7㎡が設けられ、その中央部にはわずかに突出壁が立ち上がる。また北西側にも、床面との比高差が約0.13～0.23mの第VI層（Kr-M）で揃えられたしっかりとしたベッド状遺構約2.1㎡が確認された。貼床を確認する際のトレンチ掘削中に、P 7・P 8のピット2基を検出した。住居東西の対称的な位置に配置し、底面も柱穴状の形状を呈するため住居に伴う柱穴と考えたいが、ピットの中段には平面上で角部が見られるため、性格は不明である。P 7・P 8の深さは、床面からそれぞれ約0.67mと約0.61mを測る。



第32図 7号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/60)

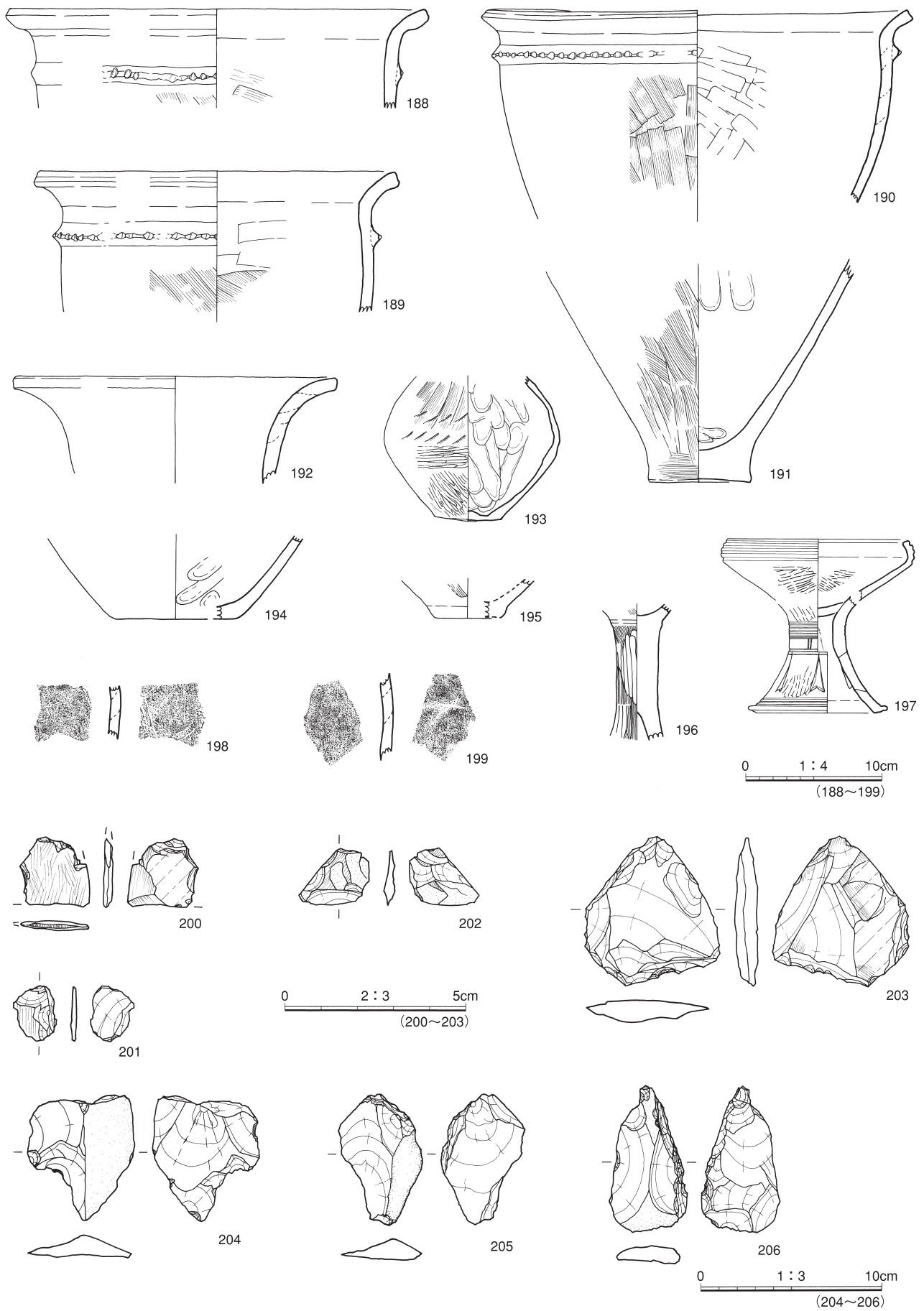
第33・34図の188～213は、SA 7 出土の遺物である。188～191は甕である。188～190には胴上部に刻目を施した断面三角形の突帯が貼り付けられるが、190の突帯位置は188・189よりも上位の口縁直下となる。刻目は188・190が丸い棒状工具押圧、189が板状工具押圧によるもので、188の刻目は不定間隔で並び摩滅している。口唇部は188がヨコナデによりわずかにくぼみ、189・190は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。いずれの口縁部も緩やかに外反しながら立ち上がり、188・189は口縁端部に向かって厚みを増す。191は胴中部から底部で、平底の底部は真っ直ぐに立ち上がり、胴部は外方へと直線的に広がる。内面には、炭化物が全面に付着している。190・191はともにSA10の土器片とも接合され、形状及び調整等から同一個体である可能性が高い。

192～195は壺である。192の頸部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に近づくにつれて緩やかに外反する。口縁部はヨコナデにより仕上げられ、口唇部には平坦な面をつくる。193は器壁が薄く、肩部から胴部の最大径位置にかけて板状工具による二段の「ノ」字形列点文が施され、瀬戸内系の様相を呈する。胴部は、平底の底面端部から胴部の最大径位置へと外方へ直線的に広がる。内面には指頭痕及び縦方向の指ナデの痕が明瞭に残り、器表面には大きな黒斑が認められる。194は平底の底面端部から胴部へとほぼ直線的に外方へ向かう。SA10の土器片とも接合され、外面全体には黒斑が見られる。195は平底の底部である。風化著しいが、外面には斜方向の工具痕が認められる。

196・197は高坏である。196は支脚部で、上部から下部近くまで中実となる。坏部との接合面にはやや粗さが残る。最終調整は縦方向の粗いミガキで、部分的にハケ目が残存する。坏部内面には黒斑が見られる。197は瀬戸内系の凹線文土器である。坏部は内外面共に工具ナデの後に横方向及び斜方向のミガキが施される。口縁部外面には4条の凹線文が施され、最下線が口縁部と身部との境界を成す。脚上部には横方向に7条と3条の沈線が巡り、その間に縦位の沈線2条が6箇所施されるものと思われる。脚中部から下部にかけては貫通する矢羽根透かし孔が6箇所に施され、その周囲の器面は縦方向のミガキで丁寧に仕上げられている。脚裾部にも3条の凹線文が施される。脚部内面には絞り痕が見られ、裾部はヨコナデで平滑に仕上げられている。出土地点はSA 7を中心に、SA10、SA12と分散する。坏部と脚部との接点はないが、形状及び胎土・色調・出土状況等より同一個体であると判断した。

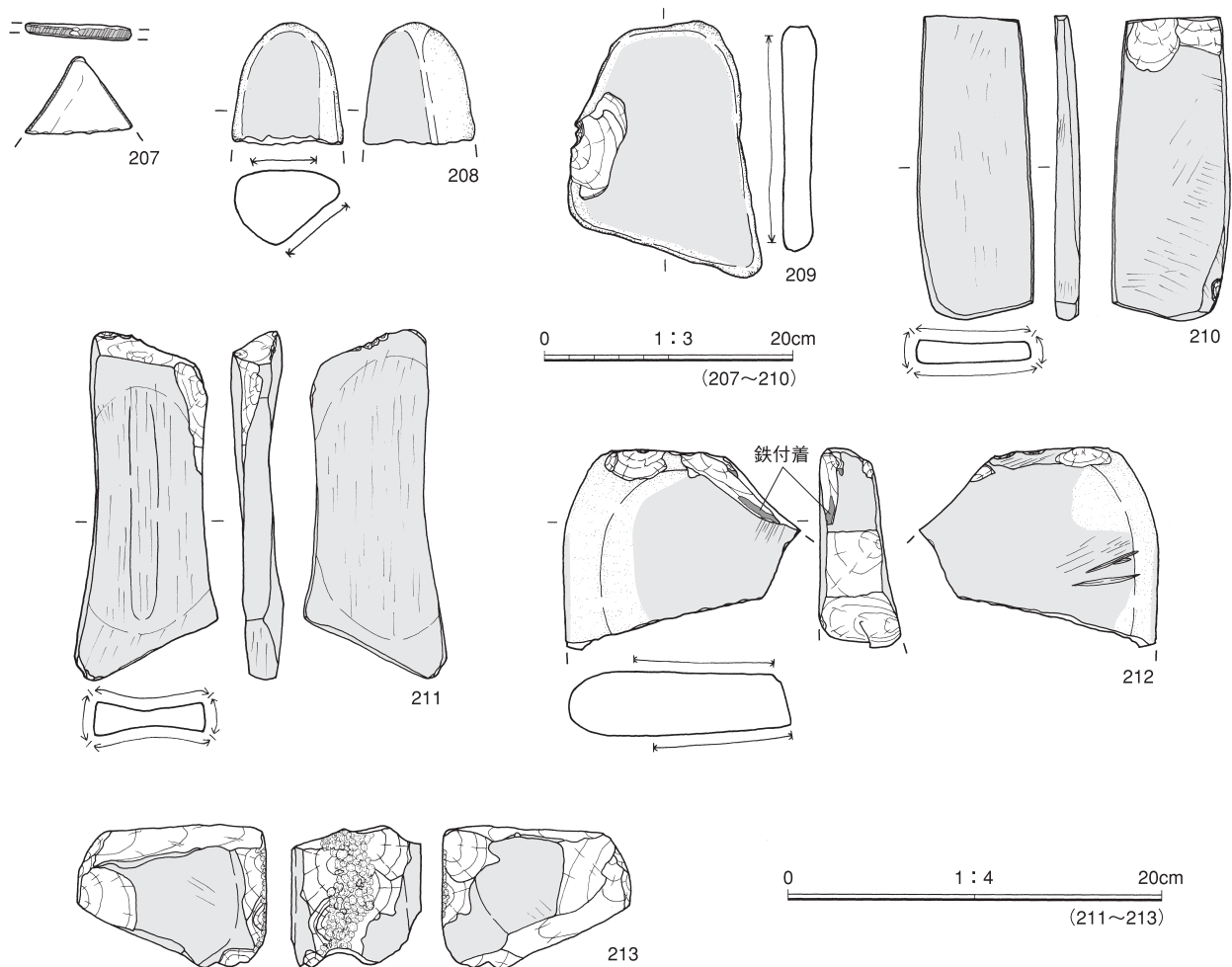
198・199は器種の特定は困難であるが、胎土及び色調から192と同一個体の可能性が考えられる。両方とも線刻が施されているため、壺の肩部から胴部にかけての破片である可能性が高い。

200は磨製石鏃で、表面の下半部を中心に残存し、裏面は節理面での剥離となる。平面形態は浅い凹基形である。201は磨製石鏃の剥片で、表面には研磨痕が残り、200と同一個体の可能性が考えられる。202・203は磨製石鏃の未成品で、202は表裏両面とも凸部に、203は裏面の凸角部に研磨痕が認められる。200～203の石材は明灰色頁岩である。204～206は暗灰色頁岩の同一素材から剥離した剥片である。出土地点も近く、磨製石鏃の素材剥片と判断した。207～213は砥石である。207は砂岩製の剥片を利用したもので、周縁端部のみが砥面となるため手持ち用と推察できる。SA 9でも同様の砥石が出土している。208・209・212・213は砂岩製の自然礫を利用した砥石である。209は板状で、表面のみが砥面となり光沢をもつ。212の表面縁部には、削り出したように長さ2.8cm、幅0.5cmにわたる鉄分が付着し、その周辺部は赤変シススも少量付着している。裏面には断面V字状の線条痕が明瞭に認められ、鋭利な製品端部を研磨したことが窺える。213はSA 4の172と接合できるため、本来は大型の台石状の砥石であったと考えられる。折損面角部にも砥面が認められるため、割れた後も砥石として利用し続けられたことが窺える。周縁部には172と同様の被敲打痕が認められ、割れる前の使用痕と推察できる。210・211は粘板岩製の砥石である。210は薄い板状で、6面全てが砥面となる。



第33图 7号竖穴住居跡出土遺物実測図① (弥生、S=1/4、2/3、1/3)

表面上部がやや赤変している。211も板状で、5面が砥面となる。やや光沢をもち、表裏両面ともに中央部がくぼむ。特に表面中央部には、幅1.4cm前後の溝状の明瞭なくぼみが長軸方向に伸びているため、棒状のものを研磨した可能性も考えられる。



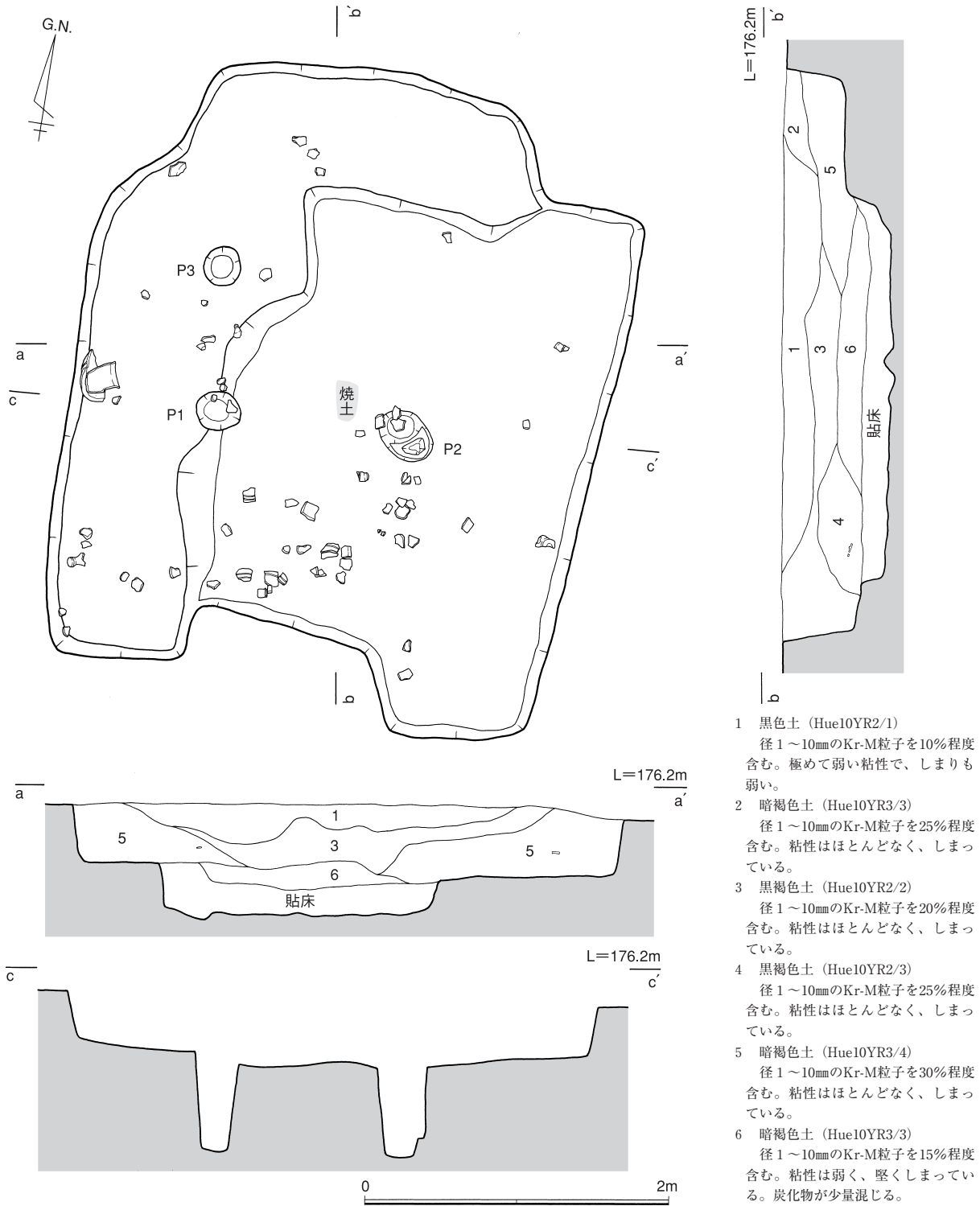
第34図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図② (弥生、S=1/3、1/4)

8号竪穴住居跡【SA8、第35図】と出土遺物【第36図】

SA8は、調査区中央部I16グリッドに位置する。長軸約4.2m、短軸約3.6mの長方形プランを基調とし、北側が入り隅となる竪穴住居である。総床面積は約11.7㎡。検出面から床面までの深さは最深部で約0.56mを測る。床面は第Ⅵ層(Kr-M)で揃えられていたが、中央部のみ約0.15~0.35mの厚い貼床が施されていた。北側から南西部にかけては一段高くなり、東側床面との比高差は約0.1mを測る。住居内の中央では、東西方向に並ぶピット2基、その北西側に1基、計3基のピットを確認することができた。西側のP1は上端の計測値が長軸約0.3m、短軸約0.24mの楕円形で、深さは約0.66m。東側のP2は長軸約0.4m、短軸約0.28mの楕円形で、深さは約0.59m。北西側のP3は深さ約0.37mと、東西のピットに比べ掘り込みが浅く、住居の構造

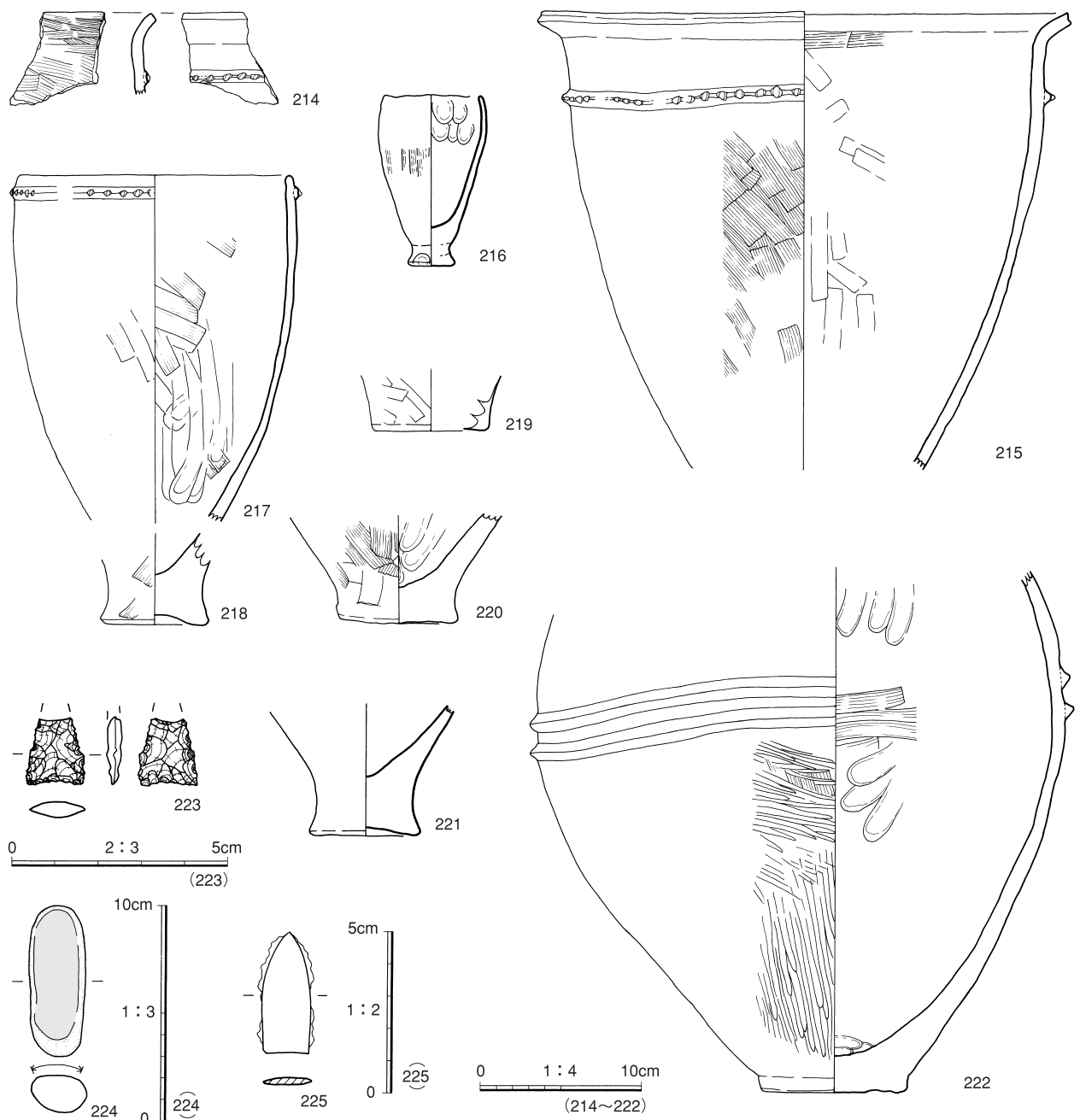
及び本遺跡の傾向から判断すると、東西方向に並ぶピットが支柱穴である可能性が高い。住居南側中央部の内側への張り出し上部及び北側の入り隅上部は、住居に伴うベッド状遺構であった可能性も否定できない。

第36図の214～225は、SA 8 出土の遺物である。214～221は甕である。214は口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる。口唇部はヨコナデによりほぼ平坦な面をつくる。胴上部には丸い棒状工具押圧による刻目突帯が1条貼り付けられ、内面は口縁端部まで明瞭なハケ目が施されている。215は口縁部から胴下部の半形が



第35図 8号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

残存する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。胴上部には丸い棒状工具押圧による刻目突帯が1条貼り付けられる。216は器高10.5cmの小型の甕で、部分的にススが付着し被熱していることから製塩土器の可能性も考えられる。底部から胴下部はほぼ完形で、胴中部から口縁部にかけては半形の残存となる。胴上部から口縁部に向けてわずかに内傾する。胴下部から底部にかけてはくびれをもち、底面周縁部は外へ張り出す。217は口縁部が極端に短く直立し、口縁部直下に1条の刻目突帯が貼り付けられる。刻目は丸い棒状工具押圧によるものである。外面は斜方向のハケ目と思われる工具痕が認められるが、風化及び炭化物の付着により鮮明ではない。218～221は甕の胴下部から底部である。218は上げ底で、底面周縁部がやや外へ張り出し、一度内湾してから胴部へと立ち上がる。217と218は、形状及び胎土等から同



第36図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図 (弥生、S=1/4、2/3、1/3、1/2)

一個体である可能性が高い。219は平底で、くびれをもたず底面からほぼ直線的に胴部へと立ち上がる。220・221は底面周縁部がわずかに外へ張り出し、内湾して胴部へと立ち上がる形状を呈する。220は平底、221はやや上げ底となり、内面には炭化物が厚く付着している。

222は壺で、SA7・SA10・SA11で出土した土器片とも接合され、胴上部から底部にかけてはほぼ完形となった。歪みが大きく、最大径位置に貼り付けられた断面三角形の突帯2条も直線状には揃わない。底部は平底である。

223はチャート製の打製石鏃で、鋒が欠損している。平面形態は細長い三角形状の平基形を呈する。224は自然礫を利用した砂岩製の小型の砥石で、砥面には光沢をもつ。手持ち用と考えられる。

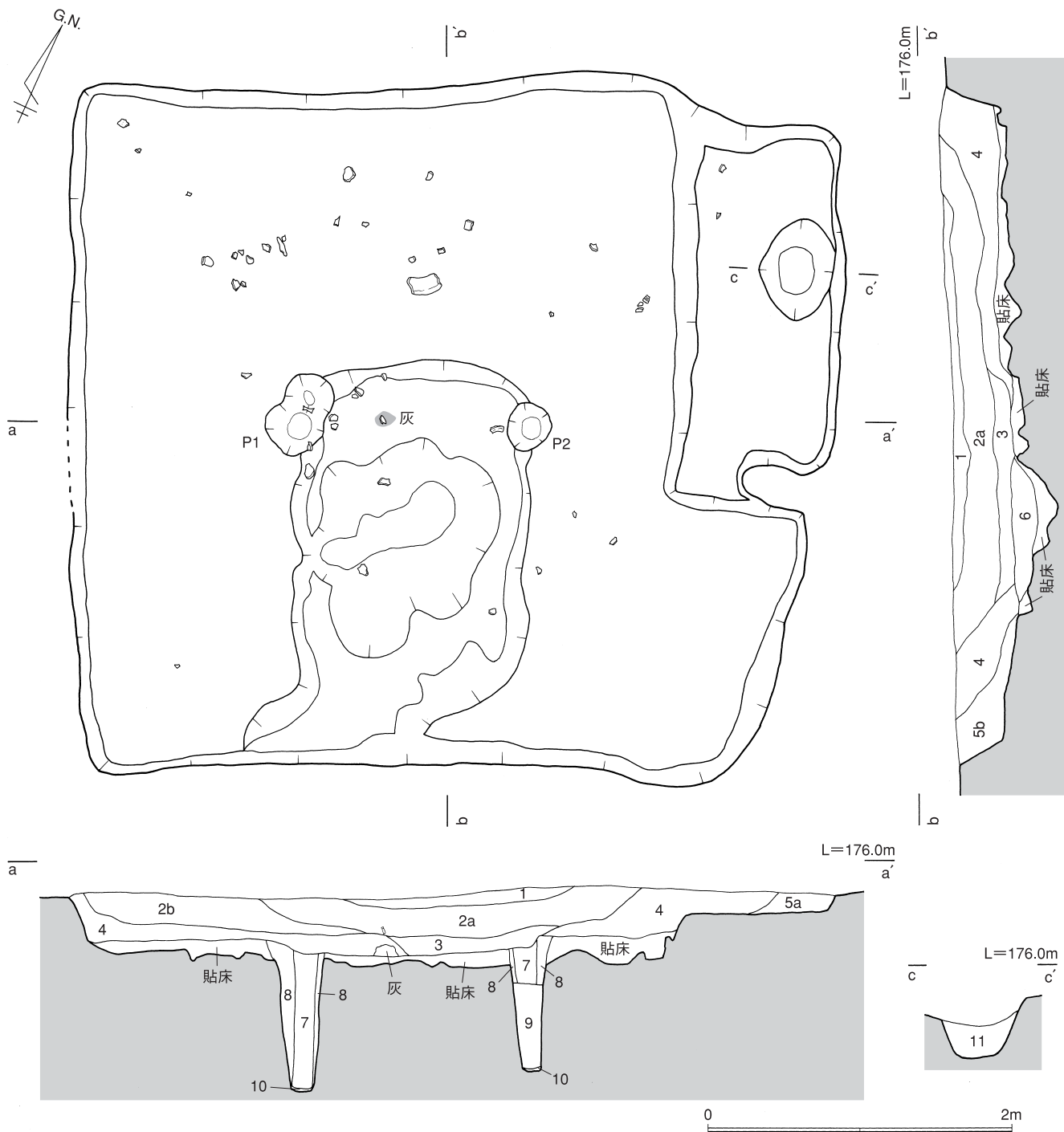
225は本調査区内で唯一出土した鉄鏃である。鏃長約3.9cm、最大幅約1.5cmの無茎鏃で、平面形態は砲弾状の平基形を呈する。

9号竪穴住居跡【SA9、第37図】と出土遺物【第38図】

SA9は、調査区東部I18～19グリッドに位置する。長軸約5.1m、短軸約4.7mの長方形プランを基調とし、突出した壁で間仕切られた空間を有する竪穴住居で、総床面積は約19.8㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.32mを測り、ほぼ全面で貼床が確認された。住居内の中央では東西方向に並ぶピット2基を確認することができ、2本柱の竪穴住居であったと考えられる。西側のP1は上端の計測値が長軸約0.56m、短軸約0.38mの楕円形で、深さは約1.0m。底部まで柱痕跡と思われる埋土が続き、最下部には硬化した面も確認できた。東側のP2は上端径約0.3mのほぼ円形で、深さは約0.9m。埋土堆積状況から判断すると、上端から約0.32mまでは柱痕跡と思われる埋土が確認できたがそれより下部では確認できず、上げ底であった可能性も否定できない。いずれの柱穴も検出時には柱痕跡のみしか検出できず、柱を立てた後に貼床を施した可能性が高い。東側に1箇所設けられた突出壁は床面から約0.2m立ち上がり、東側壁中央部から西へ向けて約0.5m突出している。この壁の北側に約1.9㎡のベッド状遺構が設けられている。この空間は第Ⅵ層(Kr-M)で揃えられ、中央床面との比高差は約0.16mを測り、北東壁際では長軸約0.65m、短軸約0.5m、深さ0.3mの土坑が検出されたが、住居に伴うものかどうかは不明である。また床面中央部には、主柱穴から南側壁に向かって二段の掘り込みが確認され、床面から掘り込みの最下部までの比高差は約0.26mを測る。二段目の掘り込みからは炭化物が散漫に出土し、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。

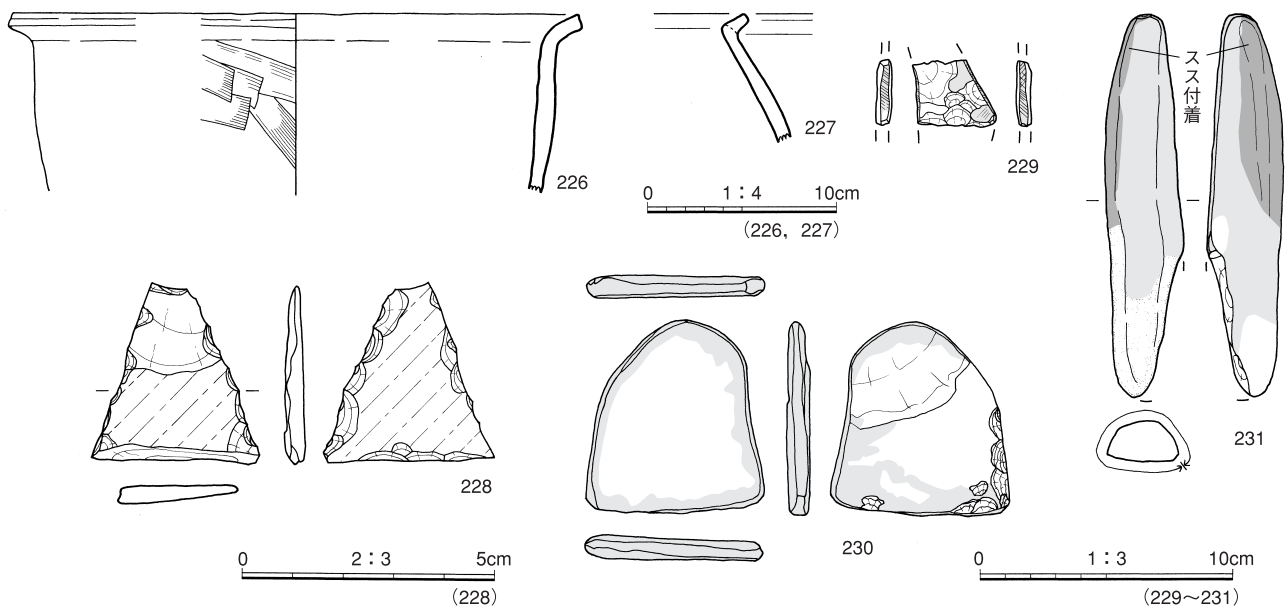
第38図の226～231は、SA9出土の遺物である。226は甕の口縁部から胴上部を残し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。227は肩部から口縁部へと直接つながる無頸の壺で、口縁部は強く折れ曲がり、断面「く」の字状を呈する。外面は口唇部を含めて風化が著しいが、肩部にはかすかにミガキ調整の痕跡が認められる。

228は明灰色頁岩製の磨製石鏃の未成品で、表裏両面は節理面を生かしたまま平面形態を三角形に整えている。229～231は剥片を利用した砂岩製の砥石で、周縁端部も砥面となるため手持ち用の砥石と推察できる。SA7でも同様の砥石が出土している。231は全体的に赤変し、ススも部分的に付着している。裏面の長軸方向には、研磨による浅い溝状の凹面も確認できる。



- | | |
|---|---|
| <p>1 黒色土 (Hue10YR2/1)
径1～2mmのKr-M粒子を5～10%程度含む。粘性が強く、しまりは弱い。</p> <p>2a 黒褐色土 (Hue10YR2/3)
径1～5mmのKr-M粒子を15～25%程度含む。粘性があり、ややしまっている。</p> <p>2b 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
2aより少し暗く、粘性はやや強い。</p> <p>3 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
径1～5mmのKr-M粒子を10～20%程度含む。粘性があり、しまっている。</p> <p>4 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
径1～5mmのKr-M粒子を20～30%程度含む。粘性があり、堅くしまっている。他の層に比べ、大きいKr-M粒子の割合が高い。</p> <p>5a 黒褐色土 (Hue10YR2/3)
径1～5mmのKr-M粒子を15～25%程度含む。粘性が強く、ややしまっている。</p> <p>5b 黒褐色土 (Hue10YR2/3)
5aより非常に堅くしまっている。</p> | <p>6 におい黄褐色土 (Hue10YR4/3)
径1～3mmのKr-M粒子を30～50%程度含む。やや粘性があり、非常に堅くしまっている。炭化物が混じり、Kr-M粒子の大きさが均一である。</p> <p>7 黒色土 (Hue10YR2/1)
径1～2mmのKr-M粒子を5～10%程度含む。粘性が強く、ふかふかしてしまりが無い。</p> <p>8 におい黄褐色土 (Hue10YR4/3)
径1～5mmのKr-M粒子を10～20%程度含む、K-Ah粒子も20～30%混じる。粘性が強く、しまっている。</p> <p>9 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
Kr-M粒子が20～30%、K-Ah粒子が10～20%程度の割合で混じる。粘性が強く、堅くしまっている。</p> <p>10 黒色土50%、Kr-M粒子50%程度の割合で混じる。非常に堅くしまっている。</p> <p>11 黒色土 (Hue10YR2/1)
径1～2mmのKr-M粒子を5～15%程度含む。径5mm大のものも数粒混じる。粘性が強く、ややしまっている。</p> |
|---|---|

第37図 9号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

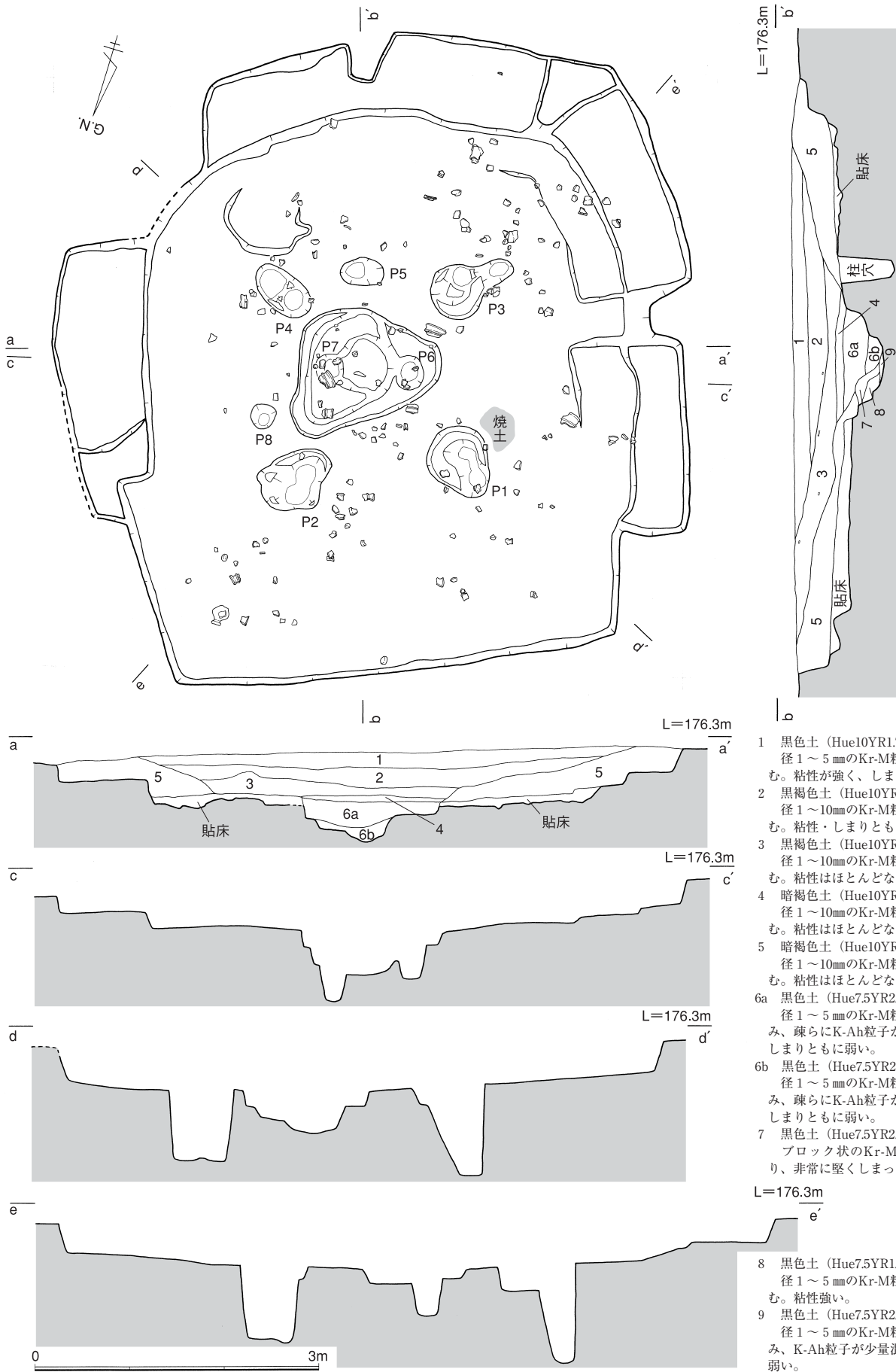


第38図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=1/4、2/3、1/3）

10号竪穴住居跡【SA10、第39図】と出土遺物【第40・41図】

SA10は、調査区中央部J～K15～16グリッドに位置する。長軸約6.9m、短軸約6.7mで、北側方形、南側円形の複合プランを基調とし、突出した3つの壁の間仕切られた空間を有する竪穴住居である。総床面積は約34.8㎡。検出面から床面までの深さは最深部で約0.5mを測り、全面に貼床が施されていた。住居内中央部には長軸約1.72m、短軸約1.22m、深さ約0.44mの住居内中央土坑と思われる掘り込みがあり、その中に東西に並ぶピット2基を確認することができた。西側のP6は上端の最大径が約0.36mのほぼ円形で、深さは約0.37m。東側のP7は最大径約0.34mのほぼ円形で、深さは約0.4m。この中央の掘り込みを囲むように、5つのピットが確認された。北西側のP1・北東側のP2・南西側のP3・南東側のP4・南側中央のP5の深さは、最深部でそれぞれ0.98m・0.78m・1.08m・0.75m・0.6mを測る。P1～P4については、掘削中に約0.2～0.4m内側でも床面検出時には確認できなかったピットを確認することができた。また、貼床下からも柱穴と考えられるピット1基（P8）が確認され、柱が立て替えられた可能性及び増築の可能性も考えられる。住居の構造上、支柱穴はP1～P4の4本柱で、P5～P7については補助的柱として利用された柱穴の可能性が考えられる。西側の突出壁は床面から約0.38m立ち上がり、この北側に約0.9㎡、南側に約1.4㎡のベッド状遺構が設けられ、床面との比高差は約0.02～0.16mを測る。また住居南側にも、床面との比高差が約0.16～0.22mのベッド状遺構約2.5㎡を有し、その中央部には約0.51m立ち上がる突出壁が設けられている。住居東側においても、約2.1㎡のベッド状遺構が床面から約0.09～0.22mの高さで確認された。住居の南東部は入り隅となり、南西部には突出壁とも見て取れる一段高いベッド状遺構が存在する。

第40・41図の232～262は、SA10出土の遺物である。232～236は胴上部に無刻目の突帯が1条貼り付けられる甕である。232の胴上部は緩やかに外傾し、口縁部も緩やかに外反する。口唇部はヨコナデにより平坦な面をつくり、SA7で出土した土器片とも接合された。233は胴部が外方へ張り出し、口縁部に向かって内傾する。口縁部は断面台形の厚い口縁を貼り付け、断面「く」の字状を呈する。口唇部はヨコナデにより平坦な

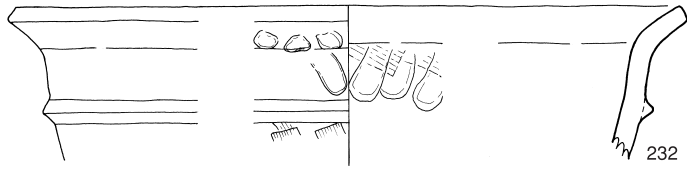


第39図 10号竪穴住居跡実測図 (彌生、S=1/60)

面をつくる。内外面とも風化著しいが、胴上部の内面にはかすかに指ナデの痕が認められる。234は大型の甕で、SA7・SA8・SA11で出土した土器片とも接合された。口縁部は貼り付けにより断面「く」の字状を呈し、口唇部は丸みを帯びる。口縁部直下の突帯も、口縁部と同じような傾きで上方を向く。胴上部と胴下部との接点はないが、形状及び胎土・調整・出土状況等から同一個体であると判断した。235はやや大きめの甕で、断面台形の厚い口縁が貼り付けられ、大きく外方を向く。236は口縁部が貼り付けにより断面「く」の字状を呈し、断面台形状の突帯は下垂気味である。内外面ともに風化著しい。237・238は胴上部に刻目突帯が1条貼り付けられる甕である。237は口縁部が断面「く」の字状に折れ曲がり、口唇部はわずかにくぼむ。刻目は丸い棒状工具押圧によるものと考えられる。238は口縁部が緩やかに外反し、口唇部はくぼむ。刻目は板状工具押圧によるものと考えられる。239～242は無突帯の甕である。239・242は口縁部が緩やかに外反し、口唇部はヨコナデにより平坦な面をつくる。240・241も口縁部が緩やかに外反するが、口唇部はヨコナデによりわずかにくぼみ、240は口縁端部に向かって厚みを増す。243～247は甕の胴下部から底部である。243は小型で、やや上げ底となる。内外面ともに風化著しい。244は平底で、底面端部から胴下部へとほぼ直線的に立ち上がる。245～247は底面周縁部が外に張り出し、底部からやや内湾して胴下部へと向かう形状を呈する。245は平底、246・247は上げ底となる。

248～256は壺である。248・249は口縁部内面に小さな断面三角形の突帯が1条貼り付けられる。248は口縁部が貼り付けられ、下垂した口縁端部は丸みを帯びる。口縁部上面には、浮文の痕跡と考えられる円形の黒斑が残る。249の外側はハケ目に沿ってミガキが施され、一見、暗文が施されたようにも見える。250は口縁部外面に突帯1条が貼り付けられ、二又状口縁をつくる。2つの口唇部はいずれも凹線状にくぼむ。251は広口で、口縁端部は厚みを増してヨコナデにより凹線状にくぼむ。口縁部のみが残存で、大きく外方へ開く形状から器台である可能性も考えられる。252は極端に短い頸部から口縁部へと直行する器形的特長を有する。口唇部は強いヨコナデにより外側に段を形成する。口唇部直下には、先端部が鋭利な工具で細かな刻目が施された突帯1条が貼り付けられ、口縁部内面には1条の沈線が巡る。全体的に風化が著しく、調整は不明である。253・254は瀬戸内系の凹線文土器であり、口縁部は頸部から大きく外反し口唇部は幅広となる。253は口唇部に2条の凹線文が施されており、SA7で出土した土器片とも接合された。254は肩部から胴部にかけて大きな欠損孔を有するものの、床上からほぼ完形のまま出土した。口唇部には3条の凹線文が巡る。胴部の最大径位置を起点として下位には横方向のミガキ、上位には斜方向のハケ目が施され、器壁が非常に薄い。内面は指頭痕及び指ナデによる凹凸が明瞭に残る。欠損孔の真裏側にあたる肩部には、板状工具刺突による列点文が縦3列×横2列で施される。また肩部には、一辺約6～7cm前後の五角形状の黒斑も明瞭に残る。255は形状からミニチュアの壺と考えられる。ほぼ平底状の底部形態を成し、胴部に向けて一度内湾してから外方へと立ち上がる。風化著しいが、胴部外面にはかすかに工具痕が認められる。256は平底の底部で、底面端部から胴部に向かって外方へ直線的に広がる。

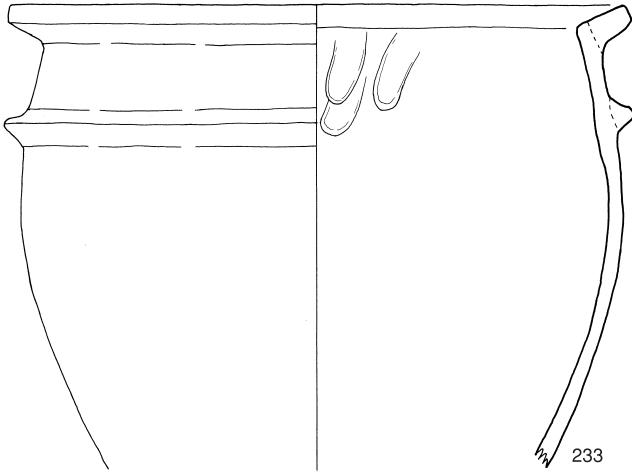
257は明灰色頁岩製の剥片で、石材及び形状から磨製石鏃の未成品と考えたい。258～260は砂岩製の敲石である。259は棒礫状を呈し、長軸両端部に敲打痕が認められる。握手部分には研磨に使用された痕跡も見られ、手持ち用の砥石としても利用されていたと考えられる。260は扁平な円礫を利用し、周縁全面及び表裏中央部にも敲打痕が認められる。表裏両面は主に磨面となり、磨石としても使用されている。261は砂岩製の砥石である。本来は大型のものが、何らかの衝撃により剥片状になったと考えられる。砥面には少量の鉄分も付着している。262は両輝石安山岩製の台石の欠片で、明瞭な使用痕は認められない。



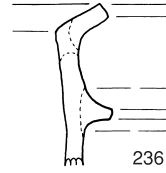
232



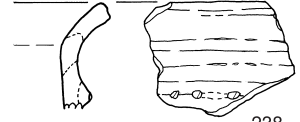
237



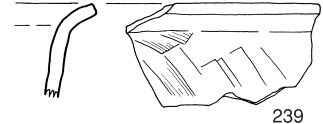
233



236



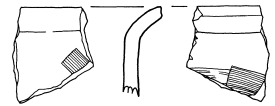
238



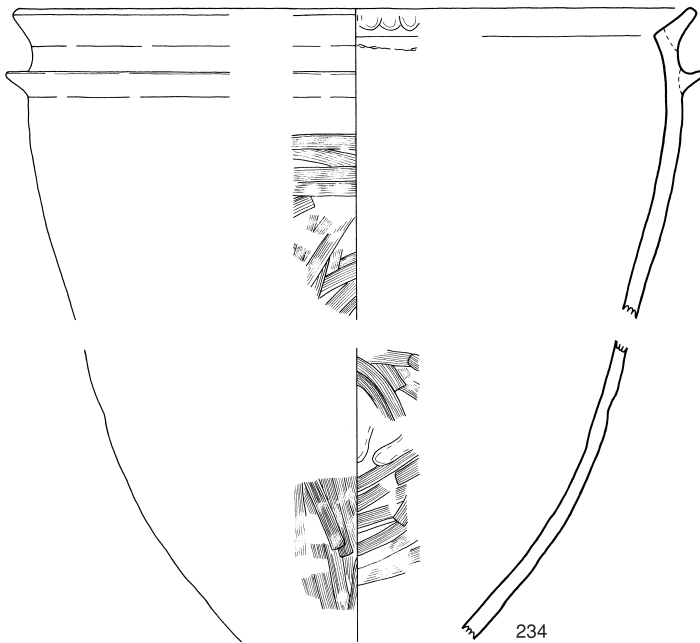
239



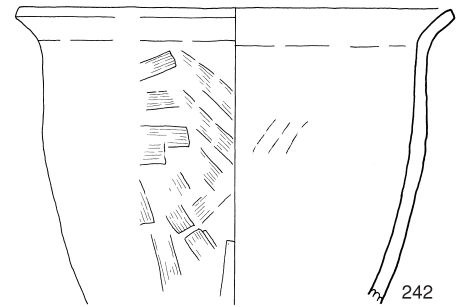
240



241



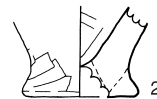
234



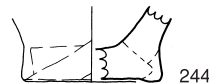
242



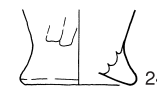
243



245

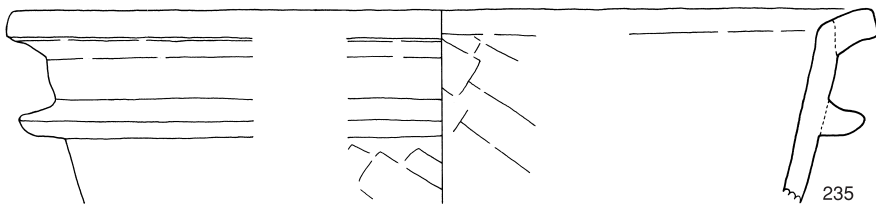


244

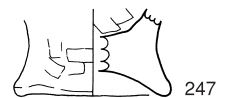


246

0 1:6 20cm
(234)



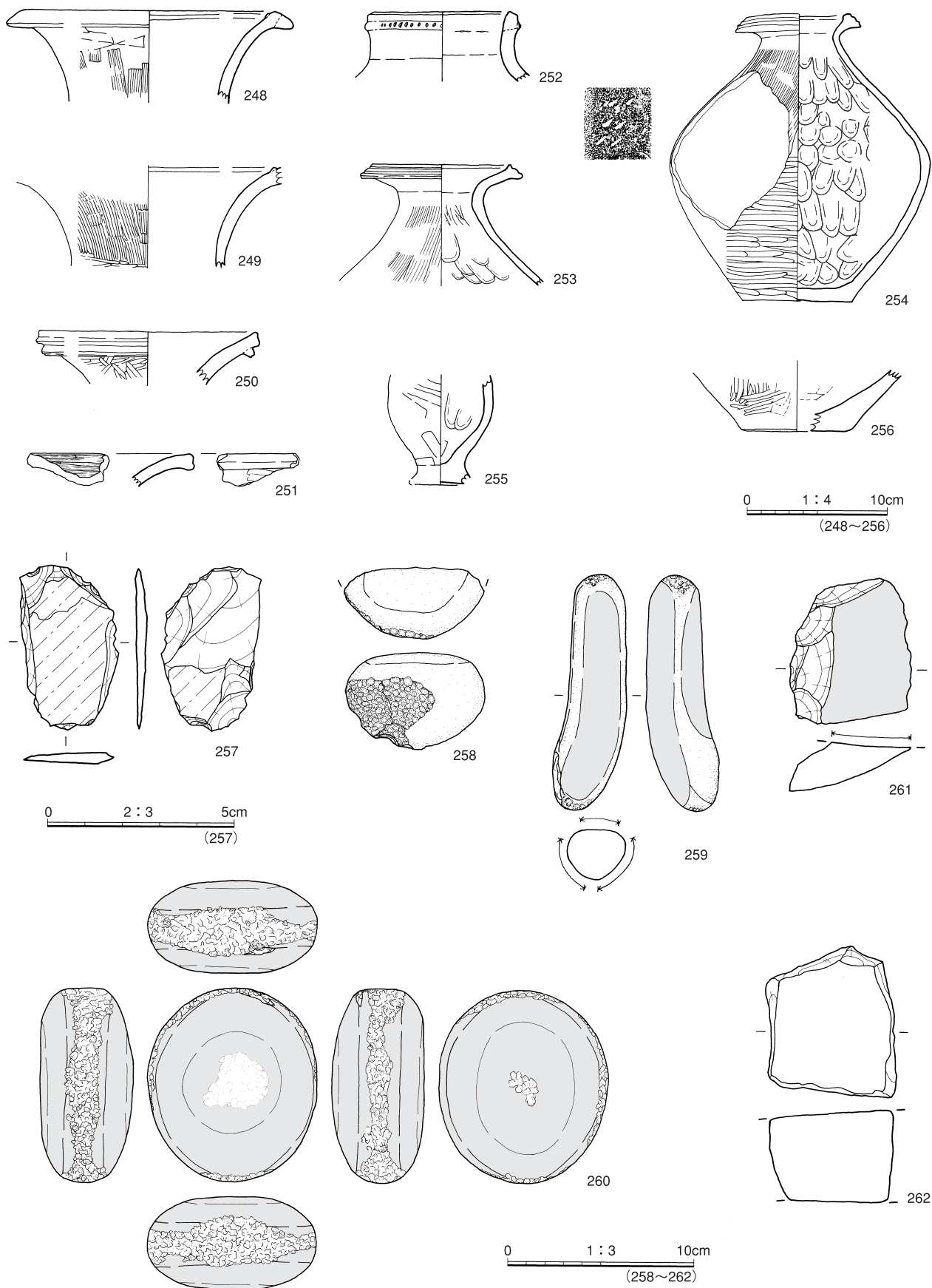
235



247

0 1:4 10cm
(232,233,235~247)

第40图 10号竖穴住居跡出土遺物実測図① (弥生、S=1/4,1/6)



第41图 10号竖穴住居跡出土遺物実測図② (弥生、S=1/4、2/3、1/3)

11号竪穴住居跡【SA11、第42・43図】と出土遺物【第44図】

SA11は、調査区中央部J16グリッドに位置する。一辺が約4.2mの正方形プランを基調とする竪穴住居で、総床面積は約15.3㎡である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.4mを測り、ほぼ全面で貼床が確認された。住居内の中央では、東西方向に並ぶピット2基とその北側に1基、北壁・南壁際に各1基ずつの計5基のピットを確認することができた。西側のP1は上端の計測値が長軸約0.74m、短軸約0.36mの楕円形で、深さは約0.89m。東側のP2は長軸約0.64m、短軸約0.48mの楕円形で、深さは約0.73m。いずれもしっかりと掘り込まれていた。中央北側のP3、北壁際のP4、南壁際のP5の深さはそれぞれ約0.11m、0.21m、0.13mを測る。いずれも東西方向のピットに比べて掘り込みが浅く、住居の構造及び本遺跡の傾向から判断すると、東西方向に並ぶP1・P2が支柱穴である可能性が高い。また床面中央部には、P1とP2を長辺上の中心に配する平面形態が長方形の掘り込みがあり、その内側にはさらに一段低い掘り込みが南寄りに確認された。床面から掘り込み最下部までの比高差は約0.26mを測る。この二段の掘り込みは、支柱位置を意識して造設された可能性が高く、二段目の掘り込みは炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。

SA11では、遺構検出時から炭化材が多く出土し焼失住居の可能性が疑われたため、遺物とともに炭化材の出土状況も記録した。出土状況を第43図に示す。

炭化材の遺存（出土）状況から、SA11は焼失住居と判断した。支柱穴と考えられるP2周辺部から北側に向けて、大きめの炭化材が集中して出土した。大きいもので幅約14cm、厚さ約5cmを測り、一定方向に同等の大きさの炭化材が出土したことから支柱の可能性が考えられる。また、支柱穴と考えられるP1・P2方向に、壁際から放射状に向かう細長い炭化材が目立つが、これは住居の構造上、垂木の可能性が高い。棟木と考えられる位置・方向には集中した炭化材は認められず、完全に焼失した可能性と炭化されなかった可能性のいずれかが考えられるが、全体の焼失状況から判断すると前者の可能性が高い。

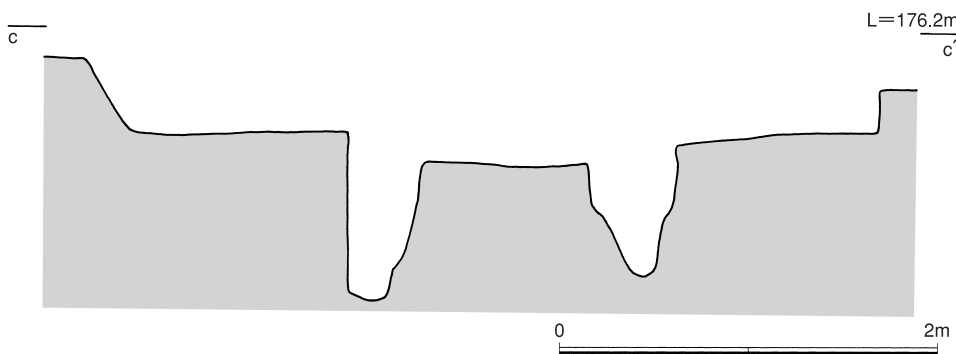
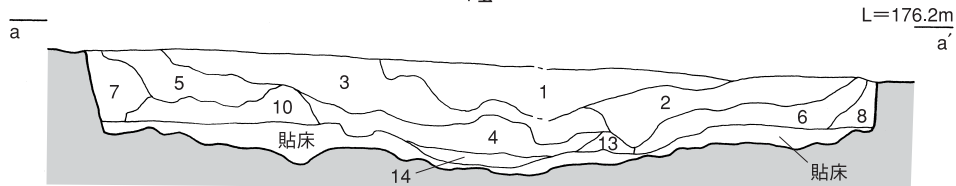
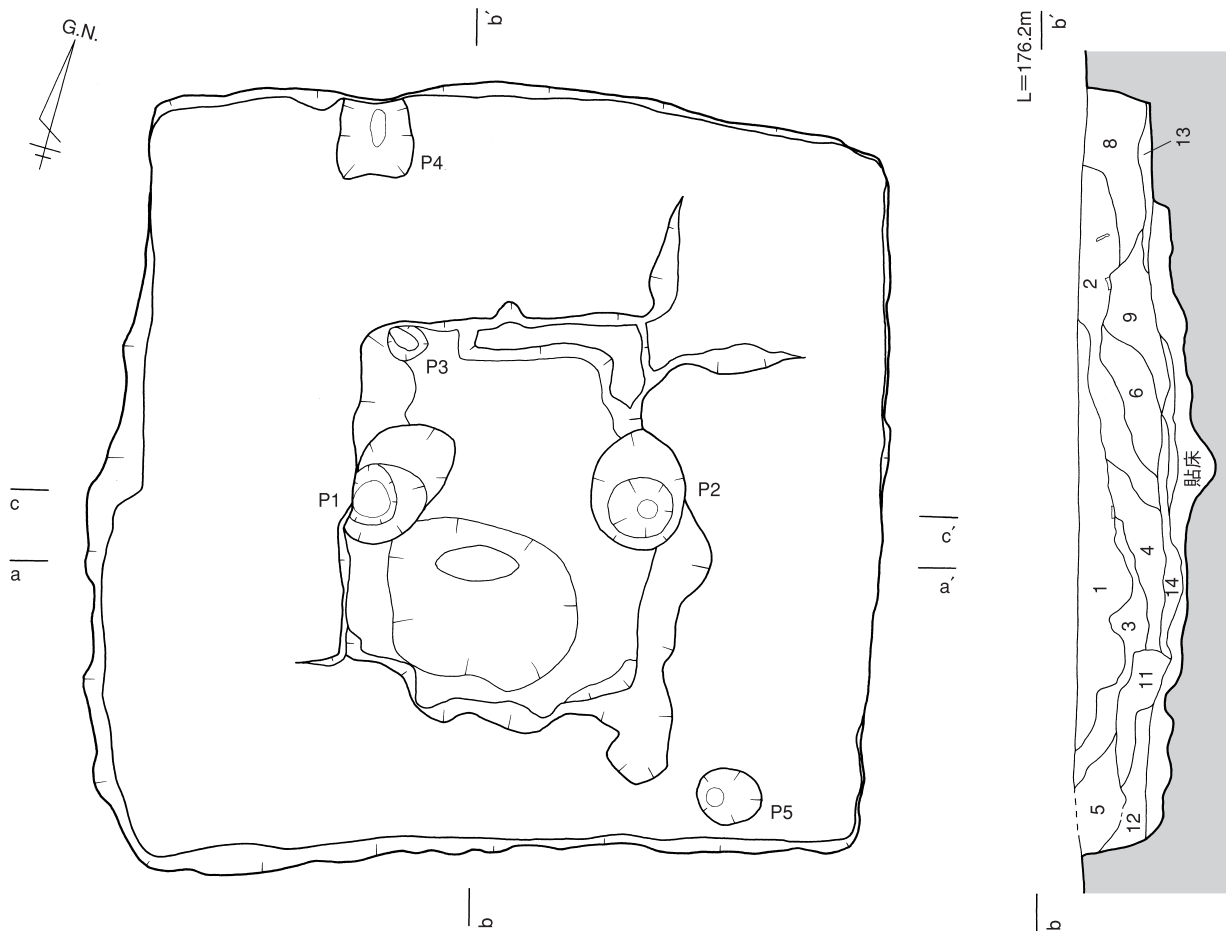
住居焼失の状況を推察する上で特筆すべき点として、次の二点を挙げておきたい。

まず、遺物の出土状況についてである。ほとんどの遺物は土器の破片で、その多くは炭化材よりも5～15cm前後上位で出土しており、廃棄または流れ込みによるものと考えられる。しかし、263の中溝式の甕については、床直上の大きめの炭化材とほぼ同レベルから出土している。出土状況としては、土圧により押しつぶされる形ではあったが、ほぼ完全な形で出土した。

次に、埋土堆積状況についてである。炭化材が集中する層は第2・4・5・6・8・11・14層（第42図中）であるが、特に第2・4層に集中する傾向にあった。また、明確に屋根土と断定できる層を確認することはできなかったが、炭化材の周辺では堅くしまった焼土が数箇所で見出された。

なお、SA11の炭化材については自然科学分析を行っているため、詳細については「第4章 自然科学分析・第2節 樹種同定」（P89～101）を参照されたい。

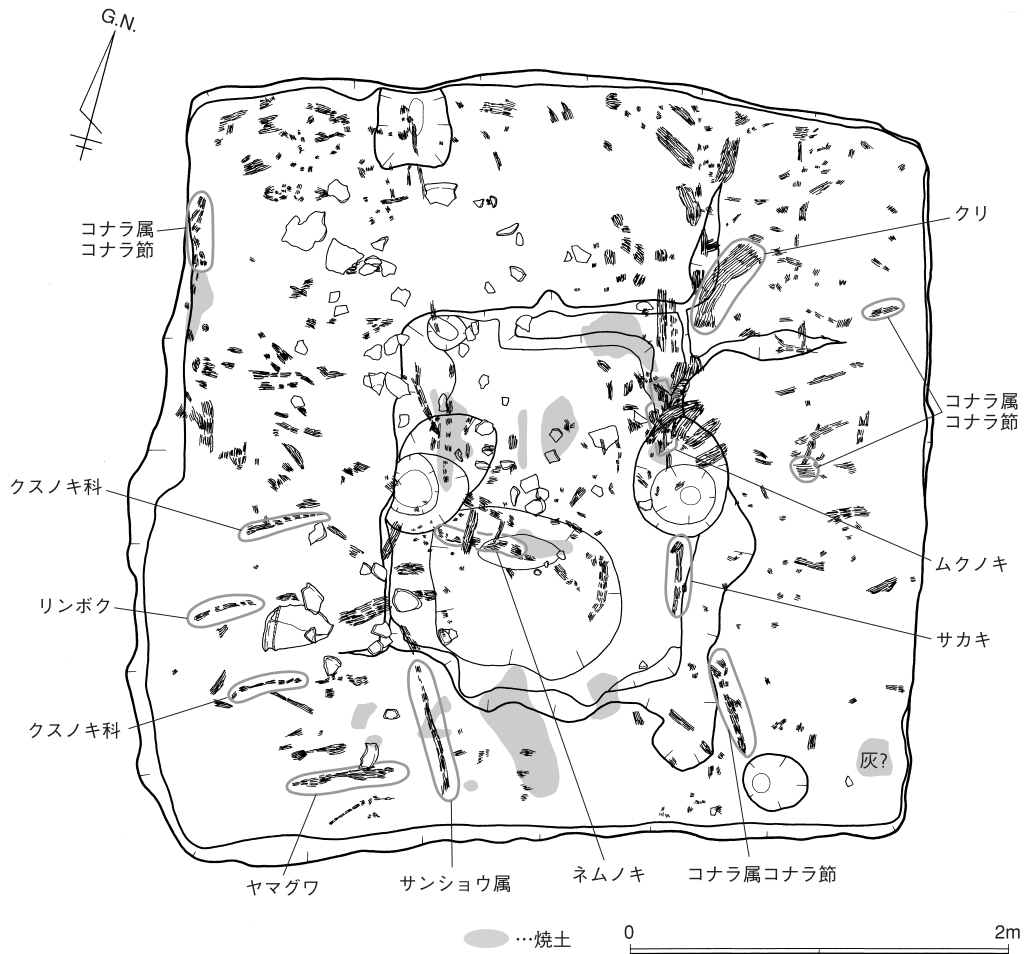
第44図の263～273は、SA11出土の遺物である。263・264は、胴上部に断面三角形の刻目突帯が1条貼り付けられる甕である。263は床上で押しつぶされる形で、ほぼ完形の状態のまま出土した。口縁部にはゆがみが認められ、最大・最小の口径差が2.5cmに及ぶ。口縁部は頸部から明瞭に折れ曲がり、口唇部はわずかにくぼむ。刻目は丸い棒状工具押圧によるものである。底部はやや上げ底となり、胴下部へ直線的に立ち上がる。264も口縁部が強く折れ曲がり外反する。口縁端部は肥厚し、口唇部はヨコナデにより平坦な面をつくる。刻目は263同様、丸い棒状工具押圧によるものである。265・266は無突帯の甕である。265は口縁部が緩やかに外反し、口唇部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。底部は上げ底となり、底部周縁部がやや外に張り出し、



- 1 黒色土 (Hue10YR2/1)
径1～5mmのKr-M粒子を5～10%程度含む。やや粘性があり、ややしまっている。部分的に炭化材が混じり、小粒のKr-M粒子も均等に混じる。
- 2 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
径1～5mmのKr-M粒子を10～30%程度含む。やや粘性があり、堅くしまっている。下面に1～2cm程度の炭化材が均一に混じる。Kr-M粒子がブロック状に入る。
- 3 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
径1～5mmのKr-M粒子を10～40%程度含む。やや粘性があり、しまっている。部分的に非常に堅くしまったKr-M粒子がブロック状に入る。
- 4 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
径1～5mmのKr-M粒子を10～20%程度含む。粘性が強く、堅くしまっている。一定のレベルで1～2cm程度の炭化材が混じる。Kr-M粒子がブロック状に入る。

- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 径1～5mmのKr-M粒子を10～40%程度含む。やや粘性があり、しまっている。部分的に非常に堅くしまったKr-M粒子がブロック状に入る。炭化材も数か所確認できる。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 径1～5mmのKr-M粒子を10～25%程度含む。粘性が強く、堅くしまっている。堅くしまったKr-M粒子がブロック状に入る。
- 7 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 径1～5mmのKr-M粒子を20～40%程度含む。粘性が弱く、堅くしまっている。Kr-M粒子が密に混じる。
- 8 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 径1～2mmのKr-M粒子を20～40%程度含む。やや粘性があり、堅くしまっている。小粒のKr-M粒子が密に混じる。
- 9 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 径1～5mmのKr-M粒子を25～40%程度含む。やや粘性があり、堅くしまっている。小粒のKr-M粒子が密に混じる。
- 10 黒褐色土 (Hue10YR3/1) 径1～5mmのKr-M粒子を20～40%程度含む。やや粘性があり、堅くしまっている。Kr-M粒子が密に混じり、堅くしまっている。床面付近の下面は非常に堅くしまっている。
- 11 暗黒褐色土 (Hue10YR3/3) 径1～5mmのKr-M粒子を20～50%程度含む。粘性が弱く、堅くしまっている。部分的に焼土が確認でき、5cm程度の炭化材も混じる。Kr-M粒子が密に混じる。
- 12 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 径1～5mmのKr-M粒子を15～25%程度含む。粘性が強く、しまっている。小粒のKr-M粒子が均等に混じり、床面付近の下面は堅くしまっている。
- 13 黒色土 (Hue10YR2/1) 径1～2mmのKr-M粒子を5～10%程度含む。粘性が強く、ややしまっている。小粒の炭化材が下面で見られ、その下は堅くしまっている。小粒のKr-M粒子が均等に混じる。
- 14 黒色土 (Hue10YR2/1) 径1～5mmのKr-M粒子を10～15%程度含む。粘性が強く、ややしまっている。小粒のKr-M粒子が均等に混じり、下面は堅くしまっている。
- 15 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 径1～5mmのKr-M粒子を15～30%程度含む。粘性が強く、堅くしまっている。部分的に焼土が確認でき、その下には炭化材も混じる。

第42図 11号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)



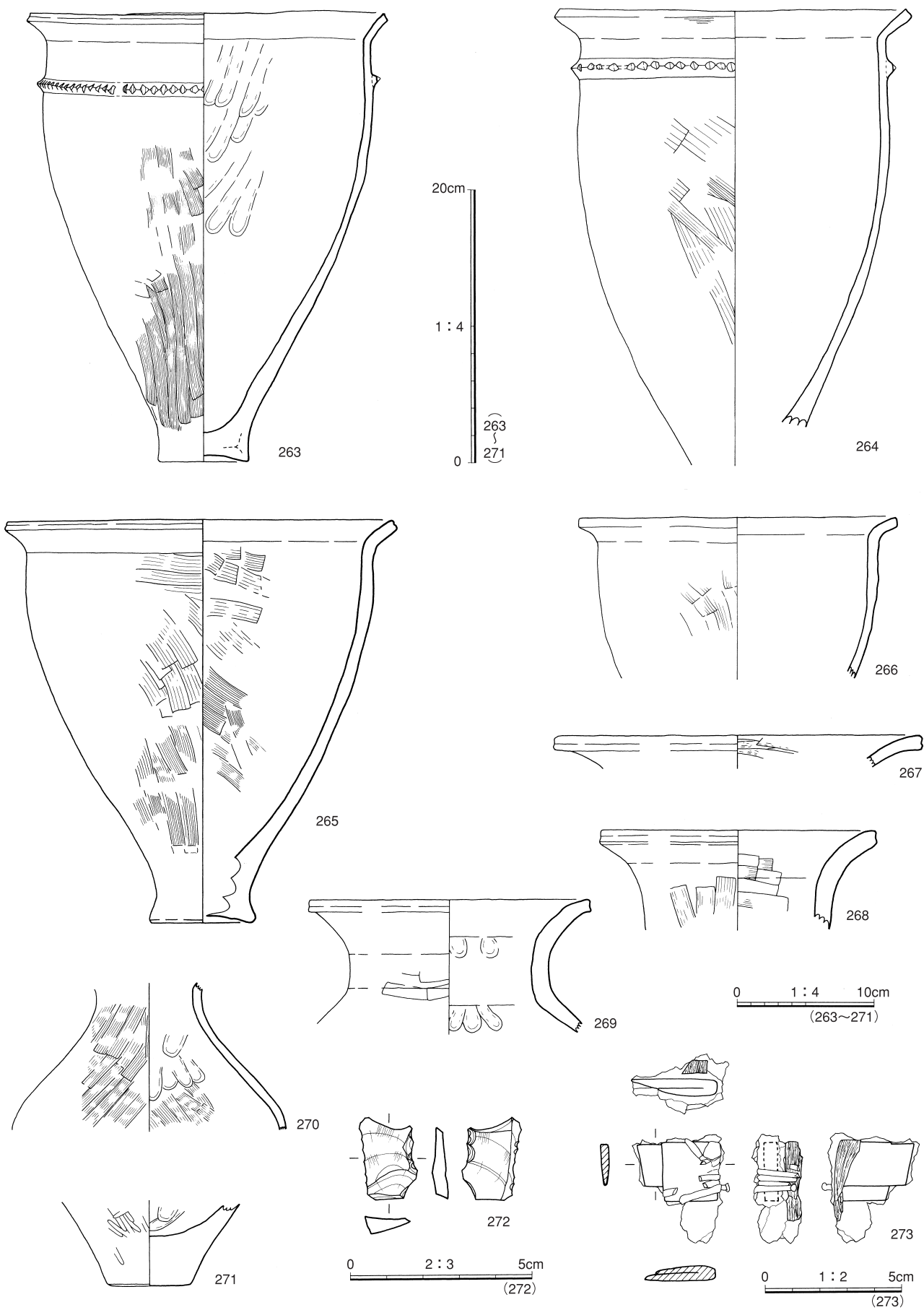
第43図 11号竪穴住居跡出土状況実測図（弥生、S=1/40）

一度内湾してから胴部へと立ち上がる。全体的に炭化物が付着し、SA7・SA10で出土した土器片とも接合された。266は口縁部が強く折れ曲がって外方へ向かい、口唇部はヨコナデにより平坦な面をつくる。風化著しいが、胴部に付着した厚い炭化物の隙間からハケ目がかすかに確認できる。

267～271は壺である。267は広口で、口縁端部は厚みを増してヨコナデにより凹線状にくぼむ。口縁部のみの残存で、大きく外方へ開く形状から器台である可能性も考えられる。268・269は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部に近づくにつれて緩やかに外反する。268の口唇部は強いヨコナデにより凹線状となり、269はわずかにくぼむ。269はSZ1で出土した土器片とも接合された。ともに器壁は厚い。270は頸部から胴部にかけて撫で肩状を呈し、器壁が薄い。271の底部は厚みのある平底となり、底面端部から胴部に向かって外方へほぼ直線的に広がる。外面は風化が著しい。

272はチャート製の剥片で、同一地点からは2点の小片も出土した。何らかの影響で住居廃絶後の埋土中に紛れ込んだ可能性も考えられる。

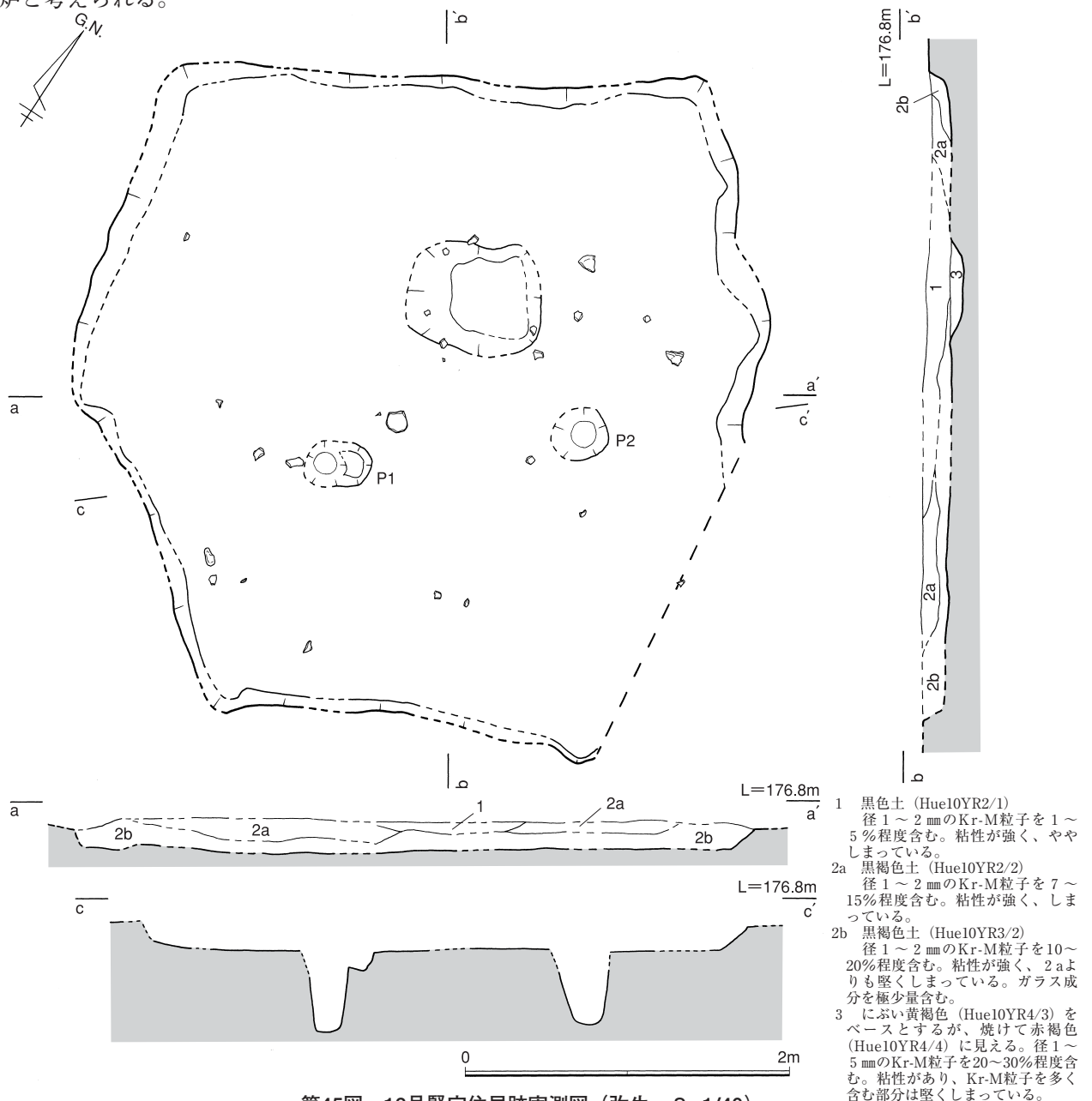
273は木片が装着された鉄製品で、鉄鎌の可能性が考えられる。出土地点は南東壁際の焼土（灰？）付近で、床直上から出土した。銹膨れにより不確定な要素が多いが、刃と思われる部分は断面形態が楔形となり、木片との装着部分付近で2cm程度折り返される。折り返し面とは逆の面に、刃と垂直方向に木片が繊維質のようなもので巻き付けられ固定される。この木片は柄の役割を果たしていたと考えられる。木片は炭化していた。



第44图 11号竖穴住居跡出土遺物実測図 (弥生、S=1/4、2/3、1/2)

12号竪穴住居跡【SA12、第45図】と出土遺物【第46図】

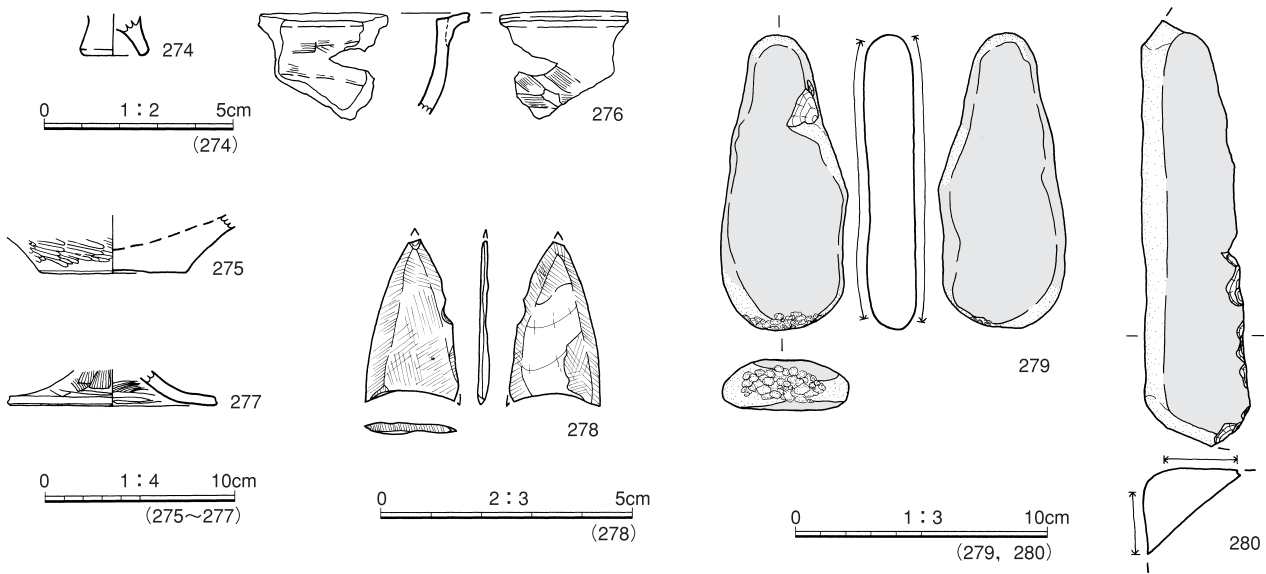
SA12は、竪穴住居跡が集中する北東～中央部からさらに約30m南下した調査区M15グリッドに孤立した形で位置する。一辺が約4.2mのやや不整形な方形プランを基調とする竪穴住居で、南東部が確認調査時の試掘トレンチにより破壊されていたため、確認できた総床面積は約13.1㎡である。検出面まで耕作されており、床面までの深さは最深部でも約0.14mと浅く、周囲にベッド状遺構が存在した可能性も否定できない。床面は第Ⅵ層（Kr-M）上面で揃えられており、貼床は確認できなかった。遺構は床面までトレンチャーで切られている部分もあったが、住居内の中央で東西に並ぶピット2基を確認することができ、2本柱の竪穴住居であったと考えられる。2基の柱穴はいずれも上端をトレンチャーで約半分程度切られていたが、底部の残存状況は良好であり、深さは西側（P1）約0.5m、東側（P2）約0.48mを測る。床面の中央北寄りに長軸約0.84m、短軸約0.72m、深さ約0.1mの掘り込みがあり、埋土が赤褐色に焼けて炭化物も確認できたことから地床炉と考えられる。



第45図 12号竪穴住居跡実測図 (弥生、S=1/40)

第46図の274～280は、SA12出土の遺物である。274は推定底径1.8cmで、中空の脚台状を呈するため、ミニチュア甕の底部の可能性が高い。275は壺の底部で、平底の底面端部から胴部に向かって緩やかに外反しながら立ち上がる。276は鉢の口縁部から胴部と思われる。口縁部は貼り付けによりやや上方を向き、口唇部はヨコナデによりわずかにくぼむ。277は形状から台付鉢の脚部の可能性が高く、裾部は緩やかに外反し大きく外方へ向かう。276と277は胎土・色調が類似するため、同一個体（台付鉢）の可能性も考えられる。

278は暗灰色頁岩製の磨製石鏃で、鋒及び刃部の一部が欠損する。裏面は側縁部のみ研磨しており、平面形態は三角形状の凹基形である。279・280は砂岩製の自然礫を利用した砥石である。279は表面中央部が研磨によりわずかにくぼむ。また下面には敲打痕が残るため、手持ち用であったと考えられる。280は本来大型のものが、何らかの衝撃により剥片状になったと考えられる。

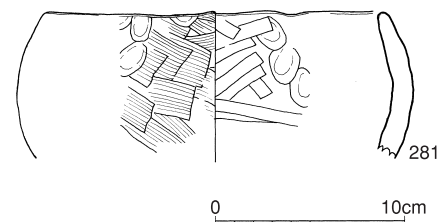


第46図 12号竪穴住居跡出土遺物実測図（弥生、S=1/2、1/4、2/3、1/3）

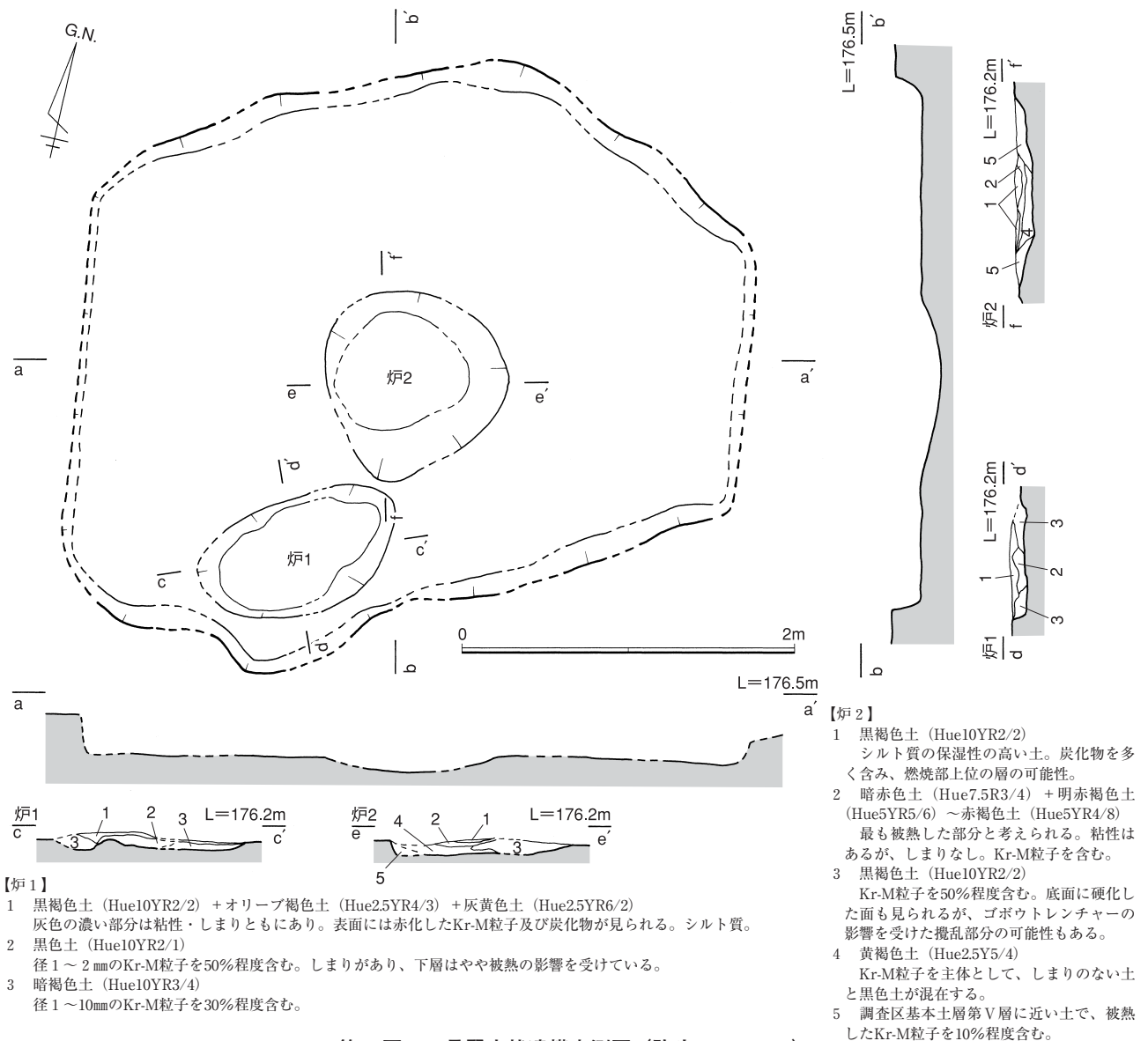
1号竪穴状遺構【SZ1、第48図】と出土遺物【第47図】

SZ1は、竪穴住居跡が集中する調査区中央部のI15グリッドに位置する。SA7の北部に隣接するような形で掘り込まれ、遺構間の距離は1mにも満たない。長軸約4.5m、短軸約3.3m、総床面積約10.4㎡の不整形な平面形態を呈する竪穴状の遺構である。検出面から床面までの深さは最深部で約0.26mを測り、床面は第VI層（Kr-M）で揃えられていた。床面南西部（炉1）及び中央部（炉2）には炉が設けられていた。炉1は上端の計測値で長軸約1.26m、短軸約0.7m、深さは最深部で約0.1m。炉2は長軸約1.16m、短軸約1.12mで、深さは最深部で約0.12m。いずれも平面形態は楕円形を呈し、被熱により底面付近及び埋土中のKr-M粒子等の変色が見られた。特に炉1においては、埋土上層に炭化物が多く混入し、灰の塊も広い範囲で確認された。遺構内から柱穴を検出することはできなかった。遺構内の3～4割前後が、検出面から床面までゴボウトレンチャーによる攪乱の影響を受けていたため、不明な点が多い遺構である。

遺構検出時に、埋土上層から第47図に示す鉢（281）が出土した。口縁部はやや内傾し、口唇部はやや丸みを帯びる。内外面ともに指頭痕が明瞭に残り、器面には凹凸が目立つ粗い整形である。



第47図 1号竪穴状遺構出土遺物実測図（弥生、S=1/4）

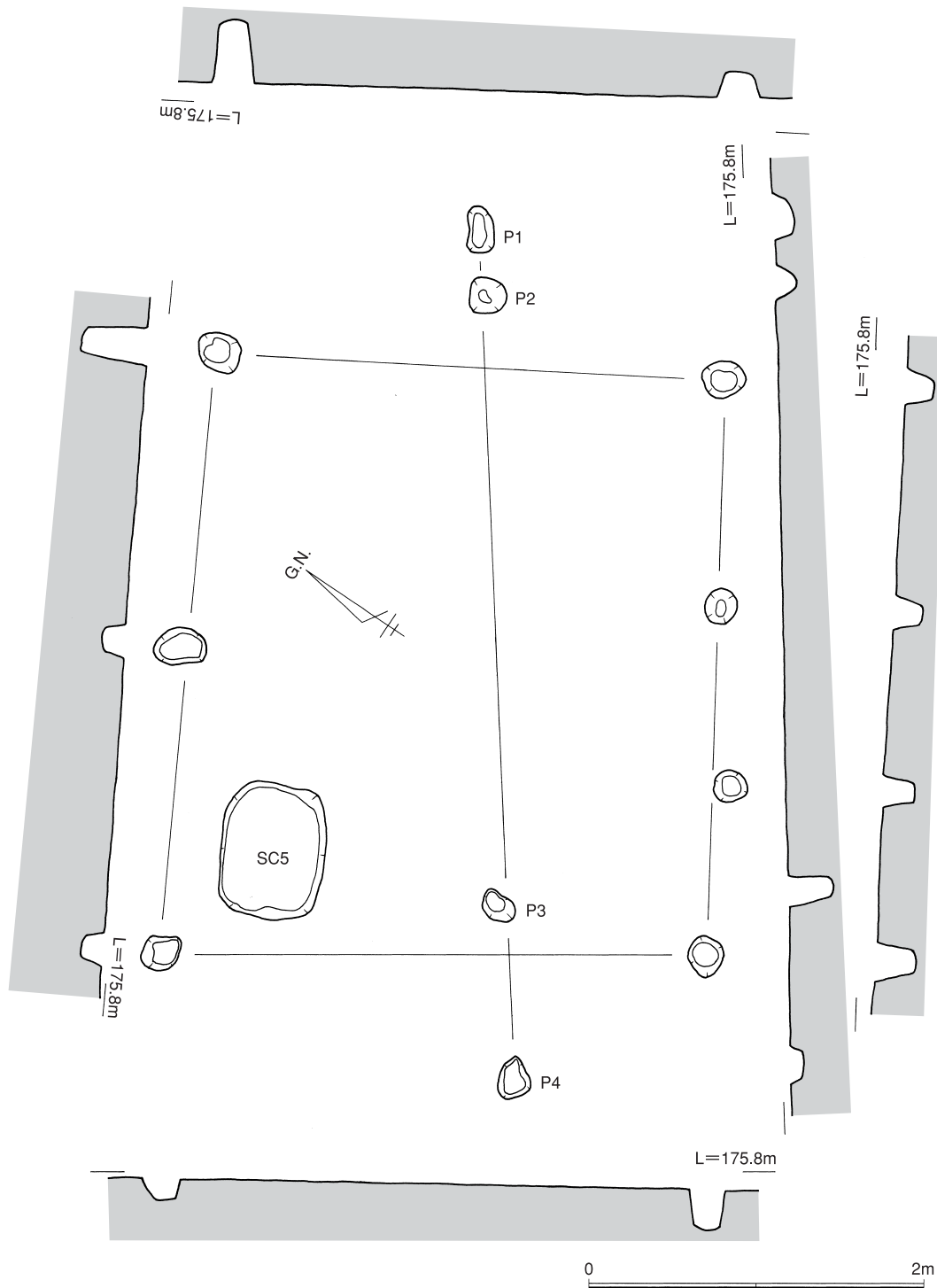


第48図 1号竪穴状遺構実測図 (弥生、S=1/40)

3 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡【SB1、第49図】

SB1は、調査区中央部東側K～L17グリッドに位置する掘立柱建物跡である。ほぼ方形の平面プランを呈するが、柱間は不均一で一部柱筋が通らない柱穴があり、桁行間柱数も南東側2本、北西側1本と異なる。北西側の桁行柱間は約1.77～1.85mとほぼ均一な値を示しており、基本的には1間×2間のプランと考えられる。桁行南東側は、出入口や補助柱等の構造上の問題で桁行間柱数を2本にしたのではないかと考えたい。妻側中央部に壁面から離れてP1・P2・P3・P4が確認された。この4つの柱穴はほぼ一直線上となり、構造上、棟木と平行した位置に当たることから、これらの柱穴が独立して棟木を支える役割を果たした可能性が考えられる。従って、P1・P4が棟持柱で、P2・P3がそれを補助する柱であると考えられる。身舎の柱穴の深さは検出面から約0.08～0.4mと浅く、柱穴によっては下端に近い位置で検出されたと考えられる。埋土は、Kr-M粒子が少量混入する黒色土及び黒褐色土で、出土遺物は確認できなかった。SB1は、SA10を含む小単位住居群から南東へ約14m離れており、住空間とはやや距離を置く遺構である。

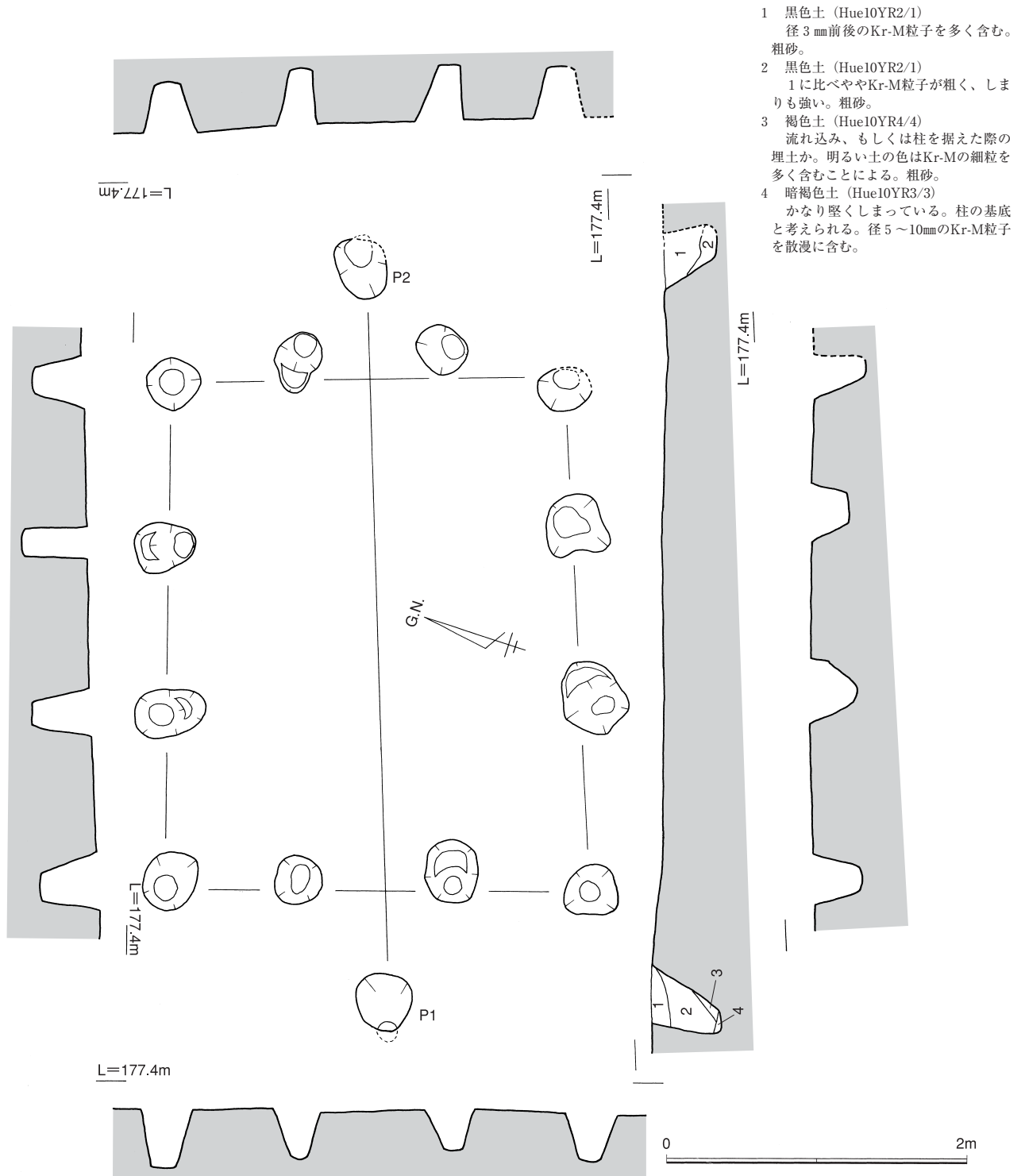


第49図 1号掘立柱建物跡実測図（弥生、S=1/40）

2号掘立柱建物跡【SB2、第50図】

SB2は、調査区中央部西側K13グリッドに位置し、妻側に独立して棟木を支える棟持柱を持つ掘立柱建物跡である。長方形の平面プランを呈する。柱間は北側桁行柱間が約1.1mと均一に揃うのに対し、南側桁行柱間は約0.9~1.3mと不揃いである。いずれも1穴ずつ柱筋がずれる。東側梁行柱間は約0.86~0.96mを測り、西側梁行柱間は約0.86~1.04mで、東西ほぼ対応した柱間であるが東側は柱筋が揃わない。柱穴の深さは検出

面から約0.26~0.44mとしっかりと掘り込まれており、埋土はKr-M粒子が混入する黒色~黒褐色土であった。棟持柱と思われるP1（西側）・P2（東側）は深さがそれぞれ約0.46m・約0.36mを測り、いずれも35°前後内傾する。埋土はKr-M粒子が混入する黒色~褐色土であった。SB2に伴う出土遺物は確認できなかった。SB2も、SA10を含む小単位住居群から南西へ約24m離れており、住空間とはやや距離を置く遺構である。

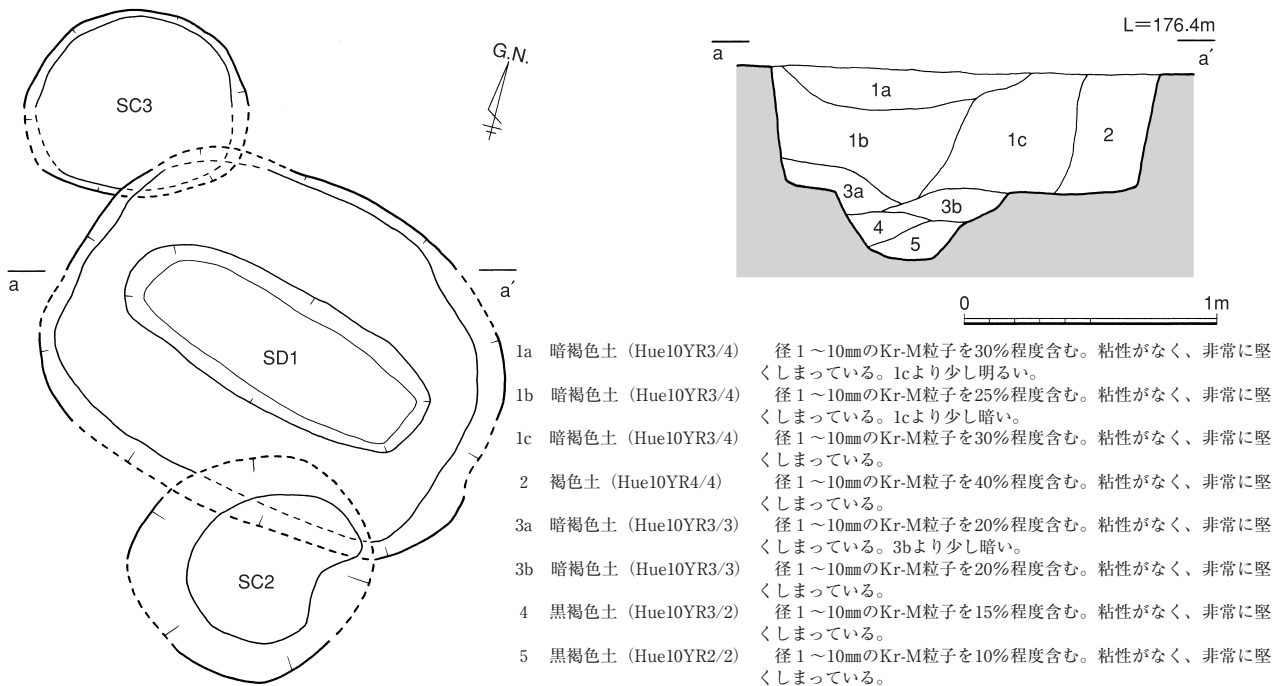


第50図 2号掘立柱建物跡実測図 (弥生、S=1/40)

4 土墳墓

1号土墳墓【SD1、第51図】

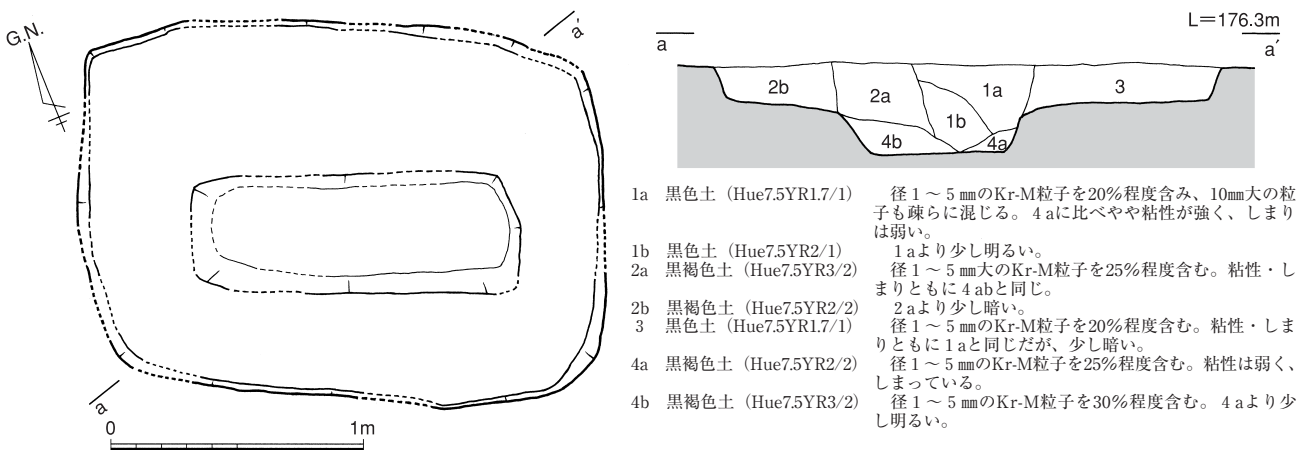
SD1は、調査区北東部G17グリッド、SA6の西方約2.5mに位置する土墳墓である。SD2に隣接し、主軸方位はN-71°-Wではほぼ平行関係にある。一部トレンチャーで切られている部分もあったが、一段目は上端の計測値で長軸約1.82m、短軸約1.35mの隅丸長方形プランを呈し、深さは約0.44~0.48mを測る。棺部の内寸法は長軸約1.13m、短軸約0.35m、最深部約0.27mを測り、床面はほぼ水平である。二段掘りの木蓋土墳墓と考えられ、目詰め用の粘土等は確認できなかったが棺部に直接木蓋を乗せていたことが想定される。棺部幅に大きな差は見られなかったものの、小口部の深さが西側約0.2mに対し東側約0.12mであったため、頭位が西側にある小児用の土墳墓であったと考えたい。SC3をSD1が切っていることは確認できたが、SD1とSC2の先後関係はトレンチャーにより不明である。遺構内から遺物は確認できなかった。



第51図 1号土墳墓・2号土坑・3号土坑実測図 (弥生、S=1/30)

2号土墳墓【SD2、第52図】

SD2は、調査区北東部G17グリッドに位置する土墳墓である。主軸方位はN-67°-Wで、隣接するSD1



第52図 2号土墳墓実測図 (弥生、S=1/30)

とほぼ平行関係にある。遺構の大部分をトレンチャーで切られていたが、一段目は上端の計測値で長軸約2.1m、短軸約1.54mの隅丸長方形プランを呈し、深さは約0.12～0.18mを測る。棺部の内寸法は長軸約1.18m、短軸約0.35m、最深部約0.22mを測り、床面はほぼ水平である。SD 1と同様に二段掘りの木蓋土壙墓と考えられるが、目詰め用の粘土等は確認できなかった。棺部幅・小口部の深さに大きな差は見られず頭位は不明であるが、規模から小児用の土壙墓であったと考えられる。遺構内から遺物は確認できなかった。

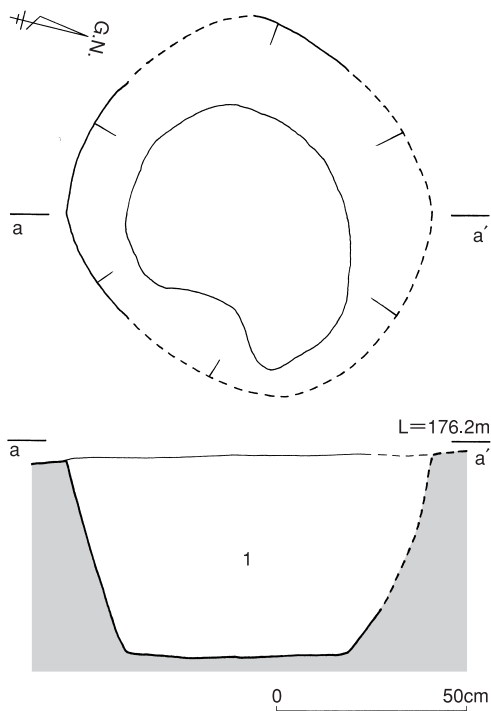
5 土坑と出土遺物

2号土坑【SC 2、第53・51図】

SC 2は、調査区北東部G 17グリッドに位置し、SD 1南壁と切り合う形で検出された土坑である。SD 1を掘削中に検出され、切り合う部分がトレンチャーで切られていたため先後関係は不明である。上端の計測値は短軸約0.87m（長軸不明）で、平面形態は楕円形を呈する。深さは最深部で約0.53mを測り、床面はほぼ平坦な形状をとる。遺構内から遺物を確認することはできなかった。

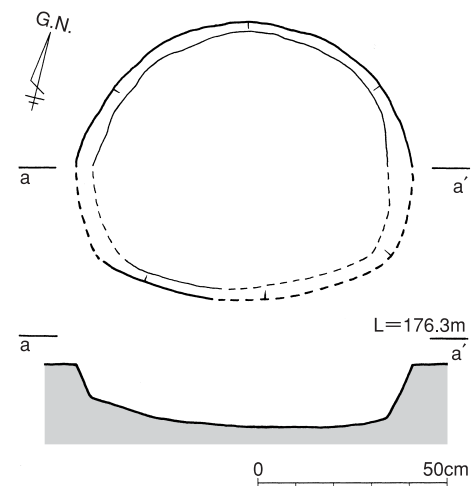
3号土坑【SC 3、第54・51図】

SC 3も、調査区北東部G 17グリッドに位置し、SD 1北西隅壁と切り合う形で検出された土坑である。SC 3をSD 1が切るため、SD 1よりも古い遺構であると考えられる。上端の計測値は長軸約0.89m、短軸約0.74mで、平面形態は楕円形を呈する。深さは最深部で約0.17mと浅く、床面はほぼ平坦な形状をとる。遺構内から遺物を確認することはできなかった。



1 黒褐色土（Hue10YR2/2） 径1～10mmのKr-M粒子を3%程度含む。
粘性弱い。

第53図 2号土坑実測図（弥生、S=1/20）



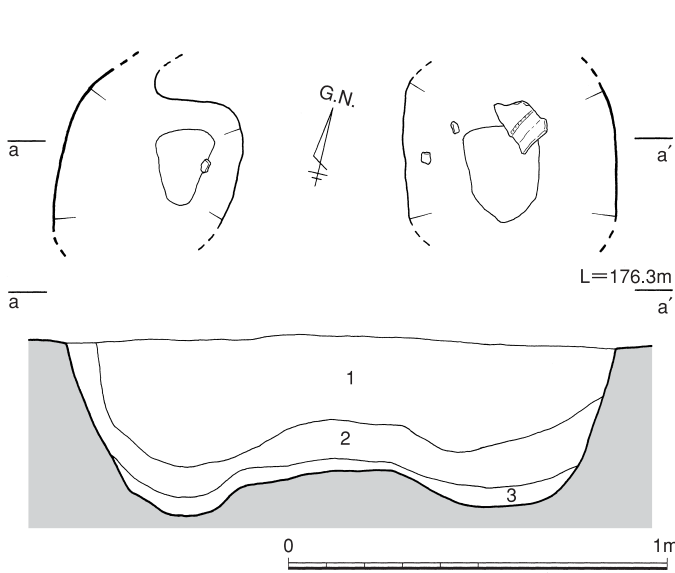
第54図 3号土坑実測図（弥生、S=1/20）

4号土坑【SC 4、第55図】と出土遺物【第56図】

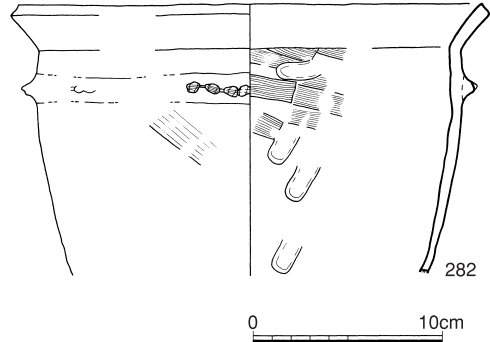
SC 4は、調査区北東部F 17グリッドに位置し、SA 4の南方約1mに隣接する土坑である。上端の計測値で長軸約1.48mの隅丸長方形のプランを呈すると思われるが、遺構の北側及び南側がトレンチャーで破壊されているため詳細は不明である。床面の東西にはそれぞれ浅い掘り込みが確認され、その間はほぼ平坦な形状をとる。東西の掘り込みは最深部で、検出面上端からそれぞれ約0.42mと0.45mを測る。竪穴住居に隣接

することから、貯蔵穴等の可能性も考えられる。

遺構内からは、第56図に示す甕（282）が出土した。口縁部は外反し、口唇部はヨコナデによりわずかにくぼむ。胴上部には断面三角形の刻目突帯が1条貼り付けられ、刻目部分には丸い棒状工具を押圧した際の繊維痕がわずかに認められる。器面は風化及び剥離が著しい。



第55図 4号土坑実測図（弥生、S=1/20）



第56図 4号土坑出土遺物実測図（弥生、S=1/4）

- 1 黒色土（Hue10YR2/1） 径1～10mmのKr-M粒子を10%程度含む。粘性弱い。
- 2 暗褐色土（Hue10YR3/4） 径1～10mmのKr-M粒子を40%程度含む。粘性弱い。
- 3 黒色土（Hue10YR1.7/1） 径1～10mmのKr-M粒子を3%程度含む。粘性あり。

5号土坑【SC 5、第57・49図】

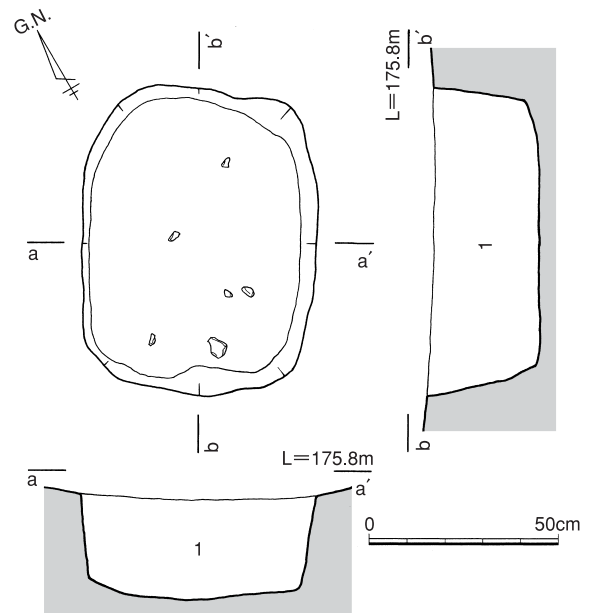
SC 5は、調査区中央部東側L17グリッドに位置する土坑である。上端の計測値で長軸約0.82m、短軸約0.62mの隅丸長方形プランを呈する。上端からほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。深さは最深部で約0.28mを測る。遺構内からは6点の弥生土器片が出土したが、器種等の判別はできなかった。SC 5は、SB 1内の西隅部で検出され、周囲で他の遺構が確認されていないことからSB 1に伴う可能性も考えられるが、近隣遺跡での掘立柱建物跡に伴う土坑の検出例は少ない。

6号土坑【SC 6、第58図】

SC 6は、調査区中央部西側M13グリッドに位置する土坑である。上端の計測値は長軸約0.87m、短軸約0.78mの不整形な平面形態を呈し、深さは最深部で約0.37mを測る。遺構内から遺物は確認できず、遺構の配置状況及び埋土、形状等から樹痕の可能性も否定できない。

7号土坑【SC 7、第59図】

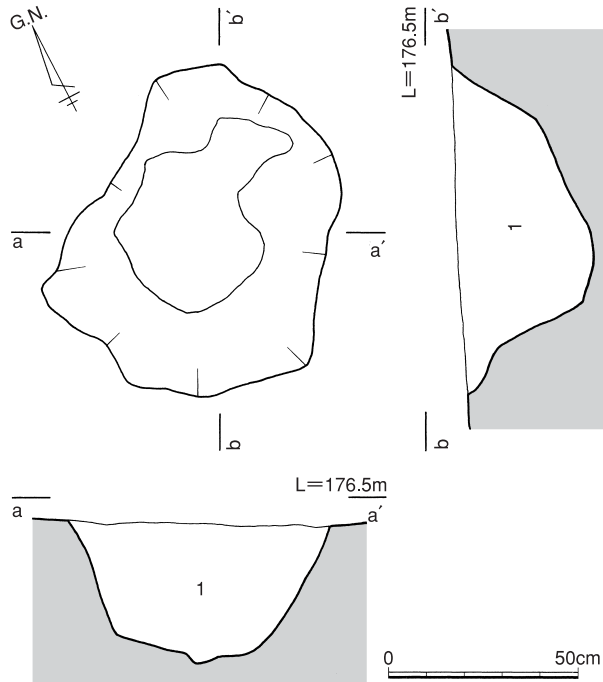
SC 7は、調査区中央部J13グリッドに位置する土坑で、SA10を含む小単位住居群から西へ約18m離れる。上端の計測値で短軸約0.78m（長軸不明）の隅丸長方形プランを呈し、深さは最深部で約0.31mを測る主軸方



- 1 黒色土（Hue10YR2/1） 径1～3mmのKr-M粒子を5～10%程度含む。粘性が強く、ややしまっている。

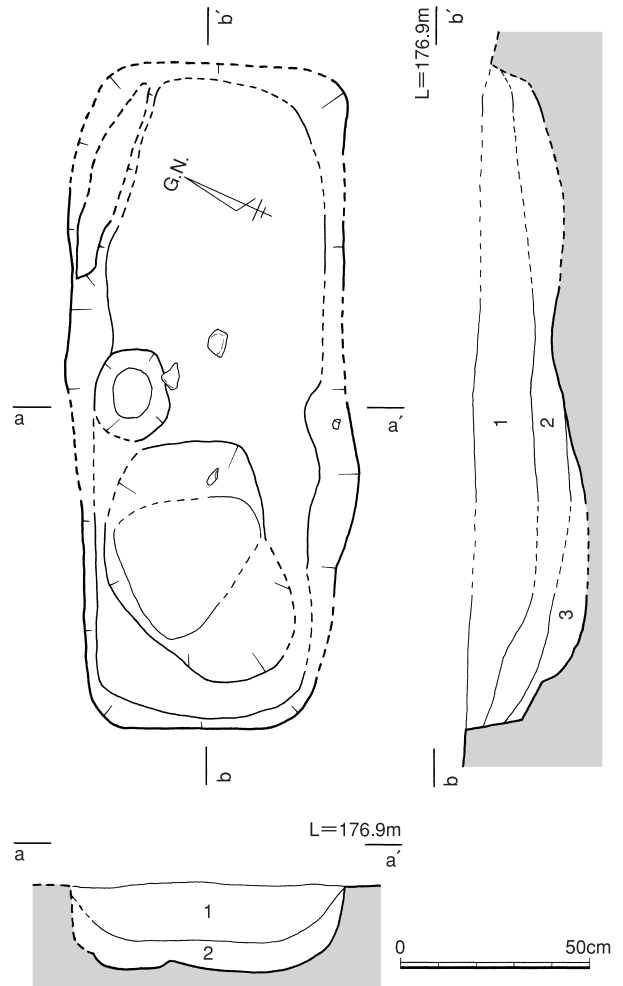
第57図 5号土坑実測図（弥生、S=1/20）

位N-66°-Eの土坑である。検出面まで耕作されており、一部床面までトレンチャーで切られる。床面は平坦ではなく、西半面には長軸約0.66m、短軸約0.48m、最深部約0.1mの不整形な浅い掘り込みが確認された。遺構内からは4点の弥生土器片が出土したが、器種等の判別はできなかった。



1 黒色土 (Hue10YR2/1)
径1~5mmのKr-M粒子を1~5%程度含む。粘性が強く、ややしまっている。

第58図 6号土坑実測図 (弥生、S=1/20)



1 黒色土 (Hue10YR2/1) 径1~2mmのKr-M粒子を3~5%程度含む。
2 黒色土 (Hue10YR2/1) 径1~3mmのKr-M粒子を7~10%程度含む。
3 黒色土と黄褐色土が混じる明るい層。

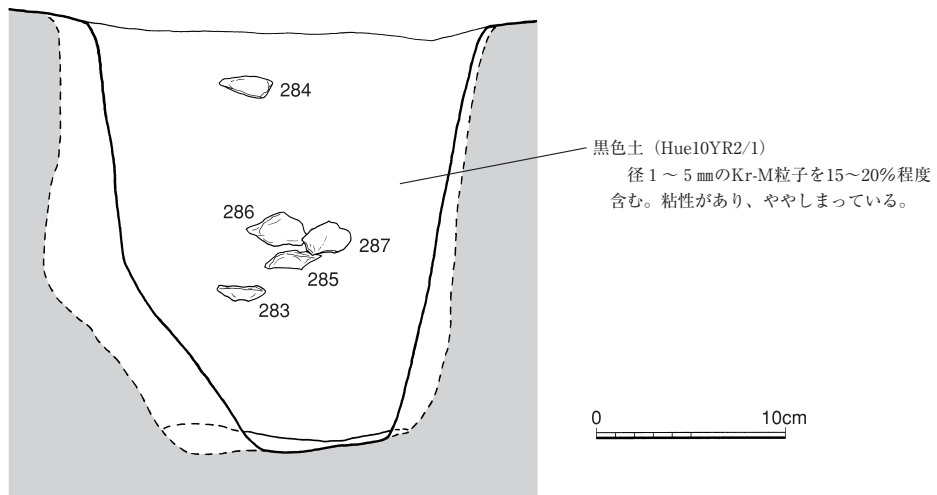
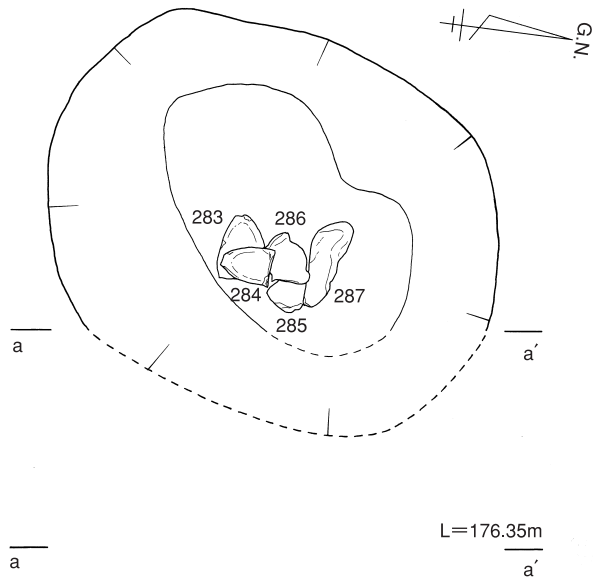
第59図 7号土坑実測図 (弥生、S=1/20)

6 小穴と出土遺物

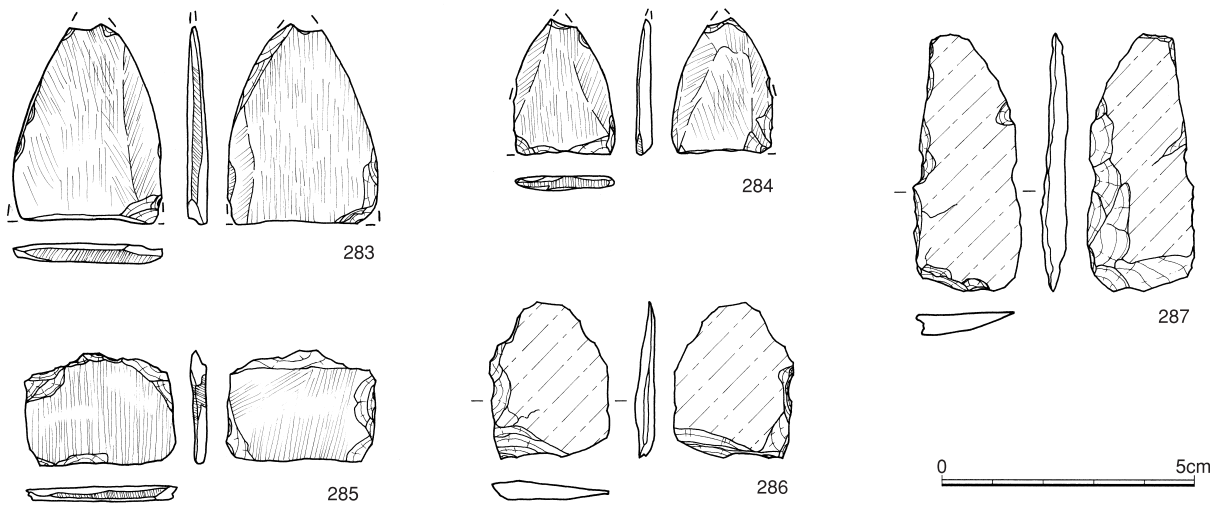
1号小穴【SH1、第60図】と出土遺物【第61図】

SH1は、調査区北中央部のF15グリッド、SA2の西方約5mに位置する遺物を伴う小穴である。上端の計測値は長軸約0.25m(短軸不明)で、平面形態は楕円形を呈する。深さは最深部で約0.23mを測り、埋土は一層のため、埋め戻されたものと考えられる。

遺構内からは、第61図に示す明灰色頁岩製の磨製石鏃未成品5点が出土した。283~285は表裏両面及び基部も研磨され、完成間近であったと推察できる。周縁部には部分的に剥離面も見られ、製作途中の失敗品であった可能性が高い。283・285は大型で、刃端部が研磨により平滑な面を成し、鋭利な刃先とはなっていない。大きさ・形状から、同一規格のものを製作しようとしていた可能性が考えられる。286・287は表裏両面の節理面を生かして製作しようとしていたものと推察される。



第60図 1号小穴実測図 (弥生、S=1/4)



第61図 1号小穴出土遺物実測図 (弥生、S=2/3)

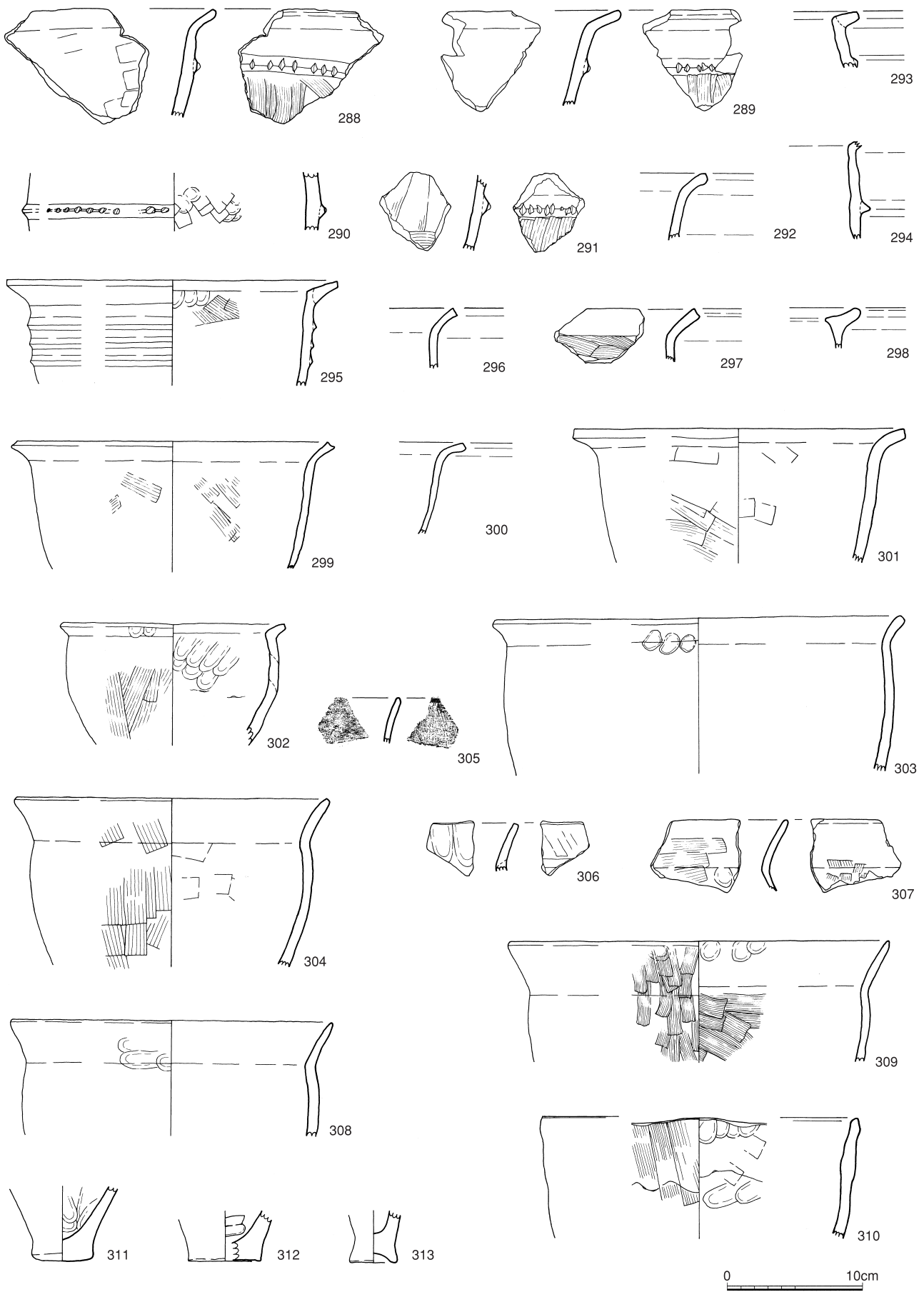
7 包含層出土遺物（弥生時代）【第62・63・64・65・66図】

遺構に伴わず、本遺跡全域の第Ⅱ層（Sz-3）下から第Ⅵ層（Kr-M）上間の遺物包含層（第Ⅳ～Ⅴ層等）から出土した遺物の中から、弥生時代に位置づけられるものを第62～66図（288～370）に示した。以下、出土した遺物について器種ごとに類別し、説明を加える。なお、個々の遺物の詳細については、遺物観察表②（第4表）及び遺物計測表①（第7表）、遺物計測表②（第8表）を参照されたい。

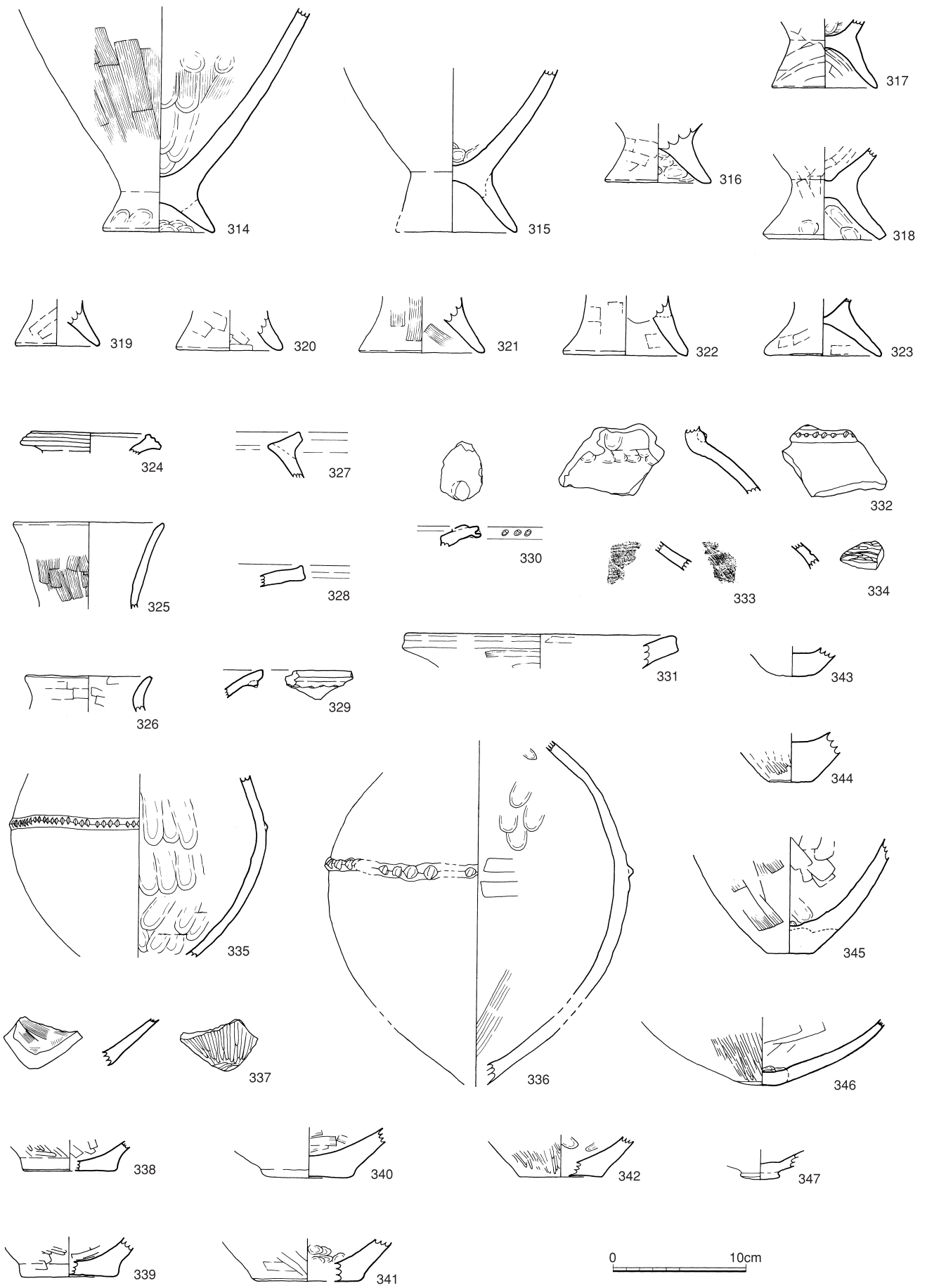
第62～64図の288～351は弥生土器である。ただし一部、層位不明の一括資料も、当該期の土器の特性をもつことからここに含めることとした。

288～323は甕である。288～295は胴上部に突帯を有し、288～291には刻目を施した突帯1条が貼り付けられる。288・289・291には先端部が鋭利なヘラ状工具押圧による刻目が不規則に並び、290には丸い棒状工具押圧による刻目が等間隔で施される。288・289は胴上部がやや外傾して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部はともに丸みを帯びる。292も同様の形状を呈し、口唇部は平坦な面をつくる。胴部欠損部付近には突帯の剥離痕が認められる。293は断面台形状の口縁部を貼り付け、断面「く」の字状に強く折れ曲がる。294は口縁部のつくりが粗く、突帯とは平行にはならない。295は胴上部に低い断面三角形の突帯が3条貼り付けられる。口縁部は外方へ強く折れ曲がり、先細となった口唇部はほぼ平坦な面をつくる。296・297は胴上部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。298は口縁部断面が鋤先状を呈する。299～301は胴上部がやや外傾し、口縁部は緩やかに外反する器形を特徴とする。299は口唇部がややくぼみ、300・301は平坦な面をつくる。302は小型の甕で、口縁部が断面「く」の字状を呈する。内面には指ナデの凹凸が明瞭に残る。303～309は胴部がやや外方へ張り出し、口縁部が上方へ立ち上がる器形を特徴とする。305の口縁部外面には、線刻が施される。310は胴部から口縁部への屈曲部をもたず、直線的に立ち上がる器形を特徴とする。成形が粗く、指頭で仕上げられた口縁部はゆがみが大きく、器壁の厚さも不均一である。311～323は甕の胴下部付近から底部にかけての資料で、いずれも風化が著しいものばかりであった。311・312は平底状を呈し、つくりが粗い。特に311は、底面周縁部の外方への張り出しが不均一である。313は推定底径3.5cmで、ミニチュア甕の底部と考えられ、上げ底となる。314～323は中空の脚台状を呈する。314～318・323については胴下部のくびれが大きく、特に323はくびれ位置の径が、底径の1/2以下となる。

324～347は壺で、そのうち324～331は口縁部付近の資料である。324は瀬戸内系の凹線文土器で、口唇部に3条の凹線文が巡る。胎土は精良であるが、6mm大の灰白色石1粒が口縁部内面に表出する。325は頸部から口縁部へとやや外方へ直線的に立ち上がる形状を呈する。326は短頸壺の口縁部で、断面「く」の字状を呈する。327は広口の無頸壺で、口縁部断面が「く」の字状を呈し、口唇部はヨコナデによりややくぼむ。328は口縁部が大きく外反し、口唇部はわずかにくぼむ。329も口縁部が大きく外反し、口唇部直下に丸い棒状工具押圧による刻目が施された突帯1条が貼り付けられる。330は口唇部に丸い棒状工具による連続刺突文が施され、口縁部上面には直径約1.3cmの円形浮文が貼り付けられる。331は口縁部が大きく外反し、口唇部がややくぼむ。口縁部のみの残存で、形状から器台である可能性も考えられる。332～334は壺の肩部付近の資料である。332は頸部と肩部の境に、板状工具押圧による刻目を施した突帯1条が貼り付けられる。333には弧を描くような線刻が施される。334には曲線状の沈線が2本施され、重弧文の可能性も考えられる。335・336は丁寧なナデにより平滑に仕上げられた壺の胴部で、ともに胴部の最大径位置に刻目突帯1条が巡る。335は球状を呈し、刻目突帯は先端が鋭利なヘラ状工具押圧によるものである。336は、形状から底部形態が尖底と判断できる。刻目突帯は丸い棒状工具押圧によるものである。337～347は壺の胴下部付近から底部にかけての



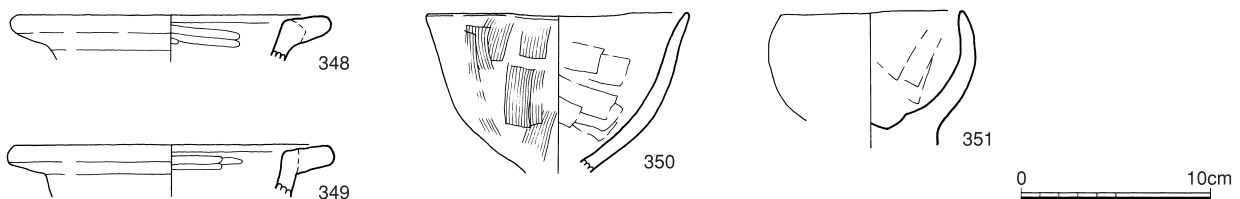
第62図 包含層出土遺物実測図① (弥生、S=1/4)



第63图 包含層出土遺物実測図② (弥生、S=1/4)

資料である。337は底部付近から外方に直線的に広がり、外面はミガキによって黒い光沢をもつ。338～342は平底状の安定した底面をもつ底部である。338～341は底面端部が丸みを帯び、胴部へと立ち上がる間に浅い湾曲部をもつ。342は底面端部に角をもち、胴部へと外方に直線的に向かう形状を呈する。343～347は底径が小さくやや不安定な底部で、後期後半から終末期にかけての底部と考えられる。343～345は、他に比べ厚みがある底部である。344・345は同様の形状をもち、胴部の張りは小さい。346は丸底状の不安定な底部から胴下部へと外方へ大きく開く形状を呈する。347はボタン状の底部を貼り付け、やや丸底状となる。

348～350は鉢である。348と349は口唇部形状に若干の違いは見られるものの、口径・形状・調整等も類似し、出土地点も近いことから同一個体の可能性も考えられる。器壁が厚く、形状とは不均衡と言える。350は外面のハケ目が口唇部付近まで明瞭に施される。351は脚付の碗と考えられる。底部内面の凹部が中心より大きくずれ、全体的に調整が粗く凹凸が目立つ。



第64図 包含層出土遺物実測図③ (弥生、S=1/4)

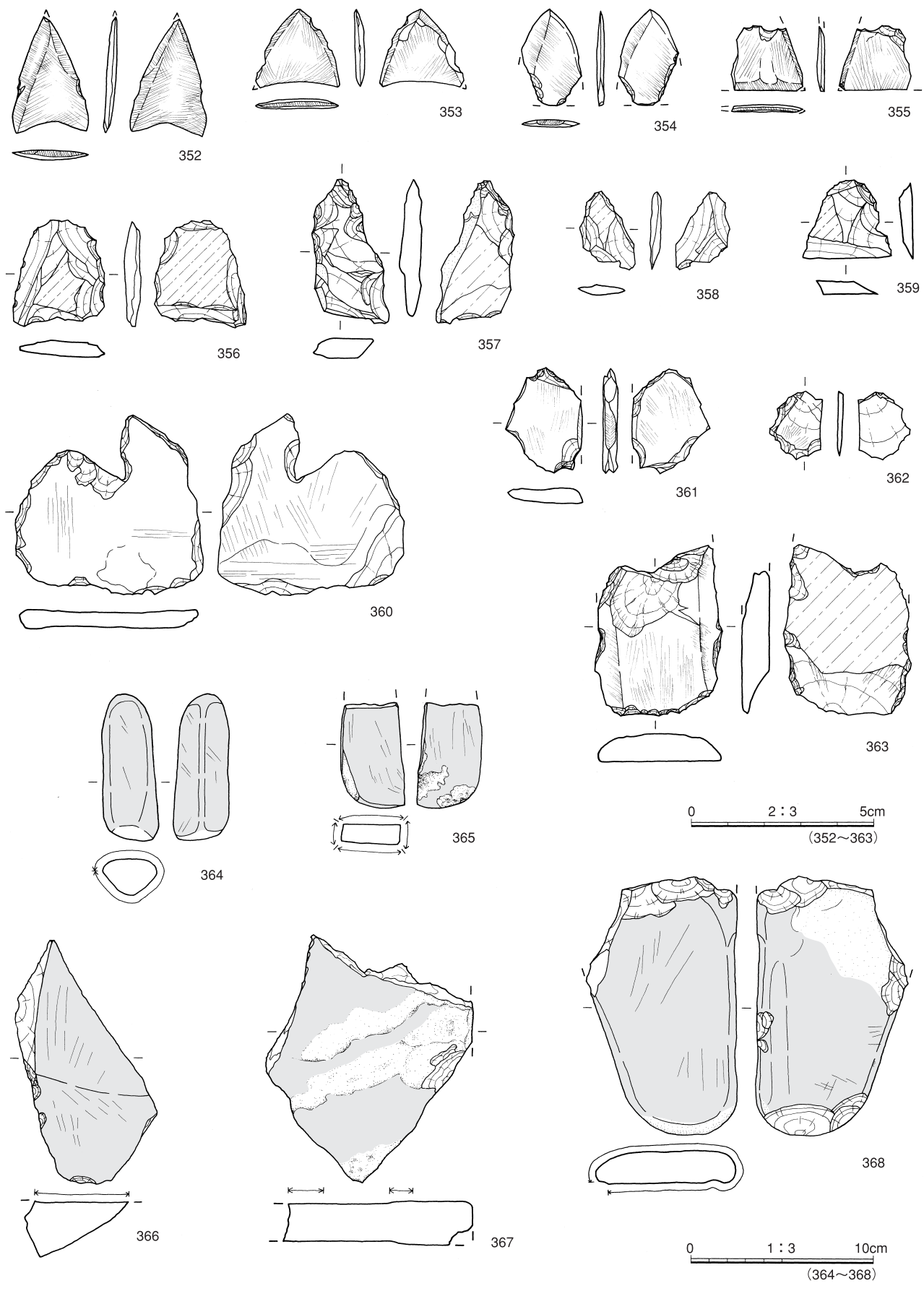
第65図の352～368は、弥生時代に位置づけられる可能性の高い石器類を集約したものである。ただし一部、層位不明の一括資料も当該期の特性をもつことからここに含めることとした。

352～355は磨製石鏃である。352は黒灰色頁岩製で、鋒及び刃部がわずかに欠損する。平面形態は三角形状の凹基形である。353は明灰色頁岩製で、刃部が部分的に欠損する。平面形態は刃部がやや丸みを帯びる正三角形状の浅い凹基形である。354は黒灰色頁岩製で、刃中部から基部にかけて欠損する。基部の平面形態はやや丸みを帯びる平基形と推察できる。表裏両面ともに粗い研磨痕が明瞭に残る。355は明灰色頁岩製で、上半部及び片刃部が欠損する。平基形で、表面の中央長軸方向に浅いくぼみが認められる。

356～361は磨製石鏃の未成品である。356は灰色頁岩製で、表裏両面の節理面の周縁部に調整を加えて整形しようとしている。357・358は明灰色頁岩製で、周縁部に整形のための剥離調整が認められる。359は黒灰色頁岩製で、裏面は節理により平坦な面をつくる。360・361は緑色泥岩製で、表裏両面に明瞭な線條の研磨痕が認められる。362は明灰色頁岩製の剥片で、磨製石鏃製作時に剥離した破片と考えられる。

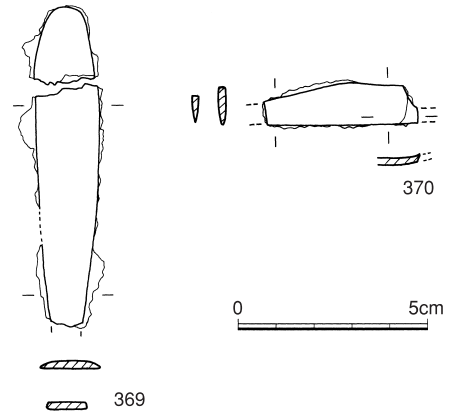
363は破損した黒灰色頁岩製の磨製石斧の転用品と考えられる。剥離した刃部付近の表面のみに調整が加えられる。元の磨製石斧は、表面が丁寧に磨き上げられて光沢があり、裏面は節理面がそのまま生かされ研磨されていない。小型で、器面全体が茶変している。

364～368は砥石である。364はホルンフェルス製で、小型の手持ち用である。自然礫を利用した断面三角形の棒礫状を呈する。長軸端部を除きほぼ全面が砥面となり、光沢をもつ。365は灰黄色の粘板岩製で、小型板状のものである。折損面及び自然面の凹部を残して全面が砥面となる。366は両輝石安山岩製で、本来大型のものが何らかの衝撃により剥片状になったと考えられる。367は砂岩製で、板状の厚い自然礫を利用して凸部のみが砥面となり、そこだけが褐灰色に変色している。368は砂岩製の自然礫を利用したもので、ほぼ全面が砥面となる。裏面には研磨による溝状の凹面が長軸方向に伸び、棒状のものを研磨した可能性が高い。



第65图 包含層出土遺物実測図④ (弥生、S=2/3、1/3)

第66図の369・370は、第Ⅳ～Ⅴ層出土の鉄器である。369は身幅最大約1.7cmの、茎を欠損する鉞と考えられる。鋒の平面形態は丸みを帯びる。銹膨れにより明瞭ではないものの、断面両端部に向かって厚みが薄くなることから両刃をもつ鉞と判断した。370は断面形態が楔形となり、小型の刀子である可能性が高い。身幅は最大約1.0cmあり、鋒及び茎を欠損するが棟関タイプであったと考えられる。身から茎へと続く部分が緩やかに湾曲する。



第66図 包含層出土遺物実測図⑤
(弥生、S=1/2)

8 その他の遺物

その他の遺物として、器種・用途等が不確定なものをここに挙げることにする。なお、実測図等の図化は行っていないため、詳細については遺物観察表③（第5表）、遺物計測表③（第9表）及び図版26を参照されたい。

軽石加工品等【図版26】

371～401は、軽石を素材とする加工品または素材そのものである。371は表面中央部に、幅2.8cm、長さ8.5cm、最深部1.8cmの研磨による凹部があり、女性器をかたどった陰石の可能性も考えられる。372～377には径0.7～1.3cmの穿孔が施されている。372は穿孔が貫通した際に軽石が折損したものと考えられ、孔内面が表出する。373～377は未貫通の穿孔であるが、376・377については表裏両面から同位置に穿孔を施し、貫通させようとしたものと考えられる。377～384は研磨による平滑な面をもつ加工品である。特筆すべき点として、384の線条痕が挙げられる。幅0.1～0.4cmの凹痕が、2～4条のハケ目状に長いところで2.8cm確認できる。386～388は側面を円滑に仕上げながら器形を整えている可能性が考えられる。また、382・391・392は表面が赤変しており、被熱している可能性が高い。393～401は明瞭な加工痕が認められないため、加工品をつくるための素材と考えたい。

焼成粘土塊【図版26】

402～410は、炉壁等の可能性も考えられる焼成粘土塊である。いずれも破片のため器種・部位等の特定はできないが、二次的な被熱を受けた灰色化した部分をもつ。また、402以外にはササ様圧痕も認められる。403～407・410はG17・H17・I18グリッドからの出土となり、出土地点が集中する傾向にある。409のみ出土地点がM13グリッドと離れて出土しているが、形状的には鋳型の可能性も考えられるため、411（M12グリッド出土の埴塙の土器片）に関連する鋳造関係の遺物である可能性も否定できない。

第4節 古代以降の遺物【第67図】

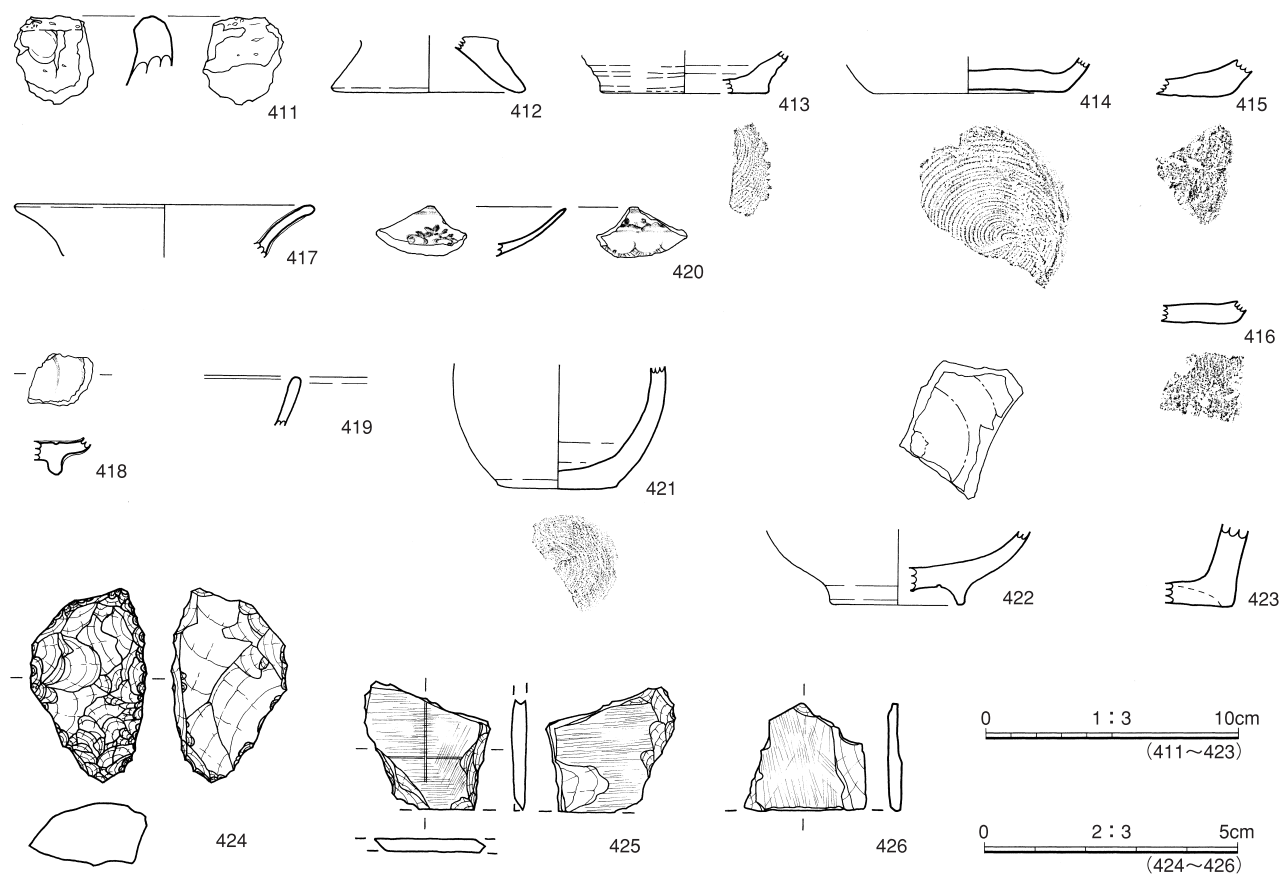
第67図に挙げた遺物は、第Ⅱ層（Sz-3）下から第Ⅵ層（Kr-M）上間で出土した遺物の中から、古代以降に位置づけられるものを集約したものである。また、層位不明の一括資料についても、遺物の特性からここに掲載することとする。詳細については遺物観察表④（第6表）及び遺物計測表①（第7表）を参照されたい。

411は埴塙の口縁部で、分析調査結果（P105～107）から判断すると古代のものと考えられる。口縁部周辺

は赤く変色しており、銅粒が付着している。詳細は分析調査結果を参照されたい。412～416は中世の土師器である。412は胴部との接合面から剥離した脚部と考えられ、脚付碗の可能性が高い。413は坏の体部から底部である。外面は粗い回転ナデにより器面に凹凸が目立ち、底部には糸切り痕が残る。414は皿の底部で、内外面には部分的にススが付着し、灯明皿の可能性も考えられる。底部には糸切り痕が残る。415・416も底部で、器種は不明であるが坏の可能性が高い。ともに風化著しいが、416の底部はヘラ切りと考えられる。

417～419は14世紀の龍泉窯系の青磁である。417は皿の口縁部から底部付近で、口唇部は丸みを帯び、底部に近づくにつれて釉が厚くなる。418は皿の底部で、高台内は露胎となる。内面には肩彫りによる弧線が同心円状に2本確認できる。419は碗の口縁部から体部で、口唇部は丸みを帯びるが内面には明瞭な稜が立つ。420は景德鎮窯系の青花である。碁笥底をもつ皿C群（小野1982）に分類される。皿の口縁部から体部を残し、口唇部先端は薄く尖頭状を呈する。外面には口縁部に波濤文、底部付近に芭蕉葉文が描かれる。内面には花鳥文と考えられる文様が施される。421は素焼きの壺と考えられ、胴部から底部にかけて残存する。非常に堅緻で内外面ともに轆轤目が残り、近世の土師器の可能性が高い。422は龍門司系の薩摩焼の碗で、体部から底部を残す。内面には蛇の目釉剥ぎによる無釉部分が同心円状に巡る。底部は削り出しによる高台をつくり、中心部付近に兜布が残る。423は苗代川系の薩摩焼の甕の底部付近で、底面まで施釉が施される。内面には轆轤目が残り、底部には焼成時に付着した可能性が考えられる灰のようなものが認められる。

424は玉髓製の火打ち石で、側縁部が磨滅しその周辺部がやや黒変している。425・426は粘板岩製の石盤で、ともに角部であり表裏両面ともに研磨されている。425には直交する方眼状の沈線が明瞭に認められる。



第67図 古代以降の遺物実測図（古代以降、S=1/3、2/3）

第3表 遺物観察表① (縄文土器)

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量〔cm〕※(推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 2 【X】	—	—	—	斜方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい 黄橙	灰黄橙	3mm以下の金色光沢・灰白色・乳白色・黒褐色・浅黄橙色・褐灰色粒	貝殻条痕文(山形状)
2	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 1 【X】	—	—	—	斜方向の貝殻条痕	ナデ	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	2mm以下の黒色光沢・黒褐色・黒色・橙色・灰白色・褐灰色・無色透明光沢粒 6mm以下の赤褐色粒	貝殻条痕文(山形状)
3	縄文 土器	深鉢 底部	Tr 5 【X】	—	(9.0)	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい 赤褐	1mm以下の褐灰色・赤褐色・乳白色・黒色・黒色光沢・無色透明光沢粒 4mm以下の灰白色・浅黄橙色・にぶい赤褐色粒 6mm以下の明赤褐色粒	平底 底部周縁部に刻目
4	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 5 【X】	—	—	—	ナデ	縦方向のミガキ	にぶい 褐	にぶい 橙	1mm以下のにぶい橙色・赤褐色・黒褐色・にぶい褐色・金色光沢・黒色針状光沢粒 3mm以下の灰白色粒	短沈線文(羽状)
5	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 5 【X】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	3mm以下の金色光沢・褐灰色・褐色・浅黄橙色粒	短沈線文(羽状)
6	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 4 【X】	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐	にぶい 褐	2mm以下の灰白色・乳白色・赤褐色・褐灰色・黒色光沢・無色透明光沢粒 4mm大の灰色光沢粒	貝殻条痕文 外面(一部)にスス附着
7	縄文 土器	深鉢 口縁部	Tr 1 【X】	—	—	—	横方向のナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	2mm以下の褐灰色・浅黄褐色・金色光沢・黒褐色・灰白色・無色透明光沢粒	押型文(山形+菱目)
8	縄文 土器	深鉢 口縁部	Tr 4 【X】	—	—	—	【口唇部】ナデ 【口縁部】不明(風化)	ヨコナデ	にぶい 黄褐	にぶい 褐	2mm以下の灰白色・赤褐色・褐灰色・無色透明光沢・黒色光沢・浅黄橙色粒 4mm以下の明赤褐色・黒色粒	口唇部に貝殻刺突文
9	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 2 【X】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 橙	灰黄褐	2mm以下の赤褐色・灰白色・乳白色・無色透明光沢・浅黄褐色・褐灰色粒	押し引き文(貝殻) 貝殻条痕文 外面(部分的)にスス附着
10	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 2 【X】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 橙	灰	1mm以下の灰白色・黒色光沢・褐灰色・黒色・浅黄褐色・無色透明光沢粒	押し引き文(貝殻) 貝殻条痕文
11	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 2 【X】	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	暗灰黄	1mm以下の乳白色・黒色光沢・灰褐色・黒色・無色透明光沢粒 5mm以下の灰白色粒	貝殻条痕文
31	縄文 土器	深鉢 口縁部	Tr 1 【VII】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 橙	にぶい 褐	2mm以下の無色透明光沢・褐灰色・暗赤褐色・黒色針状光沢・灰白色・黒色粒	内外面に平行沈線文
32	縄文 土器	深鉢 口縁部付近	Tr 1 【VII】	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	2mm以下の灰白色・黒褐色・にぶい褐色・無色透明光沢・黒色針状光沢粒 3mm以下の暗赤褐色粒	平行沈線文 外面(部分的)に炭化物附着
33	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 1 【VII】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	2mm以下の無色透明光沢・灰白色・褐灰色・黒褐色・明褐色・黒色粒	平行沈線文
34	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 1 【VII】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	橙	3mm以下の灰白色・黒褐色・無色透明光沢・褐灰色・褐色・にぶい褐色・浅黄褐色粒	平行沈線文
35	縄文 土器	深鉢 胴部	Tr 1 【VII】	—	—	—	ナデ	ナデ?	にぶい 黄褐	灰黄褐	2mm以下の乳白色・灰白色・褐灰色・黒褐色・黒色針状光沢粒	平行沈線文
36	縄文 土器	深鉢 胴部	H12 【V】	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰白色・黒褐色・褐灰色・黄褐色・無色透明光沢粒 3mm以下の黄褐色粒	傾き不明 短沈線文(綾杉状)
45	縄文 土器	深鉢 頸部	F13	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	橙	暗灰黄	2mm以下の浅黄褐色・黒褐色・橙色・無色透明光沢粒	縄文(一部) 刺突列点文 尙向弧文
46	縄文 土器	深鉢 胴部	P14 【V】	—	—	—	横方向のミガキ	不明(風化)	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	3mm以下の無色透明光沢・赤褐色・灰白色・浅黄褐色・金色光沢粒 5mm以下の褐灰色粒	沈線文(多条) 外面(全体)にスス附着
47	縄文 土器	鉢 頸~胴部	N12 【IV】 【V】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい 黄橙	黒褐	2mm以下の無色透明光沢・灰白色・黒色針状光沢・黒色・褐灰色・赤褐色・橙色粒	平行沈線文 黒斑(一部)
48	縄文 土器	深鉢 口縁部	N16 【V】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐	褐	1mm以下の褐灰色・無色透明光沢・黒色・灰白色・黒色光沢・にぶい褐色・にぶい黄橙色粒	外面(全体)にスス附着
49	縄文 土器	深鉢 口縁部	P15 【IV】	—	—	—	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	灰褐	にぶい 赤褐	2mm以下の黒色・無色透明光沢・黒色針状光沢・浅黄褐色・褐灰色・灰白色粒	外面(全体)にスス附着 黒斑(一部)
50	縄文 土器	深鉢 口縁部	Q15 【IV】	—	—	—	横・斜方向のミガキ	横方向のミガキ?(風化)	灰褐	明赤褐	3mm以下のにぶい褐色・暗赤褐色・無色透明光沢・黒色針状光沢・褐灰色・黒褐色・灰白色・浅黄褐色粒	外面(全体)にスス附着
51	縄文 土器	深鉢 口縁~頸部	P14 P13 P16 【IV】	(32.9)	—	—	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	にぶい 黄	にぶい 橙	2mm以下の灰白色・褐灰色・黒色針状光沢・にぶい黄褐色・無色透明光沢・赤褐色・褐色粒	
52	縄文 土器	深鉢 口縁部	M13 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	不明(風化)	明赤褐	黒褐	1mm以下の無色透明光沢・褐灰色・黒色・灰白色・赤褐色・黒色針状光沢・浅黄褐色粒	口縁部肥厚(沈線1条) 内外面(部分的)にスス附着
53	縄文 土器	深鉢 口縁部	O19 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ?(風化)	横方向のミガキ	にぶい 赤褐	灰黄褐	3mm以下の灰白色・暗赤褐色・無色透明光沢・黒色針状光沢・褐灰色・褐色粒	口縁部肥厚

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量 [cm] ※ (推定値)			調整		色 調		胎土の特徴	備考 (文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
54	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	N19 【IV】	—	—	—	【口縁部】 横方向のミガキ 【頸部】 縦方向のミガキ	ナデ	灰褐	にぶい 褐	1mm以下の乳白色・灰白色・ 黒褐色・褐灰色・黒色針状光 沢・無色透明光沢・赤褐色粒 3mm以下の灰褐色粒	口縁部肥厚 (沈線2条) 外面 (部分的) にスス付着
55	縄文 土器	深鉢 口縁部	O19 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ? (風 化)	暗褐	黒褐	2mm以下の灰白色・にぶい褐 色・褐灰色・無色透明光沢・ 赤褐色・黒色針状光沢粒	口縁部肥厚 外面 (部分的) にスス付着
56	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	L12 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	【口縁部】 ヨコナデ 【頸部】 ナデ	暗赤褐	にぶい 赤褐	1mm以下の灰白色・褐灰色・ 黒色・無色透明光沢・にぶい 黄褐色・黒色針状光沢・暗赤 褐色粒	口縁部肥厚 (突帯1条) 外面 (部分的) にスス付着
57	縄文 土器	深鉢 頸~胴部	O16 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	【頸部】 横方向のミガキ 【胴部】 横・斜方向の工 具痕	にぶい 赤褐	灰黄褐	3mm以下の黒色・灰褐色・褐 灰色・黒色針状光沢・灰白 色・橙色粒	外面 (一部) にスス付着
58	縄文 土器	深鉢 頸部	O19 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	ナデ	暗褐	灰褐	2mm以下の灰白色・無色透明 光沢・黒色光沢・赤褐色・に ぶい橙色粒 5mm以下の褐灰色・黒褐色粒	張り出し部に沈線2条 外面 (部分的) にスス付着
59	縄文 土器	深鉢 胴部	N13 【IV】	—	—	—	横・斜方向のミガキ	横方向のミガキ? (風 化)	にぶい 赤褐	にぶい 褐	2mm以下の無色透明光沢・灰 白色・黒色・にぶい橙色・褐 灰色・黒色光沢粒	胴上部に列点文1列・沈線1条
60	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	O19 【IV】	(29.2)	—	—	横・斜方向のミガキ	横方向の条痕→ナデ	橙	橙	2mm以下の無色透明光沢・橙 色・黒色針状光沢・灰褐色・ 黒色・赤褐色粒 4mm以下のにぶい褐色・灰白 色粒	外面 (一部) にスス付着 61と同一個体の可能性有り
61	縄文 土器	深鉢 胴~底部	O19 N18 N19 【IV】	—	—	—	縦方向のミガキ	横・斜方向の条痕→ナ デ	明赤褐	明赤褐	1mm以下のにぶい褐色・灰白 色・赤褐色・黒色・灰褐色粒 3mm以下の浅黄褐色・無色透 明光沢・黒色針状光沢粒	上げ底 60と同一個体の可能性有り
62	縄文 土器	深鉢 底部	I13 【IV】	—	(7.2)	—	縦方向のミガキ	ナデ	明赤褐	にぶい 黄橙	2mm以下の褐灰色・灰白色・ 黒色・無色透明光沢・淡黄 色・赤褐色・黒色針状光沢・ 褐色・橙色粒	上げ底
63	縄文 土器	深鉢 胴部	一括 【IV】	—	—	—	【上部】 横方向の貝殻 条痕 【下部】 斜方向の貝殻 条痕→ナデ	【上部】 横方向の貝殻 条痕→ナデ 【下部】 横・斜方向の 貝殻条痕	橙	にぶい 黄橙	3mm以下の無色透明光沢・灰 白色・赤褐色・黒色針状光 沢・褐灰色・乳白色・褐色・ にぶい褐色粒	
64	縄文 土器	浅鉢 口縁部	H8	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	褐灰	黒褐	1mm以下の乳白色・にぶい橙 色・褐灰色・無色透明光沢粒	黒色磨研 口縁部 (内面) が玉縁状
65	縄文 土器	浅鉢 口縁部	一括	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐	黄灰	1mm以下の乳白色・無色透明 光沢・黒褐色・褐灰色粒	黒色磨研 口縁部 (内面) が玉縁状
66	縄文 土器	浅鉢 胴部	一括	—	—	—	横方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	黒褐	黒褐	2mm以下の無色透明光沢・灰 白色・黒褐色・赤褐色粒	黒色磨研 胴部に沈線1条 (丹付着)
67	縄文 土器	浅鉢 口縁~胴部	E14 【IV】	(22.0)	—	—	横・斜方向のミガキ	横方向のミガキ	褐灰	褐灰	2mm以下の無色透明光沢・赤 褐色・灰白色・にぶい褐色粒 4mm以下の褐灰色・黒色針状 光沢・暗赤褐色粒	黒色磨研 口縁部に突起物 (リボン状? 鱗状?) 口縁部 (内面) が玉縁状 胴部屈曲部に沈線1条
68	縄文 土器	浅鉢 口縁~胴部	F10 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	浅黄	灰黄	3mm以下のにぶい褐色・灰白 色・黒褐色・無色透明光沢粒	黒色磨研 口唇部直下 (内外面) に沈線 各1条
69	縄文 土器	浅鉢 口縁部	Q15 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい 橙	灰褐	2mm以下の金色光沢・黒色・ 無色透明光沢・乳白色・黒色 光沢・灰白色粒	黒色磨研 口唇部直下 (外面) に沈線1条 口縁部 (内面) が玉縁状
70	縄文 土器	浅鉢 口縁~胴部	H13 【IV】	—	—	—	横・斜方向のミガキ (風化)	横・斜方向のミガキ	灰黄褐	黒	3mm以下の黒色・黒色針状光 沢・無色透明光沢・灰白色・ 明褐色・褐灰色粒	黒色磨研 リボン状口縁 胴部 (外面) ・口縁部 (内面) に沈線各1条
71	縄文 土器	浅鉢 口縁~胴部	H11 H8 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	【口縁部】 ヨコナデ 【胴部】 横方向の工具 痕→ナデ	灰黄褐	にぶい 黄褐	2mm以下の灰白色・無色透明 光沢・褐灰色・黒色針状光 沢・黒色・赤褐色粒	黒色磨研 口縁部 (内面) に沈線1条
72	縄文 土器	浅鉢 口縁部	G11	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒	黒褐	1mm以下の灰白色・明黄褐 色・褐灰色・黒色・無色透明 光沢粒	黒色磨研 口縁部に突起物 (リボン状? 鱗状?) 口縁部 (内面) に沈線1条
73	縄文 土器	浅鉢 口縁部	G11	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	黒	黒褐	1mm以下の灰白色・明黄褐 色・褐灰色・黒色・無色透明 光沢粒	黒色磨研 口縁部 (内面) に沈線1条
74	縄文 土器	浅鉢 口縁部	I12 【IV】	—	—	—	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の無色透明光沢・赤 褐色・黒色光沢・褐灰色・灰 白色粒	黒色磨研 口縁部に突起物 (リボン状? 鱗状?) 突起部直下に沈線1条
75	縄文 土器	浅鉢 胴部	H8 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい 黄橙	黒	1mm以下の乳白色・灰黄褐 色・無色透明光沢・灰白色粒	黒色磨研
76	縄文 土器	浅鉢 胴部	G9 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	横方向の丁寧なナデ	褐灰	灰黄褐	2mm以下の黒色・無色透明光 沢・褐灰色・赤褐色・黒色粒	黒色磨研
77	縄文 土器	浅鉢 胴部	H8	—	—	—	横方向のミガキ	【上部】 横方向の丁寧 なナデ 【下部】 横・斜方向の ミガキ	暗灰黄	黄灰	2mm以下の黒色・灰白色・無 色透明光沢・褐灰色・褐色粒	黒色磨研
78	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	H12 【IV】	—	—	—	横方向の貝殻条痕	横方向のミガキ	にぶい 黄褐	にぶい 褐	1mm以下の無色透明光沢・褐 灰色・にぶい褐色・橙色・灰 白色・黒色針状光沢粒	粗製 口縁部肥厚 外面 (全体) にスス付着
79	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	I13 K11 【IV】	—	—	—	横方向の条痕	横方向の条痕→横方向 のミガキ	褐灰	にぶい 橙	3mm以下の無色透明光沢・赤 褐色・黒色針状光沢・にぶい 黄褐色・褐灰色・乳白色粒	粗製 口縁部肥厚 口唇部に沈線1条 外面 (部分的) にスス付着

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量〔cm〕※(推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
80	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	I 12 【IV】	—	—	—	[口唇部] 横方向のミ ガキ [口縁・胴部] 横方向 の条痕	ミガキ? (風化)	灰黄褐	にぶい 黄橙	2mm以下のにぶい黄褐色・褐 灰色・褐色・黒色粒	粗製 口縁部肥厚 外面(全体)にスス附着
81	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	I 12 【IV】	—	—	—	[口唇部] 横方向のミ ガキ [口縁・胴部] 横方向 の条痕	ミガキ?	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の黒褐色・黒色・ にぶい褐色・褐色粒 5mm以下の褐灰色粒	粗製 口縁部肥厚
82	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	一括 【IV】	—	—	—	横方向の条痕	横方向の条痕	褐灰	にぶい 黄橙	3mm以下のにぶい橙色・黒色針 状光沢・黒色・赤褐色・無色透 明光沢・灰白色・黒褐色粒 5mm以下の灰褐色粒	粗製 口縁部肥厚 外面(全体)にスス附着
83	縄文 土器	深鉢 口縁部	J 14 【IV】	—	—	—	[口唇部] 横方向のミ ガキ [口縁部] 横方向の条 痕	横方向のミガキ	橙	橙	3mm以下の無色透明光沢・灰 黄色光沢・灰白色・褐灰色・ 黒褐色・乳白色粒	粗製 口縁部肥厚(口縁部直下に突 帯1条)
84	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	F 12 【IV】	—	—	—	[口唇部] 横方向のミ ガキ [口縁部] ヨコナデ [胴部] 横方向の条痕	横方向の条痕→横方向 のミガキ	にぶい 赤褐	にぶい 赤褐	3mm以下の黒色・無色透明光 沢・褐灰色・黒色光沢・乳白 色光沢・灰白色粒	粗製 口縁部肥厚(口縁部直下に突 帯1条) 外面(全体)にスス附着
85	縄文 土器	鉢 底部付近	一括 【IV】	—	—	—	組織痕	ナデ	にぶい 黄橙	褐灰	2mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・灰白色・黒褐色・褐 灰色・黄褐色・黒色・褐色粒	組織痕(編布) 傾き不明
86	縄文 土器	鉢 底部付近	I 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ナデ	橙	にぶい 黄橙	2mm以下の乳白色・褐灰色・ 浅黄褐色・黒色光沢・灰白 色・無色透明光沢粒	組織痕(編布) 傾き不明
87	縄文 土器	鉢 底部付近	H 11 【IV】	—	—	—	組織痕	工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の黒褐色・赤褐色・ 褐色・無色透明光沢・黒色光 沢粒 3mm以下の灰白色・褐灰色粒	組織痕(編布) 傾き不明
88	縄文 土器	鉢 底部付近	一括	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰白色・褐灰色・ 黒褐色・褐色・無色透明光 沢・黒色・黒色光沢粒	組織痕(編布) 傾き不明 外面(部分的)にスス附着
89	縄文 土器	鉢 底部付近	K 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ? (剥離)	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm以下の無色透明光沢・灰 白色・褐灰色・黒色針状光 沢・赤褐色・にぶい褐色・黒 褐色粒	組織痕(編布) 傾き不明
90	縄文 土器	鉢 底部付近	H 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい 橙	黒	3mm以下の灰白色・褐灰色・ 無色透明光沢・黒色・暗褐 色・褐色・浅黄褐色・黒色針 状光沢粒	組織痕(編布) 傾き不明
91	縄文 土器	鉢 底部付近	H 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色・無色透明光 沢・褐灰色・暗褐色・黒色針 状光沢・灰褐色・灰白色・乳 白色粒	組織痕(編布) 傾き不明 外面(部分的)にスス附着
92	縄文 土器	鉢 底部付近	H 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ?	橙	にぶい 黄橙	3mm以下の灰白色・黒色針状 光沢・無色透明光沢・褐灰 色・黒色・浅黄褐色粒	組織痕(編布) 傾き不明
93	縄文 土器	鉢 底部付近	H 8	—	—	—	組織痕	工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下のにぶい褐色・灰白 色・浅黄褐色・無色透明光 沢・黒色針状光沢・褐灰色粒	組織痕(編布) 傾き不明
94	縄文 土器	鉢 底部付近	一括 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ?	にぶい 黄橙	橙	2mm以下の褐灰色・無色透明 光沢・黒褐色・灰白色・浅黄 褐色・黒色針状光沢粒	組織痕(編布) 傾き不明
95	縄文 土器	鉢 底部付近	I 14 【IV】	—	—	—	組織痕	不明(風化)	にぶい 黄橙	灰黄褐	2mm以下の灰白色・黒色・赤 褐色・橙色・褐色・乳白色・ 無色透明光沢粒 4mm以下の黒褐色粒	組織痕(凹痕、網目?) 傾き不明
96	縄文 土器	鉢 底部付近	I 12 【IV】	—	—	—	組織痕	ミガキ?	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の黒色・無色透明光 沢・灰白色・にぶい褐色・橙 色・褐灰色・褐色粒	組織痕(網目) 傾き不明
97	縄文 土器	鉢 底部付近	一括	—	—	—	ナデ(組織痕?)	ナデ	にぶい 黄	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・褐色・無 色透明光沢・浅黄褐色・褐灰 色粒	組織痕?(網目?) 傾き不明
98	縄文 土器	深鉢 口縁~胴部	E 13 【IV】	(20.8)	—	—	[口唇部] 横方向のナ デ [口縁・胴部] 横方向 の条痕	横方向の条痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	2mm以下の黒褐色・無色透明 光沢・明褐色・黒色光沢・黄 褐色・灰白色・褐灰色粒	粗製 口縁部に突起物(リボン状? 鱗状?) 胴部に突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス附着 99と同一個体の可能性有り
99	縄文 土器	深鉢 底部	I 13 【IV】	—	(10.0)	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄	黄灰	2mm以下の黒色針状光沢・無 色透明光沢・黒色・橙色・灰 白色・浅黄色・褐灰色・無色 透明光沢・褐色・乳白色・に ぶい褐色粒	粗製 平底 98と同一個体の可能性有り

第4表 遺物観察表② (弥生土器)

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量 [cm] ※ (推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考 (文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面		
135	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 1	—	—	—	ヨコナデ	指頭痕→ナデ	にぶい 黄橙	橙	2mm以下の赤褐色・にぶい褐色・灰褐色・乳白色・黒色・金色光沢粒	胴上部に突帯2条 (貼付) 外面 (部分的) にスス附着
136	弥生土器	甕 胴~底部	SA 1	—	—	—	[胴部] ナデ? (風化) [底部] 横・斜方向の 工具ナデ	縦方向の指ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰褐色・灰色・灰 白色・赤褐色・黒褐色・無色 透明光沢粒	平底
137	弥生土器	甕 底部	SA 1	—	(6.0)	—	縦・斜方向の工具痕 (風化)	横方向のナデ	灰白	黄灰	2mm以下の黒褐色・暗褐色・ 褐灰色・灰白色・無色透明光 沢・黒色光沢粒	上げ底
141	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 2	—	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 縦方向のハケ目	[上部] 横方向のハケ目 →横方向のナデ [下部] 斜方向のハケ目	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の黒褐色・無色透明 光沢・にぶい赤褐色・赤褐色 ・褐灰色粒	胴上部に刻目突帯1条 (貼付) 外面 (部分的) にスス附着
142	弥生土器	甕 (大型) 口縁~胴部	SA 2	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	明褐	黄褐	2mm以下の乳白色・灰白色・ 黒褐色・浅黄褐色・無色透明 光沢粒 5mm以下の灰褐色粒	
143	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 2	(29.4)	—	—	ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	にぶい 褐	明褐	1mm以下の黒褐色・金色光沢粒 3mm以下の灰白色・灰褐色・ 乳白色粒	胴上部に突帯2条 (貼付)
144	弥生土器	壺 口縁~肩部	SA 2	(22.4)	—	—	[口縁部] 指頭痕→ヨ コナデ [肩部] 横・斜方向の ミガキ	[上部] 指頭痕→ヨコ ナデ [下部] 斜方向のナデ	赤褐	にぶい 橙	2mm以下の灰白色・褐色・淡 褐色・赤褐色・無色透明光沢 粒	無頸 (広口)
145	弥生土器	壺 胴部	SA 2	—	—	—	[突帯付近] ヨコナデ [胴部] 斜方向のミガ キ	斜方向の工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 褐	3mm以下の乳白色・灰白色・ 浅黄褐色・黒褐色・赤褐色・ 金色光沢粒	胴上部に突帯2条 (貼付) 黒斑 (全体) 146と同一個体の可能性有り
146	弥生土器	壺 胴~底部	SA 2	—	8.6	—	[胴部] 縦・斜方向の ミガキ [底部] 指頭痕→横方 向のナデ	[上部] 横方向の工具 ナデ [下部] 指ナデ、ナデ	暗褐	褐	3mm以下の乳白色・灰白色・ 浅黄褐色・黒褐色・赤褐色・ 金色光沢粒 5mm大の赤褐色粒	平底 黒斑 (大) 145と同一個体の可能性有り
147	弥生土器	壺 底部	SA 2	—	7.1	—	指頭痕→ナデ	指ナデ、ナデ	橙	灰褐	2mm以下の灰白色・浅黄橙 色・金色光沢・黒色光沢・乳 白色粒 5mm以下の褐灰色粒	平底
156	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 3	(26.1)	—	—	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 横・斜方向の ハケ目→工具ナデ	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰白色粒 4mm以下の暗褐色・黒褐色・ 金色光沢・褐灰色・褐色・黒 色針状光沢・無色透明光沢粒	外面 (部分的) にスス附着 157と同一個体の可能性有り
157	弥生土器	甕 胴~底部	SA 3	—	(5.9)	—	[胴部] 工具痕? (剥 離) [底部] ヨコナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・褐灰色・ 黒色・褐色・黒褐色・浅黄橙 色・無色透明光沢・黒色針状 光沢粒	上げ底 外面 (一部) にスス附着 内面 (大部分) に炭化物附着 156と同一個体の可能性有り
165	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 4	—	—	—	[口縁部] 指頭痕→横方 向のナデ [胴部] 斜方向のハケ目	[口縁部] 指頭痕→横方 向のナデ [胴部] 横方向の指ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	3mm以下の明赤褐色・無色透 明光沢・赤褐色・灰褐色・褐 色・黒色針状光沢・褐灰色粒	外面 (一部) にスス附着
166	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 4	—	—	—	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 指頭痕→縦・ 斜方向のハケ目	[上部] 縦方向の指ナ デ→ヨコナデ [下部] 斜方向のハケ目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・黒色・褐 色・褐灰色・乳白色粒 5mm大の褐色粒	外面 (全体) にスス附着
167	弥生土器	壺 口縁部	SA 4	(16.2)	—	—	横・斜方向のミガキ (風化)	[上部] 横方向のミガ キ [下部] 不明 (風化)	浅黄	にぶい 褐	2mm以下の褐灰色・灰白色・黒 色・褐色・赤褐色・無色透明 光沢・無色透明光沢粒	
168	弥生土器	壺 胴部	SA 4	—	—	—	横・斜方向のハケ目→ 横・斜方向のミガキ [突帯付近] ヨコナデ	指頭痕・斜方向の指ナ デ→横方向の工具ナデ	にぶい 黄褐	にぶい 褐	2mm以下の灰白色・褐灰色・ 灰黄色・黒色・乳白色・金色 光沢・無色透明光沢粒 5mm大の赤褐色粒	胴部に突帯4条 (貼付) 黒斑 (一部)
169	弥生土器	壺 底部	SA 4	—	(6.7)	—	縦・斜方向のハケ目→ 縦・斜方向のミガキ	工具痕 (風化)	橙	灰黄	1mm以下の灰白色・黒色光沢・ 無色透明光沢・金色光沢粒 5mm以下の赤褐色・褐灰色粒	平底 黒斑 (大)
173	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 5	24.1	—	—	[口縁部] 指頭痕→ヨ コナデ [胴部] 縦・斜方向の ハケ目	[口縁部] 指頭痕→ヨ コナデ [胴部] 斜方向のハケ 目→ナデ・指ナデ	にぶい 黄橙	灰黄	2mm以下の黒褐色・灰白色・ 乳白色・浅黄褐色・無色透明 光沢・黒色針状光沢粒 4mm以下の灰褐色・褐灰色粒	外面 (大部分) にスス附着 174と同一個体の可能性有り
174	弥生土器	甕 胴~底部 付近	SA 5	—	—	—	不明 (風化)	工具痕→ナデ	にぶい 黄橙	黄灰	2mm以下の黒褐色・灰白色・ 乳白色・無色透明光沢・黒色 針状光沢粒 4mm以下の灰褐色・褐灰色・ にぶい褐色粒	173と同一個体の可能性有り
175	弥生土器	甕 口縁~胴部	SA 5	(20.8)	—	—	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 工具ナデ	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 指頭痕→斜方 向の工具ナデ	にぶい 赤褐	にぶい 褐	2mm以下の灰白色・無色透明 光沢・金色光沢粒 5mm以下の赤褐色・乳白色粒	外面 (全体) にスス附着
176	弥生土器	甕 (大型) 口縁~胴部	SA 5	(50.3)	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨコナデ [突帯下] 横・斜方向 の丁寧なナデ	[上部] ヨコナデ、指 ナデ→丁寧なナデ [下部] 工具ナデ→丁 寧なナデ	にぶい 赤褐	赤褐	1mm以下の灰白色・黒褐色粒 4mm以下の金色光沢・褐灰 色・にぶい赤褐色・乳白色粒	胴上部に突帯1条 (貼付) 外面 (大部分) にスス附着
177	弥生土器	甕 胴~底部	SA 5	—	7.7	—	縦・斜方向のハケ目 →丁寧なナデ	指頭痕・斜方向の指ナ デ→丁寧なナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	2mm以下の無色透明光沢・金 色光沢・乳白色・黒褐色・灰 白色・褐灰色粒	脚台状 (中実) 外面 (全体) にスス附着
178	弥生土器	壺 口縁~肩部	SA 5	(18.5)	—	—	[口縁部] ヨコナデ→ (一部) ミガキ [肩部] ハケ目→横・ 斜方向のミガキ	[口縁部] ヨコナデ→ ミガキ [肩部] 指頭痕・指ナ デ→横方向のナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色・褐色・無色 透明光沢・浅黄褐色・褐灰 色・灰白色粒	無頸 (広口) 外面 (部分的) にスス附着
179	弥生土器	壺 頸~肩部	SA 5	—	—	—	ハケ目→ミガキ	縦方向の指ナデ	にぶい 褐	褐	2mm以下の灰白色・黒色・淡 黄褐色・金色光沢・乳白色・ 褐灰色粒	器壁薄
180	弥生土器	壺 頸部	SA 5	—	—	—	斜方向のハケ目 [突帯付近] ヨコナデ	横方向のナデ? (剥離)	灰褐	灰褐	2mm以下の黒色光沢・金色光 沢・灰白色・黒色・乳白色粒 4mm以下の明赤褐色・浅黄橙 色・褐灰色粒	頸下部に突帯2条 (貼付)
181	弥生土器	壺 (大型) 頸~胴部	SA 5	—	—	—	横・斜方向のミガキ [突帯] ヨコナデ	[上部] 縦方向の指ナ デ [下部] 指頭痕→ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰白色・褐色・明 赤褐色・無色透明光沢・黒色 針状光沢・黒色・褐灰色粒	頸下部に突帯2条 (貼付) 胴中部に突帯2条 (貼付)

遺物番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量[cm] ※(推定値)			調整		色調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
182	弥生 土器	壺 肩~胴部	S A 5	—	—	—	縦方向のハケ目→ 横・斜方向のミガキ [突帯付近] ヨコナデ	不明(風化)	にぶい 橙	褐灰	1mm以下の金色光沢・黒色光 沢・黒色・灰白色・褐灰色・に ぶい橙色・乳白色・赤褐色粒	肩下部に突帯2条(貼付)
183	弥生 土器	壺 胴~底部	S A 5	—	4.8	—	ミガキ?(風化)	ナデ?(風化)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下の灰白色・無色透明光 沢・黒色針状光沢・黒色・褐灰 色・褐色・にぶい黄褐色粒 6mm大の褐色岩片	平底 黒斑(一部)
188	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 7	(30.8)	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 斜方向のハケ目	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 斜方向のハケ 目→ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の褐灰色・黒色・黒 色針状光沢・無色透明光沢・ にぶい黄褐色・褐色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付)
189	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 7	(26.2)	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 斜方向のハケ目	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 斜方向のハケ 目→(上部) 横方向の 工具ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・浅黄橙・ にぶい赤褐色・黒褐色・褐灰 色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(一部)にスス附着
190	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 7 S A 10	32.1	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 縦・斜方向の ハケ目	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 斜方向の工具 ナデ	褐灰	にぶい 黄橙	1mm以下の褐灰色・黒色・乳 白色・黒色光沢・無色透明光 沢粒 5mm以下のにぶい褐色・赤褐 色・灰白色粒	口縁部直下に刻目突帯1条 (貼付) 外面(全体)にスス附着 191と同一個体の可能性有り
191	弥生 土器	甕 胴~底部	S A 7 S A 10	—	7.3	—	[胴部] 斜方向のハケ目 [底部] 横方向のハケ目	指ナデ→斜方向のナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	2mm以下の黒色光沢・灰白 色・褐灰色・黒色粒 5mm以下の明赤褐色粒 7mm以下のにぶい褐色粒	平底 内面(全体)に炭化物附着 190と同一個体の可能性有り
192	弥生 土器	壺 口縁~頸部	S A 7	(23.6)	—	—	[口縁部] ヨコナデ [頸部] ナデ	[口縁部] ヨコナデ [頸部] ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・無色透明 光沢・黒色光沢・灰色光沢・ 褐灰色・灰褐色粒	198・199と同一個体の可能性 有り
193	弥生 土器	壺 肩~底部	S A 7	—	4.8	—	[肩部] 縦方向のハケ目 [胴~底部] 横・斜方向 のミガキ	指頭痕→縦・斜方向の 指ナデ	橙	橙	3mm以下の灰白色・明赤褐 色・灰褐色・灰色光沢粒	瀬戸内系、平底 肩部に「ノ」字形列点文二段 黒斑(大)、器壁薄
194	弥生 土器	壺 胴~底部	S A 7 S A 10	—	(9.0)	—	工具ナデ→丁寧なナ デ	斜方向の指ナデ	黒褐	にぶい 黄橙	2mm以下の灰白色・褐灰色・ 無色透明光沢粒 5mm以下の赤褐色粒	平底 黒斑(大)
195	弥生 土器	壺 底部	S A 7	—	(4.8)	—	斜方向のハケ目?(風 化)	不明(剝離)	浅黄	不明 (剝離)	2mm以下の赤褐色・黒色・灰 褐色・金色光沢・黒色光沢・ 白色・無色透明光沢粒	平底
196	弥生 土器	高坏 支脚部	S A 7	—	—	—	縦方向のハケ目→縦 方向のミガキ	[坏部] ナデ [支脚部] 縦方向のナ デ?(風化)	にぶい 黄橙	[坏部] にぶい 黄橙 [支脚部] 褐灰	2mm以下の黒色光沢・無色透 明光沢・灰白色・赤褐色・褐 灰色・黒色・にぶい褐色粒	搬入品 坏部内面に黒斑(一部)
197	弥生 土器	高坏 坏部・脚部	S A 7 S A 10 S A 12	(13.1)	8.8	—	[坏部] 横・斜方向の ミガキ [脚部] 工具ナデ→縦 方向のミガキ	[坏部] 横・斜方向の 工具ナデ→横・斜方向 のミガキ [脚部] ヨコナデ	明赤褐	にぶい 赤褐	1mm以下の金色光沢・黒色光 沢・褐灰色・明赤褐色粒 7mm以下の灰白色粒	瀬戸内系 矢羽根透かし孔(6つ)、凹線文 (口縁部4条、脚部3条)、沈線 文(横7条+縦2条+横3条) 脚上部(内面)に絞り痕 図上復元
198	弥生 土器	不明(壺?) 肩~胴部?	S A 7	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰白色・褐灰色・ 金色光沢・黒色針状光沢・無 色透明光沢粒	線刻(絵文=鹿?建物?) 192と同一個体の可能性有り 傾き不明
199	弥生 土器	不明(壺?) 肩~胴部?	S A 7	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	浅黄	1mm以下の灰白色・褐灰色・ 黒色針状光沢・無色透明光沢粒	線刻(絵文) 192と同一個体の可能性有り 傾き不明
214	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 8	—	—	—	ヨコナデ	横・斜方向のハケ目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色針状・無色透 明光沢・灰白色粒 4mm以下の褐灰色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)に炭化物附着
215	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 8	32.6	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 縦・斜方向の ハケ目	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 縦・斜方向の 工具ナデ(一部横方向 のハケ目)	浅黄橙	にぶい 黄褐	2mm以下の黒色・灰白色・褐 灰色・無色透明光沢・にぶい 褐色・乳白色・黒色針状光沢 粒	胴部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)に炭化物附着
216	弥生 土器	甕(ミニ) 口縁~底部	S A 8	(5.8)	(2.4)	10.5	縦方向のハケ目(風 化)	[上部] 指頭痕 [下部] ナデ	橙	橙	3mm以下の無色透明光沢・褐 灰色・乳白色・黒色・にぶい 褐色・灰白色粒	平底 黒斑(大) 外面(一部)にスス附着 製塩土器の可能性有り
217	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 8 S A 7	(16.7)	—	—	[口縁部~突帯付近] ヨ コナデ [胴部] 縦・斜方向の ハケ目(風化)	[上部] 縦・斜方向の ハケ目 [下部] 縦・斜方向の 指ナデ→ハケ目	黒褐	にぶい 黄橙	3mm以下の黒色・黒褐色・褐 灰色・褐色・無色透明光沢・ 灰白色粒	口縁部直下に刻目突帯1条 (貼付) 内外面(全体)に炭化物附着 218と同一個体の可能性有り
218	弥生 土器	甕 胴~底部	S A 8	—	6.1	—	[胴部] 斜方向のハケ 目 [底部] ハケ目→横方 向のナデ	ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	3mm以下の黒色・褐灰色・褐 色・無色透明光沢・灰白色粒	上げ底 内面(全体)に炭化物附着 外面(一部)にスス附着 217と同一個体の可能性有り
219	弥生 土器	甕 底部	S A 8	—	(6.2)	—	横・斜方向の工具ナ デ	不明(残存無)	浅黄	不明 (残存無)	2mm以下の灰白色・褐灰色・黄 褐色・黒色・浅黄色・無色透 明光沢・金色光沢・黒色針状 粒	平底 外面(部分的)にスス附着
220	弥生 土器	甕 胴~底部	S A 8	—	7.0	—	[胴部] 工具ナデ→ 縦・斜方向のハケ目 [底部] ナデ	[胴部] 縦方向の指ナデ [底部] 指頭痕	にぶい 黄橙	褐灰	2mm以下の黒色光沢・黒褐色粒 4mm以下の無色透明光沢・灰 白色・褐灰色・黒色粒	平底 外面(部分的)にスス附着
221	弥生 土器	甕 胴~底部	S A 8	—	6.1	—	横・斜方向の工具 痕?(風化)	縦・斜方向のナデ	にぶい 橙	黒褐	2mm以下の無色透明光沢・褐 色・橙色・灰白色・褐灰色・ 黒色粒	上げ底 内面(全体)に炭化物附着
222	弥生 土器	壺 胴~底部	S A 8 S A 7 S A 10 S A 11	—	9.0	—	[突帯上] ナデ?(風 化) [突帯付近] ヨコナデ [突帯下] 縦・斜方向 のハケ目→縦・斜方 向のミガキ	[上部] 横方向のハケ 目→縦方向の指ナデ、 横方向のナデ [下部] 横・斜方向の ハケ目→斜方向の指 ナデ、ナデ	橙	灰黄	2mm以下の黒褐色・乳白色・ 明褐色・褐灰色・灰白色・無 色透明光沢・黒色針状光沢・ にぶい黄褐色粒	平底 胴中部に突帯2条(貼付) 外面(部分的)にスス附着
226	弥生 土器	甕 口縁~胴部	S A 9	(30.1)	—	—	[口縁部] ヨコナデ [胴部] 斜方向のハケ 目	不明(風化)	にぶい 黄橙	浅黄	2mm以下の黒褐色・にぶい黄 橙色・灰褐色・暗褐色・無 色透明光沢・黒色針状光沢粒 4mm以下の褐灰色・灰白色粒	外面(一部)に炭化物附着
227	弥生 土器	壺 口縁~肩部	S A 9	—	—	—	[口縁部] ヨコナデ [肩部] ミガキ?(風 化)	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色光沢・金色光 沢・無色透明光沢・褐灰色・ にぶい褐色・黒色粒	無頸

遺物番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量[cm] ※(推定値)			調 整				色 調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面				
232	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10 S A 7	(33.7)	—	—	【口縁部】指頭痕→ヨコナデ 【突帯上】横方向のナデ 【突帯下】縦方向のハケ目	【口縁部】指頭痕→ヨコナデ 【胴部】斜方向の指ナデ→斜方向のハケ目	浅黄橙	浅黄	3mm以下の黒色光沢乳白色・灰白色・赤褐色・明黄褐色・褐灰色・黒色粒	胴上部に突帯1条(貼付) 外面(一部)にスス付着		
233	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	32.4	—	—	不明(風化)	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】指ナデ?(風化)	橙	浅黄橙	3mm以下の無色透明光沢・黒色・赤褐色・灰白色・褐灰色・灰褐色・乳白色粒	胴上部に突帯1条(貼付)		
234	弥生土器	甕(大型) 口縁~胴部	S A 10 S A 11 S A 7 S A 8	(53.0)	—	—	【口縁部~突帯付近】ヨコナデ 【胴部】横・斜方向のハケ目	【口縁部】指頭痕→ヨコナデ 【胴上部】縦方向のハケ目→ナデ?(風化) 【胴下部】横・斜方向のハケ目	橙	【上部】 橙 【下部】 褐灰	3mm以下の黒色光沢・褐色・黒色・無色透明光沢・灰白色・にぶい黄褐色・褐灰色粒	胴上部に突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着 図上復元		
235	弥生土器	甕(大型) 口縁~胴部	S A 10	(44.9)	—	—	【口縁部~突帯付近】ヨコナデ?(風化) 【胴部】斜方向のハケ目?(風化)	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】斜方向のハケ目?(風化)	橙	明黄褐	3mm以下の褐灰色・灰白色・黒色・明赤褐色・無色透明光沢・黒色針状光沢・にぶい黄褐色粒	胴上部に突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着		
236	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	【口縁部~突帯付近】ヨコナデ 【胴部】不明(風化)	不明(風化)	橙	明赤褐	3mm以下の黒色・黒色光沢・金色光沢・黒褐色・灰白色・褐灰色粒	胴上部に突帯1条(貼付)		
237	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	ヨコナデ	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】斜方向のハケ目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の褐色・にぶい黄褐色・黒色針状光沢・橙・明褐色・黒色・にぶい褐色・無色透明光沢・灰白色・褐灰色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(一部)にスス付着		
238	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	ヨコナデ	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】横・斜方向のナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色・灰褐色・褐灰色・無色透明光沢・灰色・橙色・浅黄褐色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着		
239	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】斜方向のハケ目	不明(風化)	橙	橙	2mm以下のにぶい褐色・灰白色・褐灰色・黒色・無色透明光沢・黒色針状光沢粒	外面(大部分)に炭化物付着		
240	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	【口縁部付近】ヨコナデ 【胴部】縦方向のハケ目	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒色・乳白色・灰白色・褐灰色・褐色粒	外面(部分的)にスス付着		
241	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	—	—	—	【口縁部付近】ヨコナデ 【胴部】横・斜方向のハケ目	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】横方向のナデ、斜方向のハケ目	にぶい 黄橙	灰黄褐	2mm以下の無色透明光沢・黒色針状光沢・黒褐色・灰白色・赤褐色粒	外面(大部分)にスス付着		
242	弥生土器	甕 口縁~胴部	S A 10	(22.8)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】横・斜方向のハケ目	【口縁部】ヨコナデ? (風化) 【胴部】工具ナデ?(風化)	にぶい 黄橙	にぶい 橙	2mm以下の黒色針状光沢・赤褐色・黒褐色・にぶい赤褐色粒 4mm以下の浅黄色・無色透明光沢・灰白色・褐灰色粒	外面(大部分)に炭化物付着		
243	弥生土器	甕(ミニ) 底部	S A 10	—	2.6	—	不明(風化)	工具痕(風化)	にぶい 橙	淡黄	2mm以下の黒色・褐灰色・褐色・黒色針状・にぶい赤褐色・金色光沢粒	上げ底		
244	弥生土器	甕 底部	S A 10	—	(6.9)	—	横・斜方向の工具ナデ	ナデ?(残存少)	灰黄	灰黄	3mm以下の無色透明光沢粒・褐灰色・灰白色・にぶい褐色・黒褐色・赤褐色・黒色光沢粒	平底		
245	弥生土器	甕 胴~底部	S A 10	—	(5.6)	—	横・斜方向の工具ナデ	【上部】斜方向の工具痕 【下部】縦方向の指ナデ	にぶい 黄橙	浅黄橙	2mm以下の黒褐色・乳白色・浅黄橙・褐灰色・無色透明光沢・金色光沢・黒色針状光沢粒	平底 黒斑(一部)		
246	弥生土器	甕 底部	S A 10	—	(5.7)	—	【胴部】斜方向の工具痕 【底部】ヨコナデ	不明(残存無)	にぶい 橙	不明 (残存無)	3mm以下の黒色・褐色・黒色光沢・金色光沢・浅黄褐色・褐灰色・灰白色・無色透明光沢粒	上げ底		
247	弥生土器	甕 底部	S A 10	—	(7.5)	—	横・斜方向の工具ナデ	【胴下部】工具ナデ 【底部】指頭痕→横方向のナデ	にぶい 黄橙	黒褐	3mm以下の灰白色・褐灰色・黒色光沢・金色光沢・無色透明光沢・黒色・にぶい黄褐色・にぶい赤褐色粒	上げ底 内面(全体)に炭化物付着		
248	弥生土器	壺 口縁~頸部	S A 10	(18.0)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【頸部】ハケ目→ヨコナデ、縦方向のハケ目	【上部】ヨコナデ 【下部】ナデ?(風化)	橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒色光沢・にぶい赤褐色・灰白色・褐色・黒褐色・褐灰色粒	口縁部(内面)に突帯1条(貼付) 口縁部(内面)に黒斑(円形浮文痕)		
249	弥生土器	壺 口縁~頸部	S A 10	—	—	—	斜方向のハケ目→斜方向のミガキ(下部のみ横方向)	【口縁部】ヨコナデ 【頸部】丁寧なナデ	にぶい 橙	にぶい 橙、 にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒色光沢・黒褐色・にぶい黄褐色・灰白色・褐灰色粒	口縁部(内面)に突帯1条 暗文風のミガキ		
250	弥生土器	壺 口縁部	S A 10	(15.6)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【頸部】斜方向のハケ目→ミガキ	丁寧なヨコナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	3mm以下の黒色光沢・無色透明光沢・赤褐色・黒色・褐灰色・乳白色・灰白色・金色光沢粒	二又状口縁		
251	弥生土器	壺 口縁部	S A 10	—	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【頸部付近】横方向ハケ目→ナデ	【口縁部】ヨコナデ 【頸部付近】横方向ハケ目	にぶい 橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・灰白色・褐色・褐灰色・にぶい褐色・にぶい黄褐色・黒色針状光沢粒	広口(器台の可能性有り) 内面(一部)に炭化物付着		
252	弥生土器	壺 口縁~頸部	S A 10	(9.8)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【頸部】不明(風化)	【口縁部】ヨコナデ 【頸部】ナデ?(風化)	黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒色光沢・灰白色・黒色針状・褐灰色・褐色粒	短頸 口唇部直下に刻目突帯1条(貼付) 口縁部(内面)に沈線1条		
253	弥生土器	壺 口縁~肩部	S A 10 S A 7	(9.9)	—	—	【口縁部付近】ヨコナデ 【頸~肩部】縦方向のハケ目	【口縁部】ヨコナデ 【肩部】縦方向のハケ目→縦・斜方向の指ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1mm以下の灰白色・乳白色・褐灰色・黒色透明粒	瀬戸内系 口唇部に凹線文2条 頸部(内面)に絞り痕 器壁薄		
254	弥生土器	壺 ほぼ完形	S A 10	7.0	7.8	20.6	【口縁部】ヨコナデ 【肩部】斜方向のハケ目 【胴~底部】横方向のミガキ	【口縁~頸部】ヨコナデ 【肩~胴部】指頭痕、縦方向の指ナデ	橙	褐灰	2mm以下の灰白色・明褐灰色・明赤褐色・金色光沢・褐灰色・乳白色粒	瀬戸内系 口唇部に凹線文3条 胴部に欠損孔(意図的?) 肩部に列点文(3×2列) 平底、黒斑(一部)、器壁薄		
255	弥生土器	壺?(ミニ) 胴~底部	S A 10	—	—	—	横・斜方向の工具ナデ?(風化)	【上部】縦・斜方向の指ナデ(風化) 【下部】工具ナデ?	明赤褐	明赤褐	2mm以下の無色透明光沢・黒色光沢・褐灰色・黒色・褐色粒 5mm以下の灰白色粒	平底		
256	弥生土器	壺 胴~底部	S A 10	—	(8.0)	—	工具痕→ミガキ	ハケ目→ナデ	にぶい 褐	にぶい 褐	3mm以下の赤褐色・金色光沢・灰白色・乳白色・黒色・褐灰色・褐色粒	平底 外面(一部)にスス付着		

遺物番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量[cm] ※(推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面		
263	弥生 土器	甕 完形	S A 11	26.0	6.5	33.0	〔口縁部～突帯付近、 底部〕ヨコナデ 〔胴部〕縦・斜方向の ハケ目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕斜方向の指ナ デ→ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の無色透明光沢・黒色 針状光沢・褐灰色・黒褐色 ・褐色・黒色・浅黄褐色・ 灰白色・明褐色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 器形壺大(最大口径28.4cm) 外面(部分的)にスス付着 上げ底
264	弥生 土器	甕 口縁～胴部	S A 11	(25.5)	—	—	〔口縁部～突帯付近〕 横方向のハケ目→ヨ コナデ(風化) 〔胴部〕横・斜方向の ハケ目	〔口縁部〕ヨコナデ? (風化) 〔胴部〕不明(風化)	橙	橙	2mm以下の金色光沢・黒色針 状光沢・褐灰色・黄灰色・褐 色・乳白色・黒褐色・赤褐色 粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)に炭化物付着 図上復元
265	弥生 土器	甕 口縁～底部	S A 11 S A 7 S A 10	28.2	7.4	29.6	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕縦・横・斜方 向のハケ目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕横・斜方向の ハケ目	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の無色透明光沢・褐 灰色・黒色・赤褐色・灰褐 色・にぶい褐色・灰白色・黒 色針状光沢粒	内外面(部分的)に炭化物付 着 上げ底
266	弥生 土器	甕 口縁～胴部	S A 11	(23.2)	—	—	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕縦・斜方向の ハケ目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕不明(風化)	橙	橙	3mm以下の無色透明光沢・黒色 光沢・赤褐色・灰白色・褐 灰色・灰褐色・黒色粒	外面(部分的)に炭化物付着
267	弥生 土器	壺 口縁部	S A 11	(26.5)	—	—	ヨコナデ	横方向のハケ目	橙	橙	3mm以下の無色透明光沢・黒色 光沢・金色光沢・黒色・赤 褐色・褐灰色・にぶい褐色粒	広口(器台の可能性有り) 内面(一部)にスス付着
268	弥生 土器	壺 口縁～頸部	S A 11	(19.9)	—	—	〔口縁部〕ヨコナデ 〔頸部〕縦方向のハケ 目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔頸部〕横方向のハケ 目→横方向のナデ	浅黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の黒色・橙色・無色 透明光沢・褐色・褐灰色・灰 白色・黒色針状粒	
269	弥生 土器	壺 口縁～肩部	S A 11 S Z 1	(20.5)	—	—	〔口縁部〕ヨコナデ 〔頸～肩部〕横方向の 工具痕?(風化)	〔口縁部〕ヨコナデ 〔頸部〕指頭痕→ナデ 〔肩部〕縦方向の指ナ デ	橙	浅黄橙	2mm以下の黒色針状・灰白色・ 黒色・褐灰色・無色透明光沢・ 明黄褐色・にぶい褐色粒	
270	弥生 土器	壺 頸～胴部	S A 11	—	—	—	〔頸部〕斜方向のハケ 目→ヨコナデ 〔肩部〕斜方向のハケ目	〔頸部〕ヨコナデ 〔肩部〕縦・斜方向の指 ナデ、斜方向のハケ目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙、 黄灰	2mm以下の黒色・乳白色・褐 灰色・浅黄色粒 5mm以下の灰白色粒	器壁薄
271	弥生 土器	壺 胴～底部	S A 11	—	6.2	—	斜方向のミガキ(風 化)	縦方向の指ナデ、指頭 痕	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下のにぶい黄褐色・黒 色光沢・褐灰色・赤褐色・乳 白色・金色光沢・灰白色粒 8mm大の灰黄色粒	平底 内面(全体)に炭化物付着 外面(部分的)にスス付着
274	弥生 土器	甕?(ミニ) 底部?	S A 12	—	(1.8)	—	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の黒色・無色透明 光沢粒	ミニチュア 脚台状(中空)
275	弥生 土器	壺 底部	S A 12	—	7.8	—	斜方向のミガキ	不明(剥離)	赤褐色	不明 (剥離)	2mm以下の黒色・灰白色・浅 黄褐色・褐灰色・乳白色・金 色光沢・無色透明光沢・にぶ い褐色・黒褐色粒	平底
276	弥生 土器	鉢 口縁～胴部	S A 12	—	—	—	〔口縁部付近〕ヨコナ デ 〔胴部〕横・斜方向の ハケ目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕横方向のハケ 目→ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	2mm以下の黒色・黒色光沢・ 無色透明光沢・赤褐色・灰白 色・褐灰色	277と同一個体の可能性有り
277	弥生 土器	台付鉢? 脚部?	S A 12	—	(10.8)	—	〔上部〕縦方向のハケ 目 〔下部〕横方向の工具 ナデ、ヨコナデ	〔上部〕横方向のハケ 目 〔下部〕横方向の工具 ナデ、ヨコナデ	明黄	黒	3mm以下の灰白色・褐灰色・ 黒色・無色透明光沢・赤褐 色・褐色・褐灰色粒	276と同一個体の可能性有り
281	弥生 土器	鉢 口縁～胴部	S Z 1	(17.8)	—	—	横・斜方向のハケ目 〔口縁下部〕指頭痕	指頭痕→斜・横方向の 工具ナデ	灰黄褐	にぶい 黄橙	3mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・灰白色・黒褐色粒 5mm以下の褐灰色・にぶい褐 色粒	外面(全体)にスス付着
282	弥生 土器	甕 口縁～胴部	S C 4	(25.5)	—	—	〔口縁部～突帯付近〕 ヨコナデ 〔胴部〕斜方向のハケ 目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕斜方向のハケ 目、斜方向の指ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下のにぶい褐色・灰白 色・黒色・褐灰色・無色透明 光沢・褐色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着
288	弥生 土器	甕 口縁～胴部	J 13 【IV】	—	—	—	〔口縁部～突帯付近〕 ヨコナデ?(風化) 〔胴部〕縦・斜方向の ハケ目	斜方向の工具痕→ナデ	にぶい 黄橙	灰黄褐	3mm以下の黒色・無色透明 光沢・褐色・灰白色・黒色針 状光沢・金色光沢・褐灰色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着 289・291と同一個体の可能性 有り
289	弥生 土器	甕 口縁～胴部	I 14 【IV】	—	—	—	〔口縁部～突帯付近〕 ヨコナデ 〔胴部〕縦方向のハケ 目	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒 色針状光沢・褐灰色・黒色・ 灰褐色・褐色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(部分的)にスス付着 288・291と同一個体の可能性 有り
290	弥生 土器	甕 胴部	I 13 【IV】	—	—	—	ヨコナデ	指頭痕→斜方向の工具 ナデ	橙	橙	1mm以下の黒褐色・褐灰色・ 乳白色・無色透明光沢・黒色 光沢粒 4mm以下の灰白色粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付)
291	弥生 土器	甕 胴部	I 15 【IV】	—	—	—	〔突帯上〕ナデ 〔胴部〕縦方向のハケ 目	〔上部〕縦・斜方向の ハケ目→横方向のナデ 〔下部〕横方向のハケ 目	にぶい 黄橙	浅黄	2mm以下の赤褐色・黒色光 沢・黄褐色・にぶい褐色・褐 灰色・灰白色・無色透明光沢 粒	胴上部に刻目突帯1条(貼付) 外面(一部)にスス付着 288・289と同一個体の可能性 有り
292	弥生 土器	甕 口縁～胴部	K 16 【IV】	—	—	—	不明(風化)	不明(風化)	浅黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色針状光沢・無色 透明光沢・にぶい褐色・乳白 色・褐色・褐灰色・灰白色粒	胴上部に突帯(貼付)剥離痕
293	弥生 土器	甕 口縁～胴部	J 13 【IV】	—	—	—	不明(風化)	不明(風化)	橙	橙	2mm以下の乳白色・黒褐色・ 褐灰色・無色透明光沢・黒色 光沢・にぶい褐色粒	胴上部に突帯1条(貼付)
294	弥生 土器	甕 口縁～胴部	E 15	—	—	—	ナデ?(風化)	不明(剥離)	橙	浅黄橙	2mm以下の黒色針状光沢・灰 白色・無色透明光沢粒 4mm以下の褐色・暗褐色・褐 灰色粒	胴上部に突帯1条(貼付)
295	弥生 土器	甕 口縁～胴部	E 15	(24.7)	—	—	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕横方向のナデ	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕指頭痕・斜方 向のハケ目→横方向の ナデ	にぶい 赤褐	にぶい 褐	2mm以下の灰白色・乳白色・ にぶい褐色・黒褐色・黒色光 沢・金色光沢・褐色・暗褐色 粒	胴上部に突帯3条(貼付) 外面(部分的)にスス付着
296	弥生 土器	甕 口縁～胴部	L 14	—	—	—	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕不明(風化)	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕不明(風化)	橙	橙	1mm以下の乳白色・褐灰色・暗 褐色・黒褐色・無色透明光沢・ 黒色光沢・にぶい赤褐色粒	内面(部分的)にスス付着
297	弥生 土器	甕 口縁部	J 14 【IV】	—	—	—	ヨコナデ	〔口縁部〕ヨコナデ 〔胴部〕斜方向のハケ 目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の灰白色・褐灰色・褐 色・無色透明光沢・黒色針状 光沢・黒褐色・にぶい褐色粒	外面(一部)にスス付着

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量 [cm] ※ (推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考 (文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
298	弥生 土器	甕 口縁部	H15 J15 【IV】	—	—	—	ヨコナデ? (風化)	ヨコナデ? (風化)	橙	浅黄橙	1mm以下の灰白色・褐色・ 褐色・黒色・赤褐色・無色透 明光沢・黒色針状光沢粒	断面鋸先状 内面 (一部) にスス附着
299	弥生 土器	甕 口縁~胴部	K16 J15 【IV】	(23.1)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】斜方向の工具 痕 (風化)	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】斜方向のハケ 目 (風化)	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	2mm以下の無色透明光沢・褐 灰色・黒褐色・にぶい褐色・ 赤褐色・乳白色・灰白色・黒 色針状光沢粒	外面 (一部) にスス附着
300	弥生 土器	甕 口縁~胴部	K16 M14 【IV】	—	—	—	【口縁部】指頭痕→ヨ コナデ? (風化) 【胴部】不明 (風化)	【口縁部】ヨコナデ? (風化) 【胴部】不明 (風化)	橙	にぶい 橙	2mm以下の灰白色・褐色・乳 白色・無色透明光沢・褐色 色・黒色光沢・浅黄橙色粒	
301	弥生 土器	甕 口縁~胴部	H12	(24.4)	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】横・斜方向の ハケ目	【口縁部】ヨコナデ? (風化) 【胴部】斜方向の工具 痕 (風化)	橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色針状光沢・黒 褐色・灰白色・乳白色・無色 透明光沢・暗赤褐色粒 5mm以下の褐色色粒	外面 (部分的) に炭化物附着
302	弥生 土器	甕 口縁~胴部	E13 E14	(16.4)	—	—	【口縁部】指頭痕→ヨ コナデ 【胴部】ハケ目→横方 向のナデ、縦・斜方 向のハケ目	【口縁部】横方向のナ デ 【胴部】工具痕→斜方 向の指ナデ	灰黄	にぶい 黄	2mm以下の黒褐色・褐色・ 灰白色・無色透明光沢・黒色 針状光沢・明黄褐色粒	外面 (部分的) にスス附着
303	弥生 土器	甕 口縁~胴部	H12 I15	(30.2)	—	—	【口縁部】指頭痕→ヨ コナデ? (風化) 【胴部】不明 (風化)	【口縁部】ヨコナデ? (風化) 【胴部】ナデ? (風化)	橙	橙	2mm以下の無色透明光沢・橙 色・褐色・にぶい褐色・灰 白色・黒色粒	外面 (部分的) にスス附着
304	弥生 土器	甕 口縁~胴部	K12 【IV】	(23.0)	—	—	【口縁部】斜方向のハ ケ目→ヨコナデ 【胴部】縦・斜方向の ハケ目	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】横方向の工具 痕→丁寧なナデ	橙	明黄褐	1mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・黒色・暗褐色粒 5mm以下の灰白色粒、 7mm以下の褐色色粒	外面 (部分的) に炭化物附着 黒斑 (一部)
305	弥生 土器	甕 口縁部	一括 【IV】	—	—	—	斜方向のハケ目	ヨコナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の黒色光沢・無色透 明光沢・褐色色・灰白色・褐色 粒	線刻 (絵画文?)
306	弥生 土器	甕 口縁部	L12 【IV】	—	—	—	斜方向の工具痕→ヨ コナデ	縦方向の指ナデ→ヨコ ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・灰白色・にぶい橙 色・黒褐色・赤褐色粒	外面 (一部) にスス附着
307	弥生 土器	甕 口縁部	L12 【IV】	—	—	—	【口縁部】ヨコナデ 【胴部】縦・斜方向の ハケ目	横方向のハケ目→ヨコ ナデ	橙	橙	2mm以下の黒色・黒色光沢・ 褐色色・乳白色・無色透明光 沢・灰白色粒	外面 (部分的) にスス附着
308	弥生 土器	甕 口縁~胴部	M12 【IV】	(23.6)	—	—	【口縁部】ヨコナデ、 横方向の指ナデ 【胴部】ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・にぶい褐色・黒色粒 5mm以下の褐色色・赤褐色粒	
309	弥生 土器	甕 口縁~胴部	I13 【IV】	(28.1)	—	—	縦・斜方向のハケ目	【口縁部】指頭痕→ヨ コナデ 【胴部】横・斜方向の ハケ目	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の無色透明光沢・黒 色光沢・灰白色・にぶい黄橙 色粒	
310	弥生 土器	甕 口縁~胴部	K12 【IV】	(23.2)	—	—	斜方向のハケ目	【口縁部】指頭痕→斜 方向の工具痕 【胴部】斜方向の工具 ナデ→斜方向の指ナデ	橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色・黒色針状光 沢・無色透明光沢・褐色色・ 灰白色・明赤褐色・赤褐色粒	外面 (部分的) にスス附着 黒斑 (一部)
311	弥生 土器	甕 胴~底部	K12 【IV】	—	(4.3)	—	不明 (風化)	縦方向の指ナデ	浅黄橙	橙	2mm以下の黒色針状光沢・灰 白色・褐色色・無色透明光 沢・赤褐色粒	平底
312	弥生 土器	甕 底部	I14 【IV】	—	(5.2)	—	不明 (剥離・風化)	【上部】横方向の工具 痕 【下部】指ナデ	黄灰	黄灰	2mm以下の黒色・灰白色・無 色透明光沢・黒色針状光沢・ 褐色色・にぶい橙色粒	平底
313	弥生 土器	甕 (ミニ) 胴部~底部	K14 【IV】	—	(3.5)	—	不明 (風化)	不明 (風化)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の金色光沢・黒色針状 光沢・無色透明光沢・褐色色・ 黒灰色・にぶい褐色・灰白色粒	黒斑 (一部) 上げ底
314	弥生 土器	甕 胴~底部	L12 J13 【IV】	—	8.2	—	【胴部】斜方向のハ ケ目 【底部】指頭痕→ヨコ ナデ	【胴部】縦方向のハケ 目→縦方向の指ナデ、 ナデ 【底部】指頭痕→ヨコ ナデ	橙	にぶい 橙	2mm以下の黒色・にぶい褐 色・無色透明光沢・金色光 沢・灰白色・褐色色・赤褐 色・黒褐色粒	脚台状 (中空) 外面 (一部) にスス附着
315	弥生 土器	甕 胴~底部	K12 【IV】	—	—	—	【胴部】縦・斜方向の ハケ目? (風化) 【底部】横方向のナ デ? (風化)	【胴上部】不明 (風化) 【胴下部】斜方向の指 ナデ 【底部】指頭痕→横方 向のナデ? (風化)	橙	にぶい 橙	3mm以下の無色透明光沢・黒 色・にぶい赤褐色・褐色色・ 灰白色粒 5mm以下の浅黄橙色粒 7mm以下の橙色粒	脚台状 (中空)
316	弥生 土器	甕 底部	K12 【IV】	—	(8.0)	—	指頭痕→横・斜方向 の工具痕? (風化)	指頭痕→横方向のナ デ? (風化)	明黄褐	明黄褐	2mm以下の黒色光沢・灰白 色・無色透明光沢・灰褐色・ 黒色・褐色色粒	脚台状 (中空)
317	弥生 土器	甕 底部	I13 【IV】	—	(7.8)	—	指頭痕→横・斜方向 の工具痕? (風化)	指頭痕→斜方向の工具 痕? (風化)	橙	橙	3mm以下の黒色針状光沢・黒 色・褐色色・灰白色・にぶい 赤褐色・無色透明光沢粒	脚台状 (中空)
318	弥生 土器	甕 底部	一括	—	(8.2)	—	指頭痕→斜方向の工 具痕? (風化)	【胴下部】斜方向の工 具痕? (風化) 【底部】指頭痕・斜方 向の指ナデ→横方向 のナデ? (風化)	浅黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の明赤褐色・黒色針 状光沢粒 4mm以下の褐色色・灰白色・ 褐色色・にぶい橙色・黒色・無 色透明光沢粒	脚台状 (中空)
319	弥生 土器	甕 底部	I14 【IV】	—	(6.2)	—	縦・斜方向の工具 痕? (風化)	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	2mm以下の褐色・無色透明光 沢・黒色針状光沢・黒色・灰 白色・褐色色粒	脚台状 (中空)
320	弥生 土器	甕 底部	K12 【IV】	—	(7.8)	—	横・斜方向の工具 痕? (風化)	指頭痕→横・斜方向の 工具痕? (風化)	橙	橙	1mm以下の黒色・灰白色・褐 灰色・にぶい黄橙・無色透明 光沢・黒色針状光沢粒	脚台状 (中空)
321	弥生 土器	甕 底部	K12 【IV】	—	(9.4)	—	縦方向のハケ目→ヨ コナデ? (風化)	斜方向のハケ目→ヨコ ナデ? (風化)	橙	橙	1mm以下の黒色光沢・無色透 明光沢・黒色・灰白色・褐色 色・灰黄色粒 3mm以下のにぶい褐色粒	脚台状 (中空)
322	弥生 土器	甕 底部	K13 【IV】	—	9.3	—	縦方向の工具痕? (風 化)	横方向の工具痕? (風 化)	橙	明黄褐	2mm以下の灰白色・無色透明 光沢・黒色針状光沢・乳白色・ 黒色・褐色色・にぶい褐色粒	脚台状 (中空)
323	弥生 土器	甕 底部	L12 【IV】	—	8.6	—	指頭痕→斜方向の工 具痕? (風化)	指頭痕→横方向の工具 痕? (風化)	橙	橙	2mm以下の無色透明光沢・黒 色針状光沢・黒色・灰白色・ 黒色光沢・褐色色粒 4mm以下の乳白色・明赤褐色粒	脚台状 (中空) くびれ大

遺物番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量[cm] ※(推定値)			調整		色調		胎土の特徴	備考(文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面		
324	弥生土器	壺 口縁部	J 12	(8.8)	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	橙	橙	2mm以下の無色透明光沢・褐灰色・乳白色・黒色光沢粒 6mm大の灰白色粒	瀬戸内系 口唇部に凹線文3条
325	弥生土器	壺 口縁~頸部	I 14 【IV】	(11.5)	—	—	[口縁部]ヨコナデ [頸部]縦・斜方向のハケ目	横方向のナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色・黒色光沢・褐灰色・灰白色・にぶい黄橙色・暗赤褐色・無色透明光沢粒	
326	弥生土器	壺 口縁部	L 12 【IV】	(9.1)	—	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色・無色透明光沢・褐灰色・赤褐色・黒色針状光沢粒	短頸
327	弥生土器	壺 口縁~肩部	一括 【IV】	—	—	—	[口縁部]ヨコナデ [肩部]ミガキ?(風化)	ヨコナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm以下の無色透明光沢・黒色・褐色・灰白色・褐灰色・浅黄橙色・黒色針状光沢粒	無頸(広口)
328	弥生土器	壺 口縁部	K 13	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄	浅黄	2mm以下の黒色・黒色針状光沢・にぶい黄橙色・にぶい黄褐色・褐灰色・赤褐色・無色透明光沢粒	
329	弥生土器	壺 口縁部	K 12 【IV】	—	—	—	ミガキ?(風化)	ヨコナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の灰白色・無色透明光沢・褐色・黒褐色・褐灰色粒	口縁部直下に刻目突帯1条(貼付)
330	弥生土器	壺 口縁部	J 15 【IV】	—	—	—	不明(風化)	不明(風化)	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の金色光沢・褐灰色・赤褐色・灰白色・にぶい橙色・乳白色・暗褐色粒 4mm大の灰白色光沢粒	口唇部に連続刺突文 口縁部(内面)に円形浮文
331	弥生土器	壺 口縁部	J 14 【IV】	(20.0)	—	—	横方向の工具痕→ヨコナデ?(風化)	横方向の工具痕→ヨコナデ?(風化)	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の乳白色・にぶい黄褐色・黒色針状光沢・暗褐色・無色透明光沢・黒色・明褐色・褐灰色粒	器台の可能性有り
332	弥生土器	壺 頸~肩部	I 15 【IV】	—	—	—	斜方向のナデ?(風化)	指頭痕→斜方向のナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の黒色・無色透明光沢・褐灰色・赤褐色・黒色針状光沢粒 灰白色・褐灰色・無色透明光沢・黒色針状光沢・にぶい黄褐色粒	頸下部に刻目突帯1条(貼付)
333	弥生土器	壺? 肩部	一括 【IV】	—	—	—	ミガキ?(風化)	横方向のハケ目→横方向のナデ	橙	灰黄	1mm以下の無色透明光沢・黒色光沢・浅黄褐色・褐灰色・灰白色粒	線刻
334	弥生土器	壺 肩部	一括 【IV】	—	—	—	横方向のミガキ	ナデ	灰黄褐	暗灰黄	1mm以下の灰白色・にぶい黄褐色・黒色粒	曲線状の沈線(2本) 重弧文の可能性有り
335	弥生土器	壺 胴部	L12・K12 M12 【IV】	—	—	—	丁寧なナデ	工具痕→縦・斜方向の指ナデ	橙	にぶい 橙	3mm以下の黒色・赤褐色・黒色針状光沢・褐灰色・無色透明光沢・灰白色粒	胴中部に刻目突帯1条(貼付)
336	弥生土器	壺 胴~底部 付近	M12 L12 【IV】	—	—	—	丁寧なナデ	[肩部]ハケ目→斜方向の指ナデ [胴部]横・斜方向のハケ目→丁寧なナデ	浅黄橙	橙	1mm以下の灰白色・乳白色・黒褐色・褐灰色・明赤褐色・黒色光沢・褐色・無色透明光沢粒	胴中部に刻目突帯1条(貼付) 黒斑(一部) 尖底
337	弥生土器	壺 胴~底部 付近	J 14 【IV】	—	—	—	[胴部]縦方向のミガキ [底部付近]横方向のミガキ	斜方向のハケ目	黒	黒	2mm以下の黒褐色・にぶい橙色・金色光沢・乳白色・灰白色粒	
338	弥生土器	壺 底部	L 12 【IV】	—	(6.9)	—	斜方向の工具痕→斜方向のミガキ	斜方向の工具痕→ナデ	にぶい 黄褐	にぶい 黄褐	2mm以下の無色透明光沢・金色光沢・灰白色・黒色・褐灰色・明褐色粒 5mm以下の褐色粒	平底
339	弥生土器	壺 底部	G 1 1	—	(7.2)	—	[胴部]斜方向のミガキ [底部]横方向の工具ナデ	工具ナデ	橙	褐灰	3mm以下の浅黄褐色・明褐色・褐灰色・黒色針状光沢・無色透明光沢・灰白色粒	平底 外面(部分的)にスス附着
340	弥生土器	壺 底部	L 12 【IV】	—	7.0	—	ナデ?(風化)	横方向のハケ目→ナデ	橙	黒	1mm以下の乳白色・灰白色・褐灰色・無色透明光沢・黒色光沢粒 4mm以下の褐色・黒褐色粒	平底
341	弥生土器	壺 底部	K 16 【IV】	—	(8.4)	—	横・斜方向の工具ナデ→ミガキ?(風化)	指頭痕→ナデ	明褐	にぶい 褐	3mm以下の金色光沢・灰白色・乳白色・黒褐色・赤褐色粒	平底
342	弥生土器	壺 底部	G 17 【IV】	—	(6.2)	—	縦方向のハケ目→縦・斜方向のミガキ	指ナデ	にぶい 赤褐	にぶい 黄橙	2mm以下の褐灰色・暗赤褐色・無色透明光沢・黒色針状光沢・浅黄褐色・黒褐色・にぶい橙色・灰白色粒	平底
343	弥生土器	壺 底部	L 12 【IV】	—	3.4	—	ナデ?(風化)	ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	3mm以下の褐灰色・無色透明光沢・黒色光沢・にぶい褐色粒	やや丸底
344	弥生土器	壺 底部	O 19 【IV】	—	3.5	—	斜方向のミガキ?(風化)	不明(風化・剥離)	灰褐	灰褐	2mm以下の灰白色・赤褐色・黒色・乳白色・黒色光沢粒 4mm以下の無色透明光沢・浅黄褐色粒	平底
345	弥生土器	壺 胴~底部	K 12 K 13 【IV】	—	3.2	—	縦・斜方向のハケ目	[上部]縦・斜方向の工具痕→ナデ [下部]指頭痕→指ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	2mm以下の黒色針状光沢・無色透明光沢・黒色・乳白色・褐灰色粒 4mm以下の灰白色・赤褐色粒	平底
346	弥生土器	壺 胴~底部	J 12 I 13 【IV】	—	3.6	—	縦方向のミガキ	[胴部]斜方向の工具ナデ [底部]指頭痕	灰白	淡黄	2mm以下の灰白色・褐灰色・明褐色・黒褐色・黒色針状光沢・にぶい褐色・無色透明光沢粒	やや丸底 黒斑(大)
347	弥生土器	壺 底部	一括	—	2.9	—	ミガキ	指頭痕→工具ナデ	橙	浅黄	2mm以下の黒色光沢・灰白色・褐灰色・褐色粒	やや丸底(ボタン状)
348	弥生土器	鉢 口縁部	E 15	(16.2)	—	—	不明(風化)	ヨコナデ→横方向のミガキ	橙	にぶい 黄橙	3mm以下の灰白色・黒色針状光沢・無色透明光沢・褐灰色・褐色・赤褐色・黒色粒	349と同一個体の可能性有り
349	弥生土器	鉢 口縁部	E 14	(16.5)	—	—	不明(風化)	ヨコナデ→横方向のミガキ	橙	橙	3mm以下の黒色・黒色針状光沢・褐色・無色透明光沢・赤褐色・褐灰色・にぶい褐色粒	348と同一個体の可能性有り
350	弥生土器	鉢 口縁~胴部	L 12 【IV】	(13.8)	—	—	縦方向のハケ目	[口縁部]ヨコナデ [胴部]斜方向の工具痕→横方向のナデ	橙	橙	3mm以下の灰白色・無色透明光沢・黒色光沢・にぶい橙色・赤褐色・褐灰色粒	外面(部分的)内面(一部)にスス附着
351	弥生土器	碗(脚付) 口縁~底部	J 13 K 13 【IV】	9.8	—	—	不明(風化)	斜方向の工具痕→横方向のナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3mm以下の赤褐色・無色透明光沢・黒色・褐灰・乳白色・黒色光沢・浅黄褐色粒	

第5表 遺物観察表③ (焼成粘土塊)

遺物 番号	器 種	出土地点		法 量 (cm)			色 調	胎土の特徴	備 考
		遺構・Gr	層位	長軸	短軸	器厚			
402	焼成粘土塊	S Z 1	炉	4.2	3.5	1.8	淡黄	透光沢粒を含む微細な粒子	茶変 (一部)
403	焼成粘土塊	H17	IV	3.5	2.2	1.0	褐灰	3mm以下の無色透明光沢・灰白色・にぶい橙色・黒褐色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
404	焼成粘土塊	H17	IV	3.1	2.7	1.4	にぶい橙	1mm以下の無色透明光沢粒 3mm以下の赤褐色・灰白色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
405	焼成粘土塊	I 18	IV	6.4	4.1	3.3	浅黄橙	3mm以下の明赤褐色・灰白色・無色透明光沢粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
406	焼成粘土塊	I 18	IV	4.8	3.0	2.7	にぶい橙	2mm以下の赤褐色・黒褐色・無色透明光沢粒 5mm以下の灰白色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
407	焼成粘土塊	I 18	IV	4.8	3.2	2.5	にぶい橙	2mm以下の灰白色・にぶい黄橙色粒 4mm以下の赤褐色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
408	焼成粘土塊	I 14	IV	7.3	4.2	2.5	にぶい橙	2mm以下のにぶい赤褐色・黒色・褐灰色粒 4mm以下の浅黄橙色粒 6mm以下のにぶい橙色粒	スサ様圧痕、堅くしまっている 炉壁の可能性有り
409	焼成粘土塊	M13	—	5.1	3.8	2.6	にぶい橙	2mm以下の灰白色・無色透明光沢粒 4mm以下の赤色・赤褐色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り
410	焼成粘土塊	G17	—	4.2	3.7	2.8	明褐灰	1mm以下の灰白色・無色透明光沢粒 3mm以下の赤色・褐灰色粒	スサ様圧痕 炉壁の可能性有り

第6表 遺物観察表④ (古代以降の遺物)

遺物 番号	種別	器種 部位	出土地点 【層位】	法量 [cm] ※ (推定値)			調 整		色 調		胎土の特徴	備考 (文様等)
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面		
411	土師器	埴埴 口縁部	M12	—	—	—	ナデ	指頭痕→ナデ	灰黄	黄灰	1mm以下の灰白色・黒褐色粒	内外面 (全体) ともに赤変 口唇部に溶解した銅粒付着 金属分析実施
412	土師器	脚付碗? 脚部	一括 【IV】	—	(7.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	2mm以下の無色透明光沢・橙 色・褐灰色・黒褐色粒	上げ底 (脚台状)
413	土師器	坏 体~底部	一括 【IV】	—	(6.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	微細な無色透明光沢・黒色・ 褐灰色粒 3mm以下の赤褐色粒	糸切り底
414	土師器	皿 底部	一括 【IV】	—	(7.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい 橙	にぶい 橙	1mm以下の無色透明光沢・黒 色・灰白色・褐灰色・明赤褐 色粒	糸切り底 内外面 (部分的) にスス付着
415	土師器	坏? 底部	一括 【IV】	—	—	—	不明 (風化)	不明 (風化)	浅黄橙	浅黄橙	微細な無色透明光沢・黒色・褐 灰色・灰白色・にぶい褐色粒 2mm以下の明赤褐色粒	
416	土師器	坏? 底部	H15 【IV】	—	—	—	回転ナデ? (風化)	回転ナデ? (風化)	浅黄橙	にぶい 橙	微細な黒色・明赤褐色・褐灰 色・無色透明光沢粒	ヘラ切り底
417	青磁	皿 口縁~体部	一括 【IV】	(11.8)	—	—	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	明オリ ープ灰	明オリ ープ灰	精良	龍泉窯系
418	青磁	皿 底部	一括	—	—	—	回転ナデ→施釉 (高 台内=露胎)	回転ナデ→施釉	明オリ ープ灰	明オリ ープ灰、 黄灰	精良	龍泉窯系 片彫り
419	青磁	碗 口縁~体部	L 15	—	—	—	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	オリ ープ灰	オリ ープ灰	精良	龍泉窯系
420	青花	皿 口縁~体部	一括 【III】	—	—	—	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	明青灰	明青灰	精良	景徳鎮窯系 (III C群) 染付 (外:波濤文・芭蕉葉文、 内:花鳥文?)
421	土師器	壺? 胴~底部	K 13	—	(4.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	精良	糸切り底
422	陶器	碗 体~底部	J 16	—	(5.2)	—	回転ナデ→施釉 (高 台内=露胎)	回転ナデ→施釉	暗オリ ープ	暗オリ ープ褐、 オリ ープ褐	精良	龍門司系 蛇の目種剥ぎ 削り出し高台 (兜中有り)
423	陶器	甕 底部付近	K 12	—	—	—	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	オリ ープ黒	オリ ープ黒	精良	苗代川系 胴部内面に轆轤目 底部内面に付着物

第7表 遺物計測表① (石器類)

遺物 番号	器 種	石 材	出土地点		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g重)	備 考
			遺構・Gr	層位					
12	打製石鏃	チャート	T r 6	XI	(2.8)	2.4	0.5	(2.2)	凹基 (逆Y字状)、鋒欠損
13	打製石鏃	黒曜石 (姫島産)	T r 2	X	1.9	(1.7)	0.4	(0.9)	凹基 (正三角形)、脚部欠損
14	石鏃	安山岩	T r 2	X	(2.1)	(1.2)	(0.5)	(1.0)	上部欠損
15	剥片	黒曜石	T r 2	X	1.8	2.0	0.8	4.7	二次加工有り
16	二次加工剥片	珩質岩	T r 2	X	2.2	1.4	0.5	1.0	
17	剥片	珩質岩	T r 2	X	3.1	2.0	0.8	4.8	二次加工有り
18	剥片	珩質岩	T r 2	X	1.4	1.7	0.4	0.8	
19	剥片	珩質岩	T r 2	X	3.3	2.1	0.8	2.9	
20	剥片	珩質岩	T r 2	X	2.0	3.5	1.6	5.4	
21	剥片	珩質岩	T r 2	X	1.4	2.3	2.8	3.7	
22	剥片	珩質岩	T r 2	X	1.7	1.9	0.4	1.3	
23	剥片	珩質岩	T r 2	X	3.2	2.2	1.3	6.1	24と接合
24	剥片	珩質岩	T r 2	X	3.1	1.9	1.1	3.4	23と接合
25	石核	珩質岩	T r 2	X	3.4	2.8	2.0	13.1	
26	石核	珩質岩	T r 2	X	3.8	3.0	2.9	17.2	
27	石核	安山岩	T r 2	X	2.3	3.7	1.2	12.2	
28	剥片	安山岩	T r 2	X	2.8	1.0	0.5	0.8	石鏃の可能性有り
29	剥片	安山岩	T r 2	X	1.9	3.3	0.7	1.9	
30	磨石	砂岩	T r 2	X	9.0	8.2	5.8	580.9	
37	石鏃	チャート	T r 1	VII	(1.7)	1.1	0.3	(0.5)	基部欠損
38	剥片	玉髄	T r 1	VII	1.4	1.3	0.3	0.3	
39	剥片	黒曜石	T r 1	VII	2.3	0.8	0.5	0.5	
40	剥片	黒曜石	T r 1	VII	1.6	1.3	0.5	0.7	二次加工有り
41	剥片	黒曜石	T r 1	VII	1.8	1.2	0.7	1.4	二次加工有り
42	剥片	黒曜石	T r 1	VII	1.8	1.7	0.7	1.0	二次加工有り
43	剥片	黒曜石	T r 1	VII	2.1	2.8	1.0	5.0	二次加工有り
44	石核	黒曜石	T r 1	VII	2.2	2.5	1.0	4.0	
100	打製石鏃	玉髄	L15	V	2.3	1.3	0.4	0.8	凹基 (略五角形)
101	打製石鏃	チャート	K12	IV	2.8	1.3	0.4	1.2	凹基 (略五角形)
102	打製石鏃	玉髄	K12	IV	2.5	1.3	0.6	1.1	平基 (略五角形)
103	打製石鏃	チャート	L13	V	(2.4)	(1.8)	0.5	(1.3)	凹基 (正三角形)、両脚部欠損
104	打製石鏃	安山岩	O19	IV	2.1	(1.3)	0.4	(0.5)	凹基 (砲弾形)、脚部欠損
105	打製石鏃	チャート	F11	IV	2.0	(1.3)	0.3	(0.6)	平基 (三角形)、基辺両端部欠損
106	打製石鏃	安山岩	H12	IV	1.4	1.2	0.3	0.4	凹基 (三角形)、小型
107	異形石器?	安山岩	H12	IV	(1.2)	(1.4)	(0.3)	(0.4)	先端部欠損、打製石鏃・石匙の可能性有り
108	剥片	珩質岩	F14	IV	1.4	2.6	0.3	0.7	
109	剥片	安山岩	O19	IV	1.8	2.1	0.8	2.7	
110	剥片	安山岩	O19	IV	1.8	1.3	0.2	0.8	
111	剥片	安山岩	O19	IV	2.6	1.2	0.7	2.3	
112	剥片	チャート	—	—	2.5	2.1	0.9	4.2	二次加工有り
113	二次加工剥片?	両輝石安山岩	P19	IV	(4.1)	(3.6)	(0.7)	(9.2)	127と同一個体の可能性有り
114	二次加工剥片	ホルンフェルス	—	IV	4.9	7.4	0.7	22.1	削器の可能性有り
115	二次加工剥片	両輝石安山岩	P19	IV	21.2	4.6	1.0	41.6	削器の可能性有り
116	打製石斧	両輝石安山岩	I13	—	(2.6)	(4.6)	(1.2)	(18.4)	小型、基部~身部・刃半部欠損
117	打製石斧	ホルンフェルス	H12	IV	(5.2)	(4.0)	(1.7)	(29.3)	小型、刃部・基部欠損
118	打製石斧	ホルンフェルス	—	IV	(6.6)	4.0	1.2	(41.3)	小型、舌状 (細長)、基部欠損
119	打製石斧	ホルンフェルス	—	—	(6.7)	4.3	(0.9)	(34.1)	小型、舌状 (細長)、基部欠損
120	打製石斧	ホルンフェルス	M14	IV	(8.3)	6.2	1.3	(72.7)	小型、舌状、基部欠損
121	打製石斧	ホルンフェルス	—	IV	9.6	4.0	1.0	50.0	小型、舌状 (細長)、有袂
122	打製石斧	ホルンフェルス	F13	IV	(6.3)	(4.7)	(1.0)	(29.5)	小型、台形状、側半部・刃側部欠損、無袂
123	打製石斧	ホルンフェルス	N18	IV	(9.6)	(6.5)	(1.3)	(104.6)	撥形、刃部欠損、有袂 (浅い)
124	打製石斧	ホルンフェルス	L13	IV	(10.1)	(8.3)	(1.7)	(161.2)	刃部欠損、無袂

遺物 番号	器 種	石 材	出土地点		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g重)	備 考
			遺構・Gr	層位					
125	打製石斧	両輝石安山岩	N12	IV	(8.3)	(11.0)	(1.5)	(163.8)	大型、刃部欠損、無抉
126	打製石斧	両輝石安山岩	O19	IV	(15.0)	(10.9)	(1.6)	(273.4)	大型、台形状、側半部欠損、無抉
127	打製石斧	両輝石安山岩	O19	IV	(7.4)	(5.7)	(1.1)	(49.8)	基部～刃半部欠損
128	打製石斧	両輝石安山岩	H 8	IV	(6.6)	(7.8)	(1.65)	(85.9)	基部～刃半部欠損
129	敲石	砂岩	H 7	V	3.9	3.8	1.9	38.6	小型、円礫利用
130	敲石	砂岩	Q15	IV	(7.0)	6.3	(3.3)	(170.7)	円礫利用
131	敲石・磨石	砂岩	N13	V	6.2	6.6	5.5	317.0	角礫(立方体状)利用
132	磨石・敲石	砂岩	L12	IV	(6.8)	8.9	4.5	(347.8)	円礫利用
133	磨石・敲石	砂岩	I 14	IV	(8.5)	9.6	4.3	(389.9)	円礫利用
134	磨石	砂岩	K17	—	5.7	8.9	7.5	539.8	剥片利用
138	磨製石鏃	頁岩(暗灰色)	S A 1	—	2.5	(1.9)	0.2	(1.1)	平基(三角形)、基辺端部欠損
139	スクレイパー	黒曜石	S A 1	—	(1.3)	2.1	0.5	(1.0)	小型、つまみ部欠損
140	剥片	黒曜石	S A 1	—	2.4	2.0	0.9	3.5	二次加工有り
148	打製石鏃	チャート	S A 2	—	2.1	1.9	0.3	0.8	凹基(正三角形)
149	打製石鏃	安山岩	S A 2	—	1.4	1.5	0.3	(0.5)	凹基(正三角形)、局部磨製、脚部欠損
150	磨製石鏃	頁岩(灰色)	S A 2	—	(2.4)	(2.3)	0.2	(1.2)	凹基、鋒～刃部欠損
151	磨製石鏃未成品	頁岩(明灰色)	S A 2	—	2.6	2.1	0.3	2.1	
152	剥片	頁岩(明灰色)	S A 2	—	1.7	1.4	0.1	0.5	磨製石鏃剥片
153	剥片	頁岩(暗灰色)	S A 2	—	1.7	1.5	0.2	0.6	磨製石鏃剥片
154	剥片	頁岩(暗灰色)	S A 2	—	1.9	1.8	0.2	0.9	磨製石鏃剥片
155	敲石	安山岩	S A 2	—	(6.3)	8.9	4.2	(276.2)	円礫利用、磨石としての利用の可能性有り
158	磨製石鏃	頁岩(明灰色)	S A 3	—	(2.2)	(1.6)	0.3	(1.0)	浅い凹基(三角形)、鋒・基辺端部欠損
159	磨製石鏃	頁岩(明灰色)	S A 3	—	(2.8)	(1.8)	(0.2)	(1.2)	浅い凹基(三角形)、基辺両端部欠損
160	剥片	頁岩(明灰色)	S A 3	—	2.7	2.5	0.2	1.3	磨製石鏃剥片
161	剥片	頁岩(明灰色)	S A 3	—	2.3	2.2	0.2	1.0	磨製石鏃剥片
162	砥石	砂岩	S A 3	—	21.2	9.1	4.7	1453.7	自然礫利用、浅い溝状の研磨面有り
163	石皿	砂岩	S A 3	—	(9.3)	(12.5)	(4.6)	(760.0)	被敲打痕有り
164	磨製石斧	蛇紋岩	S A 3	—	6.6	3.7	1.3	56.5	隅丸長台形状、柄装着部凹有り
170	砥石	砂岩	S A 4	—	6.3	6.0	1.1	41.8	剥片利用、手持ち用(小型)、周縁端部にも砥面
171	磨製石鏃未成品	頁岩(明灰色)	S A 4	—	3.0	2.4	0.3	2.0	
172	砥石	砂岩	S A 4	—	16.0	15.3	6.5	2375.1	台石状(自然礫利用)、213と接合、角部に砥面、被敲打痕有り、赤変
184	台石	両輝石安山岩	S A 5	—	(6.5)	(8.3)	4.0	(300.9)	被敲打痕有り
185	磨製石鏃未成品	頁岩(灰色)	S A 6	—	3.8	2.9	0.7	6.1	研磨痕有り
186	剥片	頁岩(灰色)	S A 6	—	5.0	3.2	0.5	11.9	磨製石鏃素材
187	剥片	頁岩(灰色)	S A 6	—	4.3	2.8	0.6	6.9	磨製石鏃素材
200	磨製石鏃	頁岩(明灰色)	S A 7	—	(1.9)	(1.9)	(0.3)	(1.1)	浅い凹基、上半部欠損、201と同一の可能性有り
201	剥片	頁岩(明灰色)	S A 7	—	1.5	1.2	0.1	0.3	研磨痕有り(磨製石鏃の欠片)、200と同一の可能性有り
202	磨製石鏃未成品	頁岩(明灰色)	S A 7	—	1.5	1.9	0.3	0.7	研磨痕有り
203	磨製石鏃未成品	頁岩(明灰色)	S A 7	—	4.1	3.8	0.6	9.3	研磨痕有り
204	剥片	頁岩(暗灰色)	S A 7	—	6.9	5.8	1.3	44.8	磨製石鏃素材
205	剥片	頁岩(暗灰色)	S A 7	—	7.2	4.8	1.1	29.3	磨製石鏃素材
206	剥片	頁岩(暗灰色)	S A 7	—	8.1	4.3	1.0	36.1	磨製石鏃素材
207	砥石	砂岩	S A 7	—	(3.1)	(4.3)	0.6	(7.3)	剥片利用、手持ち用(小型)、周縁端部のみ砥面
208	砥石	砂岩	S A 7	—	(4.9)	(4.5)	(3.0)	(77.3)	自然礫利用
209	砥石	砂岩	S A 7	—	10.3	7.8	1.4	159.9	板状(自然礫利用)、手持ち用
210	砥石	粘板岩	S A 7	—	12.2	4.8	1.0	(92.1)	板状、赤変
211	砥石	粘板岩	S A 7	—	18.6	7.7	2.8	385.4	板状、溝状凹面有り
212	砥石	砂岩	S A 7	—	(10.7)	(12.8)	(4.4)	(697.2)	自然礫利用、鉄分・スス付着、赤変、線条痕有り
213	砥石	砂岩	S A 7	—	7.6	10.1	6.9	727.1	台石状(自然礫利用)、172と接合、角部にも砥面、被敲打痕有り
223	打製石鏃	チャート	S A 8	—	(1.6)	1.4	0.4	(0.8)	平基(細長三角形)、鋒欠損
224	砥石	砂岩	S A 8	—	7.0	2.6	1.7	51.0	自然礫利用、手持ち用(小型)
228	磨製石鏃未成品	頁岩(明灰色)	S A 9	—	3.5	3.3	0.4	5.0	

遺物 番号	器 種	石 材	出土地点		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g重)	備 考
			遺構・Gr	層位					
229	砥石	砂岩	S A 9	—	(2.6)	(3.2)	(0.6)	(7.1)	剥片利用、手持ち用 (小型)、周縁端部にも砥面
230	砥石	砂岩	S A 9	—	7.7	7.1	1.0	76.1	剥片利用、手持ち用 (小型)、周縁端部にも砥面、赤変
231	砥石	砂岩	S A 9	—	(15.2)	(3.0)	1.6	(107.2)	剥片利用、手持ち用 (小型)、スス付着、周縁端部にも砥面、溝状凹面有り、赤変
257	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S A 10	—	4.4	2.7	0.3	4.4	
258	敲石	砂岩	S A 10	—	(3.8)	(7.5)	(5.2)	(112.5)	円礫利用
259	敲石・砥石	砂岩	S A 10	—	12.7	4.0	2.7	183.8	棒礫利用、手持ち用、樹皮布敲石の可能性有り
260	敲石・磨石	砂岩	S A 10	—	10.4	9.2	5.0	722.6	円礫利用
261	砥石	砂岩	S A 10	—	(7.9)	(6.5)	(2.7)	(141.1)	剥片状、鉄分付着
262	台石	両輝石安山岩	S A 10	—	(8.1)	(7.0)	(5.0)	(533.6)	
272	剥片	チャート	S A 11	—	2.3	1.6	0.5	1.6	同一地点小片 2 点出土
278	磨製石鏃	頁岩 (暗灰色)	S A 12	—	(3.2)	(1.8)	0.2	(1.4)	凹基 (三角形)、鋒・刃中部欠損
279	砥石・敲石	砂岩	S A 12	—	11.7	5.0	2.0	173.7	自然礫利用、手持ち用、樹皮布敲石の可能性有り
280	砥石	砂岩	S A 12	—	(17.0)	(4.3)	(3.4)	(208.4)	剥片状
283	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S H 1	—	3.9	3.0	0.4	6.8	完成間近 (研磨痕有り)、大型
284	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S H 1	—	2.7	2.0	0.3	2.1	完成間近 (研磨痕有り)
285	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S H 1	—	2.2	3.0	0.3	3.2	完成間近 (研磨痕有り)、大型
286	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S H 1	—	3.2	2.4	0.4	3.1	
287	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	S H 1	—	5.1	2.2	0.5	5.2	
352	磨製石鏃	頁岩 (黒灰色)	K 16	IV	(3.2)	2.1	0.3	(1.6)	凹基 (三角形)、鋒・刃部欠損
353	磨製石鏃	頁岩 (明灰色)	—	—	2.2	2.3	0.3	(1.4)	浅い凹基 (正三角形)、刃部欠損 (部分的)
354	磨製石鏃	頁岩 (黒灰色)	G 10	V	2.6	(1.7)	0.2	(1.0)	平基 (基辺に丸み)、刃中部～基辺端部欠損
355	磨製石鏃	頁岩 (明灰色)	I 14	—	(1.8)	(2.0)	0.2	(1.1)	平基、上半部・片刃部欠損、浅い凹部有り
356	磨製石鏃未成品	頁岩 (灰色)	—	—	2.9	2.6	0.4	3.7	
357	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	H 13	—	3.9	2.2	0.6	4.8	
358	磨製石鏃未成品	頁岩 (明灰色)	—	—	2.1	1.5	0.3	0.7	
359	磨製石鏃未成品	頁岩 (黒灰色)	G 14	IV	2.2	2.4	0.4	2.1	
360	磨製石鏃未成品	緑色泥岩	K 14	IV	5.0	5.1	0.6	17.4	研磨痕有り
361	磨製石鏃未成品	緑色泥岩	J 12	—	2.9	2.1	0.4	3.3	研磨痕有り
362	剥片	頁岩 (明灰色)	H 12	—	1.8	1.9	0.1	1.0	磨製石鏃剥片
363	磨製石斧転用品	頁岩 (黒灰色)	M 16	—	(4.7)	(3.5)	(0.8)	(17.6)	欠損端部に二次加工有り、茶変
364	砥石	ホルンフェルス	J 14	IV	8.1	3.1	2.1	82.6	棒礫利用、手持ち用 (小型)
365	砥石	粘板岩	K 13	IV	(5.8)	3.6	1.2	(38.6)	板状、小型
366	砥石	両輝石安山岩	I 18	IV	(6.6)	(4.0)	(1.2)	(41.3)	剥片状、茶変
367	砥石	砂岩	F 14	IV	(13.6)	(11.4)	(2.5)	(442.5)	板状 (自然礫利用)、砥面変色 (褐灰色)
368	砥石	砂岩	K 16	IV	(14.3)	(8.3)	(1.9)	(334.8)	自然礫利用、溝状凹面有り
424	火打ち石	玉髄	G 10	—	3.9	2.3	1.3	11.3	黒変、赤褐色付着物 (鉄分?) 有り
425	石盤	粘板岩	—	—	(2.5)	(2.6)	0.3	(2.5)	角部、沈線 (方眼) 有り
426	石盤	粘板岩	K 12	IV	(2.2)	(2.4)	(0.3)	(2.1)	角部

第8表 遺物計測表②（鉄器）

遺物 番号	器 種	出土地点		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g重)	備 考
		遺構・Gr	層位					
225	鉄鏃	S A 8	—	3.9	1.5	0.4	4.7	平基（砲弾形）
273	鉄鏃？	S A 11	—	(3.1)	2.1	0.3	(15.3)	木片に繊維質状のもので固定、折り返し部有り ※計測値は鉄部のみ（重さは木片等も含む）
369	鈍	F 10	V	(8.6)	1.7	0.2	(15.8)	茎欠損、両刃
370	刀子	—	IV	(4.1)	1.0	0.2	(3.2)	小型、棟関タイプ、鋒・茎欠損

第9表 遺物計測表③（軽石加工品等）

遺物 番号	器 種	出土地点		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g重)	備 考
		遺構・Gr	層位					
371	軽石加工品	S A 6	—	12.8	13.2	4.8	152.5	加工（研磨凹）痕＝陰石の可能性有り
372	軽石加工品	S A 1	—	5.5	4.7	3.4	16.7	穿孔（貫通）より折損
373	軽石加工品	S A 4	—	8.8	6.5	3.7	56.4	穿孔（未貫通）
374	軽石加工品	S A 10	—	7.6	5.3	2.7	20.0	穿孔（未貫通）
375	軽石加工品	S A 10	—	6.4	4.4	2.3	11.4	穿孔（未貫通）
376	軽石加工品	S A 11	—	6.8	5.6	3.3	27.7	表裏両面から同位置に穿孔（未貫通）
377	軽石加工品	S A 10	—	8.2	8.1	6.6	84.4	研磨による面取り（2面）、表裏両面から同位置に穿孔（未貫通）
378	軽石加工品	S A 10	—	4.7	3.6	2.2	8.2	研磨による面取り（ほぼ全面）
379	軽石加工品	S A 4	—	9.5	11.1	3.7	79.5	研磨による面取り（2面）
380	軽石加工品	S A 4	—	5.4	5.8	3.8	16.5	研磨による面取り（2面）
381	軽石加工品	S A 6	—	9.0	10.2	5.9	90.2	研磨による面取り（2面）
382	軽石加工品	J 16	—	3.8	4.8	2.7	12.8	研磨による面取り（2面）、赤変（被熱？）
383	軽石加工品	K 15	IV	15.3	9.0	4.5	129.2	研磨による面取り（1面）
384	軽石加工品	I 18	IV	6.7	6.3	4.4	42.3	研磨による面取り（複数面）、複数列の線条痕
385	軽石加工品	S A 3	—	5.4	5.2	2.9	15.5	加工（研磨）痕の可能性有り
386	軽石加工品	S A 4	—	17.3	10.9	6.3	379.7	器形を整えている可能性有り
387	軽石加工品	S A 10	—	12.8	12.8	4.4	157.1	器形を整えている可能性有り
388	軽石加工品	S A 10	—	15.0	8.3	5.0	152.8	器形を整えている可能性有り
389	軽石加工品？	I 13	—	10.3	7.4	6.4	74.9	風化著しい（研磨面の可能性有り）
390	軽石加工品？	I 15	IV	5.9	7.0	3.1	26.4	風化著しい（研磨面の可能性有り）
391	軽石素材	S A 7	—	5.7	5.0	2.4	10.2	赤変（被熱？）
392	軽石素材	一括	—	2.8	2.7	2.1	4.9	赤変（被熱？）
393	軽石素材	S A 3	—	13.2	6.0	5.6	81.0	
394	軽石素材	S A 6	—	9.6	6.2	5.4	70.4	
395	軽石素材	S A 10	—	5.6	7.8	4.2	30.8	
396	軽石素材	S A 10	—	6.9	5.4	3.0	30.1	
397	軽石素材	S A 10	—	7.3	4.9	2.6	22.0	
398	軽石素材	S A 10	—	6.5	4.3	3.1	15.3	
399	軽石素材	S C 7	—	6.2	5.8	2.6	20.0	
400	軽石素材	G 10	V	10.7	8.7	5.8	133.4	
401	軽石素材	I 14	IV	7.8	4.7	2.7	21.5	

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2 試料と方法

試料No	地点・層準	種類	前処理	測定法
No.1	試料1, SA1	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	試料2, SA2/P1内	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	試料3, SA4/No.23	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	試料4, SA6/No.1	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	試料5, SZ1/一括	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.6	試料6, SA7/P2内	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.7	試料8, SA9/No.2 (炉内)	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.8	試料11, SA11/No.69	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.9	試料23, SA12/No.7	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.10	試料24, X層 (Sz-11) No.1	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3 測定結果

第10表に放射性炭素年代測定結果および暦年代 (較正年代) を示し、第68図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

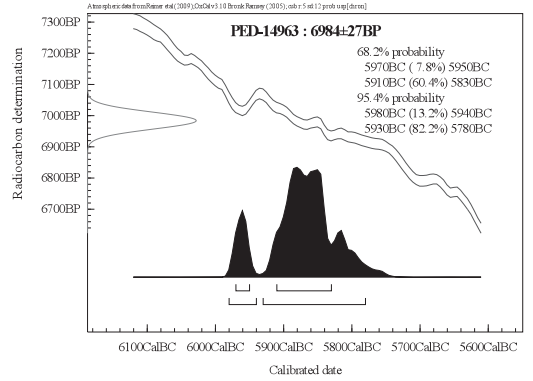
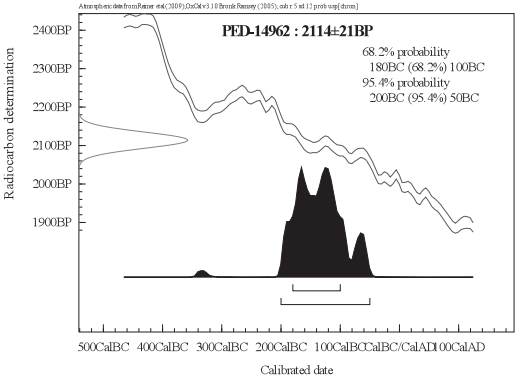
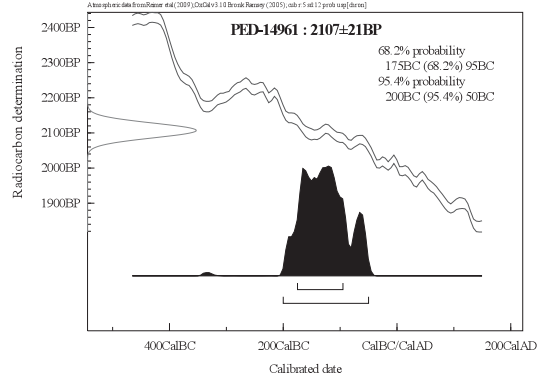
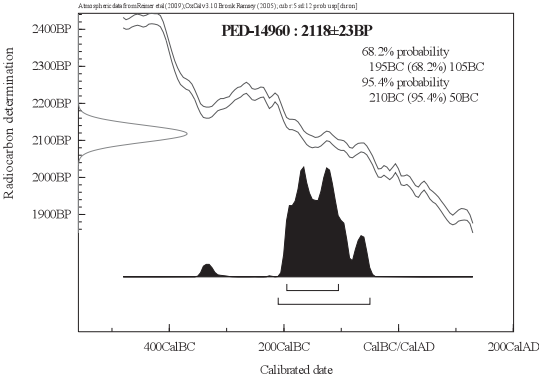
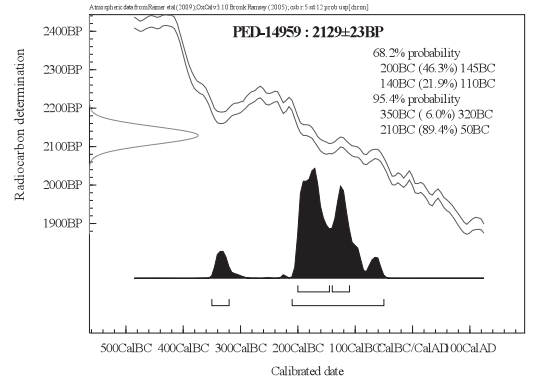
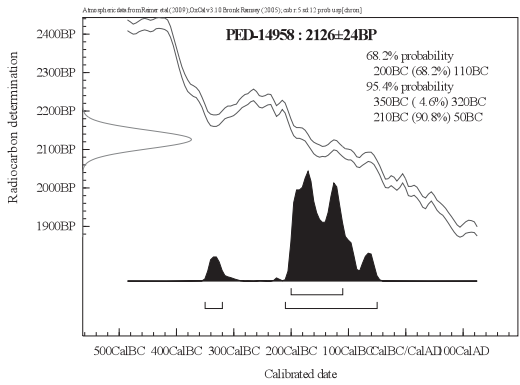
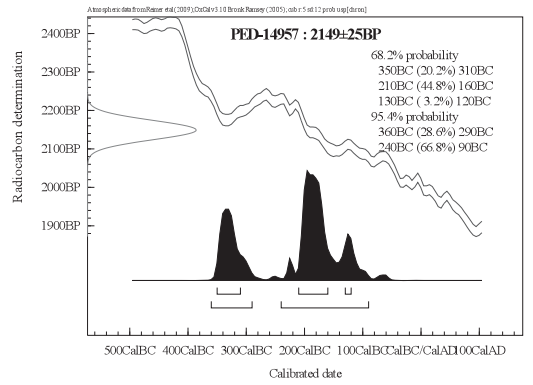
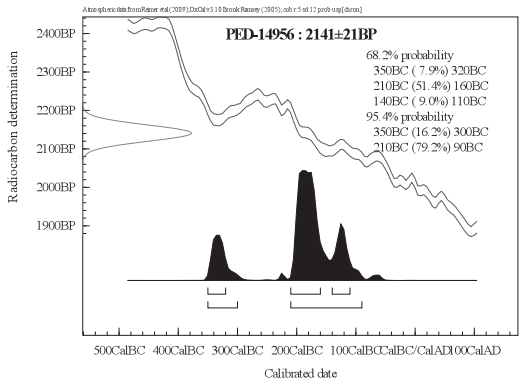
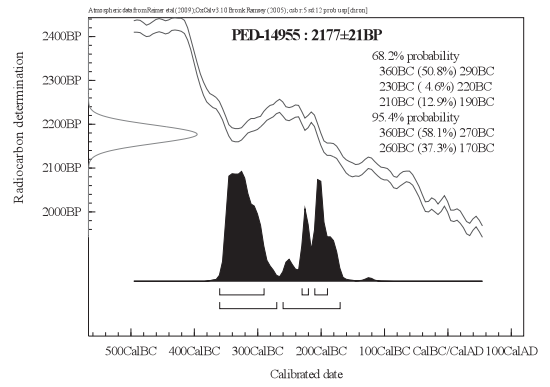
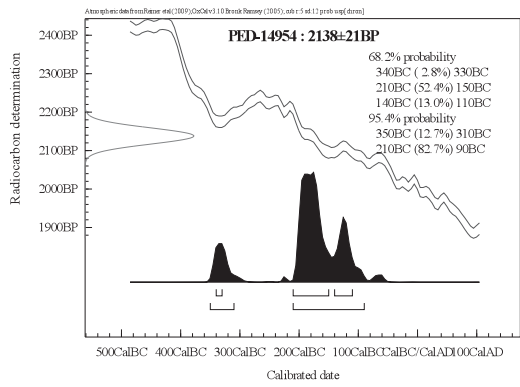
(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。

(3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データはIntCal 04、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第68図 曆年校正結果

第10表 放射性炭素年代測定結果

試料 No	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (較正年代)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	14954	-27.91 ± 0.16	2140 ± 20	BC340-330 (2.8%) BC210-150 (52.4%) BC140-110 (13.0%)	BC350-310 (12.7%) BC210-90 (82.7%)
2	14955	-28.22 ± 0.16	2175 ± 20	BC360-290 (50.8%) BC230-220 (4.6%) BC210-190 (12.9%)	BC360-270 (58.1%) BC260-170 (37.3%)
3	14956	-26.97 ± 0.14	2140 ± 20	BC350-320 (7.9%) BC210-160 (51.4%) BC140-110 (9.0%)	BC350-300 (16.2%) BC210-90 (79.2%)
4	14957	-26.53 ± 0.31	2150 ± 25	BC350-310 (20.2%) BC210-160 (44.8%) BC130-120 (3.2%)	BC360-290 (28.6%) BC240-90 (66.8%)
5	14958	-30.09 ± 0.17	2125 ± 25	BC200-110 (68.2%)	BC350-320 (4.6%) BC210-50 (90.8%)
6	14959	-26.20 ± 0.13	2130 ± 25	BC200-145 (46.3%) BC140-110 (21.9%)	BC350-320 (6.0%) BC210-50 (89.4%)
7	14960	-24.90 ± 0.15	2120 ± 25	BC195-105 (68.2%)	BC210-50 (95.4%)
8	14961	-28.23 ± 0.12	2105 ± 20	BC175-95 (68.2%)	BC200-50 (95.4%)
9	14962	-24.88 ± 0.18	2115 ± 20	BC180-100 (68.2%)	BC200-50 (95.4%)
10	14963	-27.25 ± 0.14	6985 ± 25	BC5970-5950 (7.8%) BC5910-5830 (60.4%)	BC5980-5940 (13.2%) BC5930-5780 (82.2%)

4 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 の炭化材では2140 ± 20年BP (2 σ の暦年代でBC350~310, 210~90年)、No.2 の炭化材では2175 ± 20年BP (BC360~270, 260~170年)、No.3 の炭化材では2140 ± 20年BP (BC350~300, 210~90年)、No.4 の炭化材では2150 ± 25年BP (BC360~290, 240~90年)、No.5 の炭化材では2125 ± 25年BP (BC350~320, 210~50年)、No.6 の炭化材では2130 ± 25年BP (BC350~320, 210~50年)、No.7 の炭化材では2120 ± 25年BP (BC210~50年)、No.8 の炭化材では2105 ± 20年BP (BC200~50年)、No.9 の炭化材では2115 ± 20年BP (BC200~50年)、No.10の炭化材では6985 ± 25年BP (BC5980~5940, 5930~5780年) の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, p.1029-1058.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, p.3-20.

第2節 樹種同定

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、住居跡などから採取された炭化材24点である。試料の詳細を第11表に示す。

3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

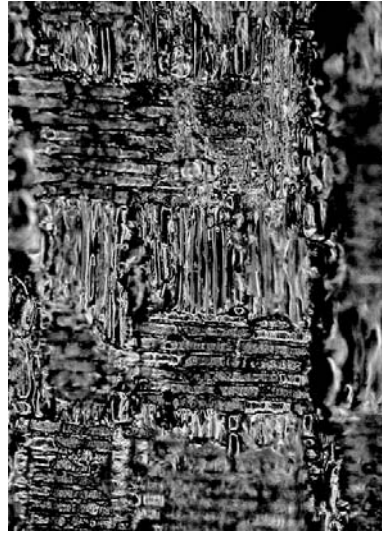
第11表に結果を示し、各試料の顕微鏡写真を第69～76図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第11表 樹種同定結果

試料No.	遺構・試料	結果（学名／和名）	
1	SA 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
2	SA 2 / P 1 内	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
3	SA 4 / No.23	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
4	SA 6 / No. 1	<i>Albizzia julibrissin</i> Durazz.	ネムノキ
5	SZ 1 / 一括	<i>Styrax</i>	エゴノキ属
6	SA 7 / P 2 内	<i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch	イヌガヤ
7	SA 8 / No.57	<i>Kalopanax pictus</i> Nakai	ハリギリ
8	SA 9 / No. 2 (炉内)	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
9	SA11/No.52	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
10	SA11/No.68	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属
11	SA11/No.69	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
12	SA11/No.76	Lauraceae	クスノキ科
13	SA11/No.81	<i>Prunus spinulosa</i> Sieb. et Zucc.	リンボク
14	SA11/No.106	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
15	SA11/No.177	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
16	SA11/No.216	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
17	SA11/No.225	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
18	SA11/No.263	<i>Morus australis</i> Poiret	ヤマゲワ
19	SA11/No.293	<i>Albizzia julibrissin</i> Durazz.	ネムノキ
20	SA11/No.299	Lauraceae	クスノキ科
21	SA11/No.479	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
22	SA11/No.480	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
23	SA12/No. 7	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
24	X層 (Sz-11) No. 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節



横断面 ————— : 0.4mm
1. SA1 コナラ属クヌギ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



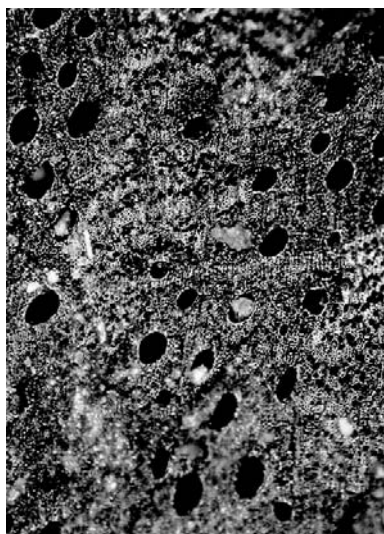
横断面 ————— : 0.4mm
2. SA2/P1内 クリ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
3. SA4/No.23 コナラ属アカガシ亜属



放射断面 ————— : 0.2mm

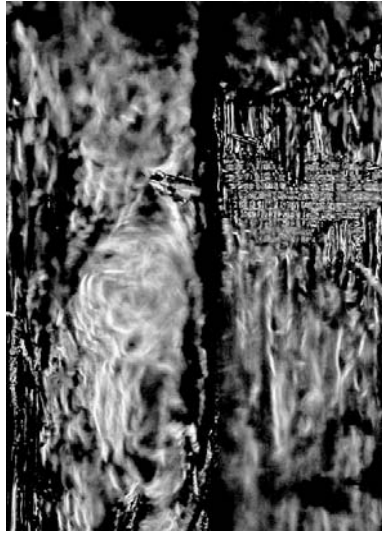


接線断面 ————— : 0.2mm

第69図 働女木遺跡の炭化材 I



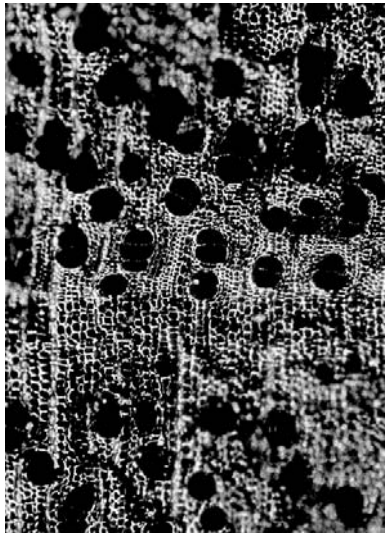
横断面 ————— : 0.4mm
4. SA6/No.1 ネムノキ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
5. SZ1/一括 エゴノキ属



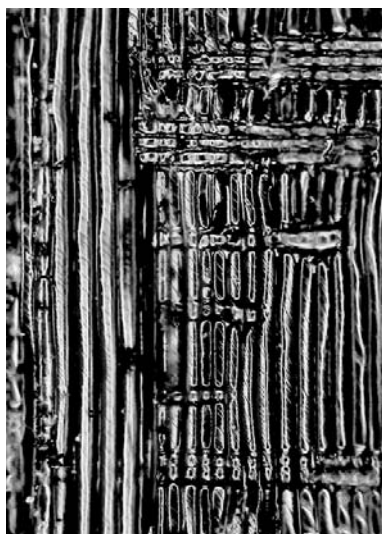
放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
6. SA7/P2内 イヌガヤ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.1mm

第70図 働女木遺跡の炭化材Ⅱ



横断面 ————— : 0.4mm
7. SA 8 / No.57 ハリギリ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
8. SA 9 / No.2 (炉内) カヤ



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.1mm



横断面 ————— : 0.4mm
9. SA11 / No.52 コナラ属コナラ節

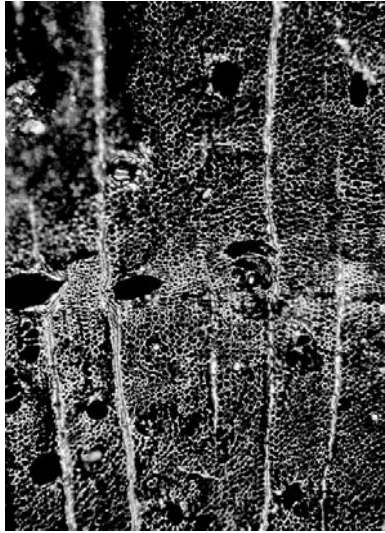


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

第71図 働女木遺跡の炭化材Ⅲ



横断面 ————— : 0.4mm
10 . SA11/ No.68 サンショウ属



放射断面 ————— : 0.2mm



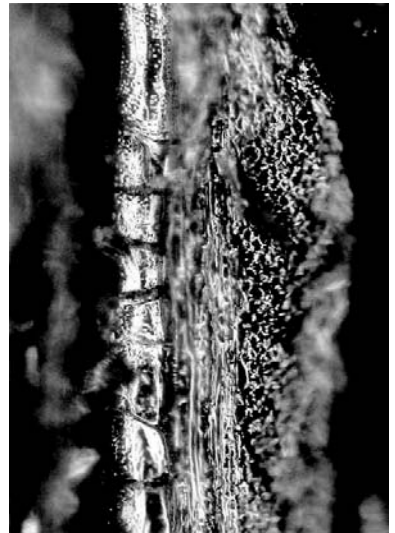
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
11 . SA11/ No.69 コナラ属コナラ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
12 . SA11/ No.76 クスノキ科

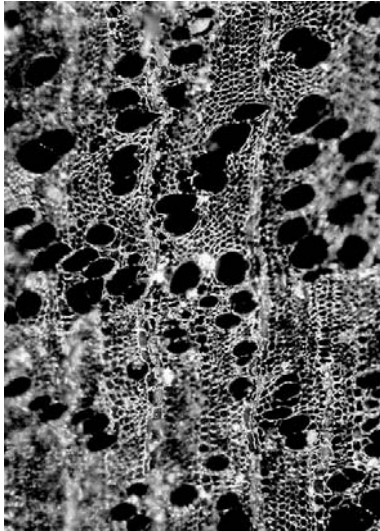


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

第72図 働女木遺跡の炭化材Ⅳ



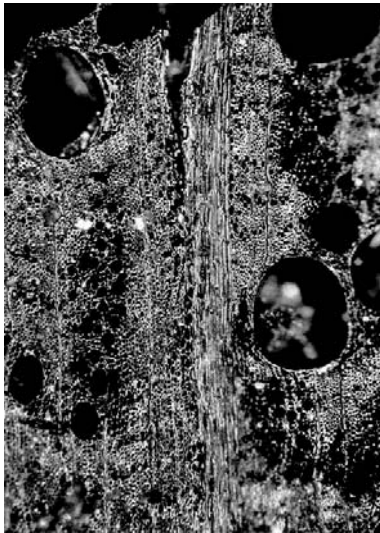
横断面 ————— : 0.2mm
13 . SA11/ No.81 リンボク



放射断面 ————— : 0.2mm



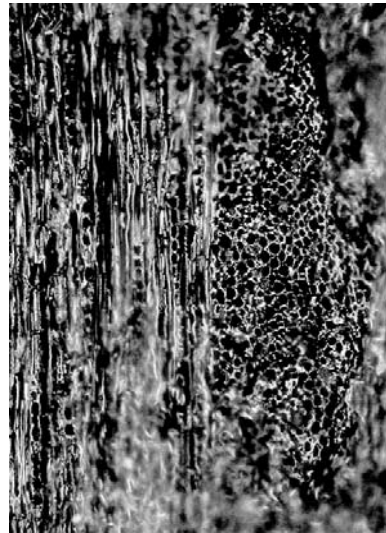
接線断面 ————— : 0.2mm



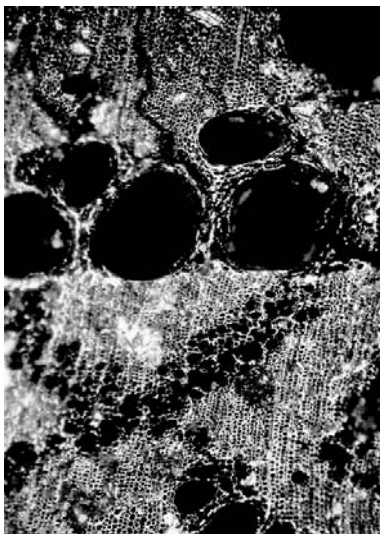
横断面 ————— : 0.4mm
14 . SA11/ No.106 コナラ属コナラ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm
15 . SA11/ No.177 クリ



放射断面 ————— : 0.2mm

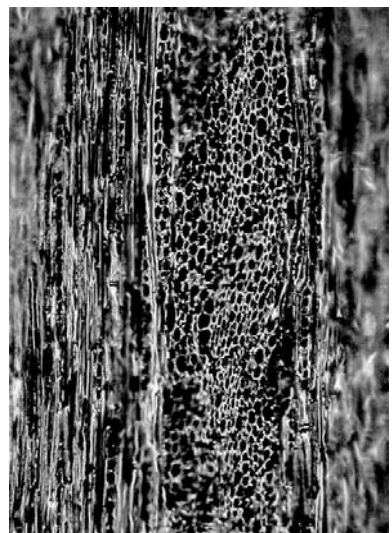


接線断面 ————— : 0.2mm

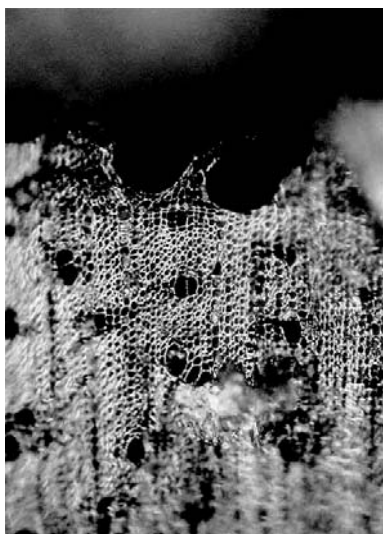
第73図 働女木遺跡の炭化材V



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 16 . SA11/ No.216 コナラ属コナラ節

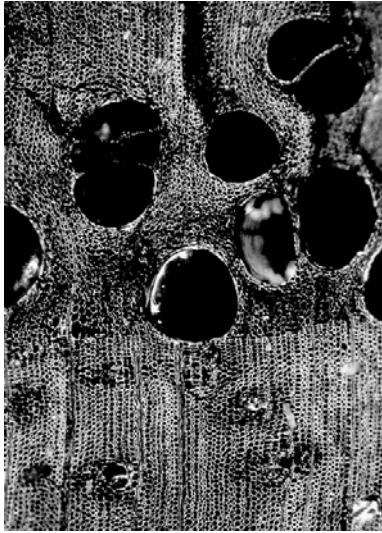


横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 17 . SA11/ No.225 コナラ属コナラ節

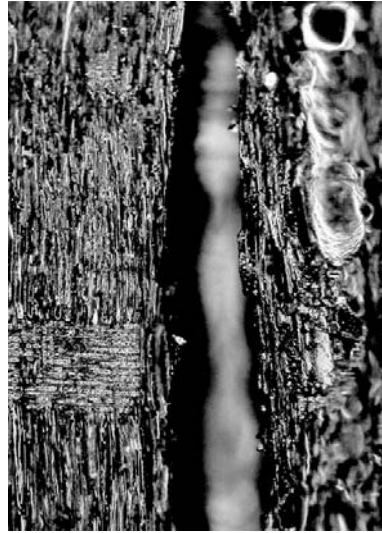


横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 18 . SA11/ No.263 ヤマグワ

第74図 働女木遺跡の炭化材Ⅵ



横断面 : 0.4mm
19 . SA11/ No.293 ネムノキ



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm



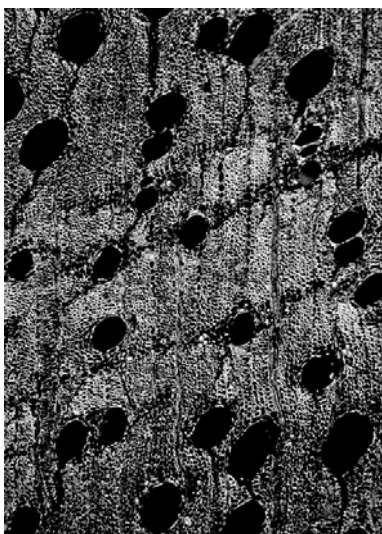
横断面 : 0.2mm
20 . SA11/ No.299 クスノキ科



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm
21 . SA11/ No.479 ムクノキ

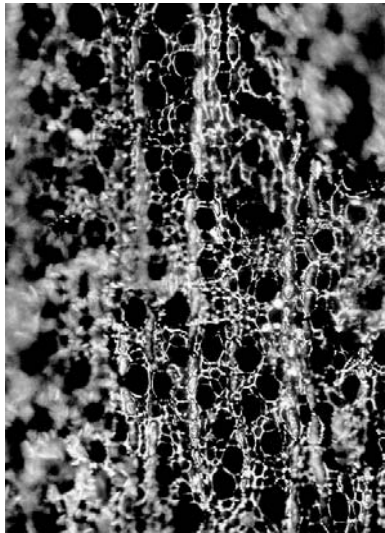


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

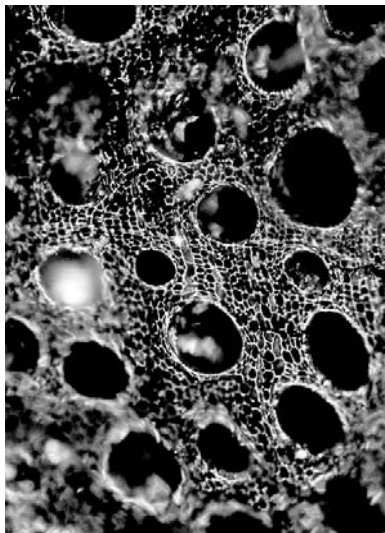
第75図 働女木遺跡の炭化材Ⅶ



横断面 ————— : 0.2mm
22 . SA11/ No.480 サカキ

放射断面 ————— : 0.2mm

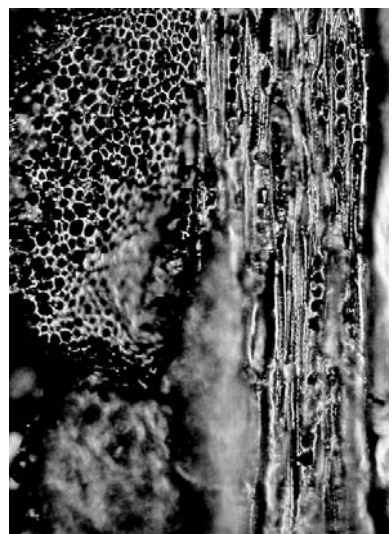
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm
23 . SA12/ No.7 コナラ属アカガシ亜属

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.1mm



横断面 ————— : 0.4mm
24 . X層 (Sz-11) No.1 コナラ属クヌギ節

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

第76図 働女木遺跡の炭化材Ⅷ

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真8

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 写真6

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真2・15

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真9・11・14・16・17

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 写真1・24

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真3・23

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. ニレ科 写真21

横断面：中型から小型で厚壁の放射方向にのびた道管が年輪界にむけて径を減少しながら、単独あるいは2～3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では数細胞幅で帯状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 写真18

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、靱性に富み、建築などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae 写真12・20

横断面：中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

リンボク *Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc. バラ科 写真13

横断面：小型の道管が2～4個放射方向に複合するものが多く、全体として斜線方向に配列する傾向を示して、散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織

は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりリンボクに同定される。リンボクは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で高さ15m、径40cmに達する。

ネムノキ *Albizzia julibrissin* Durazz. マメ科 写真4・19

横断面：年輪のはじめに大型で丸い道管が数列配列する環孔材である。晩材部では、小道管が単独および放射方向に数個複合し、木部柔組織が小道管を包み、鞘状および翼状を示す。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりネムノキに同定される。ネムノキは本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10m、径30cmであるが、大きいものは高さ20m、径40cmに達する。材は耐朽、保存性は低く、建築、器具、ろくろ、細工、下駄、薪炭などに用いられる。

サンショウ属 *Zanthoxylum* ミカン科 写真10

横断面：やや小型で丸い道管が単独あるいは2個放射方向に複合して散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。軸方向柔細胞がターミナル状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサンショウ属に同定される。サンショウ属には、カラスザンショウ、イヌザンショウ、サンショウなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の低木から高木、または藤本である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真22

横断面：小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ハリギリ *Kalopanax pictus* Nakai ウコギ科 写真7

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1列配列する環孔材である。孔圏部外では小型の道管が多数複合して接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織はほとんど平伏細胞であるが、上下の縁辺部には方形細胞が見られる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～5細胞幅である。

以上の形質よりハリギリに同定される。ハリギリは、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 写真5

横断面：年輪のはじめにやや小型で丸い道管がおもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が晩材部において接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

5 所見

樹種同定の結果、住居跡などから採取された24点の炭化材は、コナラ属コナラ節5点、コナラ属クヌギ節2点、クリ2点、コナラ属アカガシ亜属2点、クスノキ科2点、ネムノキ2点、カヤ1点、イヌガヤ1点、ムクノキ1点、ヤマグワ1点、リンボク1点、サンショウ属1点、サカキ1点、ハリギリ1点、エゴノキ属1点と同定された。

コナラ属コナラ節（ナラガシワ、コナラなど）、コナラ属クヌギ節（クヌギ、アベマキ）、クリ、リンボクは、温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素のものもある。コナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木で、イチイガシや二次林性のアラカシなどがある。クスノキ科、サカキは照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。ムクノキ、ネムノキ、エゴノキ属は暖地の山地の谷間などに生育する常緑高木である。ハリギリは暖温帯から亜寒帯と分布域が広い。サンショウ属は暖温帯から熱帯に分布する。カヤとイヌガヤは針葉樹であり、谷沿いなどやや湿潤なところに生育する。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別1号．植生史研究会，242p.

第3節 種実分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

本分析調査では、働女木遺跡（宮崎県都城市五十町に所在）の発掘調査で検出された竪穴建物跡と集石遺構の埋土を対象として、洗い出しによる種実の回収と同定を実施し、その結果に基づき当時の利用状況に関する資料を得る。

2 試料

試料は、SA4 竪穴住居跡・炉埋土（試料No.1）、SZ1 竪穴状遺構・灰（試料No.2）と炉埋土（試料No.3）、SA8 竪穴住居跡・焼土（試料No.4）、SA9 竪穴住居跡・炉埋土（試料No.5）、SA10 竪穴住居跡・焼土（試料No.6）と炉埋土（試料No.7）、SA11 竪穴住居跡・出土土器（263甕）埋土下部（試料No.8）、SA12 竪穴住居跡・炉埋土（試料No.9）、SI1 集石遺構・埋土（試料No.10）の計10点である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

3 分析方法

試料は、SZ1 灰（試料No.2）のみ炭化物を含む灰白色シルトで、他9点は黄褐色の軽石を多量含む黄～暗灰褐色シルトである。本分析では、炭化種実の回収を目的として、以下の方法を実施する。

試料全量（各1.2kg～4.1kg、計20.8kg）を容器に広げて常温で数日乾燥させた後、肉眼やルーペで観察し、目に付いた炭化物を拾い出す。水を満たした容器に試料を投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20-30回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実、炭化材（主に径4mm以上）、土器片などの遺物を拾い出す。

拾い出した種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から部位と種類を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は、70℃48時間乾燥後の重量と最大径を表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて保管する。

4 結果

結果を第12表に示す。木本2分類群（針葉樹のスギ、常緑広葉樹のヒサカキ）10個、草本11分類群（イネ、オヒシバ、カヤツリグサ属、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、ヒユ科、マメ類、チドメグサ属、キランソウ属、エゴマ、キク科）46個、計56個の種実と葉が抽出同定されたほか、双子葉類の種実6個、不明種実2個、炭化材6.67g（最大径1.4cm：SZ1）、不明炭化物36個、菌類の菌核74個、土器片1個（SA10）が確認された。

栽培種は、イネの穎2個（SA10焼土）、胚乳21個（SA9：1個、SA10焼土：6個、SA10炉埋土：2個、SA11：3個、SA12：9個）、マメ類の種子1個（SA12）、エゴマの果実2個（SA12）の計26個が確認され、全て炭化している。

一方、スギ、ヒサカキ、オヒシバ、カヤツリグサ属、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種（SA12）、ヒユ

科、チドメグサ属、キランソウ属、キク科は、炭化が認められず良好な遺存状態であった。これらの炭化していない分類群は、後代より混入した可能性が高いと判断されるため、結果表示にとどめている。

第12表 種実分析結果

分類群	部位	状態	試料No.1	試料No.2	試料No.3	試料No.4	試料No.5	試料No.6	試料No.7	試料No.8	試料No.9	試料No.10
			SA 4 竪穴住居跡	SZ 1 竪穴状遺構	SZ 1 竪穴状遺構	SA 8 竪穴住居跡	SA 9 竪穴住居跡	SA10 竪穴住居跡	SA10 竪穴住居跡	SA11 竪穴住居跡	SA12 竪穴住居跡	SI 1 集石遺構
炭化している分類群			炉埋土	灰	炉埋土	焼土	炉埋土	焼土	炉埋土	出土土器 埋土下部	炉埋土	埋土
イネ	穎	破片(基部)						2				
	穎・胚乳	破片						1				
	胚乳	完形					1		1	2	1	
		破片						5	1	1	8	
サナエタデ近似種	果実	完形			1							
マメ類	種子	完形									1	
エゴマ	果実	完形									2	
双子葉類	種実	破片									6	
不明種実		完形									2	
炭化していない分類群												
スギ	種子	完形	1	1	1		1	2				1
	葉	破片	1						1			
ヒサカキ	葉	完形						1				
オヒシバ	種子	完形						1				
カヤツリグサ属	果実	完形		1	7							
イヌタデ近似種	果実	完形			1						1	
サナエタデ近似種	果実	完形									1	
ヒユ科	種子	完形			4							
チドメグサ属	果実	破片						1				
キランソウ属	果実	完形									1	
キク科	果実	完形						1				
その他												
炭化材(乾燥重量)			0.51g	2.65g	0.79g	0.32g	1.01g	0.21g	0.10g	0.41g	<0.01g	0.67g
炭化材(最大径)			9.9mm	14.3mm	7.8mm	9.7mm	13.0mm	8.8mm	9.9mm	13.3mm	2.6mm	12.0mm
不明炭化物			1	4				6	1	5	19	
菌核			2		67	1			4			
土器								1				
分析残渣		345.76g	231.94g	534.56g	316.11g	602.22g	456.63g	313.41g	364.94g	515.88g	481.43g	
分析残渣(炭化材主体)		5.73g	0.88g									
分析量		1753.88g	4106.62g	2056.12g	1269.42g	2457.37g	1650.79g	1410.09g	1165.61g	2258.25g	2660.33g	

以下に、同定された炭化種実の形態的特徴等を記す。

イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳、穎(果)は炭化しており黒色。胚乳は長さ4.5~5.8mm、幅2.3~3mm、厚さ1.5~2mm程度のやや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が縦列する。表面に穎の破片が付着する個体もみられる(SA10焼土)。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲糊を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は果実序柄が確認され、大きさは1.2mm程度。

サナエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実は炭化しており黒色、長さ2mm、幅1.4mm程度の偏平な広卵状二面体。頂部はやや尖り、2花柱を欠損する。基部には径0.4mm程度の萼があり、先が2つに分かれ反り返る花被の脈を欠損する。両面中央はやや凹む。果皮表面はやや平滑。

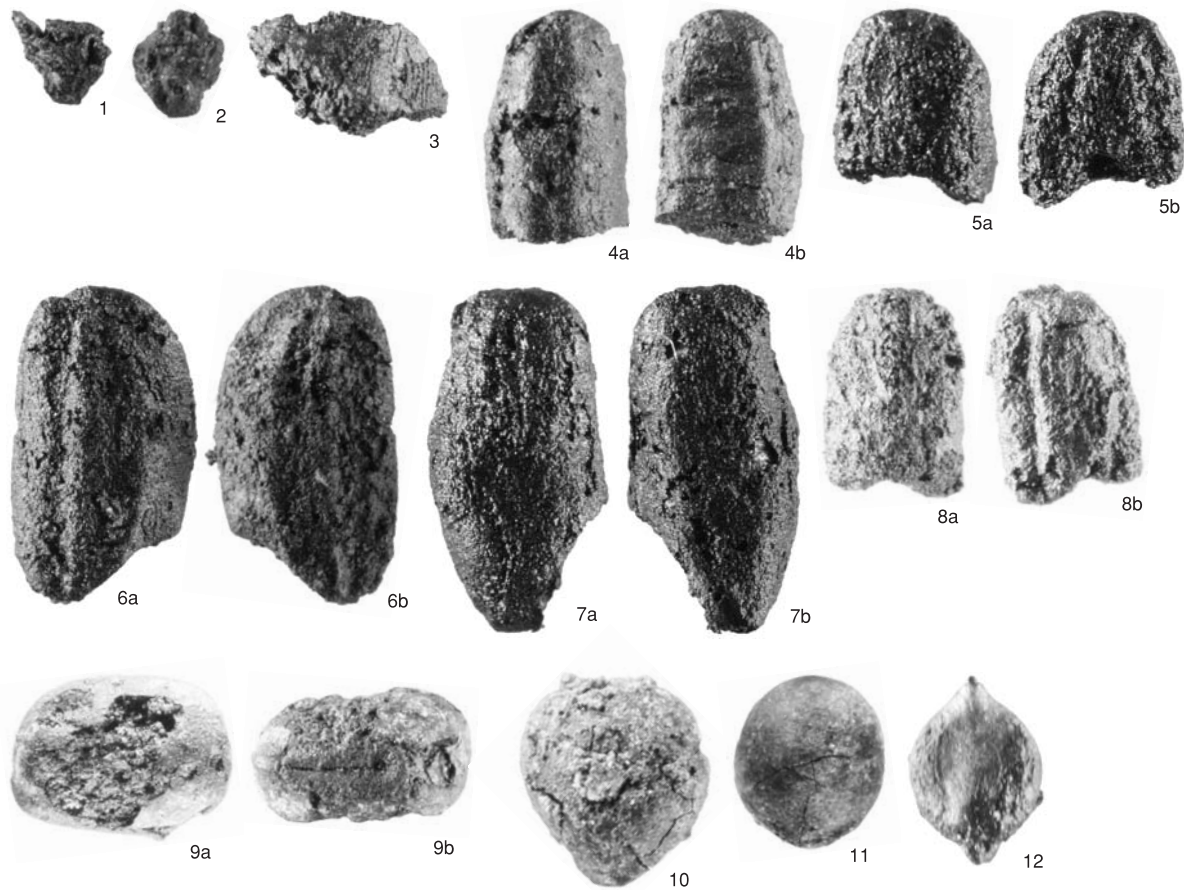
マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子は炭化しており黒色、長さ3.8mm、幅2.7mm、厚さ2.1mm程度の楕円体。腹面の子葉合わせ目上には、長さ2.2mm、幅0.5mm程度の細長い長楕円形の臍と、臍の中央に長さ1.8mm程度の縦溝がある。臍の両端には種瘤と珠

孔がある。種皮表面はやや平滑で、表面が崩れている個体もある。出土種子はアズキ型（小畑,2008）の大きさと形態的特徴を示している。

エゴマ（*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara） シソ科シソ属

果実は炭化しており黒色。径1.8～2.2mm程度の倒広卵体。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。



1mm 2mm
(1~3,10~12) (4~9)

1. イネ 穎 (試料No.6 ; SA10竪穴住居跡・焼土)
2. イネ 穎 (試料No.6 ; SA10竪穴住居跡・焼土)
3. イネ 穎・胚乳 (試料No.6 ; SA10竪穴住居跡・焼土)
4. イネ 穎 (試料No.5 ; SA 9 竪穴住居跡・炉埋土)
5. イネ 穎 (試料No.7 ; SA10竪穴住居跡・炉埋土)
6. イネ 胚乳 (試料No.8 ; SA11竪穴住居跡・出土土器 (263甕) 埋土下部)
7. イネ 胚乳 (試料No.8 ; SA11竪穴住居跡・出土土器 (263甕) 埋土下部)
8. イネ 胚乳 (試料No.9 ; SA12竪穴住居跡・炉埋土)
9. マメ類 種子 (試料No.9 ; SA12竪穴住居跡・炉埋土)
10. エゴマ 果実 (試料No.9 ; SA12竪穴住居跡・炉埋土)
11. エゴマ 果実 (試料No.9 ; SA12竪穴住居跡・炉埋土)
12. サナエタデ近似種 果実 (試料No.3 ; SZ 1 竪穴状遺構・炉埋土)

第77図 種実遺体

5 考察

各遺構埋土を洗い出した結果、炭化した種実遺体では、栽培種のイネの穎2個、胚乳21個、マメ類の種子1個、エゴマの果実2個が確認された。イネは、SA9 堅穴住居跡・炉埋土、SA10 堅穴住居跡・焼土及び炉跡埋土、SA11 堅穴住居跡・出土土器（263甕）埋土下部、SA12 堅穴住居跡・炉埋土から可食部である胚乳が確認されたほか、SA10 堅穴住居跡・焼土から穎が確認された。マメ類とエゴマは、SA12 堅穴住居跡・炉埋土から確認された。これらの炭化した栽培種の種実は、当時の働女木遺跡周辺で利用されていた植物質食糧と示唆され、住居内に持ち込まれ、何らかの理由により火を受け炭化残存したことが考えられる。

栽培種を除いた分類群では、草本のサナエタデ（近似種）の果実がSZ1 堅穴状遺構・炉埋土から1個確認された。サナエタデは、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する種であることから、調査地周辺域の草地環境に生育していたものに由来すると考えられる。

引用文献

- 石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p．
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p．
- 小畑弘巳，2008，マメ科種子同定法．「極東先史古代の雑穀3」，日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金（基盤B-2）（課題番号16320110）「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書，小畑弘巳編，熊本大学埋蔵文化財調査室，225-252．

第4節 坩堝破片（No.411）の分析

株式会社 九州テクノリサーチ・TACセンター

1 いきさつ

働女木遺跡は宮崎県都城市に所在する。弥生時代の集落遺跡である。調査地区からは、小型の坩堝破片（No.411；M12グリッド一括遺物）が検出された。同坩堝で何が溶解されて、どのような製品が製作されたのかを検討する目的から、分析調査を実施する運びとなった。

2 調査方法

（1）肉眼観察

遺物の外観の観察所見を記載した。この所見をもとに供試材の採取位置を決定している。

（2）顕微鏡組織

坩堝胎土の被熱状態、表面のガラス質滓やその内部の溶着金属粒の調査を目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。なお金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（3）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

坩堝表面のガラス質滓および溶着金属粒の組成調査を目的とする。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される物質ほど明るく、軽い元素で構成される物質ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

3 調査結果

（1）肉眼観察

手づくねを想わせる歪をもつつくりで、小型坩堝の口縁部破片である。表層部は熱影響を受けて、薄くガラス質化している。ガラス質滓は広い範囲でやや赤みを帯びており、銅酸化物（CuO）による発色の可能性が考えられる。胎土部分は灰褐色の粘土質で、粉殻を混和している。また全体に練りが甘いため、複数個所でひび割れがみられる。

（2）顕微鏡組織

第78図①～④に示す。②は坩堝先端（口唇部）断面である。表層はガラス質化しており、その内部には非常に微細な橙色の金属粒が多数点在している。①は外面表層、③④は内面表層の溶着金属の拡大である。

（3）EPMA調査

第78図⑤にガラス質滓中の溶着金属（第78図①と同一粒）の反射電子像（COMP）を示す。金属粒は特性X線像では銅（Cu）に強い反応があり、定量分析値は分析点1が96.8%Cu、2は92.0%Cu-1.6%Asであった。前者は純銅に近い組成で、後者は砒素（As）を少量固溶する。これは銅鉱石起源の不純物と推測される。

また5の素地部分の定量分析値は55.7%SiO₂-19.5%Al₂O₃-9.7%CaO-1.9%MgO-2.9%K₂O-2.7%Na₂Oであった。非晶質珪酸塩である。

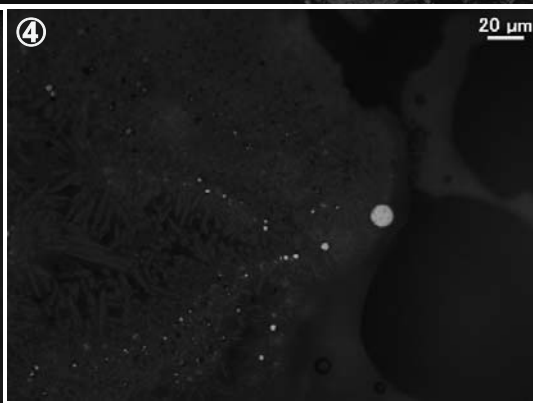
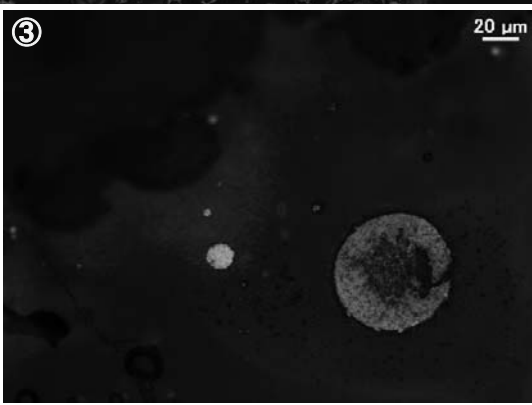
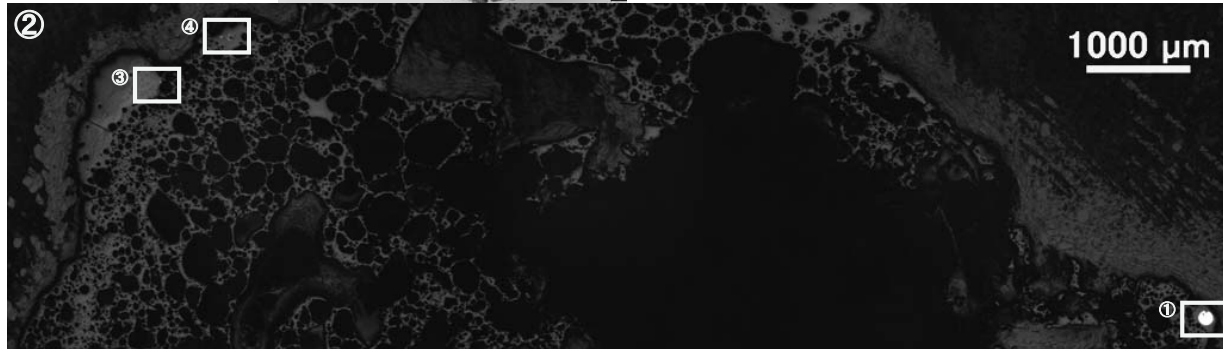
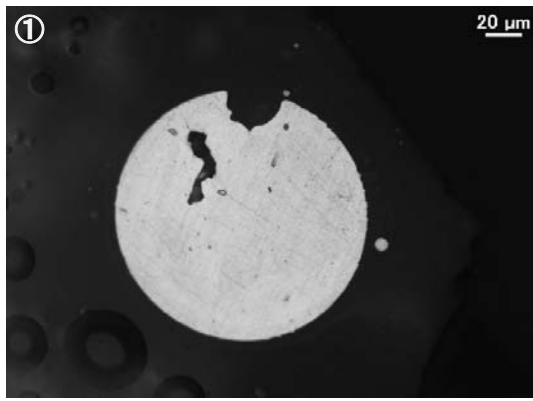
4 まとめ

働女木遺跡出土坩堝破片を分析調査した結果、以下の点が明らかとなった。

坩堝表面のガラス質滓中には、非常に微細な橙色の金属粒が多数散在する。EPMA調査の結果、これらは銅（Cu）粒であり、錫（Sn）鉛（Pb）などの元素はほとんど含まれないことが明らかになった。当坩堝では青銅ではなく、銅地金を溶解して小物等を製作している。

働女木遺跡は弥生時代の遺跡である。しかし、胎土中には粉殻を混和しており、古代に属する坩堝を感じさせる。歪をもつ手づくね的つくりは古い時代を全面的に否定は出来ない。今後の調査の類例を待ちつつ結論を出すべきであろう。

No.411 坩堝
 ① ②の拡大、外面側表層ガラス質滓中の微細銅粒
 ②坩堝口唇部断面
 ③④ ②の拡大、内面側表層ガラス質滓中の微細銅粒



定量分析値				
Element	1	2	Element	5
P	0.156	0.136	Na ₂ O	2.656
S	0.042	0.094	MgO	1.909
V	0.008	-	Al ₂ O ₃	19.477
Mn	0.041	-	SiO ₂	55.712
Fe	0.027	0.576	P ₂ O ₅	0.447
Co	-	0.020	S	-
Ni	-	-	K ₂ O	2.888
Cu	96.848	91.956	CaO	9.696
Zn	0.145	0.092	TiO ₂	0.731
As	0.290	1.604	Cr ₂ O ₃	-
Sn	0.047	-	MnO	0.189
Sb	0.016	0.061	FeO	5.006
Total	97.620	94.539	Total	98.711

ガラス質滓中の微細銅粒の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第78図 坩堝の顕微鏡組織・EPMA調査結果

第V章 総括

働女木遺跡は、南北を東流する大淀川とその支流（野間谷川）の侵食によって形成された標高170～180mのシラス台地上に立地する遺跡群の一つである。今回の調査により、遺構・遺物ともに縄文時代早期のものから確認することができ、調査区付近一帯では弥生時代後期に至るまで、断続的ながらも連続と受け継がれていった人々の営みを今回の調査により垣間見ることができた。特に、弥生時代に関しては、竪穴建物跡をはじめ、掘立柱建物跡、土壙墓等といった当時の生活文化を如実に示す遺構を比較的良好な状態で検出することができた。これらは、当地域での弥生時代の集落形成や単位生活集団の在り方等を知る上でも貴重な資料であると考えられる。

ここでは、働女木遺跡の検出遺構・出土遺物に関して時代ごとに解釈を加え、遺跡の位置づけを図りたい。

第1節 縄文時代について

早期

早期については、16箇所の確認トレンチを設定し調査を行った。その結果、Tr1で集石遺構1基、Tr5で土坑1基・ピット6基の遺構を確認することができた。遺物は少量ながら、Tr1・2・4・5で早期中葉の石坂式・桑ノ丸式等の貝殻文円筒形の土器片（6点）や早期後葉の手向山式の押型文土器片（1点）、塞ノ神B式に属すると考えられる土器片（4点）等が出土した。また、石器類としては黒曜石（姫島産）製の打製石鏃をはじめ、石錐・磨石・石核・剥片等がTr2から出土しており、その他のトレンチではTr6においてチャート製の打製石鏃が1点出土しただけであった。これらの結果から、早期の遺構・遺物はともに調査区の北側に集中する傾向が見られ、中央部から南側にかけては打製石鏃1点のみの出土にとどまる。そのため、当時の生活圏は北側の緩やかな傾斜面付近にあったと想定できる。この他、特筆すべき点として以下の二点を挙げておきたい。

まず、集石遺構についてである。遺構付近のほぼ同レベルにおいて手向山式の押型文土器が出土していることから、手向山式と並行期の集石遺構である可能性が考えられる。

次に、Tr2から出土した計11点の珪質岩製の石核・剥片についてである。同様のものは、当該期の近隣の遺跡ではほとんど確認されていない。この珪質岩には白色と灰色部分が見られ、白色部分は風化が著しく石材として耐え得るようなものではないが、灰色部分に関しては加工もしやすく石材としての強度も見られ、17（剥片）には明確な加工痕も認められる。この石材は、Tr2以外の他の16箇所のトレンチでは1点も確認されていないということも付言しておきたい。

以上、早期の概要に触れてきたが、近隣の同台地上の岩立遺跡においても規模こそ異なるものの集石遺構31基が検出され、貝殻文円筒形土器や押型文土器が出土している。本遺跡が、当該期の同じ生活文化圏であったことを窺わせる調査成果であったと言える。

前期

都城市内の遺跡では、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）降灰の影響のためか、前期の調査成果は極めて希薄である。本遺跡においても遺構を検出するには至らなかった。出土遺物としては、曾畑式系統に属すると考えられる土器片（6点）と、黒曜石製の石核や二次加工の認められる剥片、チャート製の石錐等の石器類（計

8点)が出土した。36(土器片)を除き、土器・石器類全てがTr1からの出土となる。曾畑式の出土例に関しては、都城市内では梅北地区の笹ヶ崎遺跡など数えるほどしかなく、本遺跡における出土遺物は少数の破片ながら貴重な資料と成り得るものである。また石器類についても、点数こそ少ないものの黒曜石製の剥片が目立ち、石器素材として黒曜石を用いる割合が高かったことが窺える。

後・晩期

後・晩期についても遺構は検出できなかったものの、当初の予想を上回る良好な資料を得ることができた。

出土遺物を大きく分類すると、後期後半の磨消縄文系の西平式深鉢、黒色磨研系の三万田式(中岳Ⅰ・Ⅱ式)鉢・深鉢、後期末葉から晩期初頭にかけての入佐式浅鉢・深鉢、晩期の黒川式浅鉢・深鉢、松添式深鉢、晩期から弥生初頭の組織痕土器等である。また石器類としては、当該期の打製石鏃の特徴とも言える五角形鏃や、土掘り具として使用されたと考えられる大小様々な打製石斧等が出土した。器種により石材を使い分けている傾向が見られたため、関連を第13表に簡潔に示す。特に、石材として用いられる

第13表 後・晩期の石器類の器種と石材

器種(数)	石材(数)
打製石鏃 (7)	チャート(3) 玉髓(2) 安山岩(2)
異形石器? (1)	安山岩(1)
剥片 (5)	安山岩(3) チャート(1) 珪質岩(1)
二次加工剥片 (3)	両輝石安山岩(2) ホルンフェルス(1)
打製石斧 (13)	ホルンフェルス(8) 両輝石安山岩(5)

割合が顕著である両輝石安山岩とホルンフェルスは、当該期の周辺遺跡でも同様の傾向が見られる。宍戸章氏は、横市地区遺跡群出土の石器石材の近隣産地について、両輝石安山岩は末吉町高之峯産、ホルンフェルスは大隅半島の高隅山周辺産出の可能性を示唆している(宍戸2002)。

これらの遺物の分布状況(第13図参照)についてであるが、土器・石器ともに調査区東側を除いてほぼ全域で散見された。特に遺物集中Ⅰ区(H12グリッド付近)とⅡ区(O19グリッド付近)では、まとまった量の遺物が出土した。Ⅰ区では組織痕土器の出土が目立ち、他に黒川式・松添式の土器片も複数点確認できた。石器類についての顕著な分布傾向は確認できなかった。このⅠ区は調査区北側の標高の高い地点に位置するが、第2節でも述べたようにその南西部の調査区外はさらに標高が高くなると考えられ、そこに当該期の生活空間の中心が存在したのではないかと考えられる。Ⅱ区では、中岳Ⅱ式の土器片が複数個体分出土し、時期を異にする土器は見られなかった。石器類については、打製石斧・二次加工剥片・剥片が複数点出土している。このⅡ区は周囲の標高に比べて低く、凹地となる。そのため遺構があったとは考え難く、遺物は周囲からの流れ込みの可能性が高い。この他、西平式・三万田式は調査区南側に、入佐式・黒川式・松添式は調査区北側に分布の中心があることが判明した。石器類についても、打製石斧は調査区北側と中央部西側で複数点出土し、打製石鏃に関しても調査区中央部西側で五角形鏃3点を含む4点が出土した。

最後に、98(粗製深鉢)について述べておきたい。この土器は、口縁部にリボン状か鱗状の突起物が付き、胴部には1条の突帯が巡る。黒川式土器の特徴と無刻目突帯文土器の特徴とを併せもつ土器の形状を呈し、縄文時代の終焉を告げる土器であると考えられる。口縁部に突起物をもちながら、条痕により仕上げられるという特異な性格をもつ遺物であり、当該地域周辺遺跡を見渡しても珍しい遺物であると言える。

第2節 弥生時代について

遺構

本遺跡では、弥生時代の竪穴建物跡13軒(竪穴住居跡12軒・竪穴状遺構1基)、掘立柱建物跡2棟、土壇墓2基、土坑6基、複数の遺物を伴う小穴1基を検出することができた。これらのうち、竪穴住居跡12軒は全

て中期後半に位置づけられるものである。機能的な集落の構成を考えると、遺物を伴わない他の遺構についても同時期のものである可能性が高い。

まず、竪穴建物跡について概述する。一般的に、弥生時代中期後半は円形住居から方形住居への変換期とも言え、南九州では後期に隆盛する花卉状住居の出現が見られる時期でもある。この花卉状住居も、当初は、分布が地下式横穴墓の文化圏と重なることから南九州独自の住居形態と考えられてきた。しかし、平成20年に佐賀県みやき町の西寒水四本柳遺跡で花卉状住居が検出され、分布圏に広がりが見られるようになっただけでなく、時期も中期前半まで遡る可能性が高まるなど、近年の発掘調査成果により様相が変わりつつある。本遺跡では、平面形状を大きく分類すると方形基調10軒と円形基調1軒、そして円形と方形を組み合わせた複合プラン1軒に分けられ、花びら形の円形を基調とする花卉状住居に分類されるものはSA6とSA10の2軒のみである。この2軒以外にも、間仕切りの機能を有する突出壁をもつ住居は5軒あり、全てベッド状遺構を伴うものであった。また、貼床に着目してみると、小型住居であるSA2とSA12を除いては貼床が施されており、住居規模と貼床施工には一定の関係が見られた。さらに、主軸方位と中央土坑、床土等に関してほとんどの住居において共通する点が見られ、特筆しておきたい。主軸方位は全ての住居がN-50°-90°-Eの範囲内に収まり、東西に近い方向に支柱穴が並ぶ。これは全国的な竪穴住居の特性とも合致する。住居内の中央土坑についても、ほとんどの住居で南壁寄りに設けられ、当該期の近隣の遺跡の傾向とも類似するものである。床土・ベッド状遺構の土質についても、霧島御池軽石層(Kr-M)で揃えられている住居が多く、排水等の利点を考慮した建設が当時から行われていた可能性が考えられる。最後に、SA7とSA10の柱穴について付言しておきたい。ともに総床面積が35㎡前後で、4本の支柱穴をもつ本遺跡では大型の竪穴住居跡である。いずれにも共通する点として、支柱穴以外にも、中央土坑内に東西方向に並ぶ柱穴を2基もつということが挙げられ、いわゆる松菊里型住居との類似も指摘できる。大型であるが故の補助的柱なのか、作業空間として必要不可欠な柱なのか、そのいずれかの柱穴と考えたい。その他、竪穴建物跡についての概要は、第14表を参照されたい。

第14表 竪穴建物跡（弥生、SA・SZ）概要一覧

遺構名 (略記号)	位置 (グリッド)	長軸×短軸 (m) 【面積 (㎡)】	平面形	主軸方位 (棟木方位)	支柱穴数 (支柱穴以外)	突出壁数	ベッド状 遺構	中央土坑	貼床	備考
SA1	G~H 9~10	5.4×5.0 【20.9】	長方形	N-74°-E	2 (1)	6	有	無	有	
SA2	F15~16	一辺 4.0 【12.2】	不整形 (方形)	N-60°-E	2	0	無	有	無	床面までトレンチャーによる部分的な破壊
SA3	F~G16	5.7×5.0 【22.2】	長方形	N-72°-E	2 (3)	1	有	有	有	床面までトレンチャーによる部分的な破壊
SA4	E~F 16~17	6.5×5.5 【28.5以上】	長方形	N-77°-E	2 (1)	4	有	有	有	試掘トレンチに一部切られる
SA5	E16	4.7×4.6 【13.9】	方形	N-72°-E	2	0	無	有	一部	
SA6	G18	長軸 5.8以上【不明】	円形	不明	不明	2以上	不明	不明	不明	大部分が調査区外
SA7	I15~16	7.3×6.0 【36.7】	長方形	北側N-73°-E 南側N-76°-E	4 (4)	1	有	有	有	中央土坑内に東西に並ぶ柱穴2基
SA8	I16	4.2×3.6 【11.7】	長方形	N-86°-E	2 (1)	0	無	無	有	床面二段
SA9	I18~19	5.1×4.7 【19.8】	長方形	N-65°-E	2	1	有	有	有	ベッド上に土坑1基
SA10	J~K 15~16	6.9×6.7 【34.8】	円形 + 方形	北側N-70°-E 南側N-72°-E	4 (4)	3	有	有	有	中央土坑内に東西に並ぶ柱穴2基 建替えの可能性有り
SA11	J16	一辺 4.2 【15.3】	方形	N-78°-E	2 (3)	0	無	有	有	焼失住居
SA12	M15	一辺 4.2 【13.1以上】	不整形 (方形)	N-50°-E	2	0	無	有	無	床面までトレンチャーによる部分的な破壊 試掘トレンチに一部切られる
SZ1	I15	4.5×3.3 【10.4】	不整形	N-62°-E	0	0	無	無	無	床面までトレンチャーによる部分的な破壊、炬2基

次に、掘立柱建物跡について言及したい。弥生時代の掘立柱建物跡の検出例は、九州全体を見渡してもそれほど多くはない。南九州では鹿児島県の王子遺跡で14棟検出されているのを筆頭に、県内では都城市平田遺跡・諸麦遺跡で各5棟、宮崎市椎屋形第1遺跡・都城市岩立遺跡で各4棟、都城市下大五郎遺跡・中大五郎遺跡・平田遺跡D・E地点等で各1棟検出されている。本遺跡で検出した掘立柱建物跡は2棟で、いずれも妻側に独立して棟木を支える柱（独立棟持柱）を有するものであり、検出例としてはさらに絞られる。SB1内では土坑（SC5）が1基検出されたが、土坑を伴う検出例は王子遺跡で2棟確認されている程度で、しかも土坑の規模や棟持柱の有無など、王子遺跡のものと類似するとは言い難い。建物の構造から見ても、掘立柱建物に付随する施設となる可能性は低いと考えられる。SB2は、SB1に比べてしっかりとした掘り込みが確認でき、独立した棟持柱穴は東西ともに35°前後内傾する。規模はやや異なるものの、3間×3間の規格と内傾する棟持柱穴の特性については、岩立遺跡の3号掘立柱建物跡と酷似する。その他、掘立柱建物跡についての詳細は、第15表を参照されたい。

第15表 掘立柱建物跡（弥生、SB）計測値一覧【計測値：柱穴上端中心部使用】

遺構名 (略記号)	位置 (グリッド)	規格	主軸方位	桁行 (m)	梁行 (m)	棟持柱間 (m)	面積 (㎡)	桁梁比率 (桁行/梁行)	備考
SB1	K~L17	1間×2間(北西側) 3間(南東側)	N-57°-E	北西側3.61 南東側3.45	北東側3.05 南西側3.27	5.08	11.2	1.12	独立した棟持柱をもつ
SB2	K13	3間×3間	N-70°-E	北側3.32 南側3.36	東側2.62 西側2.82	4.90	9.5	1.23	独立した棟持柱をもつ トレンチャーによる部分的な破壊

土壙墓と小穴についても触れておきたい。弥生時代の墓の検出例は、南九州では極めて少ない。県内では、前期から中期にかけての積石墓（土壙墓）9基等を検出した宮崎市檜遺跡や、後期後半の土壙墓・木棺墓19基を検出した小林市野尻町大萩遺跡、後期から終末期にかけての周溝墓・木棺墓195基を検出した新富町川床遺跡等が代表的な類例である。本遺跡と同じ弥生時代中期後半に位置づけられる近隣の検出例としては、土壙状遺構で完形の壺が出土した都城市丸谷町の本池遺跡や、石蓋土壙墓11基を検出した同市高崎町の朴木遺跡等が挙げられる。この時期の土壙墓には二段掘りという工法が広く取り入れられ、本遺跡の土壙墓2基も二段掘りとなる。いずれも目詰め用の粘土等は確認できなかったが、木蓋土壙墓の可能性を指摘しておきたい。棺部内寸（長軸）はSD1が約1.13m、SD2が約1.18mといずれも小さく、小児用の墓であった可能性が高い。この2基は隣接し合い、主軸方位もほぼ同じであるため、同時期に構築されたものであると考えたい。

第16表 土壙墓（弥生、SD）・土坑（縄文・弥生、SC）・小穴（弥生、SH）計測値一覧【計測値：上端値使用】

遺構名 (略記号)	位置 (グリッド)	時代	平面形	主軸(長軸)方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	縦横比	備考
SD1	G17	弥生	隅丸長方形	N-71°-W	1.8	(1.4)	0.76	(1.29)	SD2と隣接、二段掘り、遺物なし トレンチャーによる部分的な破壊
SD2	G17	弥生	隅丸長方形	N-67°-W	2.1	1.54	0.36	1.36	SD1と隣接、二段掘り、遺物なし トレンチャーによる部分的な破壊
SC1	K12	縄文早期	楕円形	N-33°-W	0.78	0.63	0.19	1.24	遺物なし
SC2	G17	弥生	楕円形	—	不明	(0.87)	0.53	—	SD1から切られる、遺物なし トレンチャーによる部分的な破壊
SC3	G17	弥生	楕円形	—	0.89	(0.74)	0.17	(1.20)	SD1と切り合う、遺物なし トレンチャーによる部分的な破壊
SC4	F17	弥生	隅丸長方形?	—	(1.48)	不明	0.45	—	SA4と隣接、中溝式の堦が出土 トレンチャーによる部分的な破壊
SC5	L17	弥生	隅丸長方形	N-31°-E	0.82	0.62	0.28	1.32	SB1内で検出、弥生土器破片出土
SC6	M13	不明	不整形	N-26°-E	0.87	0.78	0.37	1.12	遺物なし、樹痕の可能性有り
SC7	J13	弥生	隅丸長方形	N-66°-E	不明	0.78	0.31	—	弥生土器破片出土 トレンチャーによる部分的な破壊
SH1	F15	弥生	楕円形	—	0.25	不明	0.23	—	磨製石鎌未成品5点出土 トレンチャーによる部分的な破壊

小穴については、SH1でまとまって磨製石鏃の未成品が5点出土している。埋納遺構という観点から見れば、鹿児島県鳴神遺跡で縄文時代晩期の打製石斧22本がまとまって出土した類例がある。また、磨製石鏃未成品のまとまった出土という観点から見れば、都城市加治屋B遺跡の19号竪穴住居跡で、出入口遺構と考えられるテラスの床面から頁岩製の7点が重なり合うようにして出土した類例がある。本遺跡のSH1出土の未成品も加治屋B遺跡と同じ頁岩製であるが、製作段階で失敗して廃棄されたものなのか、一時保管または埋納されたものなのか、性格は不明である。埋土堆積状況から判断すると、一度に埋められた可能性が高い遺構と判断できる。その他、土坑等については第16表を参照されたい。

最後に、集落内の遺構配置について簡単に述べておきたい。本遺跡は、「第4節 自然科学分析（放射性炭素年代測定）」の項でも概述するが、 ^{14}C 年代 2175 ± 20 年BP～ 2105 ± 20 年BPの一定期間（70年前後）の範囲内に収まる弥生時代中期の集落である。この時代の単位生活集団は、数棟の竪穴住居と1～2棟の掘立柱建物、そして共同作業施設等によって構成されると考えられている。これらのことを考慮すると、調査区北東部に位置するSA2・3・4・5、調査区中央部に位置するSA7・8・10・11・SZ1はそれぞれ一つの単位生活集団であった可能性が考えられる。特に後者の方は、第17表の接合状況表からも判断できるように、同時期に存在した可能性が極めて高い単位生活集団であったと言える。SA7・10はともに総床面積が約35㎡前後の本遺跡で最も大きな住居で、集団内の突出した層の住居もしくは共同作業場といった性格の建物の可能性が考えられる。特にSA7では、8個の砥石と複数の磨製石鏃未成品・素材剥片、そしてチップ等も出土しており、作業的空間をもった建物の可能性が高い。また、この単位生活集団から南東へ約14m、南西へ約24mそれぞれ離れた場所に位置するSB1・SB2は、この単位集団が所有する掘立柱建物であったと推察される。ただ、SB2周辺では後期後半から終末期にかけての遺物もまとまって出土しており、他に遺構が検出できなかったことを勘案すると、SB2を中心とする後期の祭祀的な空間であった可能性も考えられる。なお、SA1とSA12は単独の住居と見られ、SA6とSA9に関しては調査区外に単位生活集団を構成する住居が存在した可能性が高く、さらに集落が東側の調査区外に向かって広がる可能性も指摘しておきたい。集落全体の傾向としては、調査区北東部から中央部にかけて住居が集中するため、地形的には台地縁辺上の標高の高い平坦面を利用して集落が形成されたものと考えられる。北側の斜面下にある水場にも近く、水を得やすい環境にあったと言える。

遺物

本遺跡では、弥生時代中期後半の南九州を代表する山ノ口式土器と、いわゆる中溝式と呼ばれる在来系の土器が多数出土した。

山ノ口式土器はキンウンモを多く含む花崗岩系の胎土が特徴的で、その産出地は大隅半島の国見山系・高隅山系が考えられている。山ノ口式系の器形的特徴及び胎土的特徴を良好に残す遺構内出土資料としては、SA2（143甕・145壺・146壺）、SA4（168壺）、SA5（176大甕・177甕・180壺）、SA10（250壺）等が挙げられる。いずれも、甕・壺に共通する多条突帯、中実脚台状の甕の底部や二叉状を形成する壺の口縁部等、山ノ口Ⅱ式の特徴が顕著に見られる。

中溝式土器については、榎畑光博氏が口縁部形態から胴部にかけての器形的特徴から1～3式に分類している（榎畑2000）。これを援用すると、SA2の141だけは口縁部が比較的短く、強く折り曲げられる1式に分類できる。SA7の188・189・190、SA8の214・215、SA10の237・238、SA11の263・264、SC4の282は、口縁部が緩やかに外反しながら1式よりも長めに立ち上がる2式に相当すると考えられる。これらのうち、

SA10の237は口縁屈曲部の稜が比較的明瞭であるため2式の中でも古い段階に、SA11の263とSC4の282は口縁部が長く上方へ向かうため新しい段階に位置づけられるものである。3式については、包含層出土のものも含めて確認できず、本遺跡の中溝式土器は中期後半に位置づけられる可能性が高い。なお、SA11の265は無突帯ではあるが器形的には中溝式土器と酷似しており、同じ系統と捉えてよいかもしれない。

この他にも、透明光沢粒を多く含み器壁が浅黄色・橙色である都城色の濃い土器、宮崎小石が目立つ宮崎色の濃い土器、軽石や火山ガラスが多く含まれる鹿児島色の濃い土器などが多数出土していることが調査指導により明解となった。

一方、非在地系の土器に目を向けてみると、本遺跡では瀬戸内系の凹線文土器が確認できるだけでも6点出土している。この凹線文土器は、九州での出土数が南九州に偏り、中でも鹿児島県の王子遺跡で13点、本県高岡町の学頭遺跡で11点と出土数は突出している。近隣の遺跡でも、牧の原第2遺跡、池ノ友遺跡、加治屋B遺跡、諸麦遺跡等では竪穴住居跡での出土例が確認されている。本遺跡では、竪穴住居跡から壺3点と高坏1点、包含層から壺2点が出土している。このうち254の壺は、SA10の床直上で横たわるように完形のまま出土した。器形・規格・調整のいずれもが宮崎市阿波岐原で出土したと考えられる壺と酷似し、大きさこそ異なるものの胴部に孔をもつところまで同じ様相を呈する。孔の裏面にあたる胴部に、板状工具による刺突列点が施される点は特異な性格と言えよう。この土器の胎土には、キンウンモが多く含まれるなど山ノ口式系の胎土・色調と類似するため、在地で製作された可能性も考えられる。またSA7では、193の壺と197の高坏が出土している。193の胴部には二段の「ノ」字形列点文が施され、器壁も非常に薄い。197の高坏は、坏部と脚部がSA7・SA10で、坏底部と支脚部がSA12で出土し、部分的に接合された資料である。多条の凹線文・沈線文が施されるとともに、貫通する矢羽根透かし孔が6箇所認められることは特筆すべき点である。南九州での出土例としては透かし孔が貫通しないものがほとんどで、貫通するものは新富町新田原遺跡等わずかな遺跡に限られる。透かし孔が貫通するものは、未貫通のものより古い様相を呈すると考えられ、瀬戸内地方では中期中葉に見られる特徴である（梅木2003）。この他、壺の口縁部に凹線文が施された資料2点と壺の肩部から胴部にかけての資料1点があるが、いずれも瀬戸内IV様式に位置づけられるもので、特に伊予地方の影響を強く受けていると考えられる。なお、非在地系の土器の一つとして、刻目突帯を有し口縁部が直立する下城式の系譜を引き継ぐような土器（217）もSA8から出土していること、包含層からは黒髪式の特徴でもある断面鋤先状を呈する甕の口縁部（298）や無頸壺（327）等が出土していることも付言しておきたい。

この他、絵画土器も数点出土している。特に、SA7の198については明瞭な線刻が認められ、4本の平行線は建物の柱とも、動物の足とも見て取れる。南九州においては、絵画土器の隆盛期は後期から終末期と考えられているため、竪穴住居跡からの出土は本遺跡が当該期の流行をいち早く取り入れていたことを物語っている。

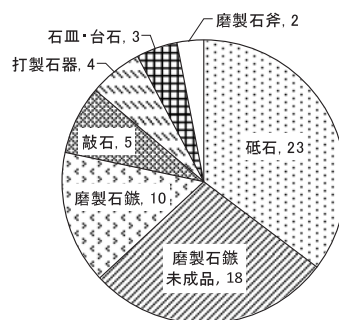
土器について、もう一点特筆しておきたい。出土資料の中に、弥生時代後期後半から終末期頃に位置づけられる土器群（甕304～310・314～323、壺325・326・343～347、鉢350・351）が、包含層からある程度まとまって出土した。甕の口縁部から胴部にかけての資料は、口縁部と胴部の間にくびれをもつタイプ（304～309）と、くびれをもたずに胴部からそのまま口縁部に立ち上がり、ハケ目が口縁部まで施されるタイプ（310）の2タイプに類別できる。胴部から底部にかけての資料（314～323）は、スカート状に広がる比較的深めの中空脚台をもつという共通点が認められる。このような中空脚台状の底部は、都城市丸谷第1遺跡・

宮崎市源藤遺跡等で出土例はあるものの、分布の中心は鹿児島県側に偏る傾向にあると考えられる。鹿児島県諏訪前遺跡や山下堀頭遺跡等では中津野式土器の範疇として捉えられており、本遺跡出土の甕も形状等に共通点も認められるため、松木蘭式～中津野式の時期幅内に収まるものではないかと考えられる。また、壺に目を向けてみると、胴部最大径位置に刻目突帯が1条貼り付けられる資料が2点(335・336)確認され、そのうち336は尖底に近い底部をもつものと考えられる。類似する土器が、近隣の加治屋B遺跡や曾於市浜場遺跡でも出土している。前述した諏訪前遺跡や山下堀頭遺跡でも同様の壺が出土しており、口縁部と胴部の間にくびれをもち中空脚台状の底部を有する甕と同時期のものであると推察できる。これらの土器の出土地点は、K12・L12グリッドを中心に調査区中央部西側の標高の最も高い地点で、比較的まとまった範囲内で出土している。周辺では土器に伴うような遺構は検出できなかったが、遺物量から判断すると当該期の集落が調査区西側付近に存在した可能性が高いことを指摘しておきたい。

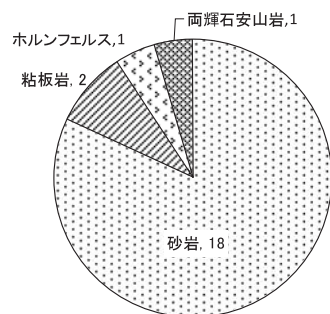
次に、鉄器についてである。本遺跡においては、当該期の製品と考えられるものは4点の出土にとどまり、そのうち遺構内から出土したものはSA8の鉄鏃(225)とSA11の鉄鎌?(273)の2点のみである。包含層からは鉋(369)が出土しているものの、時期的な位置づけは困難である。因みに鹿児島県王子遺跡では、中期後半の竪穴住居跡埋土上部から長鋒式の鉋が出土している。近隣では、平田遺跡D・E地点において中期後半から終末期にかけての竪穴住居跡で長鋒型の鉄矛が出土し、宮ノ下遺跡では後期初頭の竪穴住居跡から中溝式の甕と共伴して有茎の鉄鏃が出土している。また、向原第1遺跡では、中期後半の竪穴住居跡から鍛造剥片が検出され、小鍛冶が行われていた可能性も指摘されている。本遺跡出土の鉄器は、このような鉄文化が都城盆地周辺に広まりを見せ始めた時期のものであると推察される。

最後に、石器について述べる。本遺跡で出土した弥生時代に属すると考えられる石器の器種別割合を第79図に示す。①砥石、②磨製石鏃未成品、③磨製石鏃の3器種だけで全体の約8割を占め、大陸系磨製文化を取り入れた弥生文化が、本遺跡内でも色濃く反映されていたことを物語っている。

砥石については、第80図のとおり砂岩製のものが8割以上を占め、手持ち用のものから台石状のものまで大小様々な大きさの特徴をもつものが出土した。以下に、特筆すべき性質を五つ挙げる。



第79図 石器の器種別割合
〔剥片〕は除く、数字は点数

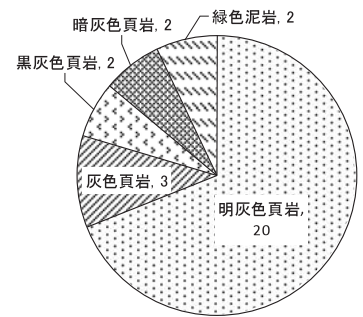


第80図 砥石の石材別割合
(数字は点数)

- 【ア】 周縁端部に砥面がある手持ち用の小型の砥石
〔170・207・229・230・231〕
- 【イ】 被熱によるものなのか?変色(赤・茶)部がみられる砥石
〔172・210・212・213・230・231・366〕
- 【ウ】 砥面をもちながら長軸端部にわずかに敲打痕が認められる
手持ち用の小型の砥石
〔259・279〕
- 【エ】 鉄が付着し、断面V字状の線条痕がある砥石
〔212〕
- 【オ】 研磨による浅い溝状の凹面が認められる砥石
〔162・211・231・368〕

【ア】では、特に207・229が約3～4cm程度と小さく、細かい研磨作業等に使用されていたと考えられる。特に、磨製石鏃の基部に着目すると、凹基形であっても縦方向に擦痕が入るものがほとんどで、このような薄手の鏃状の砥石を使って研磨していたのではないかと考えたい。【イ】に

つについては、特に212・231の赤変が顕著で、231にはスス状のものが付着していた痕跡も認められる。【ウ】は、敲石として使用する場合の握手部分に砥面が認められ棒状を呈するなど、鹿児島県王子遺跡で出土している樹皮布敲石と類似し、同様の性格をもつ石器である可能性も考えられる。【エ】の212の縁部には鉄が削り出されたような形で付着しており、その周辺部は被熱のためか赤変している。また、裏面の断面V字状の線条痕は、鋭利なものを研磨していたことを証拠づけるものであり、鍛冶関連の作業に使用していた砥石である可能性も否定できない。【オ】については、いずれも溝状の研磨部分が縦長に続くものであり、棒状のものを研磨していたことが窺える。



第81図 磨製石鏃及び未成品の石材別割合 (数字は点数)

磨製石鏃については、出土数が石鏃10点（うち竪穴住居跡出土6点）、未成品18点（うち竪穴住居跡出土7点・SH1出土5点）を数える。石鏃の形状は凹基形7点、平基形3点であった。石材に目を向けると、第81図のとおり9割が頁岩製で、明灰色のものがほとんどであった。この明灰色・灰色を呈する頁岩は、正式には凝灰質頁岩と呼ばれる四万十累層群に属する塩基性凝灰質岩で、表面が滑らかで研磨しやすい特性をもつ（宍戸2002）。主に、都城市内及び三股町・旧高城町・旧山之口町等を含む都城盆地周辺で採取可能なため、身近な場所で適材を調達していたと言えよう。また、SH1出土の磨製石鏃未成品からは、石鏃の製作過程が看取できる。283は完成間近の未成品であるが、鋭利な刃先になる前の状態のもので、刃先は研磨による面取りが行われ、一度、平滑な面として仕上げられている。つまり、刃部を鋭利に研磨する過程は最終段階で、その前に一度、大きさ・形等の規格を整える作業を丹念に行っていたことになる。

第3節 古代以降について

本調査で出土した土師器類に関しては、出土数・残存状況ともに十分とは言えず時期を特定することは困難ではあるが、そのほとんどは13～14世紀前後の遺物である可能性が高い。陶磁器については、14世紀の龍泉窯系青磁が3点、15～16世紀の景德鎮窯系青花が1点、計4点の輸入陶磁器が出土した。国産に目を向けると、龍門司系・苗代川系の薩摩焼が各1点ずつ確認された。今回の調査においては、このような遺物に対応する遺構を検出することができず、遺物量から判断しても本遺跡周辺に当該期の集落が存在した可能性は低いと考えられる。

第4節 自然科学分析について

放射性炭素年代測定

遺構の時期的な配置を整えるために、今回、放射性炭素（¹⁴C）年代測定を行った。資料の抽出については、

- ① 残存状況が比較的良好な炭化材が得られた遺構を抽出
- ② 遺物接合状況により、①の遺構とほぼ同時期であると判断できる遺構については除外

という二つの観点で行った。なお、遺物接合状況を第17表に簡潔に示す。

測定結果によると、弥生時代の遺構は¹⁴C年代で2175±20年BP～2105±20年BPの一定期間（70年前後）の範囲内に収まる。遺構内出土の遺物は中期後半の可能性が高いため、遺物に比して測定結果の方が若干古い値を示していると判断できるが、時代区分と実年代の対応については研究者によっても見解の相違が見られ

るため、ここではその判断は控えることとする。

ここでは、¹⁴C年代の約70年間という時期幅を、遺物接合状況等とも対応させながら遺構の時期的な配置を整えてみたい。まず、最も古い遺構はSA2で、中期後半の中でも前半部分にあたる。これは¹⁴C年代2175±20年BP（暦年代2σBC360-270【58.1%】）という測定値に加え、中溝式土器の中でも最も古手のもの（141甕）が遺構内から出土していることから

第17表 遺物接合状況表

遺物No	器種	SA4	SA7	SA8	SA10	SA11	SA12	SZ1
190	甕		●		●			
191	甕		●		●			
194	壺		●		●			
197	高坏		●		●		●	
217	甕		●	●				
222	壺		●	●	●	●		
232	甕		●		●			
234	甕		●	●	●	●		
253	壺		●		●			
265	甕		●		●	●		
269	壺					●		●
172/213	砥石	●	●					

からも判断できる。次に、この約70年間という時期幅の中で年代が最も下の遺構は、SA7・9・11・12・SZ1である。いずれも、¹⁴C年代2130±25年BP（暦年代2σBC210-50【89.4%】）～2105±20年BP（暦年代2σBC200-50【95.4%】）という短い時期幅に収まる測定値を示し、接合状況から見ても妥当な結果と言える。また、接合状況の結果から判断すると、年代測定を行っていないSA8・10も同時期内に収まるものと考えられる。これらの遺構とSA2との間に位置する遺構が¹⁴C年代2150±25年BP（暦年代2σBC240-90【66.8%】）～2140±20年BP（暦年代2σBC210-90【82.7%】）という測定値が得られたSA1・4・6である。この中でもSA4は、遺構内から出土した砥石（172）がSA7の砥石（213）と接合できるため、前述した時期が下の遺構と並行関係にあった可能性が考えられる。

以上のことから、本遺跡はSA2の竪穴住居建設を皮切りに、その後、周辺に住居を新築して集落を構成していったものと考えられる。また、竪穴建物跡の配置及び遺構同士の切り合いが見られないという観点からも、ほとんどの竪穴建物跡が時間的並行関係にあり、弥生時代中期後半という短期間のみ生活が営まれた集落であった可能性が高い。

樹種同定

分析の結果、遺構内から出土した炭化材は全て本遺跡周辺もしくは近隣の地域で伐採可能な樹種であることがわかった。このことから、当時、遺跡周辺には落葉高木・常緑高木等の照葉樹林・針葉樹林が存在し、これらの身近な木材を建材や薪材等、何らかの形で利用していた可能性が考えられる。ここでは、特筆すべき点を二つ挙げてみたい。

まず、薪材としての利用である。SA9・12の試料No.8・23は、住居内炉の埋土中から出土した炭化材であり、いずれの炉跡からもイネの炭化種子が出土しているため、薪材として利用された可能性が考えられる。No.8はカヤ、No.23はコナラ属アカガシ亜属という同定結果が得られた。カヤは弾性が強く耐水性・保存性の高い木材で、コナラ属アカガシ亜属も同様の特性を有する。いずれの木材も薪材としての利用に適しており、当時から木材のもつ特性に応じた利用が図られていたことが指摘できる。また、炉2基が検出されたSZ1の試料No.5はエゴノキ属と同定され、この木材は現在でも薪炭として利用されていることも付言しておきたい。

次に、建材（屋根材・柱材）としての利用についてである。SA11は焼失住居である。試料No.9～21は、大きさ・出土状況等からこの住居内の建材と判断してよい。試料の出土地点と樹種の整合性については第43図を参照されたい。主柱穴（P2）周辺から北側に向けて出土した比較的大きめの炭化材No.15、No.21のいずれかが柱材となる可能性が高い。No.15がクリ、No.21がムクノキと同定された。クリは耐朽性・耐水性・保存性が

極めて高く、ムクノキは強靱な木材で、いずれも建築材として適している。その他の試料は、主柱穴に向けて壁際から放射状に向かう細長い炭化材で、垂木と考えられるものである。この垂木と考えられる木材には、コナラ属コナラ節（5点）、クスノキ科（2点）、サンショウ属・リンボク・ヤマグワ・ネムノキ・サカキ（各1点）が利用されていた。特に、コナラ属コナラ節の出土が目立ち、強靱で弾力に富むという特性をもつ。他の木材に関しても、堅硬で靱性に富むという共通の性質をもち、木材の特性を十分に把握した上で垂木材として利用した可能性が考えられる。

以上のように、当時の人々は近隣の身近な木材の特性を十分に熟知した上で、生活の要所に適材を取り入れていた可能性が高い。

種実分析

分析結果から、SA 9・10・11・12からイネの炭化種子が確認された。特に、SA10焼土及びSA12炉埋土では複数の炭化種子が出土し、SA12からはマメ類・エゴマも確認された。本遺跡における当時の食性が垣間見える分析結果と言える。特にSA11の炭化種子は、遺構内からほぼ完形で出土した中溝式土器（263甕）の埋土中の試料で、甕を使って米を煮炊きしていた当時の様子が容易に想像できる。また、SZ 1は竪穴状の柱穴をもたない狭少の床面に炉2基が存在する性格不明の遺構であるため、試料として灰塊と炉埋土の2点を分析にかけたが、両者から食性を示す炭化種子は抽出できなかった。このことから、この2基の炉は調理を目的として使用された可能性は低く、住空間的な性格というよりむしろ工房的な役割をもつ遺構である可能性が考えられる。

最後に、栽培種ではない草本のサナエタデ（近似種）の炭化果実が今回確認されたことは、本遺跡が集落を形成するには好条件である台地上の草原に位置していたことを物語ってくれるものである。

埴埴破片の分析

本遺跡では、極少量ではあるが弥生時代の鉄器や、時期不明の炉壁等の可能性も考えられる焼成粘土塊が出土している。この埴埴の土器片もそれらの遺物に関連するものか否かを確認するため、金属分析を行うことにした。結果、埴埴に付着する金属は鉄でも青銅でもなく純銅に近い組成であり、出土した鉄器等の遺物との関連性は見られなかった。ただ、古代の遺物である可能性が考えられ、銅製品製造に使用されていたという分析結果は、当時の遺跡周辺の生業の一端を垣間見ることのできる貴重な資料であると言える。

第5節 終わりに

働女木遺跡は、主に弥生時代中期後半の集落であると考えられる。当該期の周辺遺跡においては、そのほとんどで石包丁の出土を見るが、本遺跡では1点の出土も見られない。種実分析の結果からみても、米を食料としていたことは明らかであり、石包丁未出土という点については、当時の生業を考える上で特異な性格をもつ集落であった可能性も指摘できる。遺物に目を向けてみると、貫通する矢羽根透かし孔をもつ高坏を筆頭として瀬戸内系の凹線文土器が複数点出土し、瀬戸内地方との交流があったことを窺わせる。南九州では弥生時代後期から終末期に最盛期を迎える絵画土器についても、竪穴住居跡から2点出土し、当時の文化の流行をいち早く取り入れていた集落であったことも推察できる。このようなことから鑑みて、本遺跡は当時の交易の拠点となる主要な集落であり、在地系と外来系との文化を融合させながら生活を営んでいた集落であったとも言える。

【参考文献・引用文献】

◀ 報告書 ▶

- 鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
鹿児島県教育委員会 1985『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
鹿児島県教育委員会 1990『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『山下堀頭遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第92集
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『農業開発総合センター遺群Ⅳ 諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第112集
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集
鹿児島県曾於郡有明町教育委員会 2004『浜場遺跡・下堀遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
鹿児島県曾於市教育委員会 2008『鳴神遺跡』曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
熊本県熊本市教育委員会 1986『戸坂遺跡発掘調査報告書』
宮崎県教育委員会 1974『大萩遺跡』
宮崎県教育委員会 1979『丸谷第1遺跡 他』九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
宮崎県教育委員会 1995『学頭遺跡・八見遺跡』県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『牧の原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集
宮崎県埋蔵文化財センター 2000『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001『王子原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001『木脇遺跡(旧石器時代～弥生時代編)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集
宮崎県埋蔵文化財センター 2003『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集
宮崎県埋蔵文化財センター 2005『下大五郎遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡・下川原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集
宮崎県埋蔵文化財センター 2007『湯牟田遺跡(二次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集
宮崎県埋蔵文化財センター 2007『平田遺跡D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第168集
宮崎県宮崎市教育委員会 1987『源藤遺跡』宮崎市文化財調査報告書
宮崎県宮崎市教育委員会 1996『椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡』宮崎市文化財調査報告書
宮崎県宮崎市教育委員会 1999『松添貝塚Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第37集
宮崎県都城市教育委員会 1990『平成元年度遺跡発掘調査報告 久玉遺跡(第2次調査)・野々美谷城跡・向原第1・2遺跡・竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査』都城市文化財調査報告書第11集
宮崎県都城市教育委員会 1991『平成2年度遺跡発掘調査概報 都之城跡(主郭部)・久玉遺跡(第3次調査)・宮ノ下遺跡・堂山(南地区)遺跡・牟田ノ上遺跡・屏風谷第1遺跡』都城市文化財調査報告書第13集
宮崎県都城市教育委員会 1996『丸谷地区遺跡群 中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・前畑遺跡』都城市文化財調査報告書第34集
宮崎県都城市教育委員会 2000『池ノ友遺跡(第1次調査)』都城市文化財調査報告書第49集
宮崎県都城市教育委員会 2002『横市地区遺跡群 江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡(第1次調査)』都城市文化財調査報告書第58集
宮崎県都城市教育委員会 2007『加治屋B遺跡(縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書第81集
宮崎県都城市教育委員会 2008『平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集
宮崎県児湯郡新富町教育委員会 1986『川床遺跡』新富町文化財調査報告書第5集
宮崎県児湯郡新富町教育委員会 1986『新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園地下式横穴墓』新富町文化財調査報告書第4集
宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会 1993『朴木遺跡』高崎町文化財調査報告書第4集

◀ 文献(縄文編) ▶

- 鹿児島県考古学会 1988『鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡』鹿児島県考古学会秋季大会資料集
清田純一 1998「縄文後・晩期土器考-中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について-」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
栗畑光博 1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列-中岳Ⅱ式土器の再検討-」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会

- 栞畑光博 1996「都城盆地における縄文時代前期の遺跡」『市史編さんだより』第2号 都城市企画部市史編さん室
- 栞畑光博 2000「中溝式系土器の検討－宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて－」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会
- 小杉康・他 編 2008『縄文時代の考古学』2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－ 同成社
- 小林達雄 編 2008『総覧 縄文文化』 同刊行委員会
- 下山覚 2000「いわゆる「松添式土器」の評価をめぐって－南部九州の資料を用いて－」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究所
- 東和幸 2009「組織痕土器研究の現状」『黎明館調査研究報告』第22集 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 藤木聡 2005「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」「宮崎県域における蛇紋岩製石斧」『Stone Sources』石器原産地研究会誌第5号
- 本田道輝 1980「松木遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会
- 南九州縄文研究会 2002『南九州貝殻文系土器Ⅰ～鹿児島県～』南九州縄文集成1

◀ 文献（弥生編） ▶

- 浅川滋男 編 2001『竪穴住居の空間分節に関する復元研究』平成10～12年度科学研究費補助金【基盤研究C】 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 浅川滋男 編 2008『山陰地域の弥生時代建築に関する実証的復元研究』2007年度とっとり「知の財産」活用推進事業成果報告書 鳥取環境大学浅川研究室
- 池畑耕一 1988「瀬戸内系遺物の出土とその背景－1世紀前半の南九州－」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
- 石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
- 梅木謙一 2003「中国・四国地方の土器」『考古資料大観 第1巻 弥生・古墳時代 土器Ⅰ』小学館
- 梅木謙一 2004「四国・南九州における凹線文土器の交流」下條信行『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））
- 大阪府立弥生文化博物館 2006『平成18年春季特別展 弥生画帖－弥生人が描いた世界－』大阪府立弥生文化博物館図録33 大阪府立弥生文化博物館
- 大阪府立弥生文化博物館 2007『平成19年秋季特別展 日向・薩摩・大隅の原像－南九州の弥生文化－』大阪府立弥生文化博物館図録37 大阪府立弥生文化博物館
- 大塚初重・他 編 1996『考古学による日本歴史』15 家族と住まい 雄山閣出版
- 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣出版
- 金関恕・佐原眞 編 1996『弥生文化の研究』8 祭と墓と装い 雄山閣出版
- 金関恕・佐原眞 編 1997『弥生文化の研究』7 祭と墓と装い 雄山閣出版
- 設楽博己・他 編 2008『弥生時代の考古学』8 集落からよむ弥生社会 同成社
- 菅原康夫・梅木謙一 編 2000『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社
- 武末純一 1991「九州の掘立柱建物Ⅰ」『弥生時代の掘立柱建物』
- 田崎博之 1998「九州系の土器からみた凹線文系土器の時間位置」下條信行『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 中園聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会
- 東憲章・柄本久子 2005「宮崎市阿波岐原出土の瀬戸内系土器」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第1号 宮崎県立西都原考古博物館
- 平井勝 1991『弥生時代の石器』 ニューサイエンス社
- 正岡睦夫・松本岩雄 編 1992『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
- 宮崎県総合博物館 1983『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』同館刊行
- 森貞次郎 1961「宮崎県櫛遺跡」『日本農耕文化の生成』

◀ 文献（古代以降編） ▶

- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

◀ 文献（各時代共通編） ▶

- 甲斐亮典 監修 2007『図説 西諸・北諸の歴史』郷土出版社
- 宮崎県都城市史編さん委員会 2006『都城市史 資料編 考古』都城市



働女木遺跡遠景（都城市街地を望む）



調査区全景



調査区東側壁 土層堆積状況



調査区北側壁 土層堆積状況



第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr1 [I9~10グリッド内]



第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr2 [F14グリッド]



第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr3 [I13グリッド]



第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr4 [H16グリッド内]



第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr5
[I~K12グリッド付近]



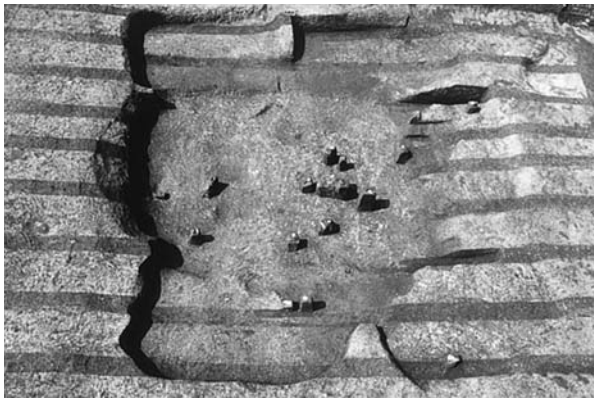
第Ⅵ層 (Kr-M) 下確認Tr6
[P~Q16~17グリッド付近]



SI 1 検出状況



SC 1 完掘状況



SA 1 遺物出土状況



SA 1 床面検出状況



SA 1 完掘状況



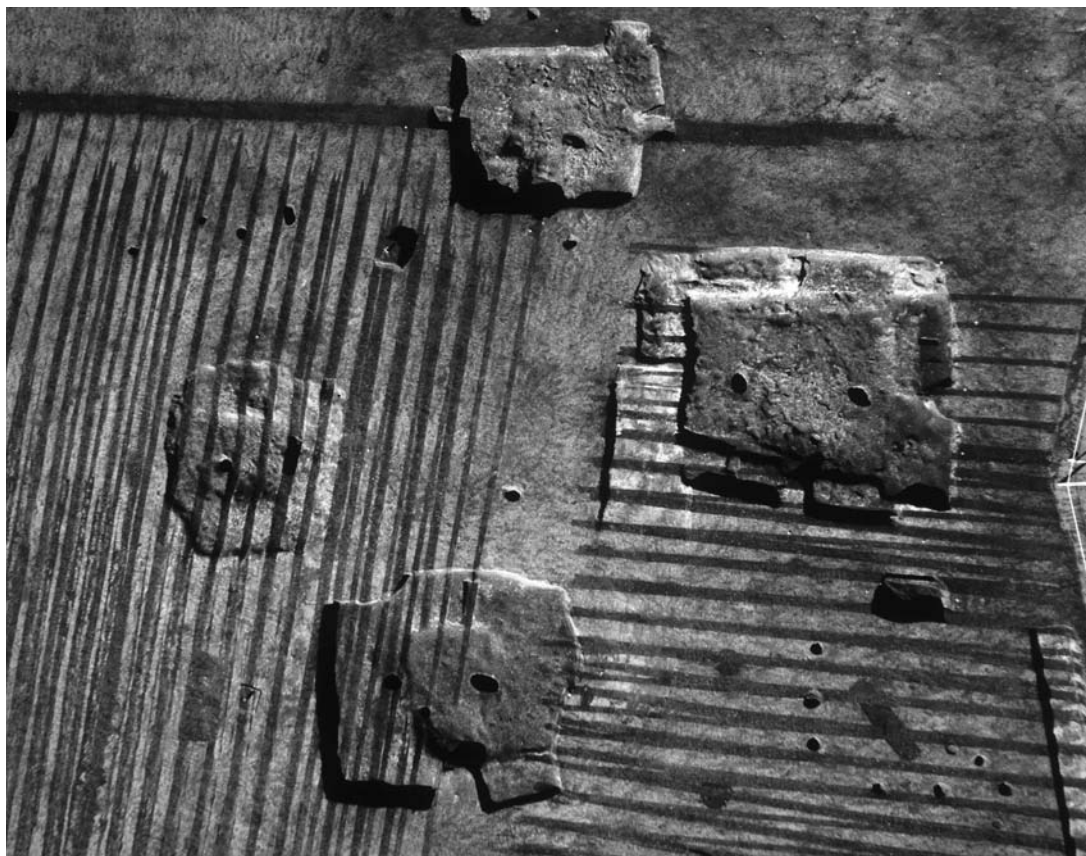
SA 2 遺物出土状況



SA 3 遺物出土状況 [164: 磨製石斧]



SA 3 完掘状況



遺構配置 (SA 2・SA 3・SA 4・SA 5 床面検出状況、SC 4 完掘状況)



SA 4 完掘状況



SA 5 遺物出土状況



SA 5 完掘状況



SA 6 完掘状況・埋土堆積状況



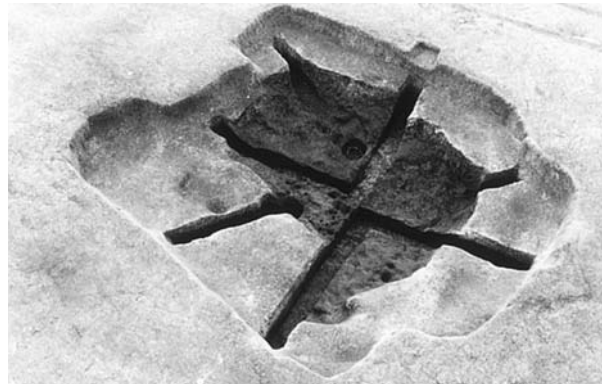
SA 6・SD 1・SD 2 完掘状況



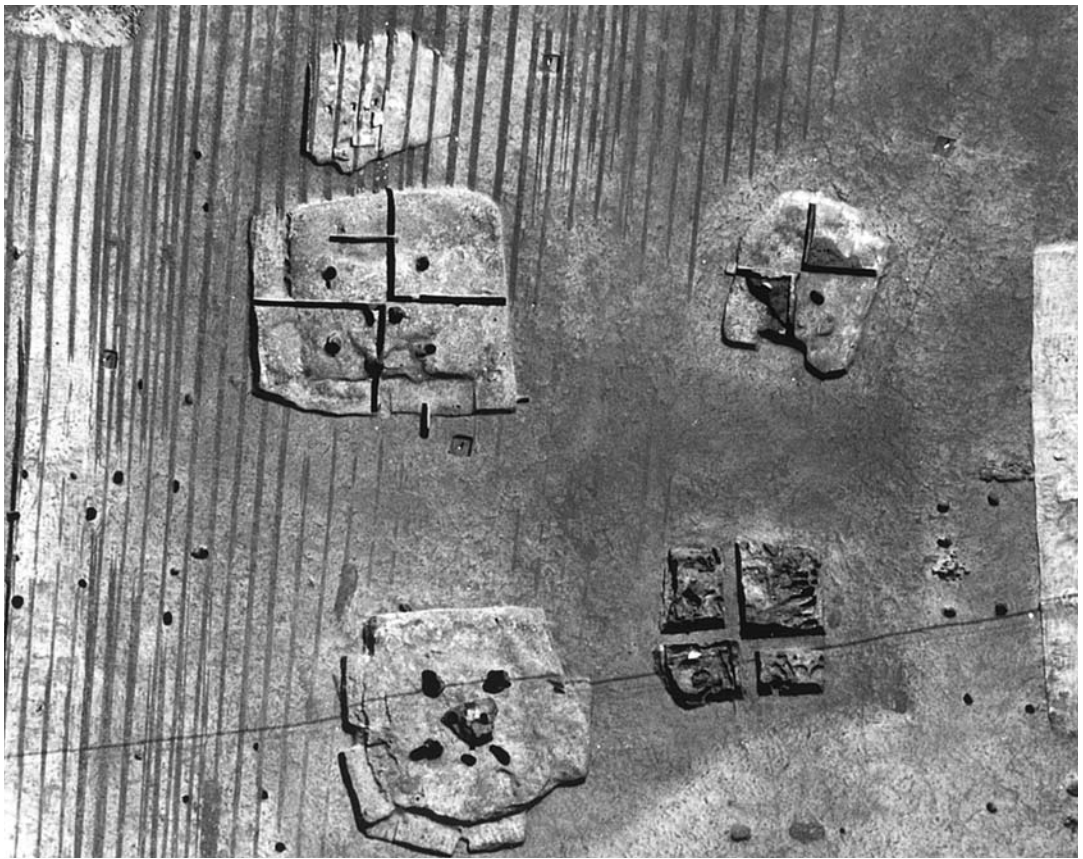
SA 7 遺物出土状況



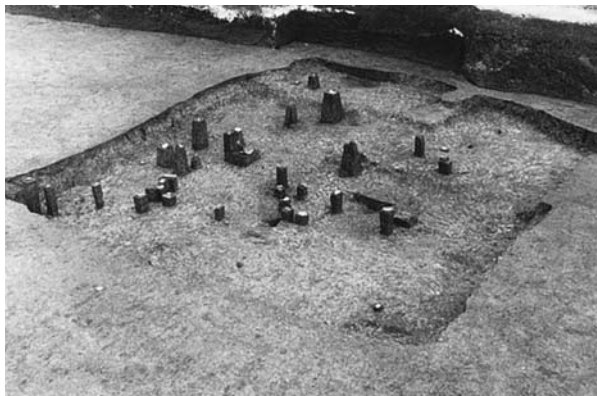
SA 8 遺物出土状況・埋土堆積状況



SA 8 完掘状況



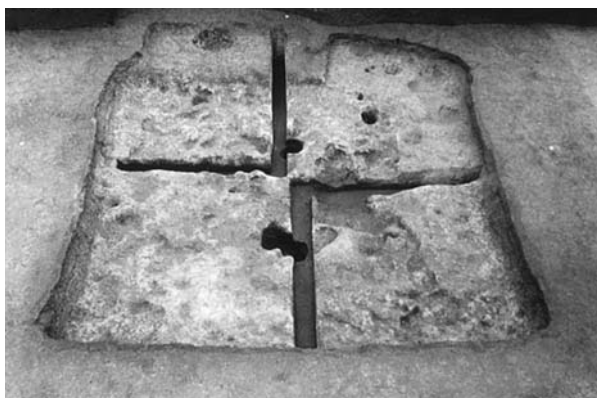
遺構配置 (SA 7・SA 8・SA 10・SZ 1 床面検出状況、SA 11 遺物出土状況)



SA 9 遺物出土状況



SA 9 床面検出状況



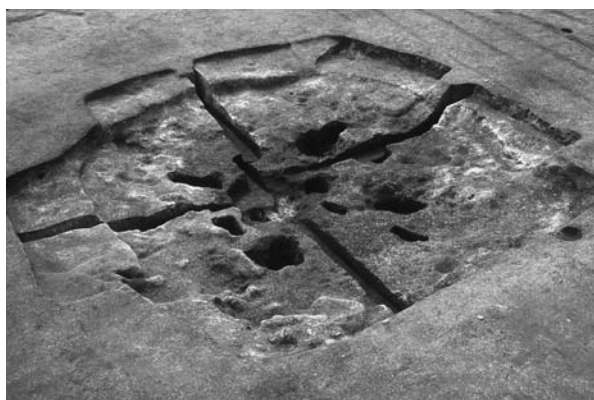
SA 9 完掘状況



SA10 遺物出土状況①



SA10 遺物出土状況② [254：瀬戸内系の壺]



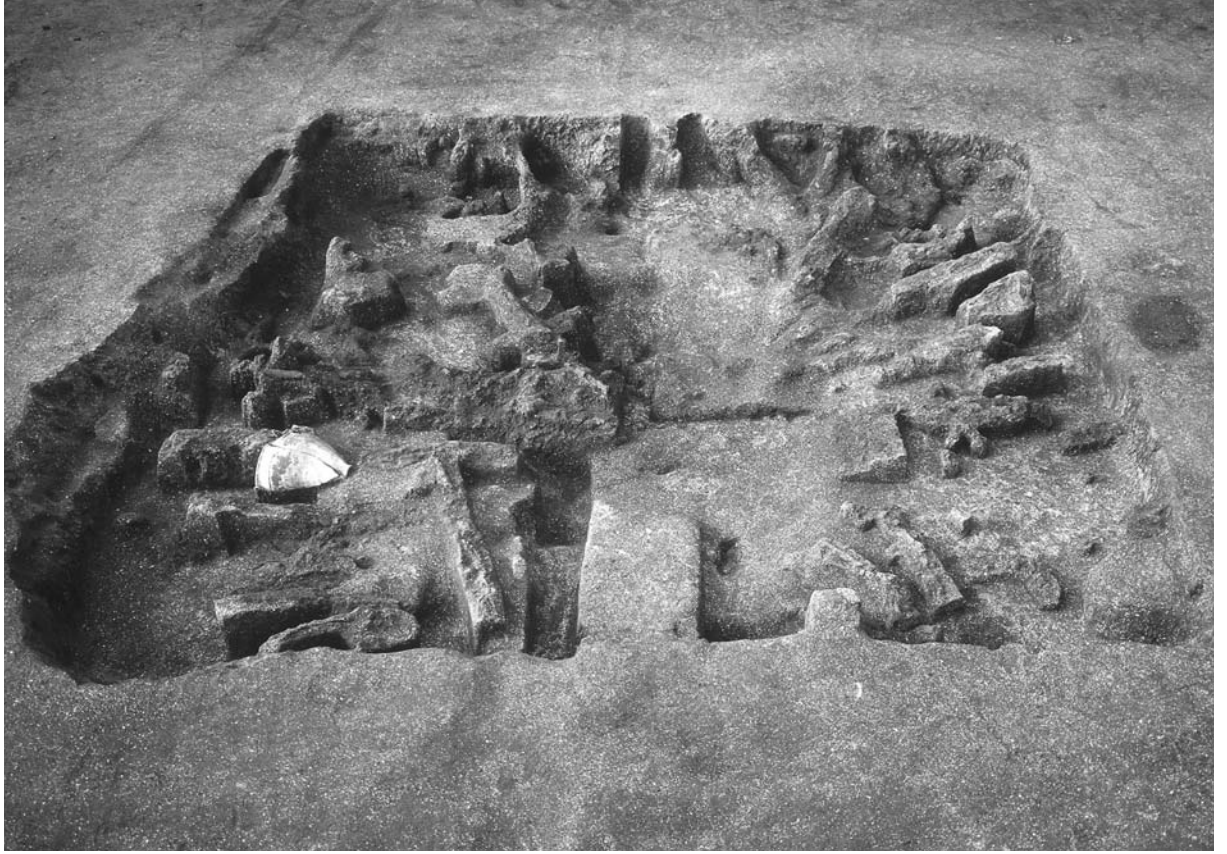
SA10 完掘状況



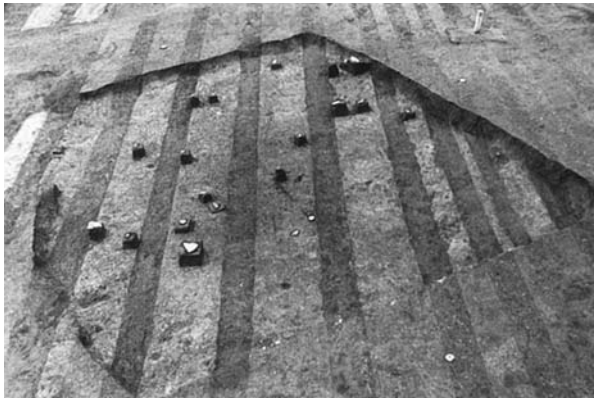
SA11 埋土堆積状況・遺物出土状況



SA11 床面検出状況



SA11 遺物出土状況



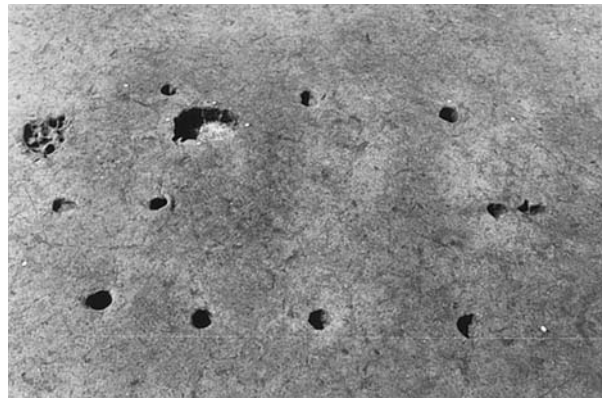
SA12 遺物出土状況



SA12 完掘状況



SZ1 完掘状況



SB1 完掘状況



SB 2 完掘状況



SD 1・SD 2・SC 2・SC 3 完掘状況



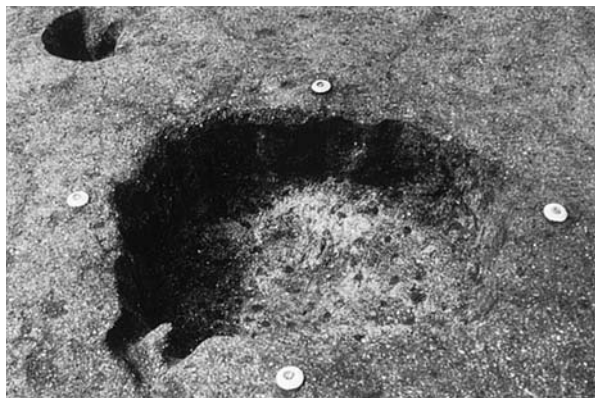
SD 1 埋土堆積状況



SD 2 埋土堆積状況



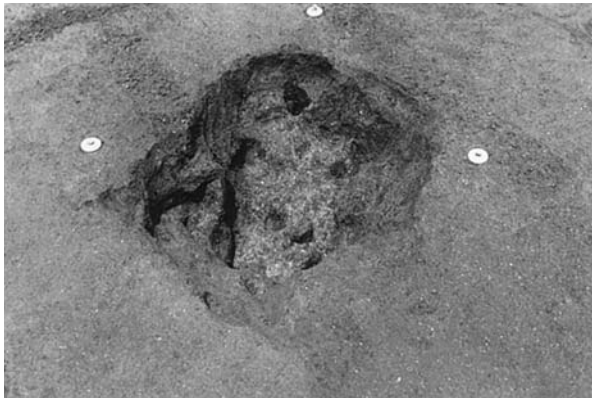
SC 4 埋土堆積状況



SC 5 完掘状況



SH 1 埋土堆積状況・遺物出土状況



SC 6 完掘状況



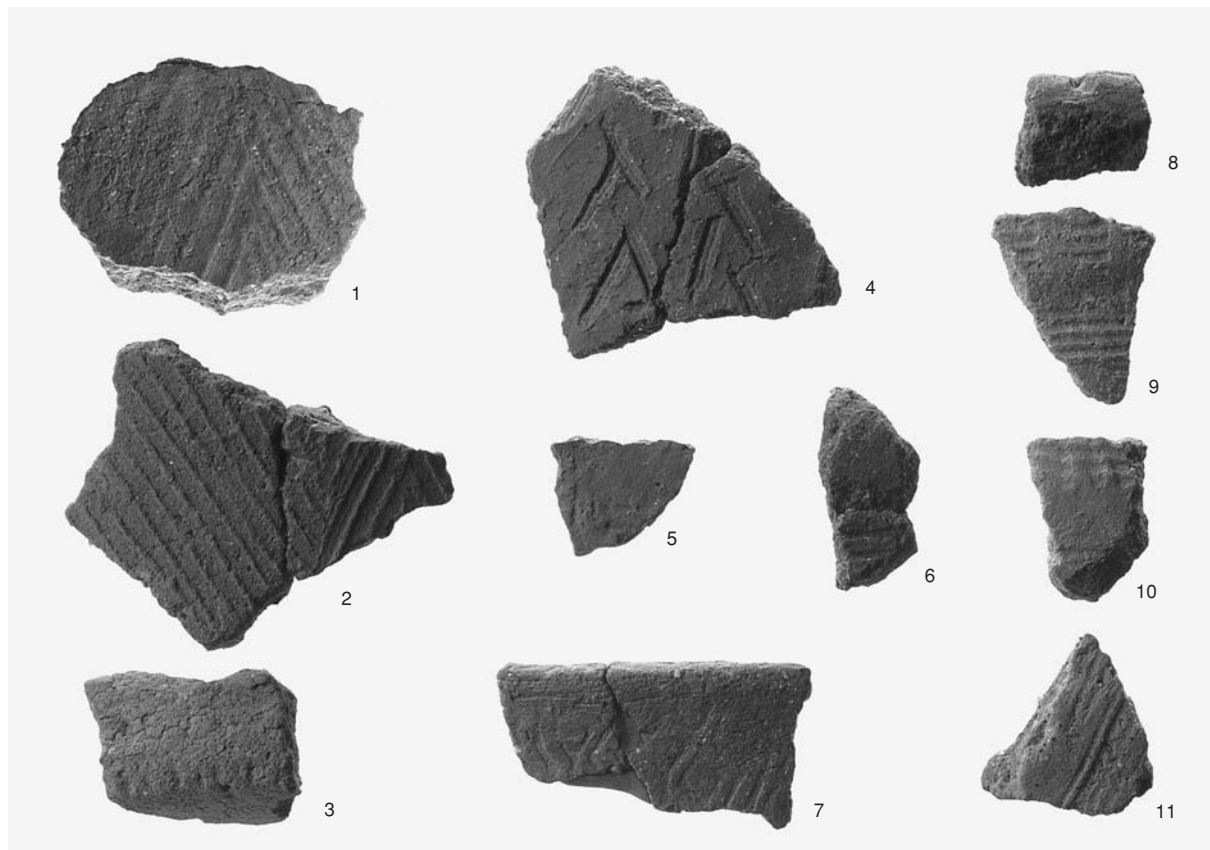
SC 7 完掘状況



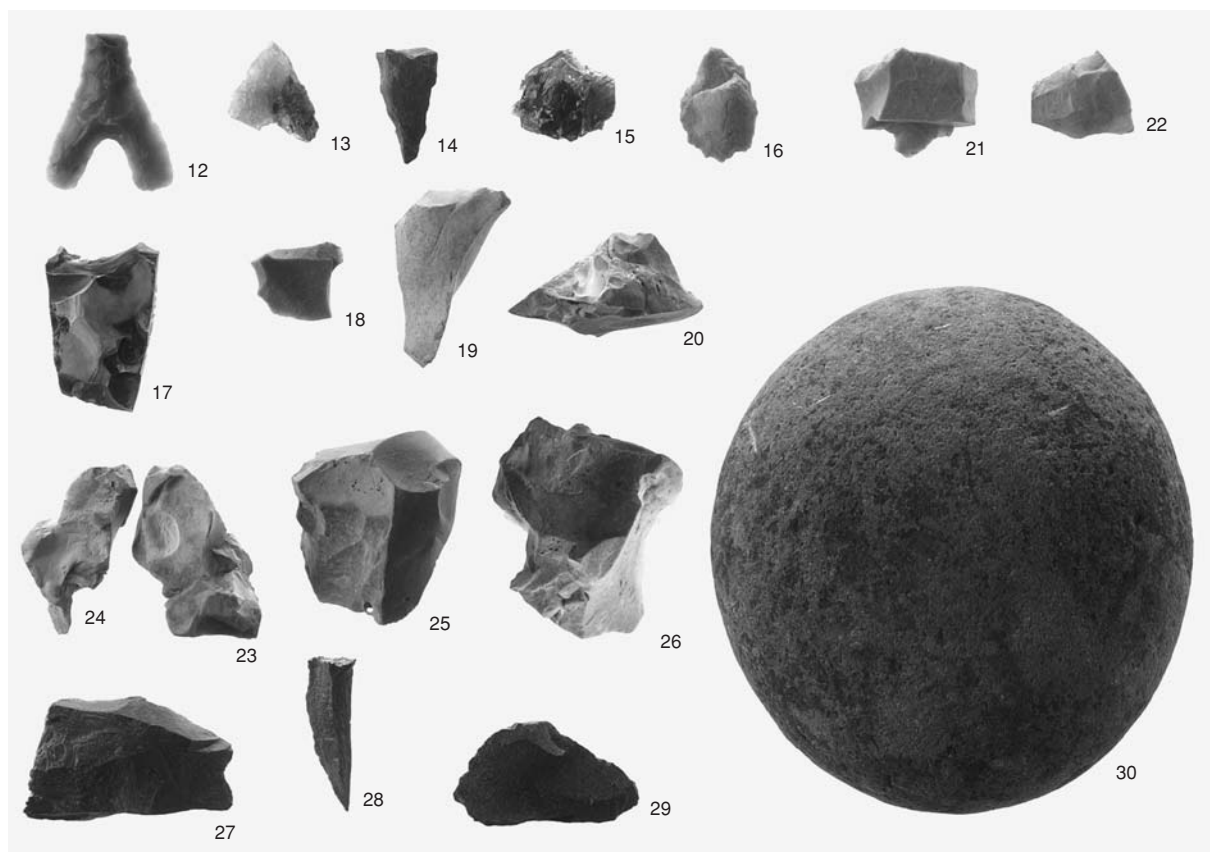
調査区南側工事道路路面の土層堆積状況



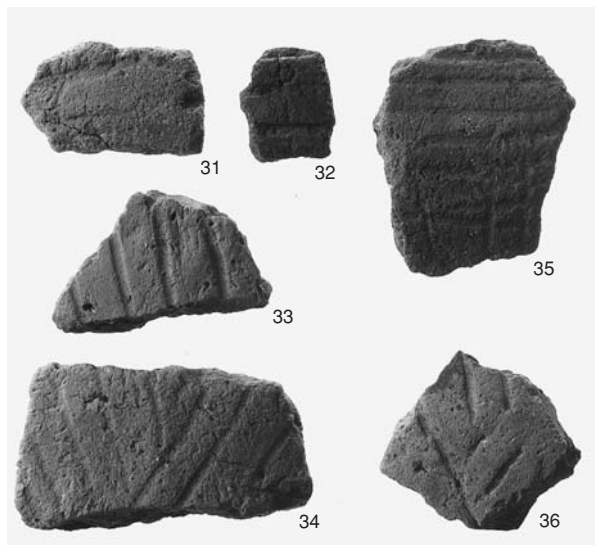
調査区から見る高千穂の峰



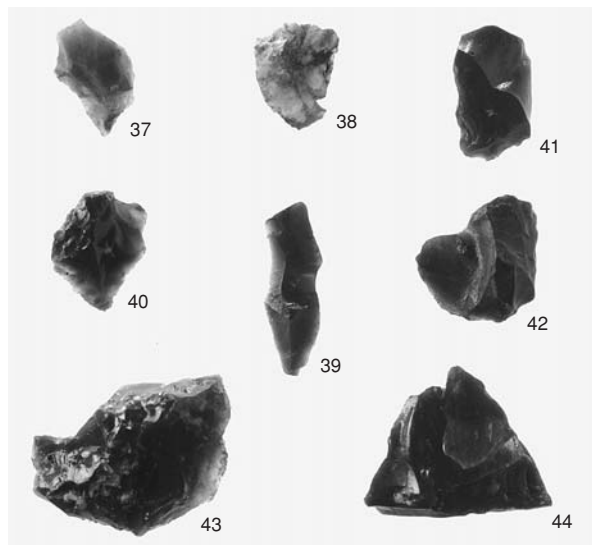
早期の縄文土器



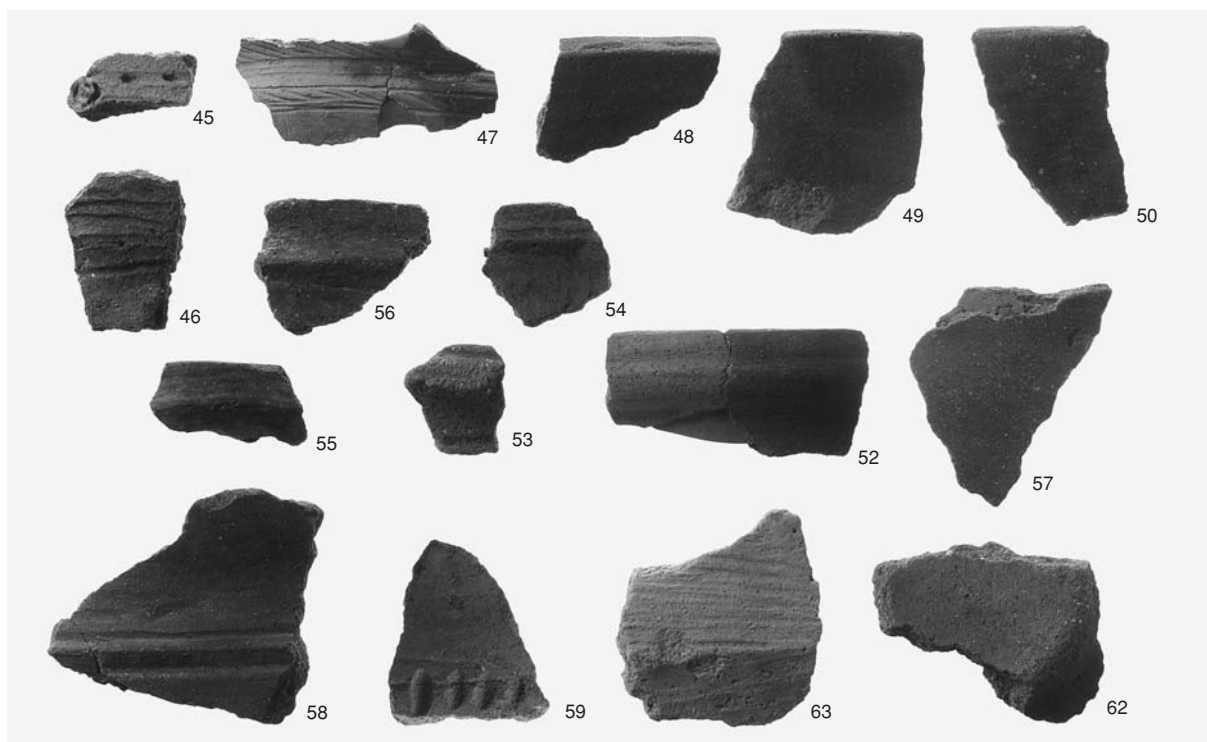
第X・XI層出土の石器類



前期の縄文土器



第Ⅶ層出土の石器類



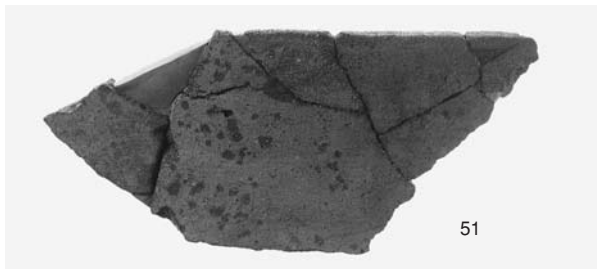
後期の縄文土器①



後期の縄文土器②

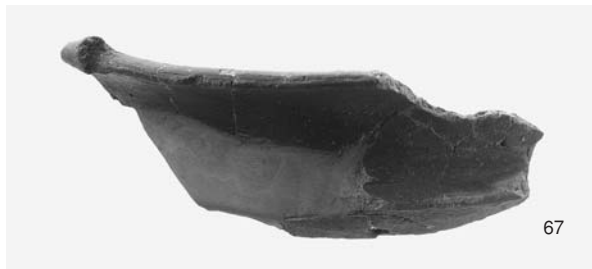


後期の縄文土器③



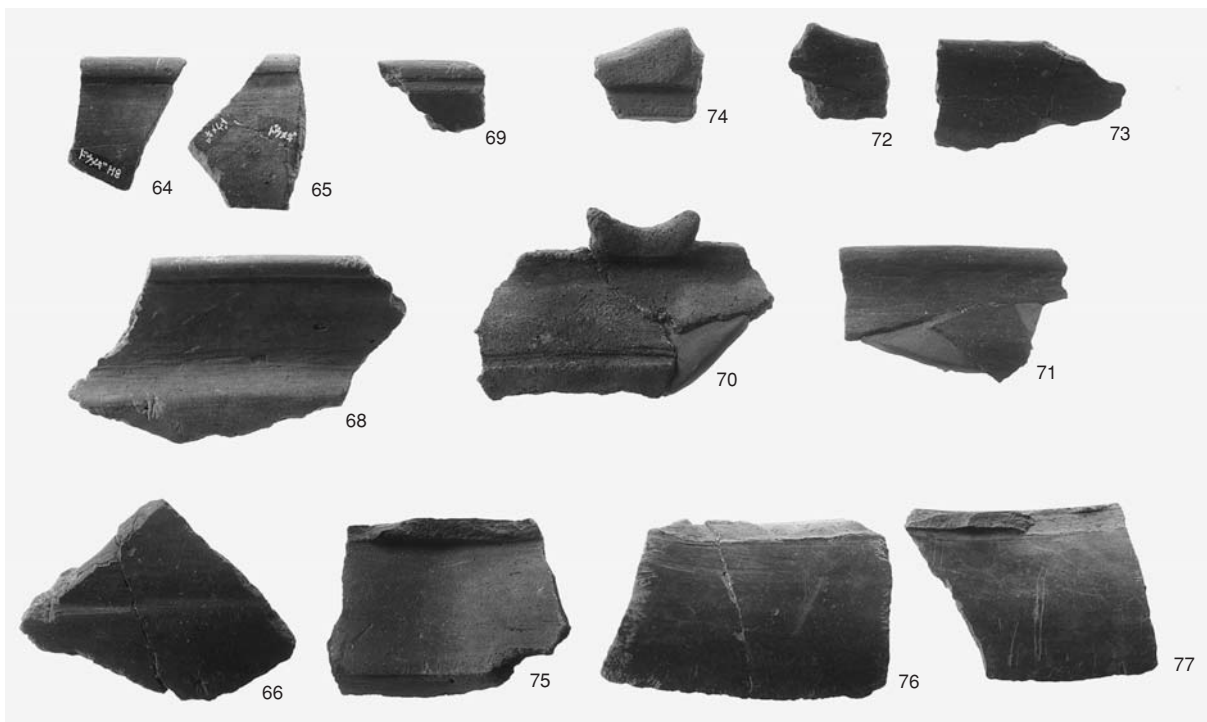
51

後期の縄文土器④

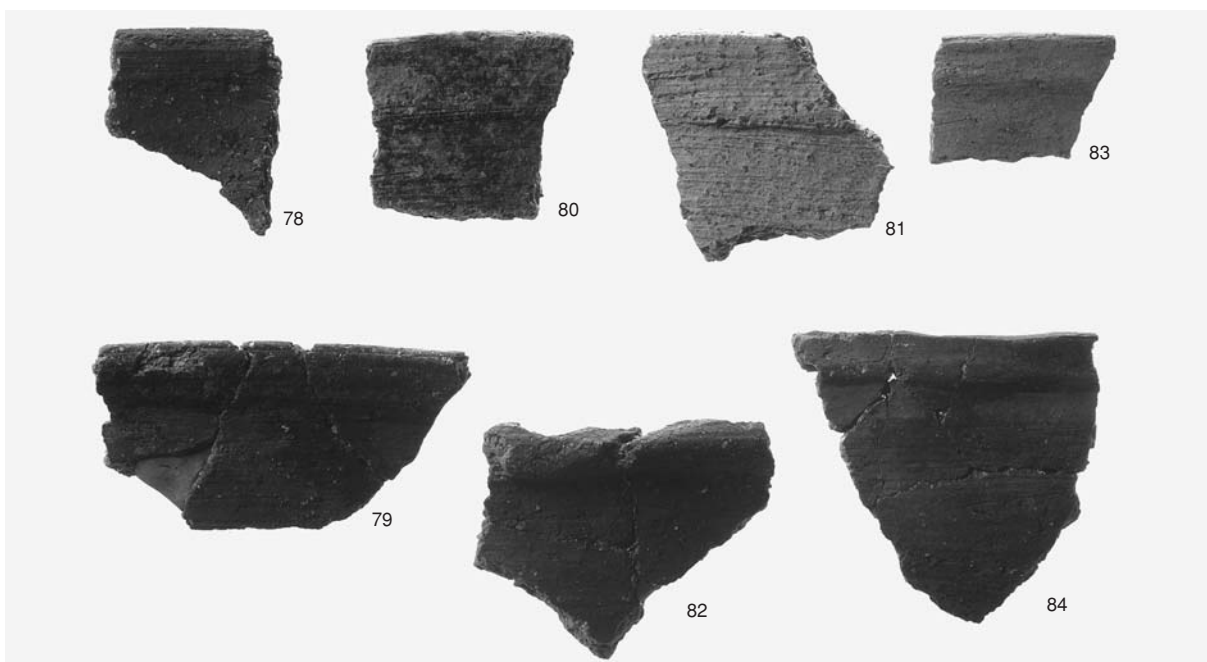


67

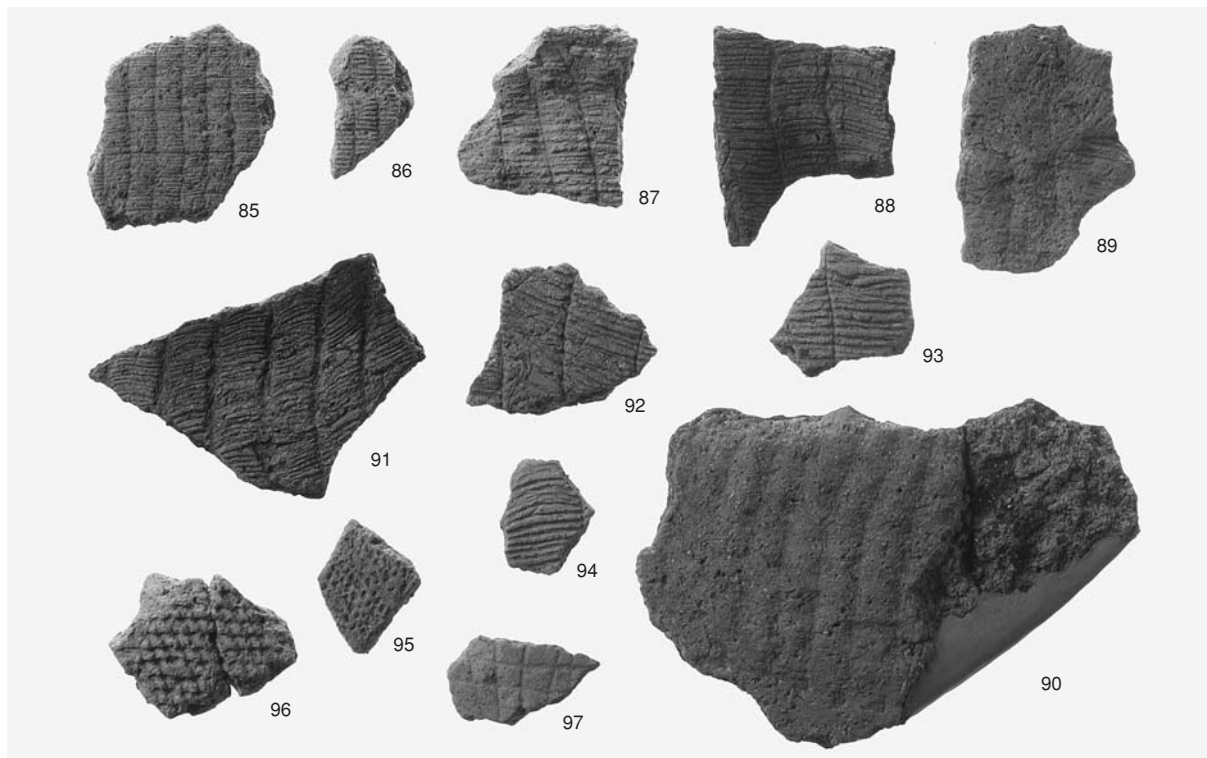
晩期の縄文土器①



晩期の縄文土器②



晩期の縄文土器③



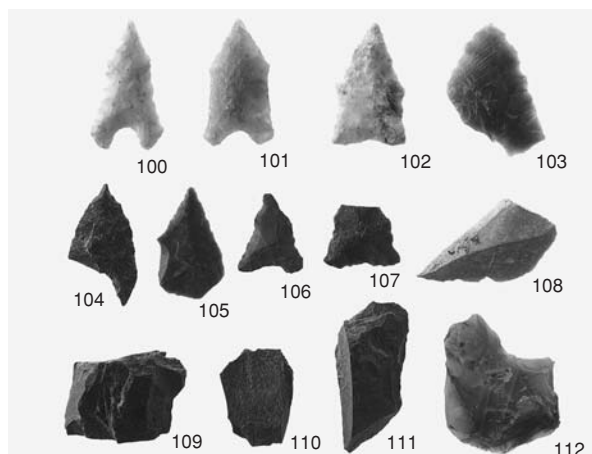
晩期の縄文土器④〔組織痕土器〕



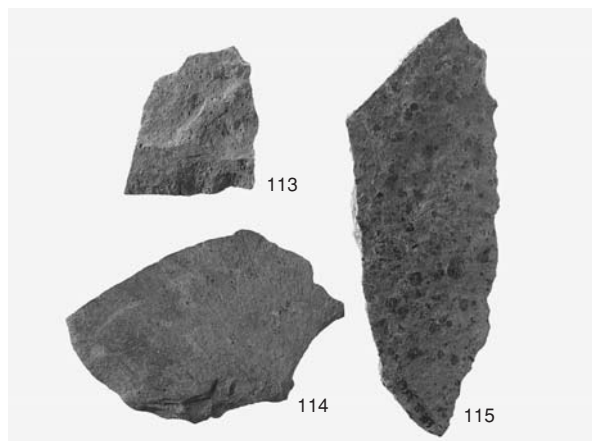
晩期の縄文土器⑤



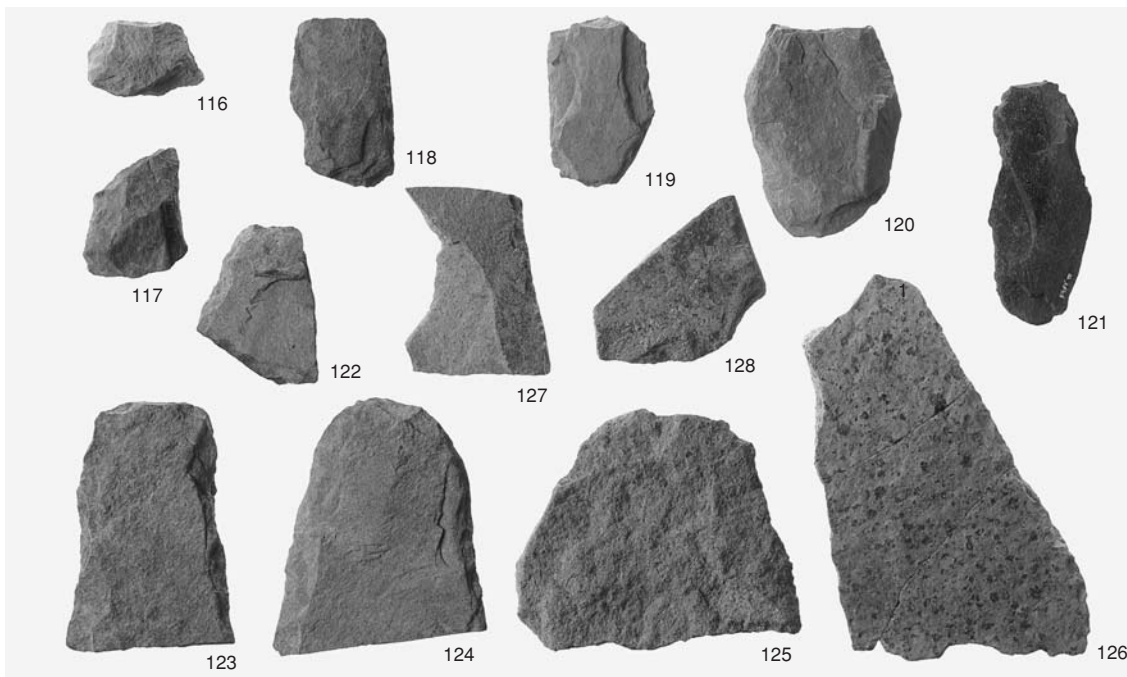
晩期の縄文土器⑥



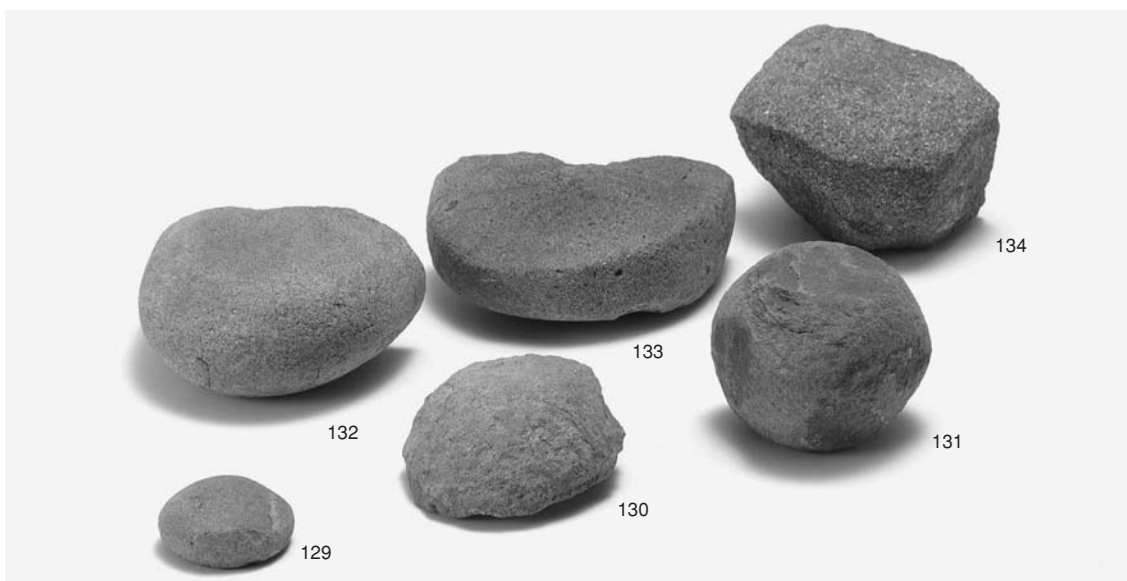
第IV・V層出土の石器類①〔打製石鏃・剥片〕



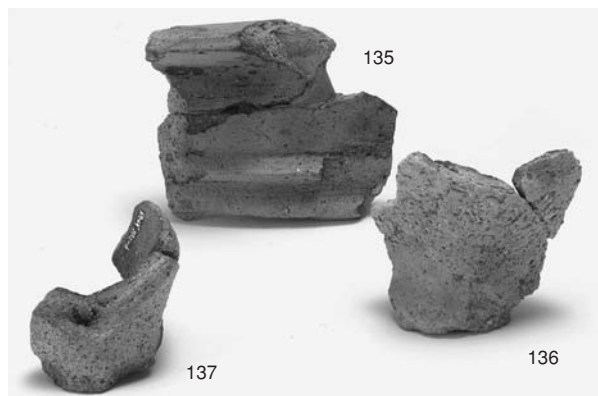
第IV・V層出土の石器類②〔二次加工剥片〕



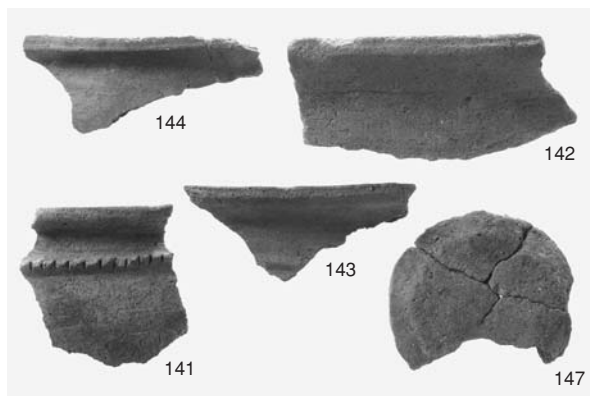
第Ⅳ・Ⅴ層出土の石器類③〔打製石斧〕



第Ⅳ・Ⅴ層出土の石器類④〔敲石・磨石〕



SA 1 出土の弥生土器



SA 2 出土の弥生土器①



145

SA 2 出土の弥生土器②



156

SA 3 出土の弥生土器①



173

SA 5 出土の弥生土器①



146

SA 2 出土の弥生土器③



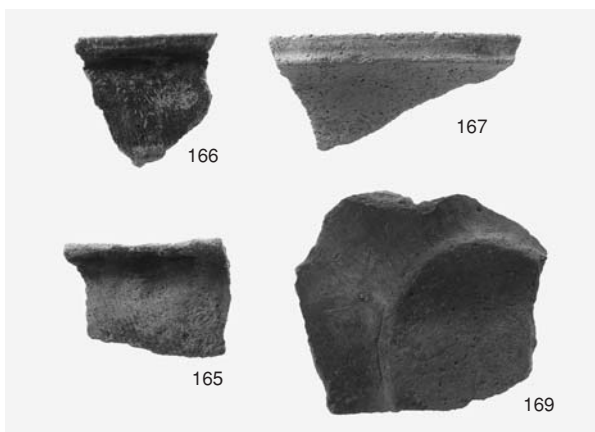
157

SA 3 出土の弥生土器②



174

SA 5 出土の弥生土器②



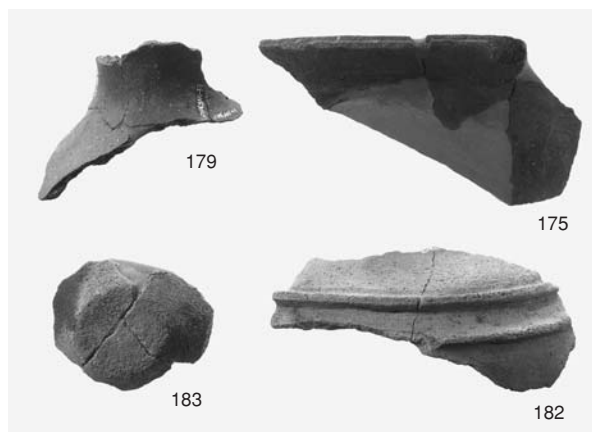
166

167

165

169

SA 4 出土の弥生土器①



179

175

183

182

SA 5 出土の弥生土器③



168

SA 4 出土の弥生土器②



176

SA 5 出土の弥生土器④



SA 5 出土の弥生土器⑤



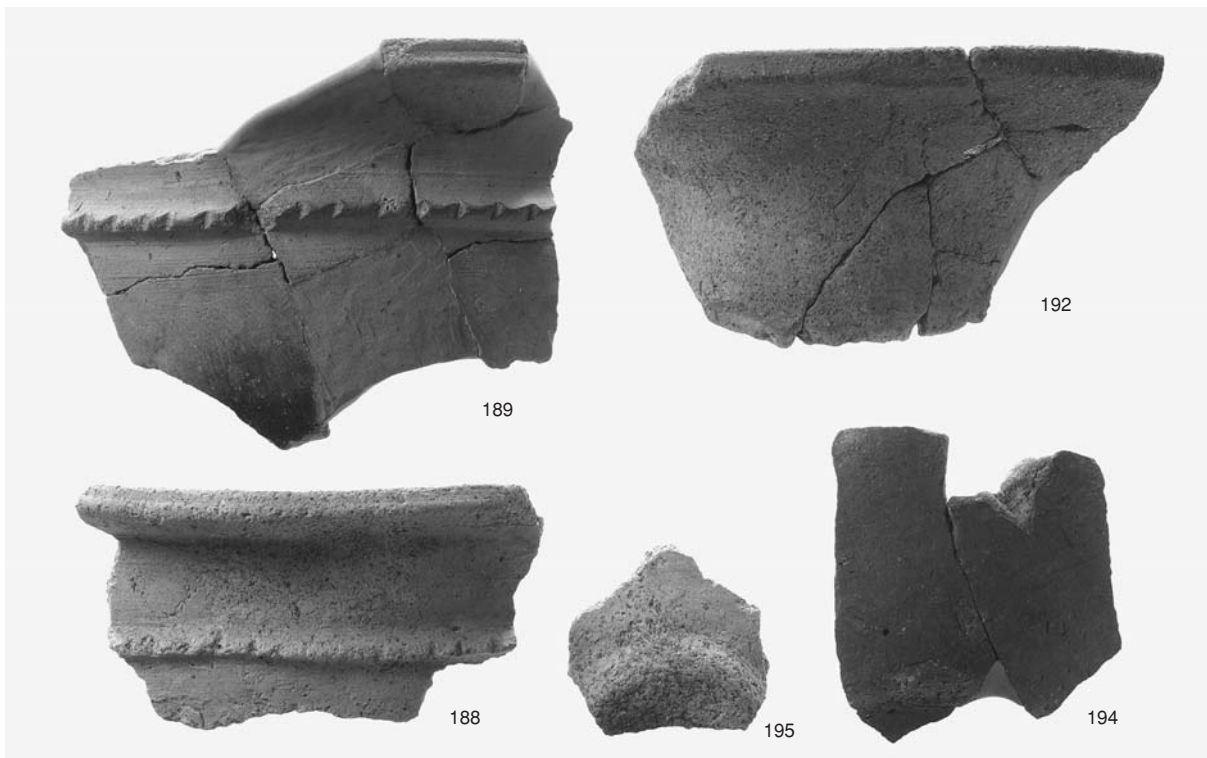
SA 5 出土の弥生土器⑦



SA 5 出土の弥生土器⑥



SA 5 出土の弥生土器⑧



SA 7 出土の弥生土器①



190

SA 7 出土の弥生土器②



193

SA 7 出土の弥生土器④



191

SA 7 出土の弥生土器③



197

SA 7 出土の弥生土器⑤



196

SA 7 出土の弥生土器⑥



216

SA 8 出土の弥生土器①



217

SA 8 出土の弥生土器③



SA 8 出土の弥生土器②



218

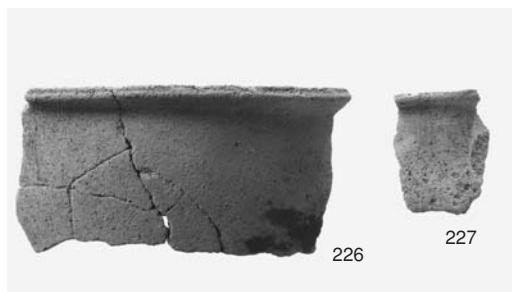
SA 8 出土の弥生土器④



SA 8 出土の弥生土器⑤



SA 8 出土の弥生土器⑥



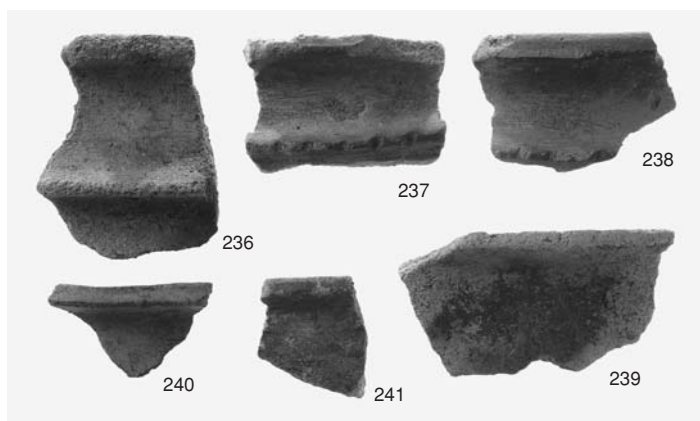
SA 9 出土の弥生土器



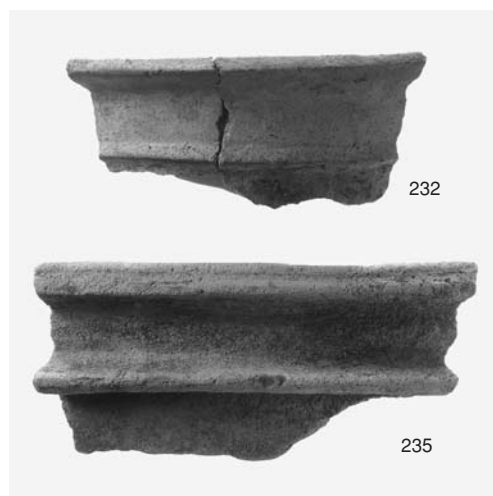
SA10出土の弥生土器②



SA10出土の弥生土器①



SA10出土の弥生土器③



SA10出土の弥生土器④



SA10出土の弥生土器⑤



254表

254裏

SA10出土の弥生土器⑧〔上段：孔側、下段：列点側〕



SA10出土の弥生土器⑥



SA10出土の弥生土器⑦



SA10出土の弥生土器⑨



SA10出土の弥生土器⑩



SA10出土の弥生土器⑪



SA11出土の弥生土器①



263

SA11出土の弥生土器②



265

SA11出土の弥生土器③



264上

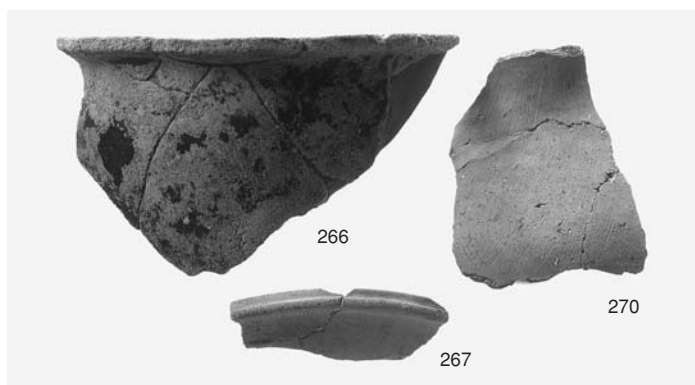
264下

SA11出土の弥生土器④



268

SA11出土の弥生土器⑤



266

267

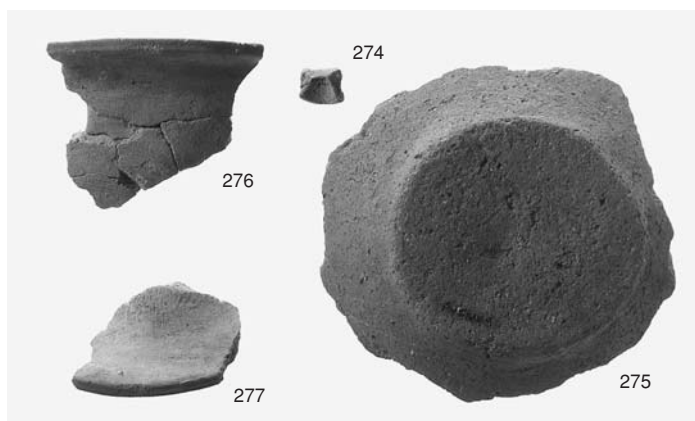
270

SA11出土の弥生土器⑥



269

SA11出土の弥生土器⑦



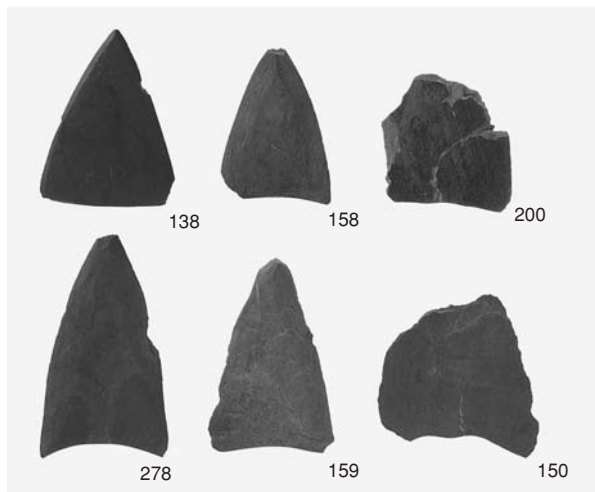
274

276

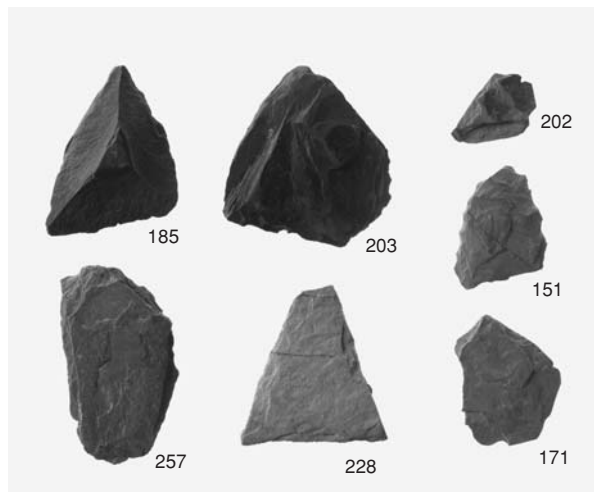
277

275

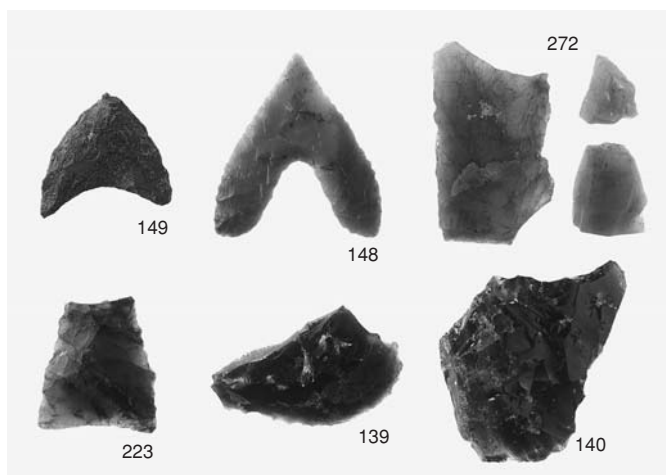
SA12出土の弥生土器



竪穴住居跡出土の石器類①〔磨製石鏃〕



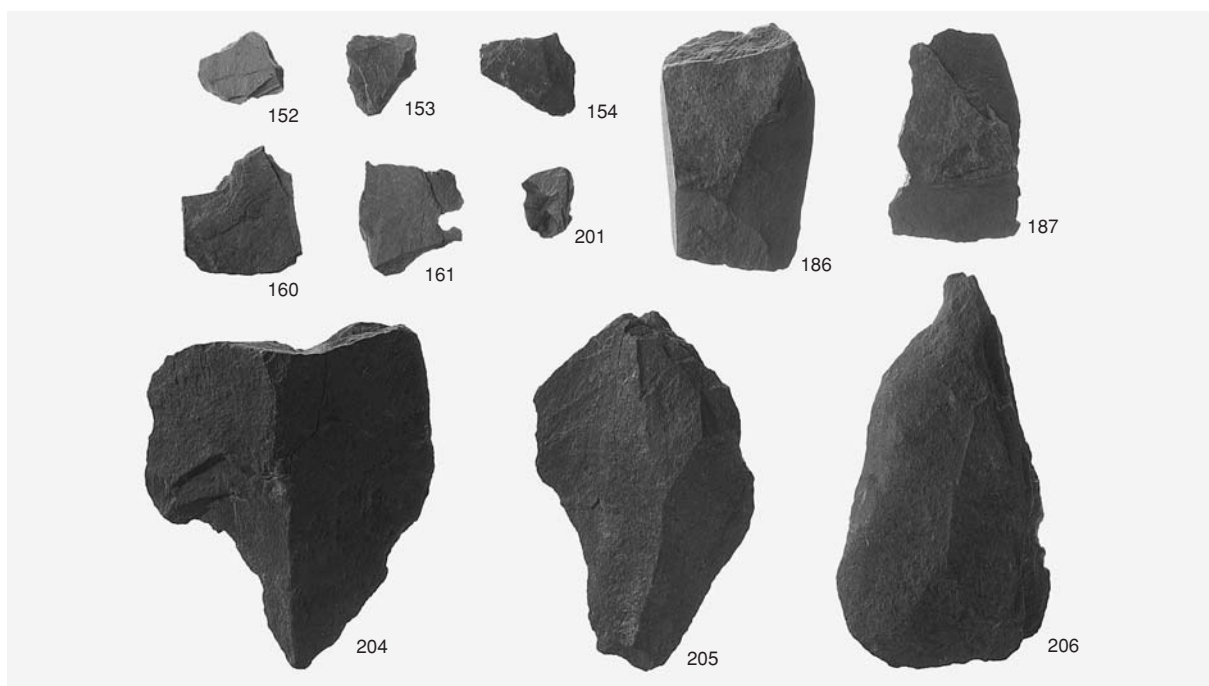
竪穴住居跡出土の石器類②〔磨製石鏃未成品〕



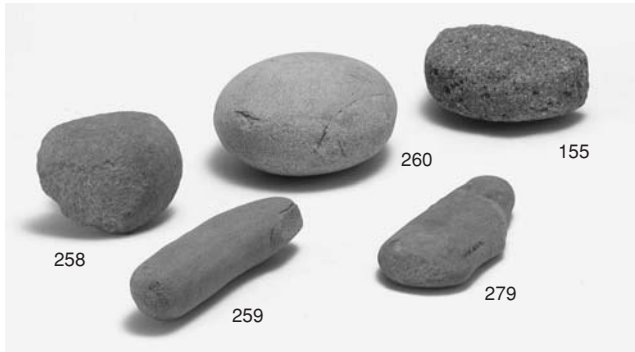
竪穴住居跡出土の石器類③〔打製石器類〕



竪穴住居跡出土の石器類④〔磨製石斧〕



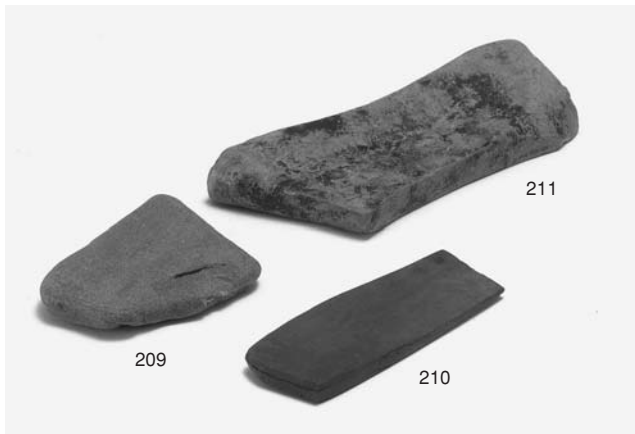
竪穴住居跡出土の石器類⑤〔剥片〕



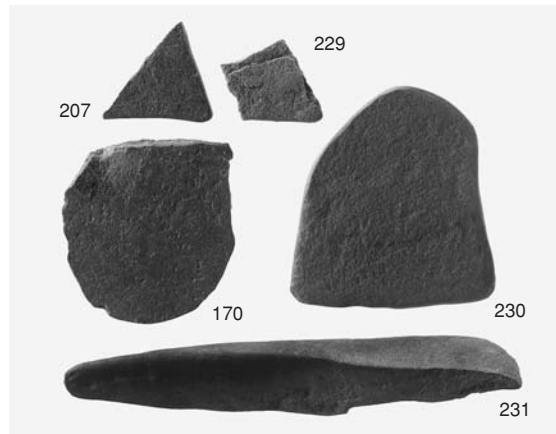
豎穴住居跡出土の石器類⑥〔敲石・磨石・砥石〕



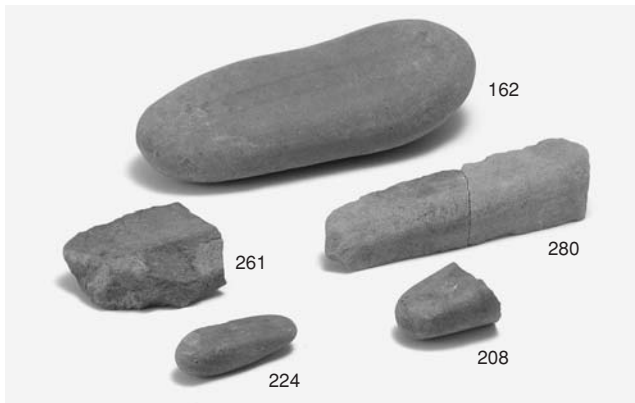
豎穴住居跡出土の石器類⑩〔縁部に鉄が付着している砥石〕



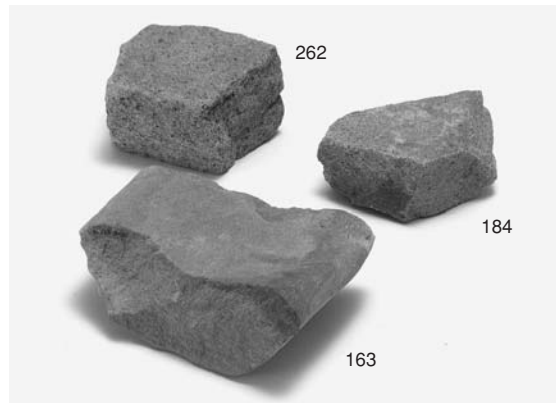
豎穴住居跡出土の石器類⑦〔砥石〕



豎穴住居跡出土の石器類⑪〔周縁端部に砥面をもつ砥石〕



豎穴住居跡出土の石器類⑧〔砥石〕



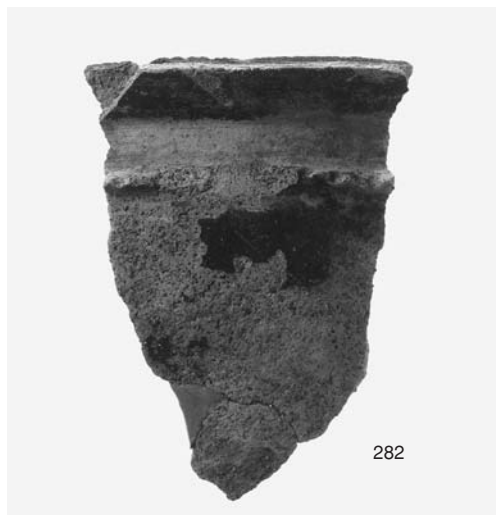
豎穴住居跡出土の石器類⑫〔台石・石皿〕



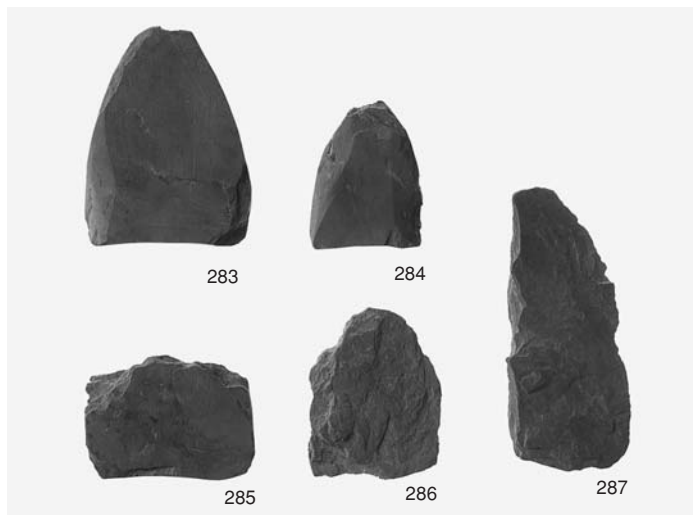
豎穴住居跡出土の石器類⑨〔砥石〕



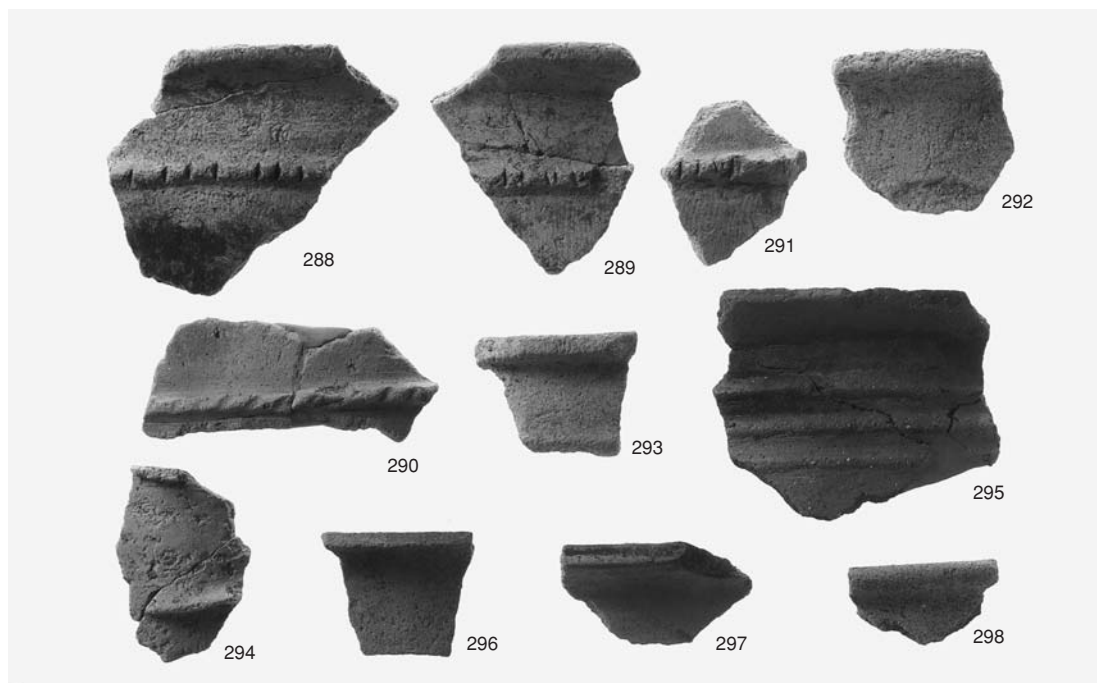
SZ 1 出土の弥生土器



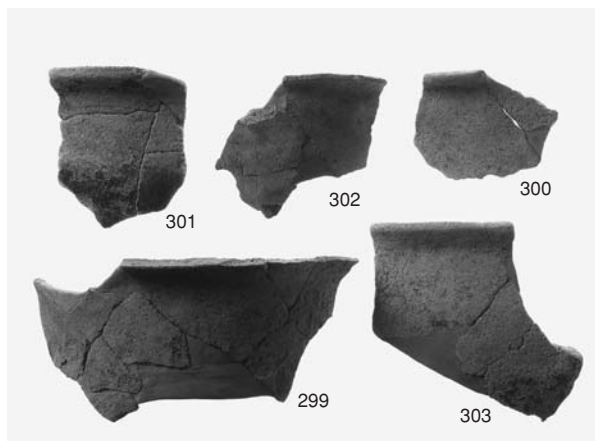
SC 4 出土の弥生土器



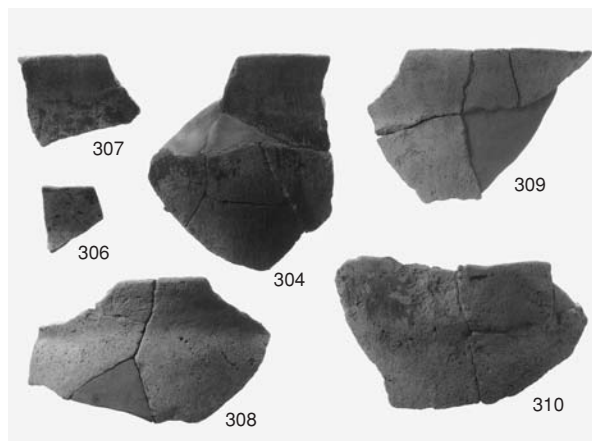
SH 1 出土の磨製石鏃未成品



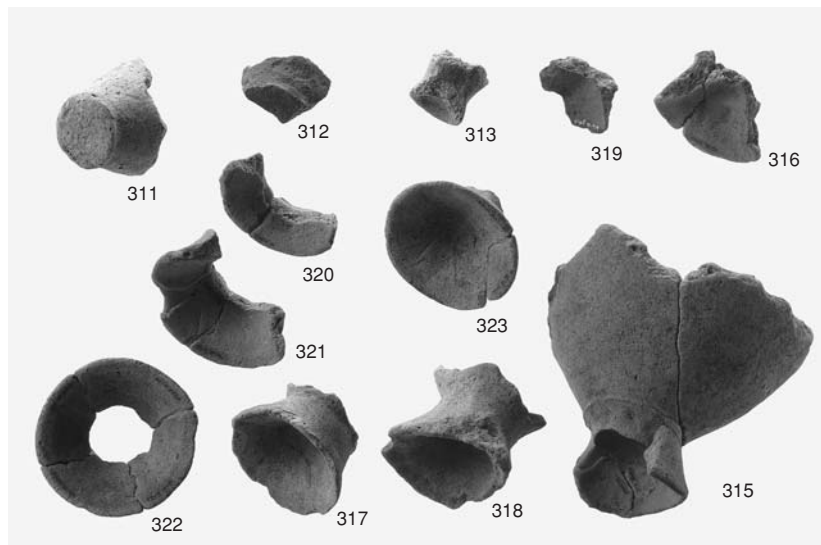
包含層出土の弥生土器①



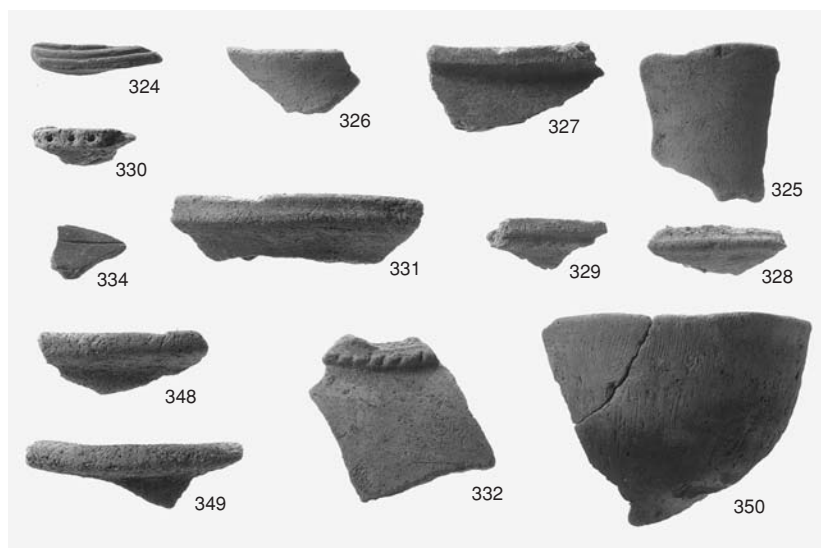
包含層出土の弥生土器②



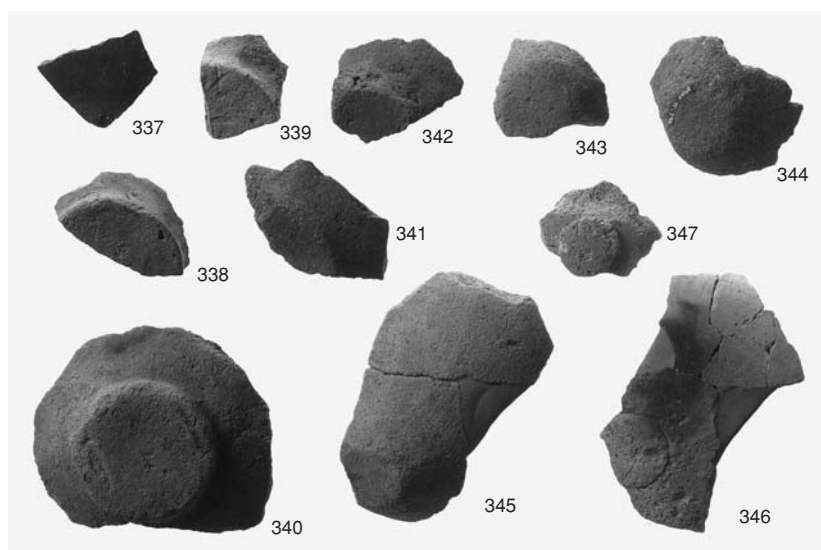
包含層出土の弥生土器③



包含層出土の弥生土器④



包含層出土の弥生土器⑤



包含層出土の弥生土器⑥



包含層出土の弥生土器⑦



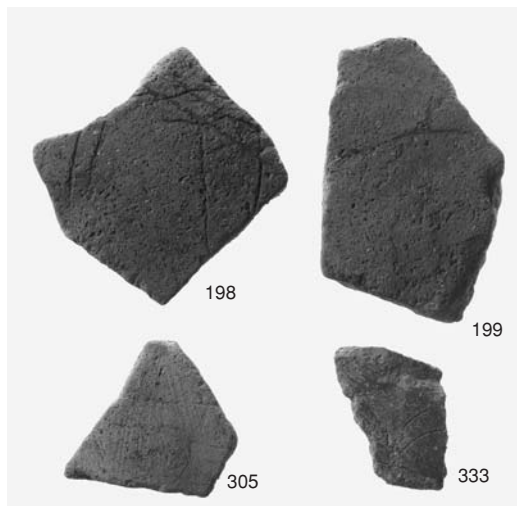
包含層出土の弥生土器⑧



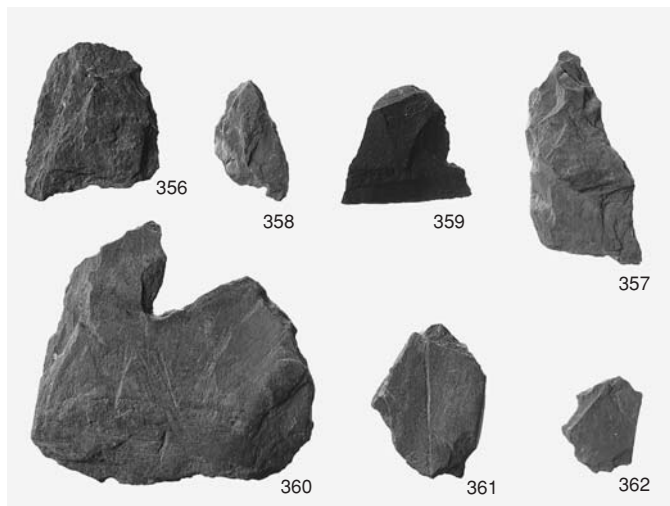
包含層出土の弥生土器⑨



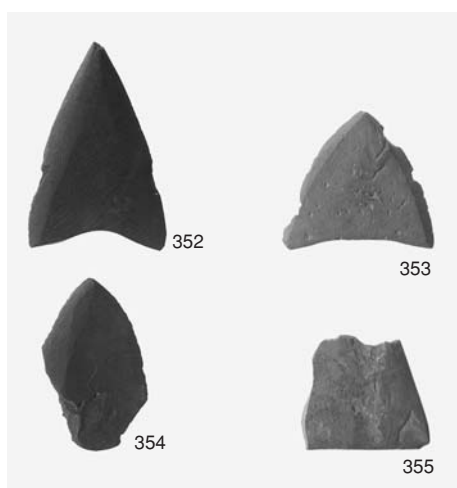
包含層出土の弥生土器⑩



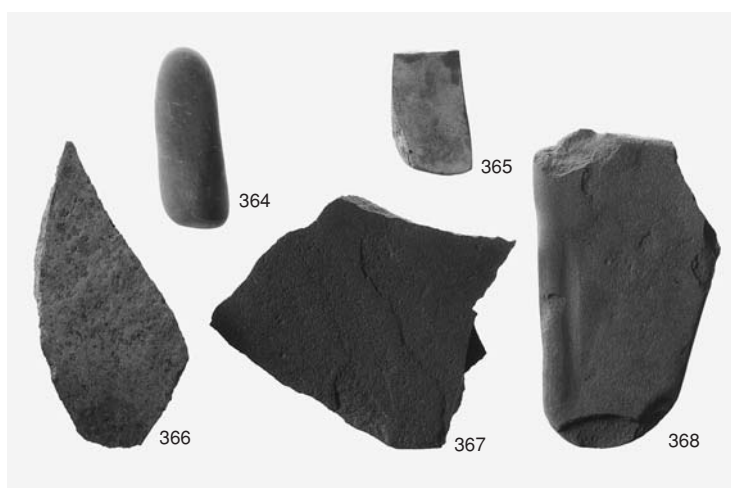
線刻のある弥生土器（遺構内・包含層出土）



包含層出土の石器類③〔磨製石鏃未完成品・剥片〕



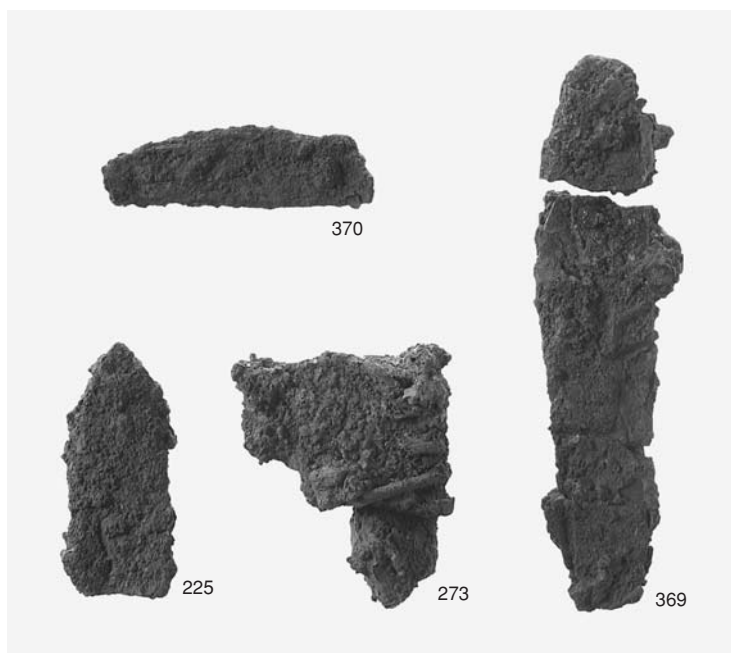
包含層出土の石器類①〔磨製石鏃〕



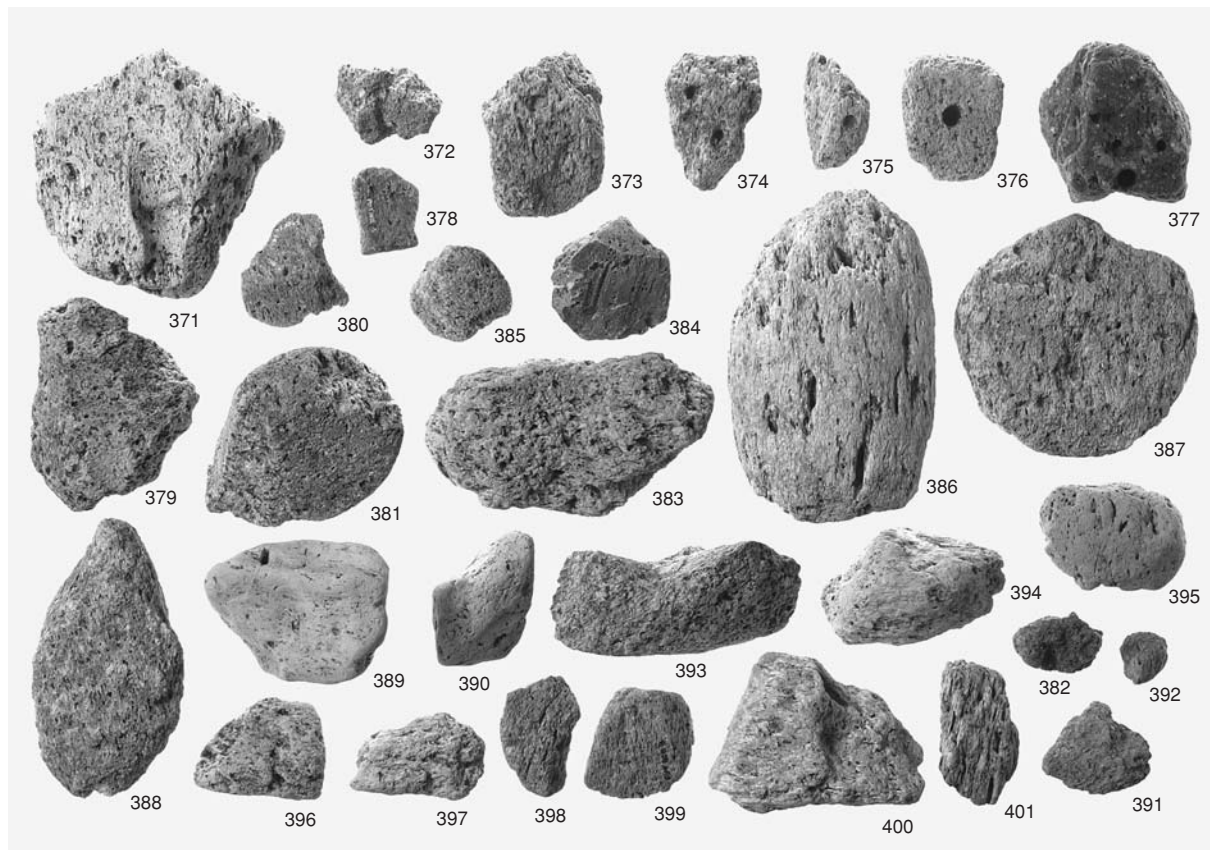
包含層出土の石器類④〔砥石〕



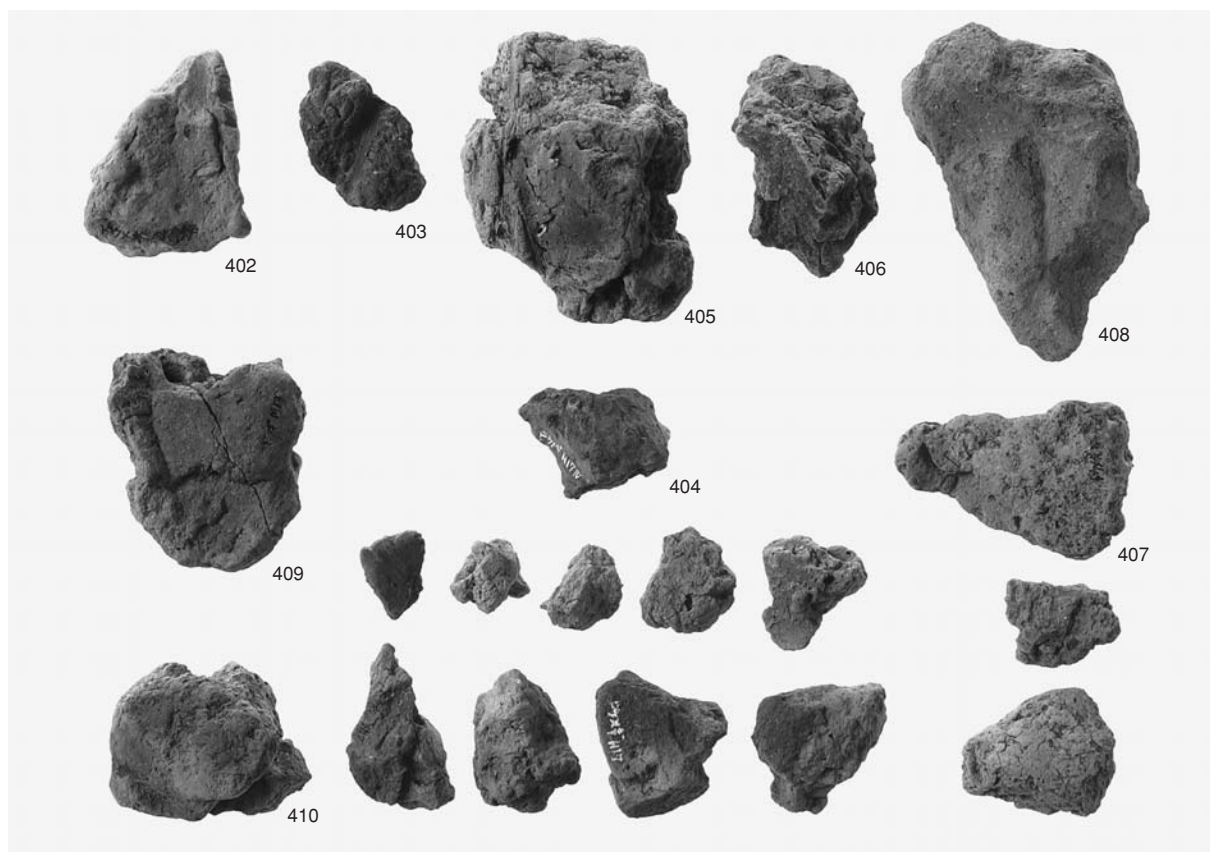
包含層出土の石器類②〔磨製石斧転用品〕



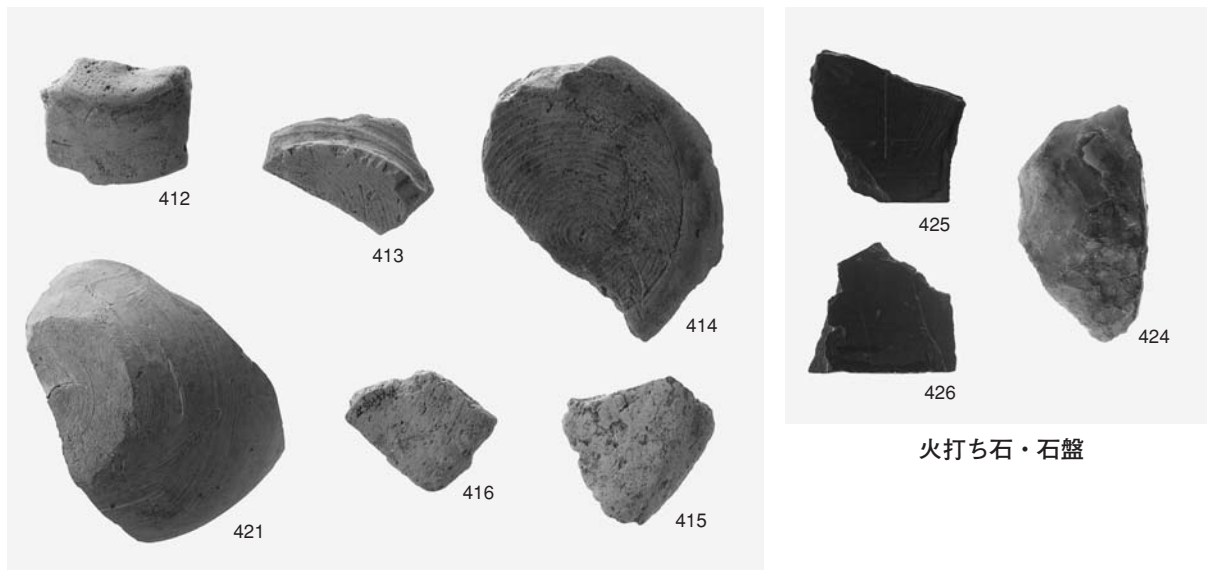
鉄器〔刀子・鉄鏃・鉄鎌?・鉈〕（遺構内・包含層出土）



軽石加工品等（遺構内・包含層出土）

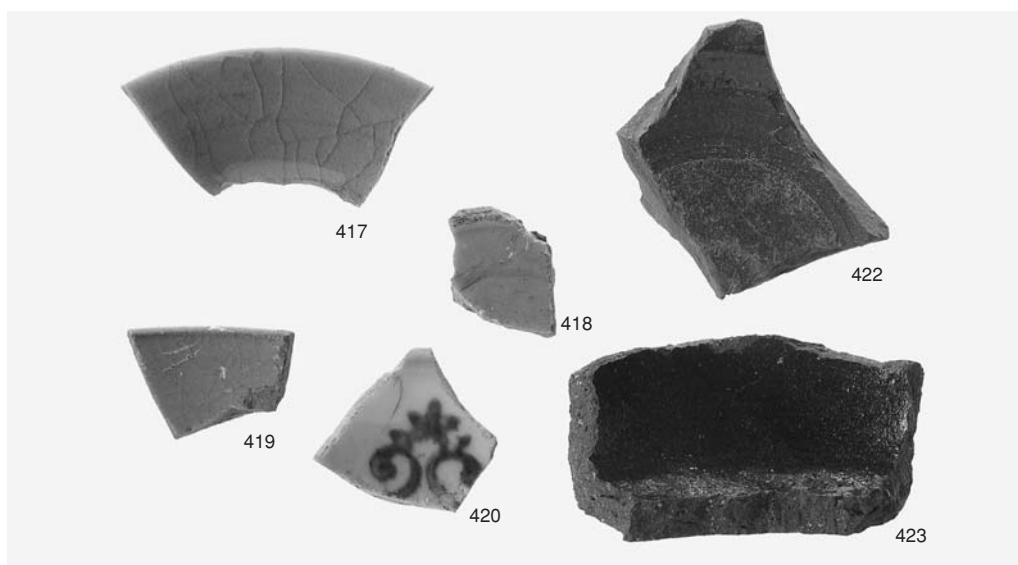
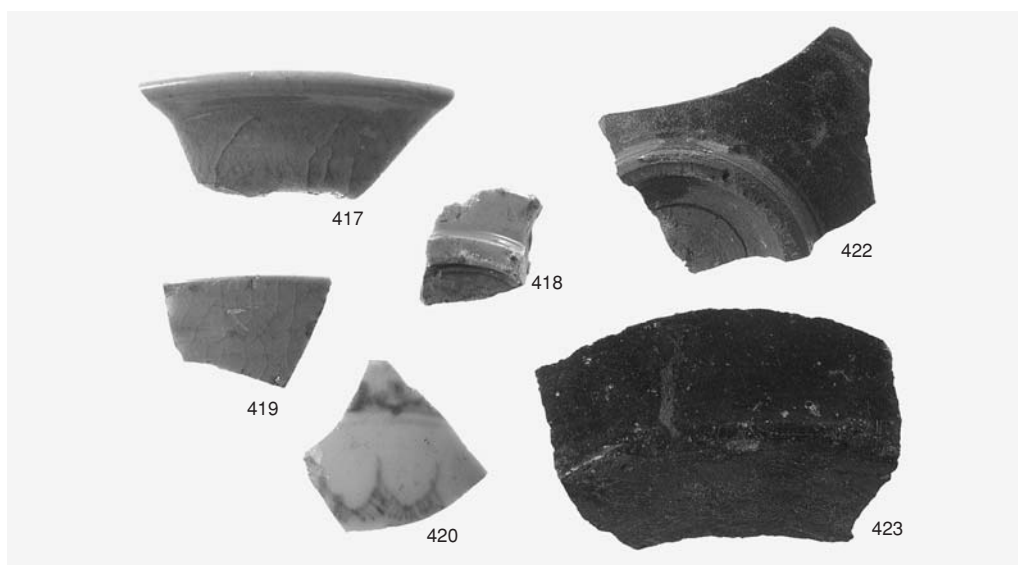


焼成粘土塊（遺構内・包含層出土）



火打ち石・石盤

古代以降の土師器



中・近世の陶磁器（上段：外面、下段：内面）

報告書抄録

ふりがな	どうめぎ いせき							
書名	働女木遺跡							
副書名	都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第205集							
編著者名	中田 憲治							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうめぎいせき 働女木遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 ごじつちよう 五十町 4687番地 他	45202	5013	31度 42分 14秒 付近	131度 01分 40秒 付近	20080804) 20090326 20090427) 20090930	16,200㎡	都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	集落	縄文時代 （早期）	集石遺構 土坑 ピット	1基 1基 6基	縄文土器 打製石鏃 石鏃 等	貝殻文円筒形土器等 が出土。		
		縄文時代 （後・晩期）	—		縄文土器 打製石鏃 打製石斧 敲石・磨石 二次加工剥片 等	黒色磨研系の土器や 組織痕土器等が出土。		
弥生時代 （中期後半）	堅穴建物跡 （堅穴住居跡 堅穴状遺構 掘立柱建物跡 土壙墓 土坑 遺物を伴う小穴 ピット	13軒 12軒 1基 2棟 2基 6基 1基 多数	弥生土器 磨製石鏃 磨製石斧 砥石 敲石・磨石 石皿・台石 鉄器 軽石加工品 焼成粘土塊 等	住居は間仕切部及び ベッド状遺構を伴う ものが主流。掘立柱 建物跡は2棟ともに 独立した棟持柱をも つ。瀬戸内系の壺や 矢羽根透かし孔が施 された高坏も出土。				
要約	<p>働女木遺跡では、堅穴建物跡をはじめ掘立柱建物跡、土壙墓等といった弥生時代中期後半の生活文化を如実に示す遺構を比較的良好な状態で検出することができた。また、焼失住居建築材の樹種同定結果やイネ等の種実分析結果等についても、今後の調査研究に役立つものと考えられる。出土遺物については、山ノ口式土器・中溝式土器といった在地系の土器が多数出土したほか、瀬戸内系や豊後系の土器もわずかながら確認することができた。他にも、絵画土器片や鉄分の付着した砥石、鉄鏃等も出土しており、当時の南九州地方における弥生文化を考える上でも貴重な資料が得られた。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第205集

どうめぎ
働女木遺跡

都城東環状線（今町工区）地域高規格道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2011年 3月

編集 宮崎県埋蔵文化財センター
発行 〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 有限会社 河野印刷 宮崎支店
〒880-0052 宮崎市丸山1丁目65番地
TEL 0985-60-1611 FAX 0985-60-1612
